

平安京左京四条四坊三町跡

京都市中京区東洞院通靖薬師下る元竹田町

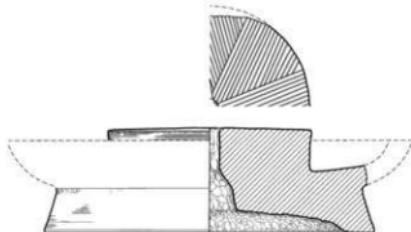
643、645、646、646-1 の発掘調査

2019

株式会社 四門

平安京左京四条四坊三町跡

京都市中京区東洞院通蛸薬師下る元竹田町 643、645、646、646-1 の発掘調査



2019 年

株式会社 四門



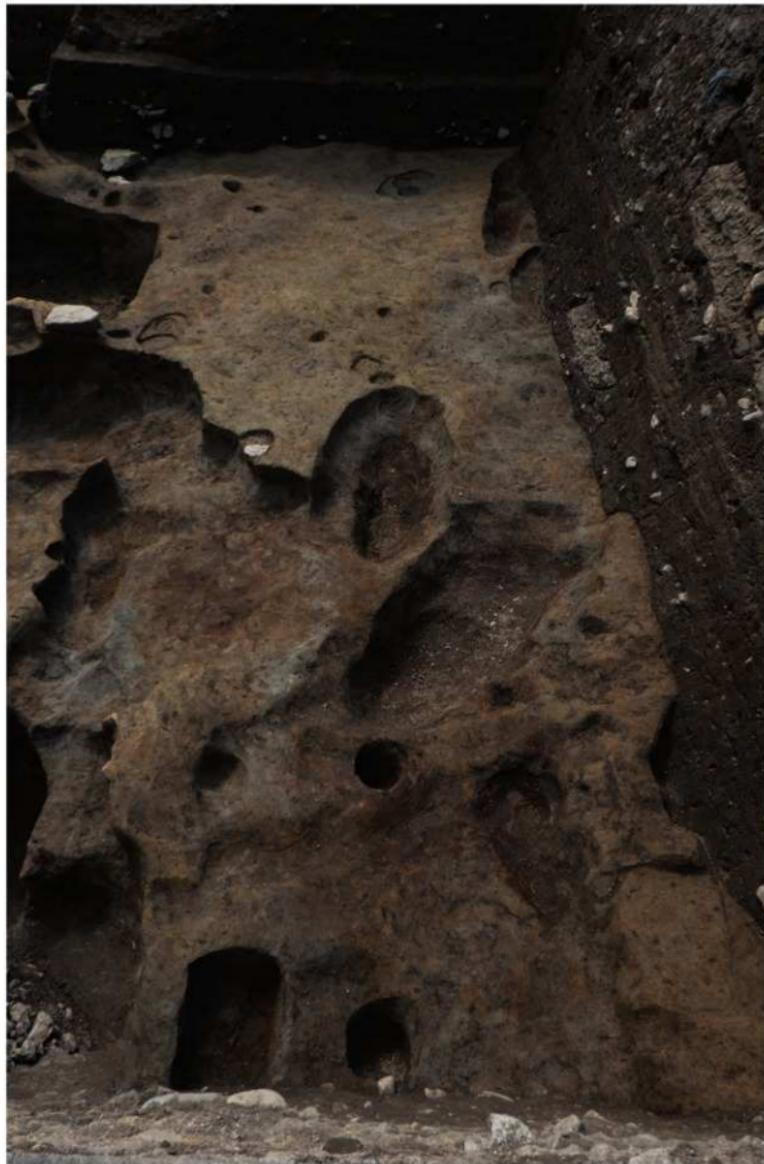
I-1 『洛中洛外圖屏風（上杉本）』右隻三扇に描かれた竹田法印屋敷と紙園会（米沢市上杉博物館蔵）



2-1 『洛中洛外図屏風（上杉本）』「竹田ほういん」屋敷と東洞院通周辺（米沢市上杉博物館蔵）



3-1 北区3面 東洞院通 東側溝 0201SD (北から)



4-1 北区4面 東洞院通東側溝洪水層(0301SD)下の残存遺構(北から)



5-1 北区 4面 完掘全景（東から）



5-2 北区 南壁 2の土層堆積（北から）



6-1 南区4面完掘全景（東から）



6-2 東区4面完掘全景（南東から）

例　　言

1. 本書は、京都市中京区東洞院通蛸薬師下る元竹田町 643、645、646、646-1における、平安京左京四条四坊三町跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、三井産興株式会社（京都市上京区堀川通今出川上ル南船橋町 382）が土地を所有し、株式会社大丸松坂屋百貨店不動産事業部（大阪市中央区西心斎橋 1-7-3）が計画し、株式会社フィル・コンストラクション（東京都千代田区平河町 2-10-4）が設計監理する、商業施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 92 条の規定により、平成 30 年 1 月 19 日付で届出し、平成 30 年 2 月 1 日付け、9 教文第 5 号の 69 で許可を得た、京都市番号 17H345 にあたる。
3. 調査の体制は、京都府教育庁指導部文化財保護課並びに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもとに、株式会社大丸松坂屋百貨店（東京都江東区木場二丁目 18 番 11 号）と株式会社四門西日本・中部支社 京都支店が契約し実施した。
4. 発掘調査の面積は、約 456m²である。
5. 発掘（現地）調査の期間は、平成 30（2018）年 2 月 1 日～平成 30（2018）年 6 月 30 日まで実施した。整理調査は、平成 31（2019）年 3 月 31 日までを行い報告書を刊行した。
6. 発掘調査及び本報告書作成は、下記の体制にて行った。

株式会社四門西日本・中部支社 京都支店

文化財事業部長（取締役専務）	山内伸治
西日本・中部支社長	後藤 修
京都支店長	五十嵐 大
主任調査員	辻 広志
調査員	布村晋士
補助員	浅野広美、小林万容
整理員	森直美、菟場育美、樋野由美子、加藤あずみ、佐々木英二、中原尚正、木村靖子、中村真波、東山華
作業員	株式会社 アート

7. 発掘調査は辻、布村が、遺構の写真撮影を布村、辻が、測量は平面・壁面測量を主に委託とし部分測量を布村、小林が実施した。整理作業は遺構番号の管理と洗浄を浅野、菟場、森、樋野が、遺物実測を辻が、拓本を菟場、木村が、遺物デジタルトースは主に委託とし一部を菟場が、挿図作成を加藤、佐々木、東山、木村、菟場が、遺物観察表作成を佐々木が、遺物写真撮影を辻が主に行なった。
8. 本書の執筆は、第 1 ～ 5 章の全てを辻が行った。編集は、辻の指示の下に東山が行なった。
9. 遺構図に使用した基準点の設置（座標・水準測量）及び遺構平面図・立面図の作成は、テクノシステム株式会社島津 功が行った。
10. 発掘調査及び整理調査、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができた。ご芳名を記して感謝の意を表します。

芦田恭彦、石山淳、馬瀬智光、奥井智子、北浦綾子、黒須亜希子、熊谷舞子、清水早織、鈴木康高、岡田和洋、高野隆、丸山俊明、持田透、山田邦和（五十音順）

京都府教育庁管理部総務企画課、京都府教育庁指導部文化財保護課、

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、公益財團法人京都市埋蔵文化財研究所、
株式会社フィル・カンパニー、株式会社フィル・コンストラクション、医療法人大澤会、
株式会社森田工務店、米沢市上杉博物館、株式会社アート・テクノシステム株式会社、
一般社団法人歴史文化研究所、平安埋蔵文化財事務所株式会社、三星商事印刷株式会社、
西近畿文化財調査研究所

凡　　例

1. 遺構に使用した座標値は、世界測地系平面直角座標系VI（測量成果2011）に基づいており、方位は座標北を北として表記し、本文中では単位の「m」を省略した。標高は、海拔高（東京湾平均海面高度）を使用し、本文中では「T.P.」を省略した。
2. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄2007年）に準拠した。
3. 使用地図は、2,500分の1の「壬生」「三条大橋」（京都市都市計画局発行）を調整して用いた。
4. 遺構図は、各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を20・40・60・75・100・200・300・800・1,500・5,000・50,000分の1とした。
5. 遺物実測図は各図スケールを掲載し、土器・瓦・木製品は原則として縮尺を4分の1とし、石製品（茶臼）は縮尺を5分の1とし、銭貨・金属製品・石製品（硯）等は2分の1又は1分の1とした。
6. 本書に収録した各資料の図は、本書の体裁に合わせて整えるために、それぞれ縮小拡大し加筆した。
7. 本書に収録した図・資料等の引用・参考文献・索引は、各章の本文末に纏めて掲載した。
8. 本書では、室町時代後期から安土桃山時代を、「戦国時代」と呼称して記載する。
9. 遺構番号は全て0001に始まる4桁の通し番号とし、遺構の性格（種類・属性）は下記の呼称か略記号を遺構番号の後に付した。遺構名称は、調査時に付した名称をそのまま本書でも用いた。
柵（杭列）・塀；SA、建物；SB、溝；SD、井戸；SE、路（小径）；SF、土坑；SK、柱穴；P、
自然河道；SR、不明遺構；SX
10. 遺構の撮影方向の表示は、平安京の主軸方向ではなく、調査区の主軸の東西南北で表示した。
11. 出土遺物には通し番号を付した。実測図・写真図版共に一致している。
12. 出土遺物の年代については、下記の文献を主に使用した。なお、下記の小森俊寛氏の編年を使用する場合は「京○期」と記載し、相対年代は下記の表に基づいた。
 - ・中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』（南真陽社 1995年）
 - ・小森俊寛監修・編『京都から出土する土器の編年的研究』（南京都編集工房 2005年）
13. 瓦の各部分の名称や計測点、成形手法や調整法による分類は、下記の文献を主に使用した。
 - ・加藤晃・金子智「御殿記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」『山上会館・御殿記念館』地点 第3分冊（考察編）東京大学埋蔵文化財調査室 1990年
 - ・辻広志「凡例」「伏見城跡」（柳四門 2018年）

本文目次

卷頭図版

例言 / 凡例 / 目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	1
第2章 地理的環境と歴史的環境	7
第1節 地理的環境と調査地の位置	7
第2節 歴史的環境	8
第3節 周辺の調査	9
第3章 遺構	15
第1節 基本層序と遺構面	15
1. 基本層序	15
2. 遺構面	22
第2節 遺構	29
1. 遺構の概要	29
2. 各期の主要遺構	29
第4章 遺物	115
第1節 遺物の概要	115
第2節 出土遺物	115
1. 土器及び土製品・木製品	115
2. 瓦製品	134
3. 鉄製品	141
4. 銅製品	141
5. 銭貨	144
6. 銅鑄造関連品	145
7. 石製品	146
8. 貝・骨	149
第5章 総括	151
第1節 竹田法印と洛中洛外図屏風	151
1) 竹田家の家系	151
2) 竹田家と「竹田ほういん」	153
第2節 遺構の変遷	156

遺物観察表 / 図版

抄録 / 奥付

挿 図 目 次

図 1 調査位置図 1 (1 : 500,000)	1
図 2 調査位置図 2 (1 : 5,000)	2
図 3 調査区別・グリッド図 (1 : 300)	3
図 4 平安京域の地形分類図	7
図 5 左右引合四坊三町の四行八門 (1 : 1,500)	9
図 6 周辺の調査地 (1 : 4,000)	11
図 7 駕籠呼称図 (1 : 400)	15
図 8 北壁・東壁正面面図 (1 : 100)	16
図 9 南壁 1・2、西壁 1・2正面面図 (1 : 100)	17
図 10 第 1 道構面	23
図 11 第 2 道構面	24
図 12 第 3 道構面	26
図 13 第 4-1 道構面	27
図 14 第 4-2、5 道構面	28
図 15 1 刈道構図	31
図 16 2 刈道構図	33
図 17 3 刈道構図	35
図 18 4 刈道構図	37
図 19 5・6 刈建物配置図	38
図 20 5 刈道構図	39
図 21 6 刈道構図	45
図 22 7 刈建物配置図	48
図 23 7 刈道構図	49
図 24 7-8 刈間 洪水範囲図	61
図 25 8 刈建物配置図	62
図 26 8 刈道構図	63
図 27 9~11 刈建物配置図	66
図 28 9 刈道構図	67
図 29 10 刈道構図	71
図 30 11 刈道構図	75
図 31 12・13 刈建物配置図	80
図 32 12 刈道構図	81
図 33 13 刈道構図	85
図 34 14 刈建物配置図	86
図 35 14 刈道構図	87
図 36 15 刈建物配置図	90
図 37 15 刈道構図	91
図 38 16 刈建物配置図	94
図 39 16 刈道構図	95
図 40 17 刈建物配置図	96
図 41 17 刈道構図	97
図 42 部分平面・断面図 1	98
図 43 部分平面・断面図 2	99
図 44 部分平面・断面図 3	100
図 45 部分平面・断面図 4	101
図 46 部分平面・断面図 5	102
図 47 部分平面・断面図 6	103
図 48 部分平面・断面図 7	104
図 49 部分平面・断面図 8	105
図 50 部分平面・断面図 9	106
図 51 部分平面・断面図 10	107
図 52 部分平面・断面図 11	108
図 53 部分平面・断面図 12	109
図 54 部分平面・断面図 13	110
図 55 建物平面・断面図 1	111
図 56 建物平面・断面図 2	112
図 57 建物平面・断面図 3	113
図 58 建物平面・断面図 4	114
図 59 遺物実測図 1 (093SX) (001 ~ 007), 0349SX (008 ~ 045), 0353SX (046 ~ 047), 0362SX (048 ~ 050), 0374SX (051 ~ 052), 1103SX (053 ~ 058), 1102SX (059)	116
図 60 遺物実測図 2 (0321SX) (060 ~ 064), 0379SX (065 ~ 066), 0307SX (067 ~ 070), 0312SX (071 ~ 073), 0335SX (074 ~ 078), 0342SX (079 ~ 092), 0366SX (093 ~ 096), 0373SX (097 ~ 099), 0375SX (100 ~ 103), 井戸 0934SE (104 ~ 113))	118
図 61 遺物実測図 3 (井戸 0936SE (114 ~ 121), 1490SX (122 ~ 127), 0343SX (128 ~ 130), 0347SX (131), 0348SX (132), 0356SX (133 ~ 134))	121
図 62 遺物実測図 4 (洪水遭禍 0310SD (135 ~ 172))	122
図 63 遺物実測図 5 (洪水遭禍 0310SD (173 ~ 181), 東側溝 0210SD (182 ~ 221))	123
図 64 遺物実測図 6 (0201SD (222 ~ 234))	124
図 65 遺物実測図 7 (0903SX (235 ~ 238), 0315SX (239 ~ 240), 0336SX (241 ~ 242), 1470SX (243 ~ 244), 0306SX (245 ~ 247), 0326SX (248 ~ 249), 0332SX (250 ~ 254), 337SX (255), 0346SX (256 ~ 263), 0350SX (264 ~ 268), 0351SX (269 ~ 270), 0365SX (279 ~ 283), 0377SX (284 ~ 285))	126
図 66 遺物実測図 8 (0983SX (286), 1017SX (287), 溝 1446SD (288 ~ 304), 1499SX (305 ~ 306), 1500SX (307 ~ 312), 井戸 0301SE (313 ~ 319))	128
図 67 遺物実測図 9 (0328SX (320), 0357SX (321 ~ 340), 0361SX (341 ~ 342), 1437SX (343 ~ 357), 1460SX (358 ~ 366))	130
図 68 遺物実測図 10 (1461SX (367 ~ 370), 1487SX (371 ~ 378), 1497SX (379 ~ 380))	131
図 69 遺物実測図 11 (溝 0170SD (390 ~ 392), 1011SX (393), 0921SX (394), 0357SX (395 ~ 396), 0363SX (397 ~ 415))	132
図 70 遺物実測図 12 (1317SX (416 ~ 423), 1215SX (424), 0109SX (425), 0723SX (426), 1219SX (427 ~ 429), 溝 0002SD (430 ~ 435), 穴 0004SK (436), 井戸 0012SE (437), 0630SD (438 ~ 443), 1116SX (444))	135
図 71 遺物実測図 13 (1102SX (445), 1011SX (446 ~ 449), 450), 溝 0103SD (447), 0953SX (448), 0815SX (451))	136
図 72 遺物実測図 14 (0818SX (452 ~ 453))	137
図 73 遺物実測図 15 (0721SX (454), 溝 0002SD (457))	138
図 74 遺物実測図 16 (溝 1002SD (455), 溝 0002SD (456))	139
図 75 遺物実測図 17 (溝 0002SD (458), 0624SX (459))	140
図 76 遺物実測図 18 (0118SX (462), 1320SX (465), 0808SX (466), 3 面包含層 (460 ~ 461 ~ 463 ~ 464), 4 面包含層 (467))	141
図 77 遺物実測図 19 (0033SX (468), 0339SX (471), 0662SX (472), 0603SX (473), 1124SX (475 ~ 490), 0621SX (476), 1313SX (478), 0624SX (479 ~ 488 ~ 489), 1139SX (482), 0321SX (483), 0128SX (485), 1132SX (486), 穴 0045SK (487), 井戸 0050SE (493), 0723SX (495), 穴 0602SK (496), 1113SX (498), 井戸 0018SE (499), 1 面包含層 (494), 2 面包含層 (470 ~ 480 ~ 484 ~ 491 ~ 492), 3 面包含層 (489 ~ 491), 4 面包含層 (474 ~ 477 ~ 497))	143
図 78 遺物実測図 20 (0199P (500), 溝 0201SD (501), 0623SX (502), 0318SX (504), 穴 0013SK (507), 0023SX (508), 0624SX (517), 0335SX (518), 0723SX (519), 0997SX (520), 0934SX (521), 0621SX (523), 0301SX 下層 (524), 0020SX (529 ~ 532), 0346SX (536), 1143SX (538), 1 面包含層 (515), 2 面包含層 (506 ~ 509 ~ 511 ~ 512 ~ 526 ~ 534 ~ 537), 3 面包含層 (503 ~ 505 ~ 510 ~ 513 ~ 514 ~ 516 ~ 522 ~ 525 ~ 527 ~ 528 ~ 533), 4 面包含層 (535))	144
図 79 遺物実測図 21 (井戸 1113SE (550), 1437SX (551 ~ 552), 井戸 0150SE (553), 2 面包含層 (541 ~ 546), 3 面包含層 (540 ~ 544 ~ 545 ~ 547 ~ 549), 4 面包含層 (539 ~ 542 ~ 543 ~ 548))	145
図 80 遺物実測図 22 (4 面包含層 (554 ~ 556), 0345SX (557))	147
図 81 遺物実測図 23 (0105SX (558), 0603SX (559), 0012SX (560))	148
図 82 戰国期下北復元園と調査地 (山田 2009 に一部加筆)	152
図 83 「落永十四年洛中船図」及び「洛中船図落永萬治前」 による調査地周辺敷設	154
図 84 「落永十四年洛中船図」松平下守屋敷と調査地	155
図 85 「落中洛外園屏風 (上杉本)」「竹田ほういん」 屋敷周辺縦掘図	156
図 86 調査地造構変遷図	157 ~ 159 ~ 162 ~ 164

表 目 次

表 1 土層注記 1	18	表 7 丸瓦觀察表	181
表 1 土層注記 2	19	表 8 平瓦觀察表	181
表 1 土層注記 3	20	表 9 鉄製品觀察表	181
表 1 土層注記 4	21	表 10 鋼製品觀察表	182
表 2 遺構時期別変遷表	30	表 11 跪貨觀察表	183
表 3 出上物概要表	115	表 12 剛踏造図述品觀察表	184
表 4 土器等觀察表	166	表 13 石製品（礎）觀察表	184
表 5 軒丸瓦觀察表	181	表 14 石製品（茶臼）觀察表	184
表 6 軒平瓦觀察表	181		

写 真 目 次

写真 1 鋼板仮囲等の準備工	3	写真 9 南区 4面・遺構検出	5
写真 2 アスフルトの産廃処分場撤出	4	写真 10 南区 4面・遺構削除	5
写真 3 新規入場者講習	4	写真 11 井戸の地込作業	5
写真 4 北区 3面・東洞院通東側溝	4	写真 12 東区 4面・遺構検出	6
写真 5 北区 4面・遺構検出後の掘削	4	写真 13 遺物洗浄	6
写真 6 北区 4面・遺構削除	4	写真 14 現地説明会 1	6
写真 7 測量作業	5	写真 15 現地説明会 2	6
写真 8 市文化財保護課馬瀬係長来跡	5	写真 16 埋戻の終了	6

卷頭図版目次

卷頭図版 1		卷頭図版 4	
1 「洛中洛外図屏風（上杉本）」右隻三幅に描かれた竹田法印歴敷と祇園会（米沢市上杉博物館蔵）		1 北区 4面 東洞院通東側溝洪水層（0301SD）下の現存遺構（北から）	
卷頭図版 2		卷頭図版 5	
1 「洛中洛外図屏風（上杉本）」「竹田ほういん」屋敷と東洞院通周辺（米沢市上杉博物館蔵）		1 北区 4面 完掘全景（東から）	
卷頭図版 3		2 北区 南壁 2の土層堆積（北から）	
1 北区 3面 東洞院通 東側溝 0201SD（北から）		卷頭図版 6	

図 版 目 次

図版 1		図版 9	
1 北区 4面の遺構面と現況の東洞院通の比高（東から）		1 北区 4面 完掘全景（南上空から）	
図版 2		2 0201SD（北上空から）	
1 北区 1面 完掘全景（東から）		3 0201SD（北から）	
2 北区 1面 完掘全景（南東から）		図版 10	
図版 3		1 0375SX 周辺の遺構（北から）	
1 北区 1面 完掘全景（南上空から）		2 0360SX 周辺の遺構（北から）	
2 0100SB 蓋石（西上空から）		3 0348SX 周辺の遺構（北から）	
3 0100SB と 0002SD（北西から）		4 0345SX 周辺の遺構（西から）	
4 0013SK・穴藏（西から）		5 0340SX 周辺の遺構（西から）	
図版 4		6 0391SX 周辺の遺構（南から）	
1 北区 2面 完掘全景（南上空から）		7 0363SX 周辺の遺構（南から）	
2 北区 2面 完掘全景（南東から）		8 0334SX 周辺の遺構（南から）	
図版 5		図版 11	
1 北区 2面 完掘全景（南上空から）		1 0365SX 周辺の遺構（南から）	
2 0050SE 周辺の遺構（北から）		2 0310SD（北東から）	
3 0004SK 周辺の遺構（北から）		3 0363SX（北西から）	
4 0107SK（北東から）		4 0401SD（南から）	
5 0110SK と出土瓦（南から）		5 0383SX（西から）	
図版 6		6 0335SX（北から）	
1 北区 3面 完掘全景（東から）		7 0369SX（北西から）	
2 北区 3面 完掘全景（南東から）		8 0375SX（南東から）	
図版 7		図版 12	
1 北区 3面 完掘全景（南上空から）		1 0378SX（北東から）	
2 0230SB 蓋石列（東から）		2 0373SX（南東から）	
3 0205SK（東から）		3 0329SX（北東から）	
4 0206SK（西から）		4 0366SX（北東から）	
図版 8		5 0365SX（北東から）	
1 北区 4面 完掘全景（南東から）		6 0336SX（東から）	
2 北区 4面 完掘全景（東から）		7 0351SX（南西から）	
		8 0382SX（南東から）	

図版 13

- 1 北区 5面 完掘全景（南上空から）
 - 2 北区 5面 完掘全景（東から）
- 図版 14
- 1 南区 1面 完掘全景（北西から）
 - 2 南区 1面 完掘全景（北東から）
- 図版 15
- 1 南区 1面 完掘全景（北上空から）
 - 2 南区 1面 完掘全景（東から）
 - 3 南区 1面 0630SD（西から）
- 図版 16
- 1 南区 2面 完掘全景（東から）
 - 2 南区 2面 完掘全景（南東から）
- 図版 17
- 1 南区 2面 完掘全景（北上空から）
 - 2 南区 2面 完掘東側部分景（北から）
 - 3 南区 2面 完掘西側部分景（北から）
- 図版 18
- 1 南区 3面 完掘全景（北東から）
 - 2 南区 3面 完掘全景（北西から）
- 図版 19
- 1 南区 3面 完掘全景（北上空から）
 - 2 南区 3面 完掘東側部分景（北から）
 - 3 0826SX（北から）
 - 4 0826SX（西上から）
- 図版 20
- 1 南区 4面 完掘全景（東から）
 - 2 南区 4面 完掘全景（北東から）
- 図版 21
- 1 南区 4面 完掘全景（北上空から）
 - 2 南区 4面 完掘全景（北から）
 - 3 南区 4面 完掘全景（北東から）
- 図版 22
- 1 1011SK 周辺の遺構（東から）
 - 2 0934SX 周辺の遺構（南から）
 - 3 0921SX 周辺の遺構（南から）
 - 4 0912SK 周辺の遺構（西から）
 - 5 0906SX 周辺の遺構（南から）
 - 6 0985SX 周辺の遺構（東から）
- 図版 23
- 1 0621SK（北西から）
 - 2 0934SX（北から）
 - 3 0991SK（東から）
 - 4 1017SK（東から）
 - 5 1019SK（東から）
 - 6 0970SX（北東から）
 - 7 0920SE（東から）
 - 8 0962SX（南東から）
- 図版 24
- 1 南区 5面 完掘全景（南東から）
 - 2 南区 5面 完掘全景（東から）
- 図版 25
- 1 東区 1面 完掘全景（北から）
 - 2 東区 1面 完掘全景（北東から）
- 図版 26
- 1 東区 1面 完掘全景（北上空から）
 - 2 完掘全景（北から）
 - 3 0001SK・穴藏（東から）
- 図版 27
- 1 1137SX 周辺の遺構（南東から）
 - 2 1128SX 周辺の遺構（西から）
 - 3 1143SX 周辺の遺構（西から）
 - 4 1113SX 周辺の遺構（西から）
 - 5 1120SE（北から）
 - 6 0001SK（北から）
 - 7 1112SX（西から）
 - 8 1114SK（北から）
- 図版 28
- 1 東区 2面 完掘全景（西上空から）
 - 2 完掘東半景（北から）
 - 3 完掘西半景（北から）

図版 29

 - 1 東区 3面 完掘全景（北東から）
 - 2 東区 3面 完掘全景（北から）

図版 30

 - 1 完掘全景（北から）
 - 2 1311SKX 周辺の遺構（南西から）
 - 3 1319SX 周辺の遺構（西から）
 - 4 1312SX（東から）
 - 5 1429SX（北東から）
 - 6 1429SX（東から）
 - 7 1429SX（北から）

図版 31

 - 1 東区 4面 完掘全景（北から）

図版 32

 - 1 東区 4面 完掘全景（西上空から）
 - 2 東区 4面 完掘全景（北東から）

図版 33

 - 1 1426SX 周辺の遺構（北から）
 - 2 1438SX 周辺の遺構（南西から）
 - 3 1497SX 周辺の遺構（西から）
 - 4 1428SX（西から）
 - 5 1437SX（東から）
 - 6 1446SD（東から）
 - 7 0571-1・2SB（北東から）
 - 8 1486SX（西から）

図版 34

 - 1 東区 5面 完掘全景（南東から）
 - 2 1605SX・1602SX（東から）

図版 35

 - 1 上器 (0349SX (004・025・040), 0307SX (069・070), 0312SK (072), 0342SX (087・089・091・092), 0934SX (113), 0936SE (119), 0201SD (162), 0310SD (167・169・175・179))

図版 36

 - 1 上器 (0201D (212・217), 0907SX (236・238), 0315SK (240), 0336SX (242), 1470SX (244), 0306SE (247), 0332SX (252～254), 0346SX (260・262・263), 0365SX (283), 0993SX (286), 1011SX (287), 1446SD (301), 1499SX (306), 1500SX (308))

図版 37

 - 1 上器 (1500SX (309～312), 0301SE (315～319), 0328SE (320), 0345SX (340), 1437SX (349～355・357), 1460SX (360・361))

図版 38

 - 1 上器 (1460SX (362～365), 1461SX (369～370), 1487SX (374・375・377・378+), 1497SX (382～384・386・389), 0370SD (390・391), 0363SK (412・414)), 木製品 (0921SX (木槌 394))

図版 39

 - 1 上器 (1215SD (429), 0002SD (434), 0004SX (436), 0328SE (437), 1116SK (444), 土製品 (0105SE (水滴 424), 鋼鉄造陶用品 1437SX (灰皿 552)), 瓦製品 (446～454・459))

図版 40

 - 1 陶製品 (468～499), 鉄製品 (460・461・464～467), 石製品 (破片 554～557)

—vi—

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

今回の発掘調査の経緯は、図1・2の京都市中京区東洞院通蛸薬師下る元竹田町643、645、646、646-1、三井産興株式会社が所有される駐車場（公簿面積736.35m²）にて、株式会社大丸松坂屋百貨店不動産事業部が計画し、株式会社フィル・コンストラクションが設計監理する商業施設の建設が計画されたことが発端である。

当該地は、周知の遺跡である「平安京跡」内に所在し、敷地の東側隣接地において2006年10月～2007年2月に財団法人京都市埋蔵文化財研究所により調査^①が実施されており、弥生時代・古墳時代のものから平安時代・室町時代～江戸時代の多量の遺物が出土しており、遺構の残りもよく同様な成果が予想された。

このため、平成29年11月30日・12月1日に、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「市文化財保護課」という。）は、これらの状況等を踏まえて、開発地域の遺構・遺物の有無、残存状況等を確認するため4本のトレーナーを設けて試掘調査が行われた。この結果、4面の遺構面が検出され、届け出された計画では遺構面の保護をすることができないことが明らかとなった。指導により、南北20m×東西21m+南北9m×東西4m=456m²の要発掘調査範囲が設けられ、市文化財保護課の指導・監督のもとに、株式会社四門が、株式会社大丸松坂屋百貨店より委託を受けて、発掘調査を行うことになった。

第2節 調査の経過

掘削土の搬出ができないこと、要発掘調査面積が広いため、調査区456m²を図3のように北区（約144m²）、南区（約154m²）、東区（約158m²）の3区に調査区を分けて、北区→南区→東区の順に調査を実施した。

遺物の取上げ方法は、図3の北西端（X=-110,310,000m、Y=-21,800,000m）から南側へ座標整数値の5m毎に0～4の数字を、北西端から東側へ座標整数値の5m毎にA～Fのアルファベットを付して、5m×5mのグリッドを設けて行った。グリッドの呼称は、数字・アルファベットとした。



図1 調査位置図1 (1:500,000)

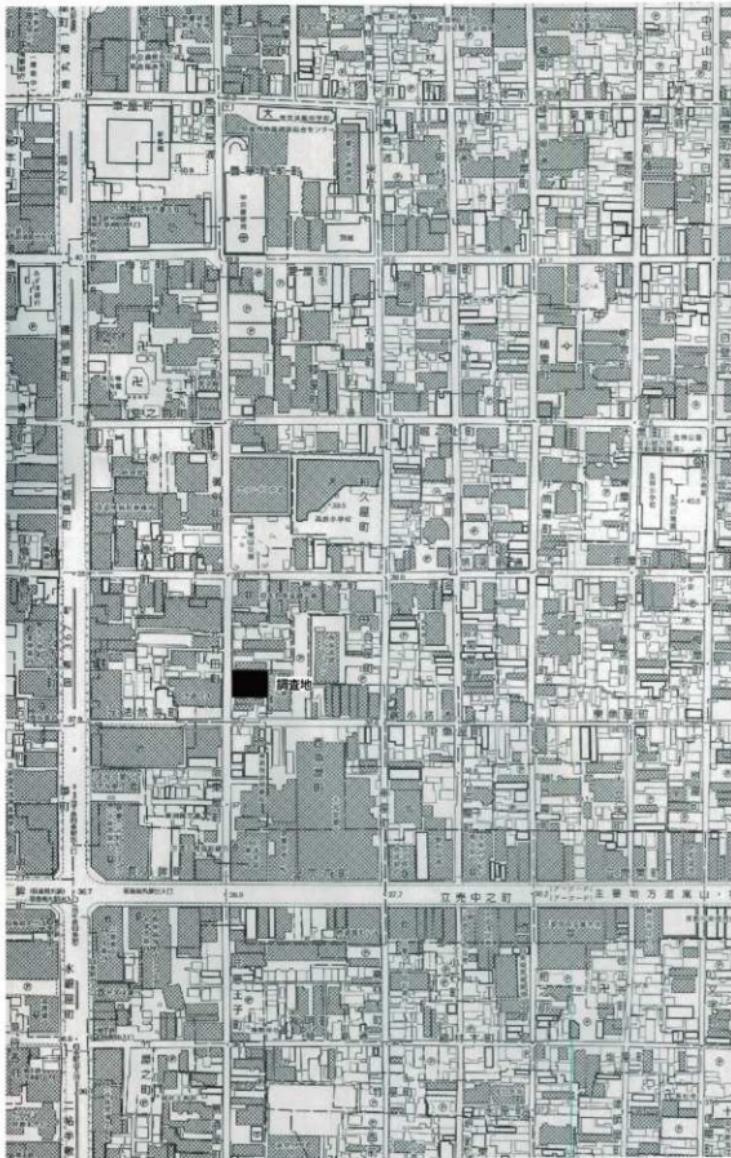


図2 調査地位置図2 (1:5,000)

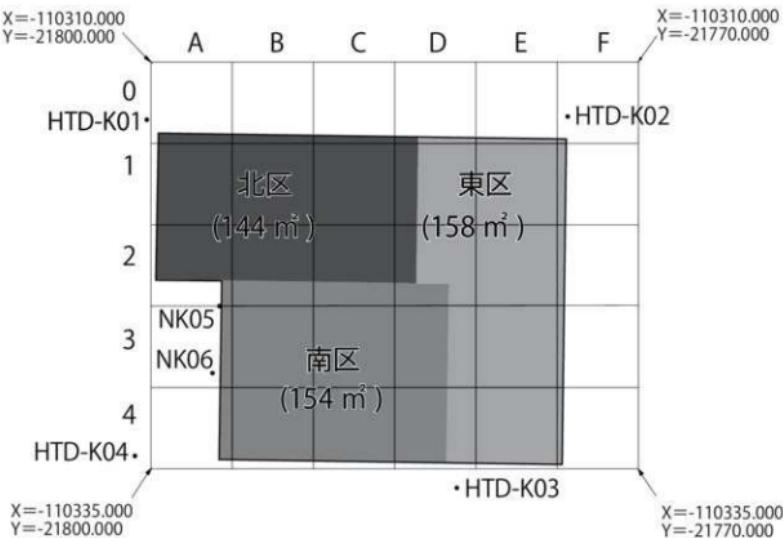


図3 調査区割・グリッド図 (1:300)

調査体制としては、主任調査員1名、調査員1名、調査補助員2名、作業員6～8名、整理員1～3名、重機オペ1名、重機（0.45m³）1台の配置を行った。また、市文化財保護課の指導により、調査検証委員会を設立、同志社女子大学現代社会学部教授山田邦和氏と、京都府立大学非常勤講師橋本清一氏に委員を委託した。

以下、調査経過の概要を記す。

平成30年2月1日　　調査前の境界・隣接地壁面等の写真撮影。重機・現場事務所・仮設トイレ・ノッチタンク・発掘資材・仮囲資材等の搬入。仮設電気・仮設水道の敷設。東洞院側の鋼板仮囲い及び蛇腹ゲート設置作業終了。市文化財保護課による調査範囲の位置決め確認を受け、アスファルト舗装のカットと、重機によるアスファルト剥し開始。㈱大丸松坂屋百货店中西直彦氏来跡。

2月2・3日　　調査区安全柵の設置。発掘資材の仮倉庫設置。洗浄遺物の乾燥場設置。撮影用足場の設置。労基掲示用看板並びに鋼板貼付け表示終了。調査用資材の搬入終了。3日にアスファルトの搬出撤去実施。3日に㈱フィル・コンストラクション高野社長来跡。

2月5日　　基準点4点と計付けメッシュの設定。新規入場者講習実施。北区の表土掘削を開始すると共に、遺構検出開始。北東隅に幕末の半地下式穴蔵0001SKの地下への階段検出。



写真1 鋼板仮囲等の準備工

- 2月6日 ベルトコンベア7台搬入。北区1面目の表土掘削終了。
- 2月7・8日 遺構検出を終了し、検出写真撮影。遺構掘削を開始。0002SDより本瓦葺丸瓦・平瓦多数出土（松平上總守京屋敷の南側溝カ）。
- 2月9日 北区1面目の完掘写真撮影（超軽量ドローンによる撮影を併せ実施）。市文化財保護課の段階確認終了。
- 2月13日 北区1面目の平面測量実施。測量終了後に2面目の包含層掘削開始。遺物洗浄を開始。
- 2月14～16日 15日に北区2面目の包含層掘削を終了し、遺構検出写真撮影。16日より遺構掘削を継続して実施。
- 2月19日 北区2面目の遺構掘削を終了し、完掘写真撮影。平面測量を実施。市文化財保護課の段階確認終了。
- 2月20～22日 20日に北区3面目の包含層掘削を終了し、遺構検出写真撮影。21日より遺構掘削を継続して実施。22日に完掘写真撮影を終了。東洞院通東側溝0201SDは、比較的幅の狭い小さな溝であったことが判明。
- 2月23日 北区3面目の平面測量を実施。市文化財保護課の段階確認終了。
- 2月26～3月15日 27日に北区4面目の包含層掘削を終了し、遺構検出写真撮影。遺構掘削は、雨が多く天候が良くなかったこと、遺構の切りあいが激しく複雑で、色調や土質に変化が無く困難を極めた。中間の切り合い平面図や断面図を作成して対応した。15日に掘削を終了し、完掘写真撮影。26日に産経新聞園田記者来跡。3月7日に脚本・コンストラクション高野社長来跡。
- 3月16日 北区4面目の平面測量を実施。市文化財保護課の段階確認終了。
- 3月19～22日 雨のため作業が遅れる。北区5面目の遺構掘削と4面目遺構の掘り残しておいた遺構の掘削を終了。
- 3月23日 北区5面目の完掘写真撮影。平面と壁面の測量を実施。壁面の注記開始。市文化財保護課の段階確認終了。
- 3月24日 北区の埋戻作業と壁面注記を併行して実施し終了。
- 3月26～29日 南区1面目の表土掘削開始。安全柵と土器乾燥場の移設。包含層掘削・掘乱遺構の掘削。27日に遺構検出写真撮影。遺構掘削を継続して実施。29日に京都平安文化財植山茂氏来跡。
- 3月30日 完掘写真撮影。平面測量を実施。
- 4月2日 市文化財保護課の段階確認終了。南区2面目の包



写真2 アスファルトの産廃処分場搬出



写真3 新規入場者講習



写真4 北区3面・東洞院通東側溝



写真5 北区4面・遺構検出後の掘削



写真6 北区4面・遺構掘削

含層掘削及び遺構検出。

4月3・4日 3日に遺構検出写真撮影。以後、遺構掘削を開始し4日に終了。

4月5日 南区2面目の完掘写真撮影。平面測量を実施。市文化財保護課の段階確認終了。

4月6～9日 南区3面目の包含層掘削と遺構検出終了。9日に遺構検出写真撮影。

4月10～12日 遺構掘削を開始し12日に終了。10日に市文化財保護課馬瀬係長、野村美術館桐山学芸課長来跡。

4月13日 南区3面目の完掘写真撮影。平面測量を実施。

4月16日 市文化財保護課の段階確認終了。南区4面目の包含層掘削開始。

4月17日 南区4面目の包含層掘削と遺構検出終了。遺構検出写真撮影。

4月18～28日 遺構掘削継続。

5月1日 遺構掘削を終了し、完掘写真撮影。平面測量を実施。市文化財保護課の段階確認終了。

5月2日 南区5面目の包含層掘削と遺構検出、遺構掘削を終了。完掘写真を撮影。平面と壁面の測量を実施。現場養生を行い、連休に入る。

5月7～10日 南区の埋戻作業と東区の表土掘削を開始。安全柵・バリケード等の移設実施。8・9日で壁面上層の注記を終了。9日に京都市建築指導課2名・市文化財保護課3名が、出来高地盤高について図面との照合作業のため来跡。

5月11日 東区1面目の包含層掘削と遺構検出終了。遺構検出写真撮影。

5月14～16日 遺構掘削を終了。完掘写真を撮影。市文化財保護課の段階確認終了。

5月17・18日 東区2面目の包含層掘削と遺構検出終了。遺構検出写真撮影。継続して遺構掘削を開始。18日に㈱フィル・コンストラクション高野社長来跡。

5月21・22日 東区2面目の遺構掘削を終了。完掘写真を撮影。平面測量を実施。市文化財保護課の段階確認終了。

5月23～25日 東区3面目の包含層掘削と遺構検出終了。遺構検出写真撮影。継続して遺構掘削を開始。25日に㈱森田工務店久野所長・服部担当課長来跡。

5月28・29日 東区3面目の遺構掘削を終了。完掘写真を撮影。29日に平面測量を実施。市文化財保護課の段階確認終了。

5月30日～6月4日 雨が続き作業が滞る。東区4面目の包



写真7 測量作業



写真8 市文化財保護課馬瀬係長来跡



写真9 南区4面・遺構検出



写真10 南区4面・遺構掘削



写真11 井戸の堀込作業

含層掘削と遺構検出終了。4日に遺構検出写真撮影。継続して遺構の掘削を開始。現地説明会用の遺物洗浄と接合を開始。

6月5～12日 6日に近畿梅雨入り。6日夜に㈱アート中村虎文職長が自宅で倒れ緊急搬送、入院。7日より職長を植均氏とする。12日早朝に台風5号通過。ようやく、12日に遺構掘削を終了。

6月13日 東区4面目の完掘写真を撮影。平面測量を実施。市文化財保護課の段階確認終了。東区5面目の遺構検出と掘削を開始。

6月14日 東区5面目の遺構完掘写真撮影。平面及び壁面測量を実施。市文化財保護課の段階確認終了。壁面の土層注記を開始。洗浄乾燥済遺物を事務所に移動。6月16日の現地説明会会場の設営を始める。

6月15日 現地説明会レジメの印刷と、安全な見学会実施のための指示を全員に行う。

6月16日 地元対象の現地説明会（10:00～）を実施。約120名の出席者があった。

6月18日 7:58に近畿北部地震が発生し、電車・高速が一時不通となる。地震による現場への被害はなく、周辺建物等にも影響なし。作業員が帰宅困難者となるため、高速の点検作業終了後、早急に帰宅を指示。壁面の土層注記を終了。東区の埋戻作業開始。仮設材の解体作業開始。

6月19日 埋戻作業を終了。現地調査は終了。

6月20～23日 地中より出土した基礎コンクリート・石材等の集積と破碎、23日に廃棄物の搬出作業を実施。安全対策用柵等の解体撤去作業実施。遺物洗浄を全員で急ぐ。23日に㈱アート中村職長が退院され、元気な姿を現場へ見せる。

6月25～28日 発掘資材の搬出作業。遺物・備品の事務所への移動。電気・水道・トイレ等の仮設材の解体撤去作業。事務所・ノッチタンク・ベルトコンベア等の搬出作業。28日に鋼板仮囲いを解体撤去。隣接地境界・建物壁面等の写真撮影。

6月29日 建築施工業者である㈱森田工務店服部担当課長に、現場を引き継ぐ。

6月30日 最後まで残っていた重機は、早朝に台車にて搬出。これにより、全ての現地調査を完了した。

〔引用参考文献〕

- 1) 東洋一・山本雅和・能芝妙子『平安京左京四条坊二町跡』京都市理蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-12. ㈱京都市理蔵文化財研究所, 2009年



写真12 東区4面・遺構検出



写真13 遺物洗浄



写真14 現地説明会1



写真15 現地説明会2



写真16 埋戻の終了

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境と調査地の位置

本調査地は、現在の行政区画で、京都市中京区東洞院通蛸薬師下る元竹田町 643、645、646、646-1に所在する。敷地の標高は 37.3 ~ 37.9 m で、南西下がりの傾斜がみられる。京都において水害史研究を行ってきた河角龍典¹⁾が作成した図4 平安京城の地形分類図でいうところの、完新世段丘面→段丘面IV→自然堤防帶・扇状地帯に所在していることが認識され、特に調査地は扇状地帯上に位置していることが確認される。

また河角龍典²⁾は、京都を流れる歴史時代の諸河川、特に鴨川の地形環境は、10 ~ 11世紀前半頃の河床低下により河底の下刻が進んで段丘崖が形成されたと考えており、これは14世紀頃まで続いたことを想定している。その後、逆に15世紀頃から始まる急速な土砂堆積によって河底が埋積され、溢流氾濫により自然堤防が次第に形成され、河床の上昇が進んだものと推測している。16世紀以降は、天井川化がさらに進み、段丘面IVにおいても土砂の堆積が大きくなつたものと考えており、御土居の築堤はこれらの洪水対策の一つであったと考えている。この状況は、江戸時代の何回もの浚渫を経過して、20世紀前半、昭和10年(1935)の鴨川大洪水を契機に行われた大規模な浚渫工事と、小規模河川(紙屋川・御室川)の付け替えによりようやく解消され、排水不良についても大幅に減少したのであった。

こうした鴨川の地形環境の変化と、今回の調査地内での堆積環境の変化は、連動しているものと推測することができる。遺構の変遷を考えるにあたって、堆積物の質や構造、堆積方向等を詳細に調査することにより、極めて大きな示唆を与えてくれるものと考えられる。

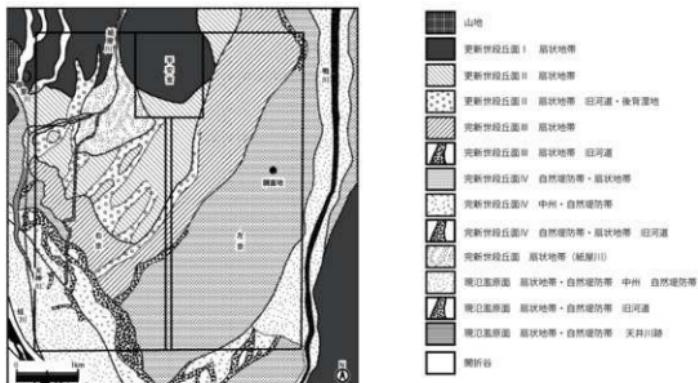


図4 平安京城の地形分類図(河角 2001・2004 より転載、縮小一部加筆)

第2節 歴史的環境

調査地に係わる文献史料や発掘調査資料には、下記のようなものがある。

縄文時代～飛鳥時代の遺跡である烏丸御池遺跡が北側に、烏丸綾小路遺跡やその一部とも考えられる長刀鉢町遺跡が南西側にあって、その中間に位置する。この時代の遺跡の存在は、希薄と考えられているが、周辺の調査において弥生時代後期の溝が検出されており、弥生土器、石器が出土し、古墳時代後期の須恵器の环身・低脚高环等が出土している。

平安京条坊では左京四条四坊三町に当たり、北側を四条坊門小路（蛸薬師通）が、西側を東から数えて2番目の大路である東洞院大路（東洞院通）が、南側を錦小路（錦小路通）が、東側を高倉小路（高倉通）に囲まれた範囲である。調査地は、その東洞院通東頃に当たる。また、一町内を区分する土地割である「四行八門制」³⁾では、図5の西一行の北六門・北七門の二戸主分に相当すると考えられる。東洞院通は、「延喜式」⁴⁾では東西幅が垣（築地）中央から中央までで8丈（約24m）あり、路面は5丈6尺（約16.8m）で、東西の各側溝は4尺（約1.2m）、各行は5尺（約1.5m）であった。

平安時代の文献史料でみると、「東京圖」「拾芥抄」⁵⁾に、「故民部卿」の邸宅の存在を記すが、どの人物であるかは不明である。さらに、安元2年（1176）「山城大徳寺文書」に、この町の東北部にある比丘尼法妙の一戸主を等分し、半分を娘に譲り、残りを八丈絹二十疋で売却した屋地譲状⁶⁾が残る。

室町時代後期には、応仁・文明の乱（1467～1477）が起り、市街地は縮小していったが、「祇園会山鉢事」「祇園社記」⁷⁾によると、応仁の乱前には、芦刈山が当町付近から出されていたことを記す。さらに、天文法華の乱（1536）⁸⁾が起り、下京は灰燼に帰してしまう。その後、南北で二条通～五条通に、東西で堀川通付近～高倉通付近にかけて「下京惣構」⁹⁾が設けられた。調査地は、町組からは少し東に離れるが惣構内に位置しており、鉢町を中心とした「古町」ではなく、江戸期には新興の町組である「三町組新町」の「東洞院壱町半組」に、東洞院通北側の三文字町、御射山町と、東洞院通南側の坂東屋町と共に属し月鉢を出している。

また、「上杉本洛中洛外図屏風」¹⁰⁾には、東洞院通の東頃、錦通を上った付近に「竹田ほういん」の屋敷を描く。これは、大永2年（1522）9月14日付「竹田法印定盛請文書」「嵯峨家文書」¹¹⁾に示す「東洞院東頃、南は錦小路、北は四条坊門、（南北）一町、東西廿五丈」に符合する。

「元竹田町」という町名は、中井家が幕府に提出した寛永14年（1637）の京屋敷を書き上げた『寛永十四年洛中絵図』（1637）¹²⁾に「本竹田町」とあり、以後も中井家系絵図は「本竹田町」としている。これに対し民間の慶安5年（1652）刊行『平安城東西南北町界之図』¹³⁾以来の絵図や町鑑類は、宝暦期（1751～64）まで「常円ノ町」で、宝暦12年刊（1762）『京町鑑』¹⁴⁾で「元竹田町」となる。『寛永十四年洛中絵図』には、竹田法印屋敷跡の北西隅に「町屋」、その南側に「松平下総守屋敷」（奥平氏）の記載があり、明治2年（1869）の廃邸にいたるまで存続した。

大正4年刊（1915）『京都坊目誌』¹⁵⁾によれば、鴨川以西に京極川、東洞院川（中世の烏丸川、室町川と共に）、西洞院川、堀川、大宮川、耳敏川、西大宮川、西堀川（紙屋川）、西ノ西洞院川（佐比川）、西室町川、西京極川があったとされる。その全てがかったかどうかも判然とせず、河川にも大路小路と同様に大小があったであろうし、流れていた時代も異なっていた可能性もある。このうち東洞院川については、調査地西側の東洞院大路中央を流れる川の一部が左京四条三坊十五町の調査で確認されている。

第3節 周辺の調査

調査地周辺は、商業施設やオフィスビルが建ち並び、さらに人通りの多い錦市場街がある繁華街に隣接している。このため、これまでの再開発に伴い実施された試掘調査や立会調査の件数は非常に多いが、開発面積の関係もあるのか本発掘調査の調査例は少ない。ここでは、今回の調査地No.①である左京四条四坊三町内で実施されたものと、隣接する他町か、後述する報告と係わる調査地に限り、図6に位置を示し下記に記述する。

【左京四条四坊三町】

No.②

- ・京都市中京区泉正寺町320、西魚屋町612-1・2

調査地である左京四条四坊三町でのこれまでの調査例は、この三町中央部で行われた2006年

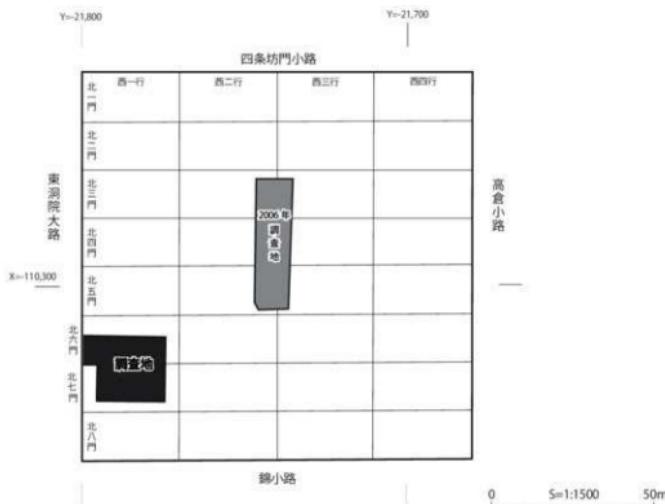


図5 左京四条四坊三町の四行八門（1:1,500）

発掘調査¹⁶⁾ の 1 件のみである。約 441m² の調査で、4 面の調査が行われている。

検出遺構には、弥生時代後期後半の竪穴住居・自然流路・土坑が、平安時代の土坑、鎌倉時代の土坑、室町時代の堀・石組井戸・石組土坑・土坑・溝・建物・柵、江戸時代の井戸・土坑・建物等がある。

このうち、第 2 面で検出された南北方向の堀 SD313 は、「調査区西端で現地表下 1.2 m で 40 m にわたって検出した。上辺 2.4 m、下辺 0.6 m、深さ 1.6 m の断面逆台形を呈する南北方向の堀である。1 町の東西の中心より、わずかに西寄りに位置する。……遺物は少量しか出土していないが、16 世紀前半～中頃に開削され 16 世紀末に埋まつたものとみられる。」としていて、今回の調査地との関連が考えられる遺構の一つである。

【左京四条四坊四町】

No.③

- ・ 京都市中京区阪東屋町 661 他

1991 年の発掘調査¹⁷⁾ で、大丸京都店の東洞院通側、約 720m² の調査が行われている。

検出遺構には、弥生時代中期の自然流路と弥生時代後期の溝、平安時代～鎌倉時代の井戸、室町時代の土坑・溝・柱穴、江戸時代の土坑・溝・井戸等がある。注目される遺物には、江戸時代初期（17 世紀前半）の鏡鑄造関係遺物の出土がある。

このうち、「発掘区西端部では、15～16 世紀代の東洞院通側溝とみられる溝 S385 が検出された。」としていて、今回検出した東洞院東側溝と繋がるものと考えられる。

【左京四条四坊二町】

左京四条四坊二町では、下記の No.④～⑥ の 3 件の調査が行われた。

No.④

- ・ 京都市中京区御射山町 262 他、中京青少年活動センター内

1990～1991 年の発掘調査¹⁸⁾ では、2 区に分けて調査が行われている。

検出遺構には、縄文時代晩期～飛鳥時代の自然流路、平安時代中期～後期の区画溝・井戸・土坑、鎌倉時代の土坑・柱穴、室町時代から戦国時代の土坑・柱穴、江戸時代前期の溝・井戸・土坑等がある。

このうち、「室町時代から桃山時代は、江戸時代以降に比べて遺構数が少なく、土器類を廃棄した土壌や柱穴が散見されるのみでまとまりを持たない。」としている。

No.⑤

- ・ 京都市中京区和久屋町 343 他、市立高倉小学校内

1993 の発掘調査¹⁹⁾ では、約 890m² 5 面の調査が行われている。

検出遺構には、平安時代後期～鎌倉時代の区画溝・井戸・土坑、室町時代の建物・礫敷遺構・柱穴・土坑、桃山時代～江戸時代前期の柵・建物・井戸・土坑・石室等がある。特徴ある遺構として、室町時代の倉の基礎構造と考えられる礫敷遺構 1 棟がある。

このうち、戦国時代から江戸時代前期の出土遺物には、「他の時期と比較するとかなり量が少

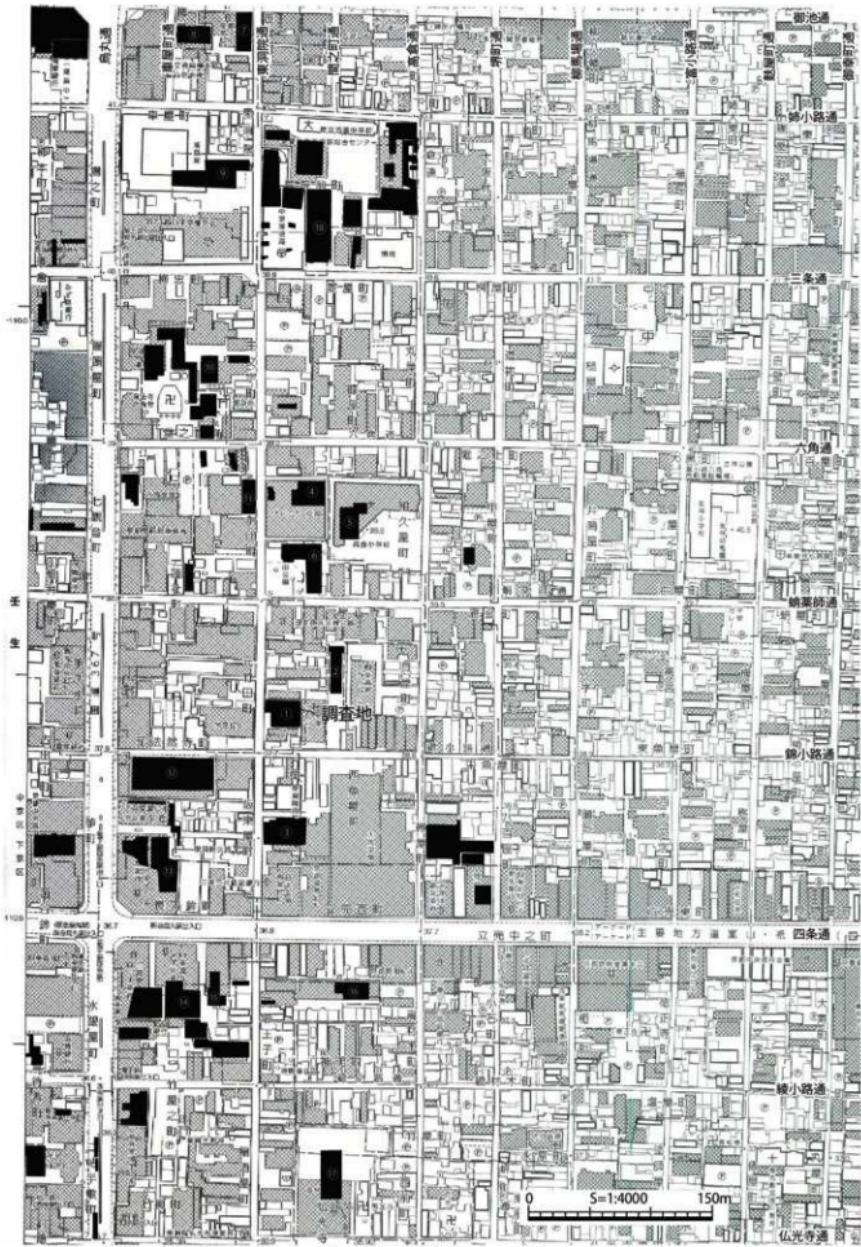


図 6 周辺の調査地 (1 : 4,000)

ない。多くを土師器の皿類と焼締陶器の甕類が占めている。」とする。

No.⑥

- ・京都市中京区御射山町他、御射山公園内

2008 年の発掘調査²⁰⁾では、約 838m² 4 面の調査が行われている。

検出遺構には、縄文時代後期～晚期・弥生時代中期後半～後期中葉・古墳時代の自然流路、平安時代中期の井戸・鎌倉時代の井戸・地下室・土坑・土取り穴、室町時代の溝・井戸・甕・甕付穴、集石土坑・土坑・土取穴、江戸時代の溝・樋・井戸・土蔵・竈・甕・甕付穴、穴蔵、石室、集石土坑・土坑・柱穴等がある。

このうち、時代を判別することができた約 900 基の遺構を、時代別遺構数変遷表にしたものを作成するにあたり、「從来の研究では調査地周辺は、下京町東側と下京惣構西側の間の空閑地帯、もしくは不明な地帯とされている。また、下京惣構が高倉通と東洞院通の間にあると推測されているが、正確な位置は不明なままである。したがって、調査地が室町時代後期に下京惣構の空閑地であったのか、町家が惣構際まで広がっていたかは発掘調査で検証されるべき問題として残されていた。」と、この調査での課題を述べながら、「今回の調査では京都が荒廃したとされた応仁の乱に対応する室町時代後期前半の遺構数がピークをなすのに対し、室町時代後期後半の遺構が少ないと注意を要する。この現象は応仁の乱の下京はむしろ活況を示しており、その後に遺構が減少するのは下京が焼き討ちされた天文法華の乱(1536 年)の影響であると考えられる。今回検出した室町時代後期後半の遺構は正確不明で、特に井戸を 1 基も検出していないことが特徴的である。調査地周辺は比較的空閑地であったことが推定できる。江戸時代初頭には遺構数が室町時代後期前半の状況に復活し、むしろ井戸の数はより多くなっていることがわかる。」と、調査見解を述べている。

No.⑪

- ・京都市中京区御射山町 273

2014 年の調査地²¹⁾では、左京四条三坊十五町西類の東洞院通に面する所において、約 306m² 6 面の調査が行われている。

検出遺構には、平安時代後期～末の東洞院通西側溝・溝・土坑・柱穴・流れ堆積、鎌倉時代の溝・土坑・東洞院通路面・柱穴、室町時代の東洞院通西側溝・土坑・東洞院通路面、桃山時代の溝(東洞院川)・東洞院通路面、江戸時代の井戸・土坑・石列・樋・礎石建物等がある。

このうち、東洞院通西側溝と路面の検出と、これまで知られていなかった、東洞院通中央を南進する東洞院川とみられる溝(溝 130)の発見がある。「東洞院川」の記述は、大正 4 年刊『京都坊目誌』²²⁾にあり、「東洞院川 東洞院大路ニアリ。一条ヨリ大炊御門ニ至リ。西流シテ烏丸ニ至リ。南流シテ冷泉二至リ又西折シテ室町ニ至リ。又南流シテ四條ニ至リ。西注シテ西洞院川ニ合ス。」とある。しかし、これまでの調査において、東洞院通中央での川(溝)の検出例はない。反転復元された川(溝)の規模は、「西側溝(溝 134・149)は築地芯から溝芯までが 3.0m、幅 1.6m、路面幅約 5.3 m(溝 130 西肩)で、反転復元すると川幅は約 5.8m となる。」と、東洞院

川はいつ掘削されたかは不明だが、川（溝130）の堆積土から平安時代後期から室町時代末期の遺物などが出土しており、埋没したのは桃山時代で明らかである。また、図5・7の断面形状を見ると中段から外反し、形状に変化がある。これは溝のほりかえして溝は幾度も改修されていたと考えられる。・・・洪水時の平安京の都市機能を維持するために造営当初から東洞院川は掘削されていたものと思われる。」と、遺構を評価している。

このように周辺の調査においては、縄文時代から近現代にいたる遺構が重複しており、特に室町時代から江戸時代前期に至る遺構の変遷は、これまでの調査成果と関連する遺構の検出が予想された。

【引用参考文献】

- 1) 河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷」『考古学と自然科学』42、日本文化財科学会、2001年
- 2) 河角龍典「歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化」『京都歴史災害研究』第1号、立命館大学歴史都市災害研究所、2004年
- 3) 「四行八門制」とは、一町（40丈×40丈）の宅地割を、東西に4分割、南北に8分割して、32分割するもので、この1区画（東西10丈×南北5丈）を戸主という。
- 4) 「延喜式」は、延喜5年（905）に醍醐天皇の命により、これまでの「弘仁式」「貞觀式」にその後の格式（律令の施工細則）を取捨編纂したもので、藤原時平、藤原忠平などが延長5年（927）に完成し、その後改訂を重ねて康保4年（967）より施工された。大路の規模等は、左右京職の京程に記述がある。
- 5) 「桔ヶ抄」は、鎌倉時代に成立していたものを南北朝期の御院公賀が増補、校訂したものと考えられており、地図や図面類を豊富に含んでいる。「東京図」や「西京図」もその一つである。
- 6) 「被380」比丘尼法妙寺地譜状（安元2年五月廿六日条）『平安道文』（山城大徳寺文書）、東京堂出版
- 7) 江戸時代中期に紙團社執行であった行扶が編纂した『紙團社記』（『新編八坂社記録』2016年）の中の書き写し文書である室町幕臣松田豈前守頼亮の「紙團会山跡事」で、応仁・文明の乱前には60基の山跡の中に「鳥丸と室町の間」から出されている「ありかり山」（芦刈山）の名前が見える。これは、現在の「芦刈山」を出す町（京都市下京区綾小路通西洞院西入ル 芦刈山町）とは異なる。応仁・文明の乱で中止となっていた神農渡御・山跡巡行が、明応9年（1500）に再開された時には、現在の町へ「ありかり山」（芦刈山）を構成する主要な町衆が、何らかの理由で移動した可能性も考えられる。
- ・河内将芳「紙團祭と戦国京都」角川叢書、2007年
- 8) 日蓮宗（法華宗）は、鎌倉時代末の永仁2年（1294）に上洛した日豫によって広められ、応仁・文明の乱前後には本山だけで21カ寺を数え、京都は「団巻の町」とまで称された。日蓮宗徒の町衆（法華衆）には、公家や武家もいたが、中核となったのは上倉や酒屋といった町衆であった。室町時代後期には、下京においても不受不施の法理に従い、自治と自衛のために團結し、闘闘的な集団を編て、他の宗派（特に山門延暦寺や淨土真宗本願寺）やこれを擁護する武家と対立し、要求を押しとおすことになった。天文元年（1532）に淨土真宗本願寺派の一東衆の一揆が入洛する噂が広がり、対立していた幕府警備頭畠川晴元や茨木長隆等と同盟した法華衆がこれを防ぎ、天文2年に山科本願寺を焼き討ちした。これにより、下京での自治権を得たほか、地子錢の納入の拒否をおこなうなど、他宗派からは法華一揆と呼ばれた。天文5年2月には法華衆が山門延暦寺に宗教閑問（「松本問答」）を呼びかけ、法華衆が論破した。このことを発端として、山門延暦寺は日蓮宗に対し、「法華宗」を名乗ることを止める裁定を幕府に求めたが、後醍醐天皇の許を證拠に山門は放逐した。このため、山門延暦寺は全山の大衆決議により十五ヶ条の決議をし、京都法華衆の撃滅を決定した。天文5年7月、延暦寺は後奈良天皇や幕府に法華衆討伐の許可を求めて、朝倉景泰をはじめ敵対する他宗派の園城寺、本願寺、東寺、興福寺等にも協力を求めたが、援軍は断られたものの中立を約した。山門は僧兵や宗徒に六角定頼、木阪長政等が加わり6万人を勤員して、天文5年（1536）7月22日早朝に洛外の法華宗拠点である妙泉寺と松ヶ崎城を襲撃し、次いで三条口と四条口を六角定頼が攻撃して洛中に入り、日蓮宗二十一本山を悉く焼き、法華寺院と町衆が集住する下京も全城が焼失し、上京も三分の一が焼けた。28日には最後まで戦った本圓寺が陥落した。この時、法華衆の3千とも1万ともいわれる人々が殺害されたと伝える。日蓮宗の立場からは「天文法華の法難」と呼ぶ。以後、日蓮宗は禁教となり、法華衆は洛外に追放された。天文11年（1542）に京都帰還を許す勅許があり、さらに天文16年（1547）六角定頼の仲介により延暦寺と日蓮宗との和解（兵火を免れた妙伝寺の破却、残一万疋の上納、毎年3月の吉日神社祭礼料足の追納）が成立し、後に15本山が京都に戻った。
- 長々と書いたが、下京にとっては大きな事件であり、その痕跡はどこかに留められている可能性がある。例えば『鹿苑日錄』天文五年（1536）五月廿九日条、「六角早鐘、用苦ノ溝ヲ掘ルト云々」もその一つである。
- ・今谷明「天文法華の亂—武装する町衆—」平凡社、1989年
- ・河内将芳「日蓮宗と戦国京都」淡交社、2013年

- 9) 「下京構」は、室町時代後期の『洛中洛外図屏風（上杉本）』の中にも表現される上京と下京の集住地帯をそれぞれ固む櫓構の内、商工業者が多く住む下京の構のことである。基本的には土塀と堀で構成され、所々に木戸と橋が設けられる。
- その範囲は、屏風絵等から幾つか想定がなされている。戦国期の上京下京復元図としては、山田邦和氏の研究がある。
- ・高橋康夫「京都中世都市史研究」思文閣出版、1983年
 - ・高橋康夫「洛中洛外」平凡社、1988年
 - ・高橋康夫・吉田伸之ほか編「図集日本都市史」東京大学出版会、1993年
 - ・黒田祐一郎「中世都市京都の研究」校倉書房、1996年
 - ・今谷明「京都・一五四七年」平凡社、1988年
 - ・山田邦和「京都都市史の研究」吉川弘文館、2009年
- 10) 洛中洛外図は、京都の洛中と洛外の景観や風俗を描いた屏風絵である。このうち「上杉本洛中洛外図屏風」は、米沢蒲原主上杉家に伝來したもので、織田信長から上杉謙信に贈られた狩野永徳の作品と伝わるものである。これには多くの議論もある。近年、小島道裕氏の研究によれば、200点以上も残されている洛中洛外図で最も制作年代が古いといわれる「歴博甲本」は景観年代が1525年頃で、「上杉本」が1565年頃の景観だといわれている。「竹田はういん」の屋敷についても、この頃の景観と考えておきたい。
- ・今谷明「京都・一五四七年」平凡社、1988年
 - ・黒田日出男「謎解き、洛中洛外図」岩波書店、1996年
 - ・小島道裕「描かれた戦国の京都」吉川弘文館、2009年
- 11) 「477 竹田法印盛請文案」（大永二年九月十四日条）『大日本古文書』（鰐川家文書）、東京大学出版会
- 12) 「寛永十四年洛中絵図」吉川弘文館、1969年
- 13) 「平安城東西南北町井之図」は、江戸前期の都市版本地図である。
 - ・矢守一彦はがね『日本の古地図』4京都、講談社、1976年
- 14) 「京町郷」新修京都叢書第3、臨川書店、1969年
- 15) 「京都坊目誌」新修京都叢書第17、臨川書店、1967年
- 16) 伊藤潔『平安京左京四条四坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書 2006-28、
・神京都市埋蔵文化財研究所、2007年
- 17) 植山茂・定森秀夫・南博史ほか『平安京左京四条四坊四町』京都文化博物館調査研究報告第9集、京都府京都文化博物館、1993年
- 18) 山本雅和「平安京左京四条四坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』神京都市埋蔵文化財研究所、1994年
- 19) 山本雅和・鈴木廣司「平安京左京四条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』神京都市埋蔵文化財研究所、1996年
- 20) 東洋一・山本雅和・能芝妙子『平安京左京四条四坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書 2008-12、
・神京都市埋蔵文化財研究所、2009年
- 21) 小松武彦『平安京左京四条三坊十五町跡・烏丸御池遺跡』古代文化調査会、2015年
- 22) 前掲註15)

第3章 遺構

第1節 基本層序と遺構面

1. 基本層序

壁面図を読み解くことは、一概には言えないが、堆積層の傾斜、層厚、質の変化から、堆積物の来た方向や原因を知ることができる。また、同一の地層上面を確認していくことができれば、時間の幅は不明ではあるが、ある時期の生活面を把握することが可能となる。しかし、平安京左京域は遺構の切り合いが余りに激しいため、基本層序となる安定した堆積を確認することさえ、なかなか困難な状態である。このため筆者は、少しでも多くの情報を得て遺跡や遺構を理解するために、取て時間と労力を要する調査区全体を一巡する壁面図を作成している。

各壁面の呼称は、図7のように、北区北壁と東区北壁を接合した「北壁」、東区の「東壁」、東区南壁と南区南壁を接合した「南壁1」と北区の「南壁2」、南区の「西壁1」と北区の「西壁2」とした。

層序は、この6面の壁面図（図8・9）から、概略1～8層（表1）に大別した。

現況の調査地表面の標高は、南北長約24m×東西長約30.5mの敷地で、北西端で37.52m、北東端で37.93m、南西端で37.34m、南東端で37.87mであった。南北の高低差は、東洞院通の北と

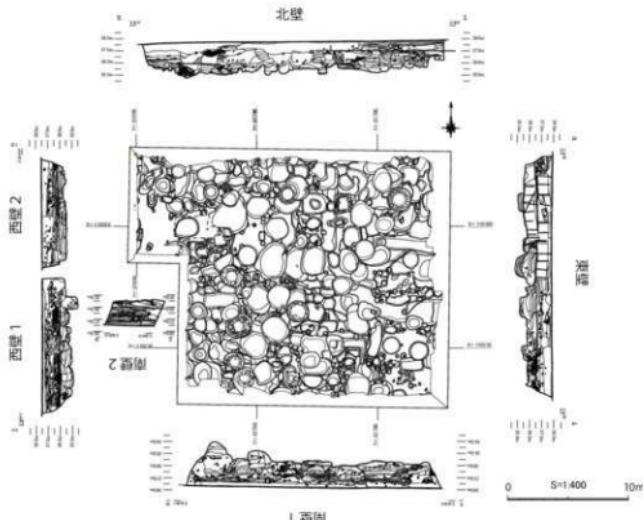
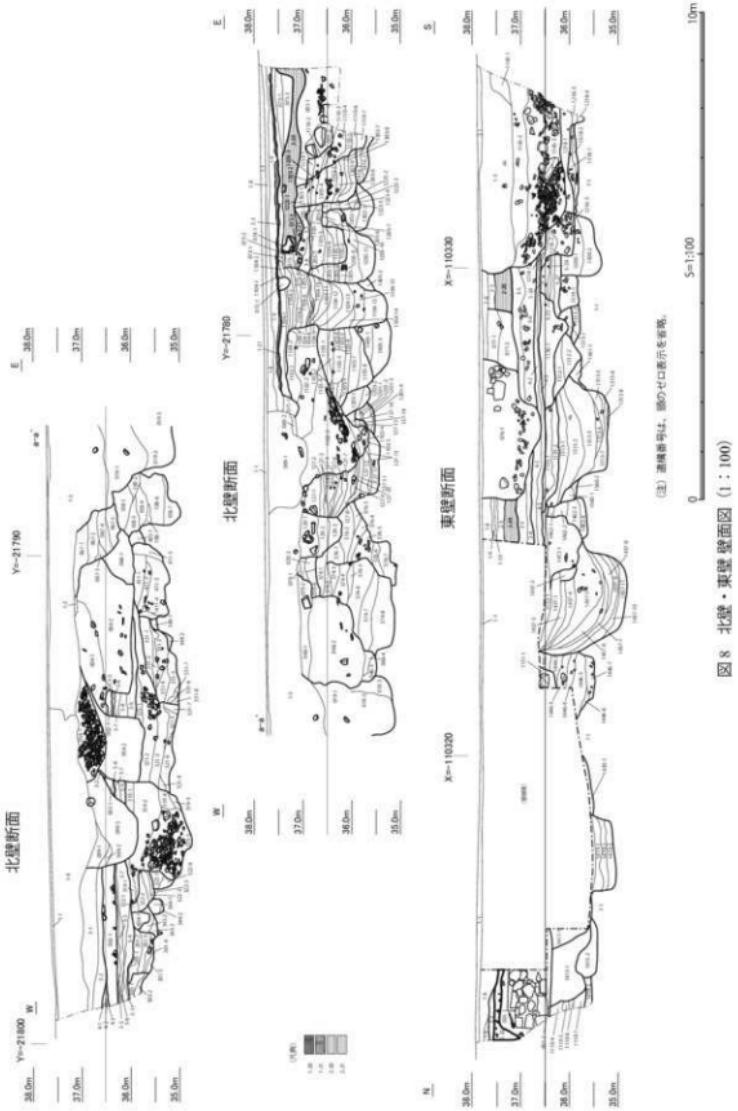
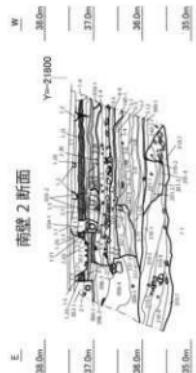
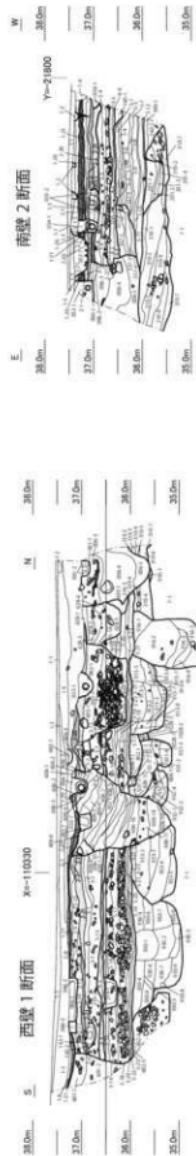
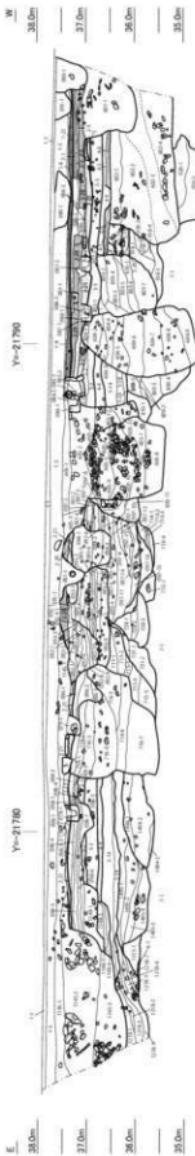


図7 壁面呼称図（1:400）



南壁1断面



(注) 泥炭層等は、頂のゼロ高さを省略。

10m
5=1:100
0

図9 南壁1・2、西壁1・2壁面図 (1:100)

1303-2 10YR5/2	灰褐色	レキ(φ ~6cm)を多く含むシルト質粗砂	1437-2 2.5Y5/1	黄褐色	レキ(φ ~6cm)を含むシルト質粗砂
1303-3 2.5Y5/2	灰褐色	レキ(φ ~6cm)を多く含むシルト質粗砂	1437-3 2.5Y5/1	黄褐色	細粒漂浮層を含むシルト質粗砂
1303-4 10YR5/2	にぶい黃褐色	礁土の塊・レキ(φ ~2cm)を含むシルト質粗砂	1437-4 2.5Y5/2	暗灰褐色	礁物質を含むシルト質粗砂
1303-5 10YR5/2	灰褐色	レキ(φ ~12cm)を含むシルト質粗砂	1437-5 2.5Y5/2	暗灰褐色	細粒質シルト
1303-6 10YR5/4	にぶい黃褐色	地山の塊を多く含むシルト質粗砂	1438-1 2.5Y5/2	灰褐色	レキ(φ ~2cm)を含むシルト質粗砂
1303-7 2.5Y5/2	灰褐色	地山の塊を多く含むシルト質粗砂	1438-2 2.5Y5/2	灰褐色	地山の塊を多く含むシルト質粗砂
1303-8 2.5Y5/1	灰褐色	地山の塊を多く含むシルト質粗砂	1446-1 2.5Y5/2	暗灰褐色	地山の塊を多く含むシルト質粗砂
1313-1 10YR5/1	褐色	地・土器片・レキ(φ ~2cm)を含むシルト質粗砂	1446-2 2.5Y5/2	暗灰褐色	地山の塊を多く含むシルト質粗砂
1313-2 10YR4/1	褐色	地・土器片・レキ(φ ~6cm)を含むシルト質粗砂	1446-3 2.5Y5/2	暗灰褐色	地山の塊を多く含むシルト質粗砂
1313-3 2.5Y4/1	褐色	地・土器片・レキ(φ ~6cm)を含むシルト質粗砂	1446-4 2.5Y5/2	暗灰褐色	地山の塊を多く含むシルト質粗砂
1313-4 2.5Y5/2	暗灰褐色	細粒はむき(φ ~6cm)を含むシルト質粗砂	1462-1 2.5Y5/1	にぶい黄色	地山の塊・地・礁土の塊を含むシルト質粗砂
1313-5 2.5Y7/2	炭化色	地山の塊・レキ(φ ~5cm)・礁土の塊を含むシルト質粗砂	1462-2 2.5Y5/2	暗灰褐色	シルト質粗砂
1313-6 2.5Y5/2	褐色	地山の塊・レキ(φ ~5cm)・礁土の塊を含むシルト質粗砂	1463-1 2.5Y5/1	暗褐色	地山の塊・礁土の塊を含むシルト質粗砂
1313-7 2.5Y4/1	褐色	シルト質粗砂	1463-2 2.5Y5/2	暗褐色	地山の塊・礁土の塊を含むシルト質粗砂
1313-8 5Y8/2	灰色	シルト質粘土	1472-1 2.5Y5/2	灰褐色	瓦・漆喰・レキ(φ ~10cm)を含むシルト質粗砂
1313-9 10YR5/2	灰褐色	レキ(φ ~6cm)を含むシルト質粗砂	1494-1 5Y5/2	灰褐色	瓦・オーリーブグリーン
1313-10 10YR5/3	にぶい黃褐色	瓦・土器片・山塊を多く含むシルト質粗砂	1494-2 5Y5/2	灰褐色	レキ(φ ~6cm)・土器片を含むシルト質粗砂
1405-1 2.5Y5/2	灰褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1494-3 5Y7/3	灰褐色	シルト質粗砂
1405-2 10YR6/1	褐色	礁土の塊を含むシルト質粗砂	1495-1 10YR5/2	灰褐色	レキ(φ ~7cm)・土器片を僅かに含むシルト質粗砂
1405-3 10YR5/1	褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1495-2 2.5Y5/2	灰褐色	地山の塊を多く含むシルト質粗砂
1411-2 10YR5/2	灰褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1495-3 2.5Y5/2	灰褐色	地山の塊・瓦・土器片を含むシルト質粗砂
1411-3 2.5Y7/2	炭化色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1495-4 5Y6/3	オリーブグリーン	瓦・漆喰・レキ(φ ~10cm)・地山の塊を含むシルト質粗砂
1415-1 2.5Y5/2	灰褐色	レキ(φ ~7cm)を多く含むシルト質粗砂	1500-1 10YR7/2	にぶい褐色	レキ(φ ~7cm)・塵を多く含むシルト質粗砂
1415-2 2.5Y5/2	暗灰褐色	地山の塊・花崗岩等を多く含むシルト質粗砂	1500-2 10YR7/2	暗灰褐色	レキ(φ ~3cm)・塵を多く含むシルト質粗砂
1417-1 2.5Y4/2	暗灰褐色	レキ(φ ~7cm)を多く含むシルト質粗砂	1512-1 2.5Y5/2	暗灰褐色	地・レキ(φ ~4cm)を多く含むシルト質粗砂
1419-1 2.5Y5/1	黄褐色	レキ(φ ~7cm)を極めて多く含むシルト質粗砂	1512-2 2.5Y7/3	灰褐色	レキ(φ ~5cm)を含むシルト質粗砂
1419-2 2.5Y5/2	灰褐色	シルトを含む粗砂	1512-3 2.5Y7/2	灰褐色	レキ(φ ~5cm)を含むシルト質粗砂
1419-3 2.5Y5/2	暗灰褐色	レキ(φ ~6cm)を多く含むシルト質粗砂	1512-4 2.5Y5/2	灰褐色	レキ(φ ~5cm)・地・土器小片を含むシルト質粗砂
1420-1 2.5Y5/2	暗灰褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1514-1 2.5Y5/3	暗褐色	レキ(φ ~5cm)・地・礁土の塊・地山の塊を多く含むシルト質粗砂
1421-1 10YR5/1	褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1515-1 2.5Y5/2	にぶい黄色	地山の塊・地・レキ(φ ~7cm)を含むシルト質粗砂
1421-2 2.5Y5/2	灰褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1560-1 10YR4/1	暗灰褐色	地山の塊・地・土器小片を含むシルト質粗砂
1423-1 10YR6/1	褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1560-2 2.5Y5/2	暗灰褐色	地山の塊・地・土器小片を多く含むシルト質粗砂
1423-2 2.5Y7/2	灰褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1561-1 2.5Y5/2	暗褐色	シルト質粗砂
1423-3 2.5Y5/2	暗灰褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1561-2 2.5Y5/2	暗褐色	地山の塊・地・土器小片を含むシルト質粗砂
1427-1 2.5Y5/2	灰褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1515-1 2.5Y5/2	にぶい黄色	地山の塊・地・レキ(φ ~7cm)を含むシルト質粗砂
1427-2 10YR6/1	褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1560-3 2.5Y5/2	暗灰褐色	地山の塊・地・土器小片を含むシルト質粗砂
1427-3 2.5Y7/2	灰褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1560-4 2.5Y5/2	暗灰褐色	地山の塊・地・土器小片を含むシルト質粗砂
1427-4 2.5Y5/2	暗灰褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1561-1 2.5Y5/2	暗褐色	シルト質粗砂
1427-5 2.5Y5/2	暗灰褐色	地山の塊・土器小片を多く含むシルト質粗砂	1561-2 2.5Y5/2	暗褐色	地山の塊・地・土器小片を含むシルト質粗砂
1427-6 2.5Y5/1	灰白色	レキ(φ ~3cm)			

表1 土層注記4

南では南側が18cm低く、敷地東側の北と南では南側が6cm余り低いのみで大きな差はみられない。東西の高低差は、北側の西と東では東洞院通側が41cm低く、南側の西と東では東洞院通側が53cmも低かった。表層の雨水処理のために、東側が可成り高く造成されていることが確認できる。

基本層序の各層の概要は、下記のとおりである。

なお、各壁面図の1層は、層数が多いこと、壁面間の連続性が乏しいため、各壁面図内での層名とし、調査区全体を統合した同一の層名とはなっていないことをご了解願いたい。

1層は、元治元年に幕府軍と長州軍が激突した禁門の変のおりに、幕府軍が長州軍を追い出すために行った放火を発端とする大火災「元治の大火」(元治元年(1864))の整地層(1-21層)から、現代の駐車場アスファルト層(1-1層)までの堆積層である。調査地ではいずれの場所でも焼土面は残存しておらず、多量に焼土塊・炭・瓦等を含む2層(1-20・1-21層)の整地層の内、下層の1-21層までとした。シルト質粗砂を主な堆積物とする。この整地層は、南壁では西側から調査地中央付近までしか確認できず、上部は削平されていたが、北壁では調査区東端まで残存していた。

2層は、「天明の大火」(天明8年(1788))の整地層(2-20・2-21層)から2-1層までの堆積層である。調査地では1-20・1-21層と同様に、明確な焼上面は残存しておらず、ここでも多量の焼土塊・炭・焼瓦等を含む2層の整地層(2-20・2-21層)として把握した。2-21層は、上層からの攢乱が無い限り全壁面で確認できた。円礫(最大φ 1~6cm)を含む、シルト質粗砂を主とする。

3層は、上層の堆積環境とは大きく性質が異なり、洪水堆積物を主とする堆積環境下で形成された堆積層である。大きな円礫(φ ~16cm)を多く含む、シルト質細砂～粗砂を主とする。

4層は、「宝永の大火」(宝永5年(1708))の整地層(4-4~4-6層)から4-1層までの堆積層である。

調査地では上層と同様に明確な焼土面は残存しておらず、ここでも焼土小塊や炭を含む整地層として把握した。上層からの擾乱が無い限り全壁面で確認できた。円礫 ($\phi \sim 8\text{cm}$) を含む、シルト質細砂を主とする。

5層は、中間層や下層に安定した堆積層を介在させるものの、上層は洪水堆積物を主とする堆積環境下で形成された洪水堆積層である。本来は、上層の大きな円礫 ($\phi \sim 10\text{cm}$) を多く含むシルト質粗砂を主とする洪水堆積層と、下層のシルト質細砂層に分離すべきかもしれないが、上層の間にもシルト質細砂層が複数介在し、土質や色調も同じものが繰り返しており、全体としては極めてよく似た堆積環境下にあったと判断されるため、地層としては敢えてこの層を分割せずに一層として扱う。

6層は、平安京内で「平安時代後期に 11世紀前半代の遺物を含むいわゆる「ウゲイス土」で大規模な整地」¹⁾が行われたと考えられている層である。これについては、扇状地帯の洪水初期にみられる疊交じりの溢流堆積泥土層と考えられることは既に述べたとおりである。2) 今回この6層は、7層地山層の上部において、6カ所において僅かに残存しているのを確認した。しかし、遺構面として面的に広がりを把握することは、上層からの掘りこみ遺構が激しく困難であった。また、今回の調査区内では、6層の下に遺構は検出されず、6層内からの遺物の出土もなかった。

7層は、地山層である。シルト質細砂を主とする、7-1層のみであった。しかし、井戸等の掘方側面には、さらに 1.2m 余り下に厚い砂礫層が堆積しているのを確認している。今回の調査区内においては、7-1層上面から旧河道等の遺構検出や、7-1層内からの遺物の出土はなかった。

2. 遺構面

遺構面は、図 10～14 の 5 遺構面である。

第1遺構面（以下「1面」という。）は、「天明の大火」（天明 8 年（1788））後である 18 世紀末～19 世紀中葉（幕末）の状況を、3-1 層上面で検出した。

3-1～3-5 層上面の凡その標高は、調査区南北長（東壁）約 21m × 東西長（北壁）約 25m の調査区で、北西端で 37.0m、北東端で 37.2m、南西端で 36.9m、南東端で 37.2m であった。南北の高低差は、東洞院通の北と南では南側が 0.1m 低く、調査区東側の北と南では差はみられない。東西の高低差は、北側の西と東では東洞院通側が 0.2m 低く、南側の西と東では東洞院通側が 0.3m 低かった。表層の雨水処理とほぼ同じ傾斜が確認できる。

第2遺構面（以下「2面」という。）は、「宝永の大火」（宝永 5 年（1708））後の状況である 18 世紀初頭～18 世紀末を、5-1 層上面で検出した。

5-1 層上面の凡その標高は、北西端は不明で、北東端で 36.6m、南西端で 36.6m、南東端で 36.6m であった。南北及び東西の高低差は殆どなく、その規模は不明ではあるが、調査区内で水平に近い整地が、「宝永の大火」前に行われていたことを伺わせるデータである。

3 遺構面（以下「3面」という。）は、5 層上面の大規模な洪水発生前の北区 5-7 層、南区 5-19 層、東区 5-25 層の上面で検出した。これらは、17 世紀後葉～18 世紀初頭に相当する。なお、東

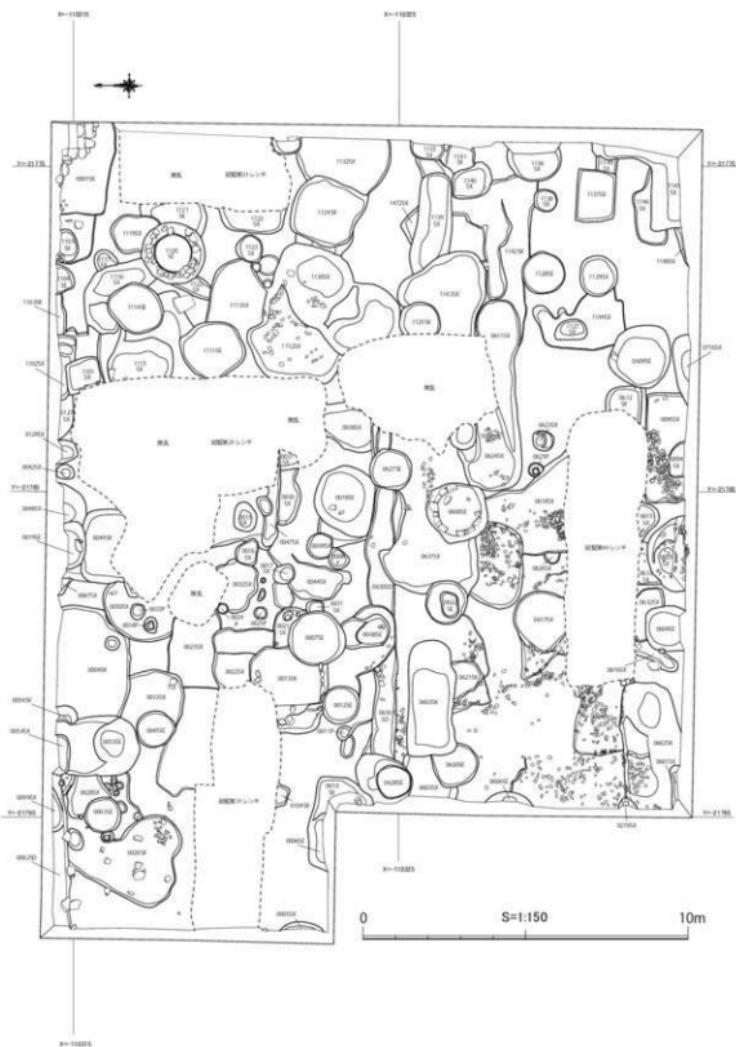


図10 第1遺構面

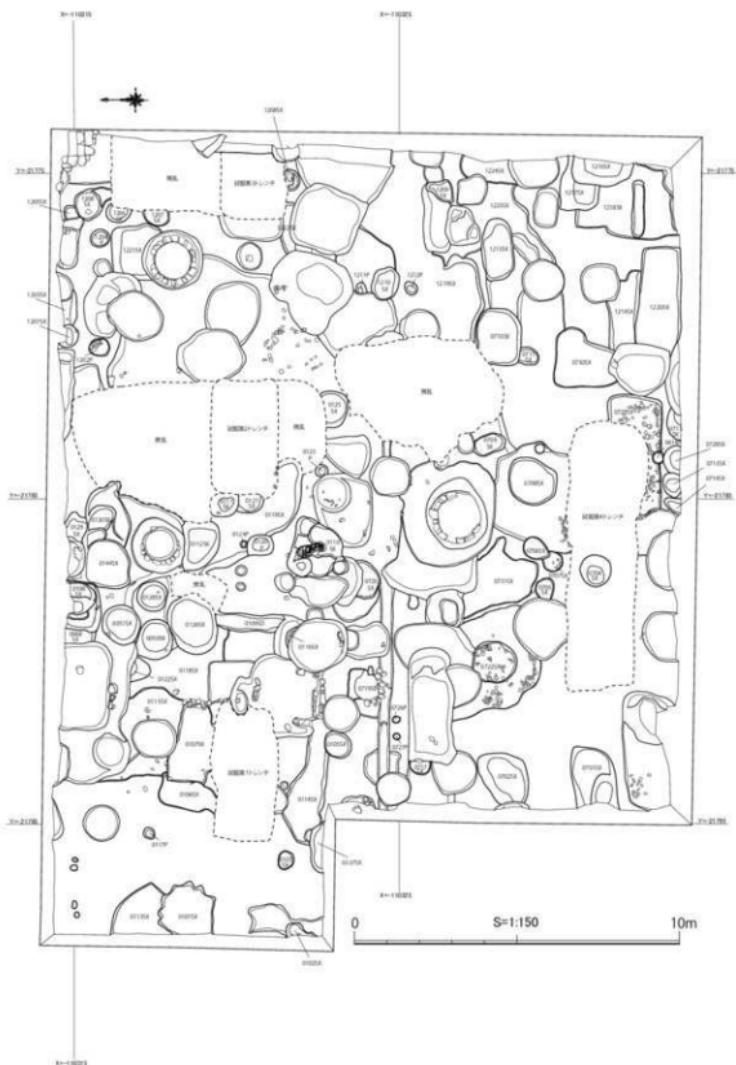


図 11 第2 遺構面

洞院通側の北区西端では、検出面がやや西側に下がっていたため、第3遺構面の遺構と下層の第4-1遺構面の遺構である0310SDや、それを切る0201SDを同時に検出し、他の3面の遺構と共に掘削してしまったので、完掘写真と遺構図との間に齟齬が生じているので明記しておく。

5-7層相当層（5-19・5-25層）上面の凡その標高は、北西端で36.3m、北東端で36.4m、南西端で36.1m、南東端で36.4mであった。南北の高低差は、東洞院通の北と南では南側が0.2m低く、調査区東側の北と南では大きな差はみられない。東西の高低差は、北側の西と東では東洞院通側が0.1m低く、南側の西と東では東洞院通側が0.3m低かった。再び表層の雨水処理とほぼ同じ傾斜が確認できた。

第4遺構面（以下「4面」という。）は、本来6-1層上面で検出される遺構であるが、6-1層の残りが悪いこと、7-1層が既に露出していたことから、遺構面としては7-1層上面で検出した。遺構は夥しい数が検出されており、一見しただけでは地山層である7-1層が見えない状況で、遺構の切り合いも激しいものであった。今回、第4遺構面を大きく二時期に分ける遺構として、東洞院通側である調査区（北区）西端に検出した、洪水により幅広く抉られた溝状の遺構0310SDの東岸を検出した。この0310SDの埋積後の前と後では大きく遺構に変化が見られたため、溝埋積後の遺構面を第4-1遺構面とし、溝下に検出された残存遺構を含む洪水以前の遺構面を第4-2遺構面とする。これらの遺構は、14世紀前葉～17世紀後葉に相当する。

4面上面の凡その標高は、北西端で36.1m、北東端で36.3m、南西端で35.9m、南東端で36.2mであった。南北の高低差は、東洞院通の北と南では南側が0.2m低く、調査区東側の北と南では0.1m南側が高い。東西の高低差は、北側の西と東では東洞院通側が0.2m低く、南側の西と東では東洞院通側が0.3m低かった。調査区での自然傾斜に近いものとなっていて、大きな地形の改変はみられない。

第5遺構面（以下「5面」という。）は、6-1層が残存していた6カ所のみを掘削し、7-1層上面で写真撮影と図化を行った。調査部分が狭小であったため、遺構図面的には4面と大差ではなく、その変化を感じられない状況となっている。

7-1層上面の凡その標高は、7-1層の平らな部分が殆どないなど難点が多いが、北西端で35.7m、北東端で36.0m、南西端で35.6m、南東端で35.9m余りとなる。南北の高低差は、東洞院通の北と南では南側が0.1m低く、調査区東側の北と南でも0.1m南側が高い。東西の高低差は、北側の西と東では東洞院通側が0.3m低く、南側の西と東では東洞院通側が0.3m低かった。

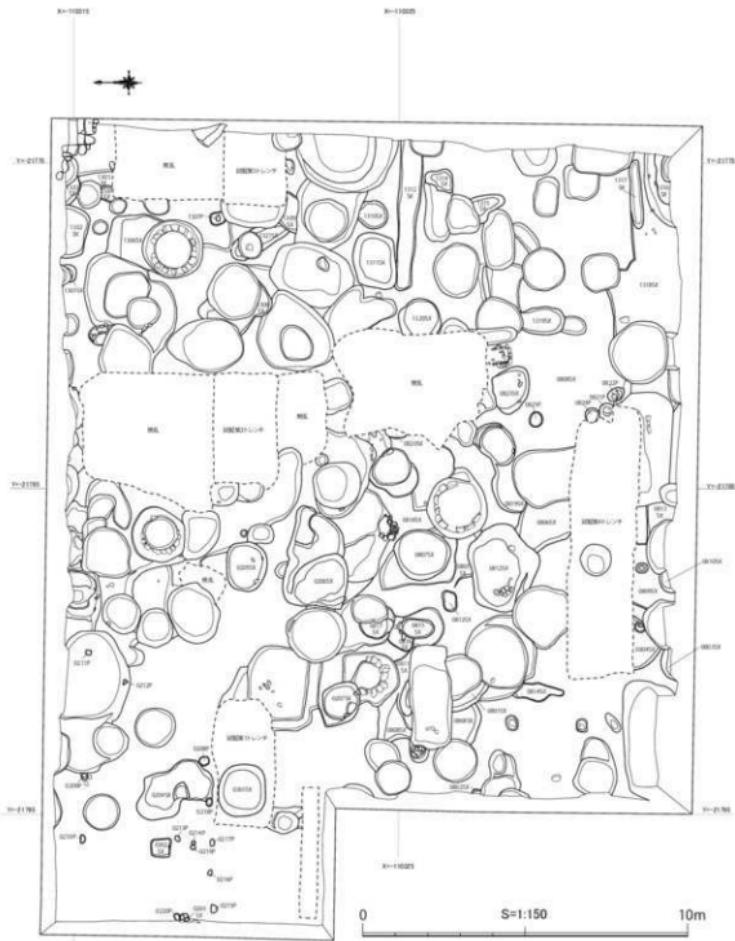


図 12 第3 遺構面

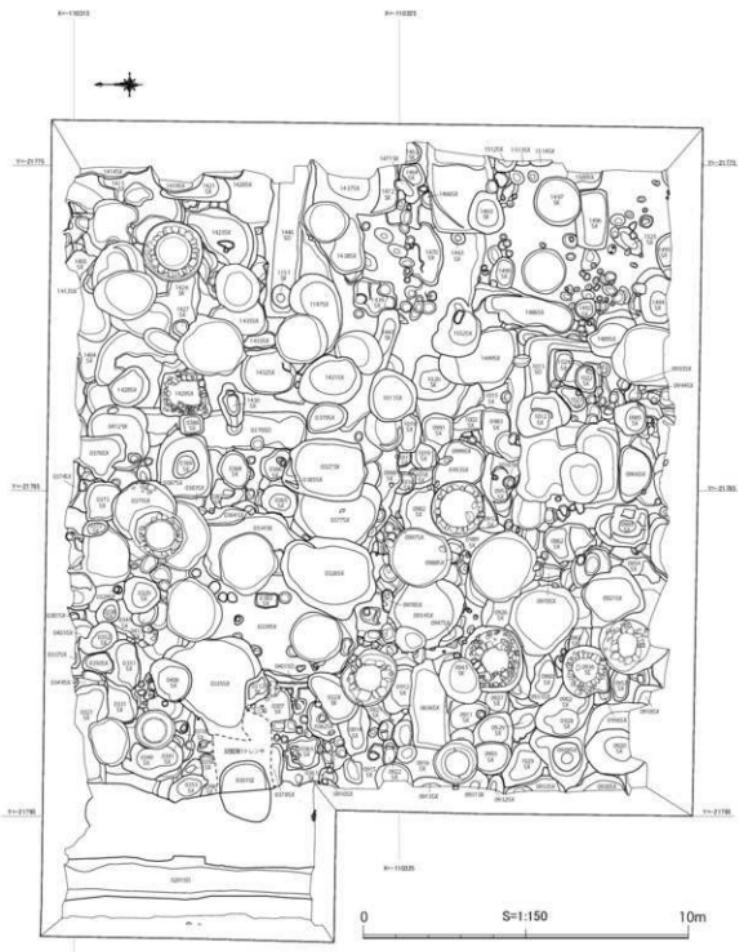


図 13 第 4-1 遺構面

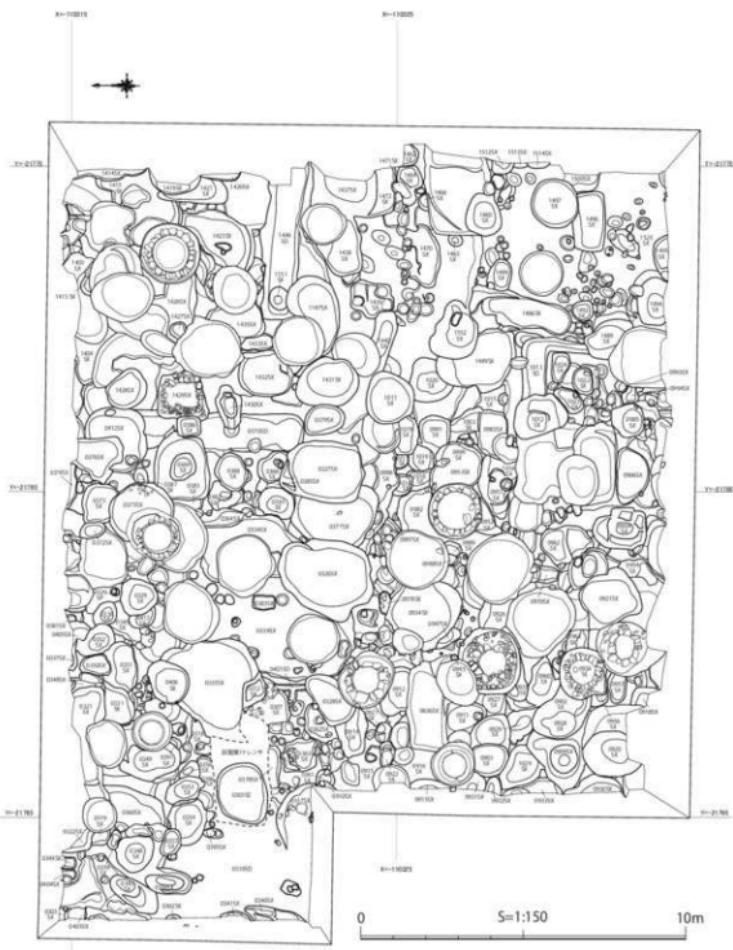


図 14 第 4-2、5 遺構面

第2節 遺構

1. 遺構の概要

今回調査した遺構数は、鎌倉時代後期～江戸時代末（・近現代）までの、建物、柵（塀）、土坑（廐棄土坑・トイレ・穴蔵・墓・土取り穴等）、井戸、溝（用排水路・雨落溝・側溝・暗渠溝等）、旧河道、道路、柱穴、不明遺構、包含層など、遺構名を付けたものだけで約970基にのぼる。

遺構の性格は、平安京左京域の中でも商工業者が集住した下京に位置することから、その殆どが町家遺構と考えられるが、その間の16世紀前葉～17世紀前葉には、調査区内に比較的大きな屋敷が設けられていたことが明らかとなった。

遺構面は、數々の制約がある現場において確認できる、最も大きなスケールで遺構変遷を明らかにしてくれる。このため、各層を一面一面調査すればいいのであるが、それは現実的に困難である。今回の壁面図を見ても分かるように、本来は東洞院通（路）側の町家の下が意外と堆積層の残りが良く、町家の「ウラ」（裏）から敷地奥の方が大きな土坑等により搅乱されていることが分かる。このため、各堆積層は容易には繋がっていない。しかし、詳細なスケールでの遺構の変化を捉えるには遺構面のみでは不十分であるため、各遺構出土遺物の年代から遺構変遷を補足した。

以下には、単一の時期の遺構面を各層で調査し把握したわけではないので、出土遺物や遺構群の前後関係をもとに、検出した鎌倉時代後期～江戸時代末・近代の遺構群について、帰属時期等が明らかとなった主要な遺構を中心に、それを大まかな時代毎に表2の1～17期に整理した。時期の古いものから順に記述する。なお、各遺構の存続時期については、長いものも短いものも存在するが、これが古い時期の遺物の混入によるものなのか、確実に存続していたのかは判断が難しい。このため、最も新しい遺物相で、遺構の最終時期と考えて示した。また、複雑な遺構群内の建物遺構の復元については、多くの遺構群と同時に示すと煩雑となるため、別図として建物配置図を作成した。

なお、残存規模の単位はmを、主軸方向については、南北をN0°WEとした表記とし、年代については特に示さない限り京編年で記入した。

2. 各期の主要遺構

【1期】(図15)

1期は洪水層6-1層（ウダイス層）下の遺構で、平安時代後期の11世紀前半（京V期古・中）以前の遺構である。しかし、厚さ10～18cm余りの6-1層は上層遺構に切られた形で、1601SX～1606SXの6カ所で僅かに残存していたのみで、6-1層下には遺構・遺物共に検出されなかった。

なお、この1期以前の遺構は、遺物に平安時代前期からの遺物を僅かではあるが出土するものの、明確には確認できなかった。これは、平安時代後期前半の洪水層6-1層が調査地内に堆積し

1期

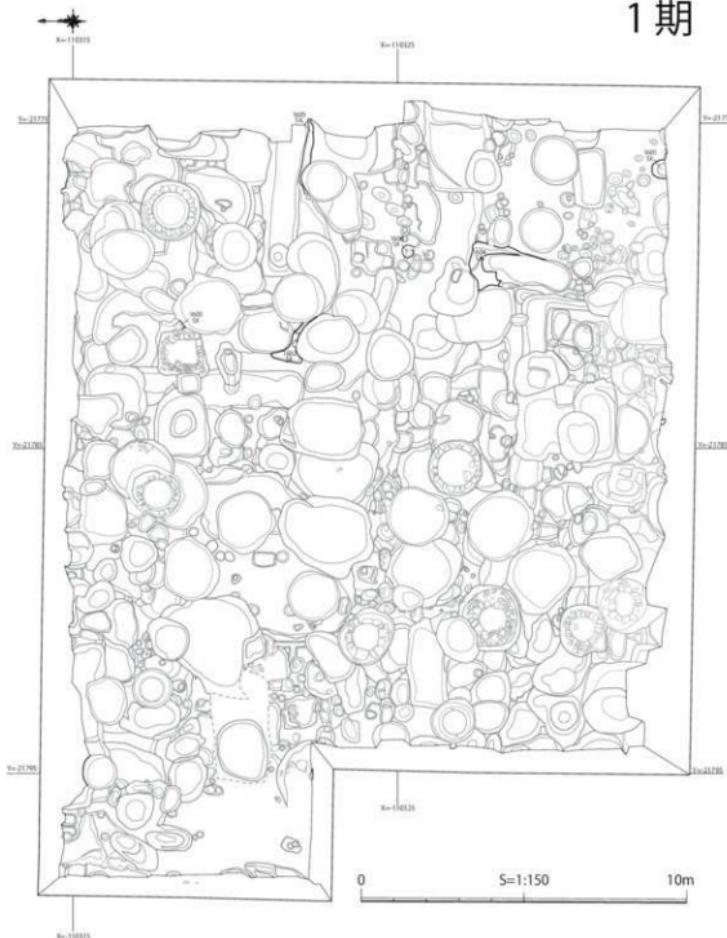


図15 1期遺構図

ていたことも含め、築地が巡るような屋敷の存在が無かった可能性が高い。また、浅い遺構は後代の擾乱により消滅したものも多かったと考えられるが、調査区内においては遺構深度の深い井戸等の遺構は当初から存在しなかった可能性が高い。

また、1期以降～2期までの、京V期新～京VII期古の間の遺構については、明確に示せるものはなかった。

【2期】(図16)

2期の遺構は、京VII期中の遺構で、比較的浅い形状の土坑0363SK・0933SK・1423SXの3遺構のみである。東洞院通側に0363SK・0933SKが、北区東側の敷地奥にやや大きい1423SXがある。マチヤ(町家)については、柱穴など建物遺構に繋がるものは少ないが、東洞院通側に存在していた可能性がある。

土坑0363SK

北区2Bグリッドに位置する。北・南・東の三辺を0367P等の柱穴に切られる。中央の石材は、上層の柱穴根固め石を残したもので、この遺構に伴うものではない。

残存規模は、長軸1.05m×短軸1.03m×深さ0.19m余りで、北側が一段高い。主軸はやや西に傾く南北方向N10°Wで、平面形状は正方形である。

堆積層は、灰黄色シルト質細砂層で、最下層に黒い小礫が薄く認められた。

出土遺物は、土師器、須恵器、中世須恵器、常滑系陶器、瓦質土器、瓦器、瓦、白磁等が出土している。

土坑0933SK

南区3Bグリッドの西壁1際に位置する。北側を0606SEに、南側を0930SEに、東側を1029SXと0909SXに切られる。

残存規模は、長軸1.65m×短軸0.48m×深さ0.92m余りで、大部分が西壁に入り、主軸・形状等も不明である。廃棄土坑と考えられる。

堆積層は、西壁1の933-1～5層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、中世須恵器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦器、瓦、白磁、青磁等が出土している。

遺構の時期は、京VII期中よりやや遅れる京VII期新となる可能性がある。

土坑1423SX

東区1E・2Eグリッドに位置する。北側を1120SEに、西側を1113SXに、東側を1122SXに切られる。

残存規模は、長軸2.28m×短軸1.44m×深さ0.33m余りである。主軸は北東方向N42°E、平面形状は橢円形で、断面形状は皿状である。廃棄土坑と考えられる。

堆積層は、2層で上層が灰褐色粗砂質シルト層で、下層が黄褐色シルト層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、中世須恵器、常滑系陶器、丹波系陶器、瓦質土器、瓦、白磁、青磁、鎔型片等が出土している。

2期

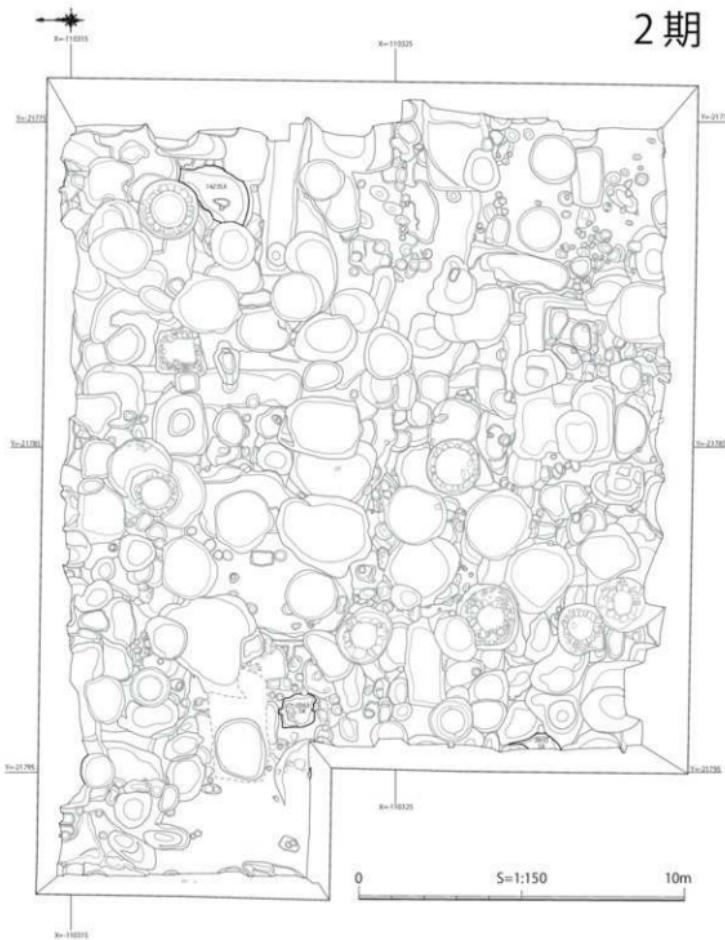


図16 2期遺構図

【3期】(図17)

2期と3期の間の、京VII期新～京IX期古の遺構については、明確に示せるものはなかった。調査区に人が住んでいない状態か、荒地となっていた可能性が高い。

時代は、鎌倉幕府の滅亡期から室町幕府草創期、南北朝の争乱期を経て両朝が合一した明徳3年／元中9年（1392年）「明徳の和約」前後の時期に相当するものと思われる。

3期の遺構は、京IX期中の時期の遺構で、東洞院通に近い北区の西側で、浅い皿状の0360SXの1遺構のみを検出した。建物遺構に直接繋がるものはない。

時代は、3代将軍足利義満の全盛期で、南北朝の合一以後、室町第・北山第の造営、応永8年（1401）の明との国交回復、翌年からの日明貿易の開始と中国銭の一方的な頒賜による貨幣発行権を得た時期に相当すると思われる。

土坑 0360SX

北区1Bグリットに位置する。北側を0003SEや0321SXに、西側を0310SD等に切られる。

残存規模は、長軸2.27m×短軸1.22m×深さ0.17m余りである。主軸はやや東に傾く南北方向N18°Eで、平面形状は楕円形で、断面形状は皿状である。廃棄土坑とみられる。

堆積層は、灰色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、瓦質土器、壁土等が出土している。

【4期】(図18)

4期の遺構は、京IX期新の時期の遺構で、これも比較的東洞院通に近い南区の西側で、小規模な土坑状の0361SX・0978SXの2遺構が検出された。建物遺構に繋がる柱穴等は、明確ではない。

時代は、4代将軍足利義持から6代将軍義教の時期で、関東の上杉弾秀の乱（1416）、永享の乱（1439）などの鎌倉府問題、さらに守護大名の政争などが続いた。義持は義満の勘合貿易を嫌い、冊封を消滅させて応永18年（1411）に一時停止したが、義教は永享4年（1432）に再び復活させた時期に相当すると思われる。

土坑 0361SX

北区2Bグリットに位置する。西側を0910SXに、東側を柱穴等に切られる。

残存規模は、長軸0.57m×短軸0.52m×深さ0.18m余りである。大部分が西壁1に入り、主軸は不明で、平面形状は円形、断面は皿状である。

堆積層は、灰黄色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、渥美系陶器、瓦質土器等が出土している。

土坑 0978SX

南区2Cグリットに位置する。南側を0934SXに、中央を柱穴礎石等に切られる。

残存規模は、長軸0.72m×短軸0.36m×深さ0.68m余りである。主軸は東西方向N88°Eで、平面形状は楕円形、断面は深い鉢状である。

堆積層は、灰褐色シルト質細砂層である。

3期

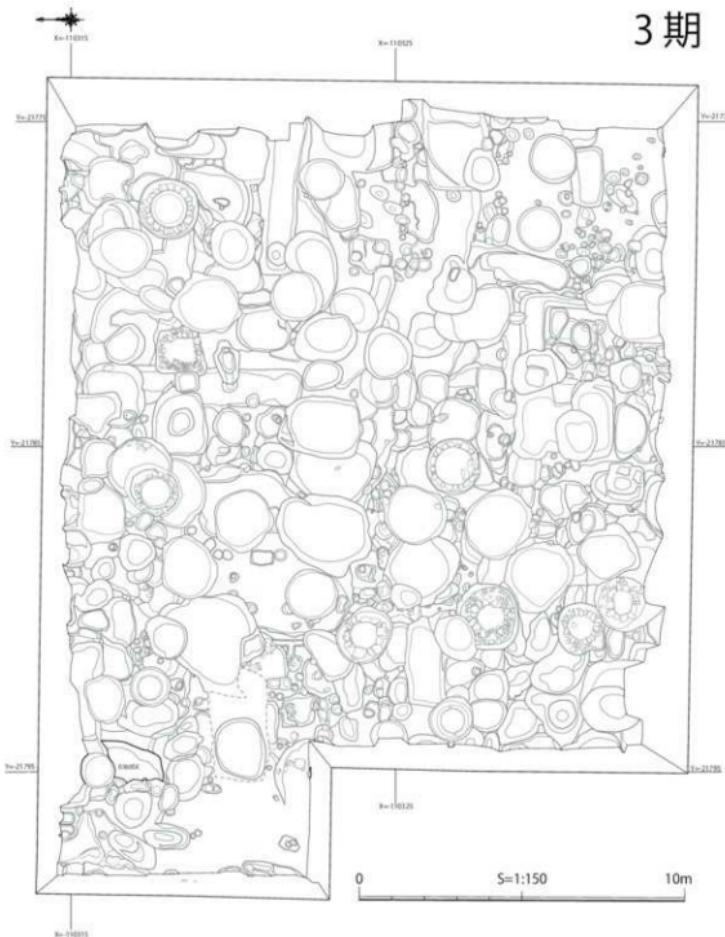


図 17 3期遺構図

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦質土器、磁石等が出土している。

【5期】(図19・20・55)

5期の遺構は、京X期古の時期の遺構で、4期の遺構数より主要な遺構だけでも一気に8倍に増えている。

時代は、足利義教の万人恐怖の政治が嘉吉の乱（1441）で終焉した後、8代將軍足利義政の時代で、財政難の中、有力守護大名に政治を任せ自らは敷寄の世界に逃避し、自らの後継者問題から応仁の乱へと進んでいく時期に相当すると思われる。

5期と6期に跨るとみられる、建物遺構0550SBと0551SBの2棟を復元推測したが、これは他に建物遺構が無いのではなく、北側にも南側にも攪乱が多く、建物を把握できなかつたため、柱穴等の存在から建物遺構は存在していたものと思われる。

なお、この路に面して口を開く建物に、切妻造り平入りで妻壁の棟持柱と柱脚部に土台（台木）を据える構造である「近世的マチヤ」²⁾を加えた、文献上の「町家」などの町家を縦じて、本書では「町家建物」とする。この町家建物内の路側を「オモテ」（表）、裏側を「オク」（奥）と呼び、建物外の裏口側を「ウラ」（建物裏と敷地奥を含む）と呼称する。

この5期の遺構の分布は、町家建物内オクの0353SX・0354SX・0362SX・1029SX等の遺構と、ウラ口から3～8m敷地オクに離れた0374SX・0376SX・0368SX・0366SX・0379SX・0982SX・0926SX・0988SX等の遺構に分けられる。これらの遺構の中には、明確な柵（塀）、井戸、トイレは確認できていない。井戸とトイレについては、調査区外に設けられていたものと推測される。

町家建物0550SB・0551SB (図19・55)

東洞院通側のIA・2A・1B・2B・3Bグリットに位置する。東洞院通に面する町家建物で、主軸はN0°EWである。北側の0550SBと南側の0551SBは、ほぼ同規模の独立屋である。この2棟の境界となるウラには、T字の雨落ち溝0401SDがあり、建物間は約0.4m離れている。なお、町家建物の基準となる路又は側溝については、平安時代並びに中世の東洞院大路（通）の東側溝の位置を、今回の調査では検出していない。このため、建物の奥行等は想定の域をはず、不明といわざるをえない。また、建物内にあたる調査区西側は、洪水による攪乱があるため、建物内部の床面叩きによる土間痕跡やカマド痕跡は検出されなかった。

この2棟の建物から、調査地内の凡そマチヤ敷地境界間口幅を、北側からマチヤA～Dの4区画（A=2.5m以上、B=約4.6m、C=約5m、D=6m以上）と考えた。この内、マチヤDについては、間口幅が他例よりも広く、南側にマチヤEを設定したほうがいいかもしれないが、不明である。

建物0550SB (図19・55)

0550SBは、南北間口（4）間（約4.3m、N 0.6+(1.5)+(1.6)+(0.6)S）、妻行きである東西奥行6間以上（6.1m以上、W α+0.8+0.8+0.8+(0.8)+1.1E）の独立屋の建物である。柱は、掘立柱の掘方底に若干の栗石とその上に平らな礎石（そいし・根石）を置いて地盤沈下を防ぐ基礎構造（以

4期

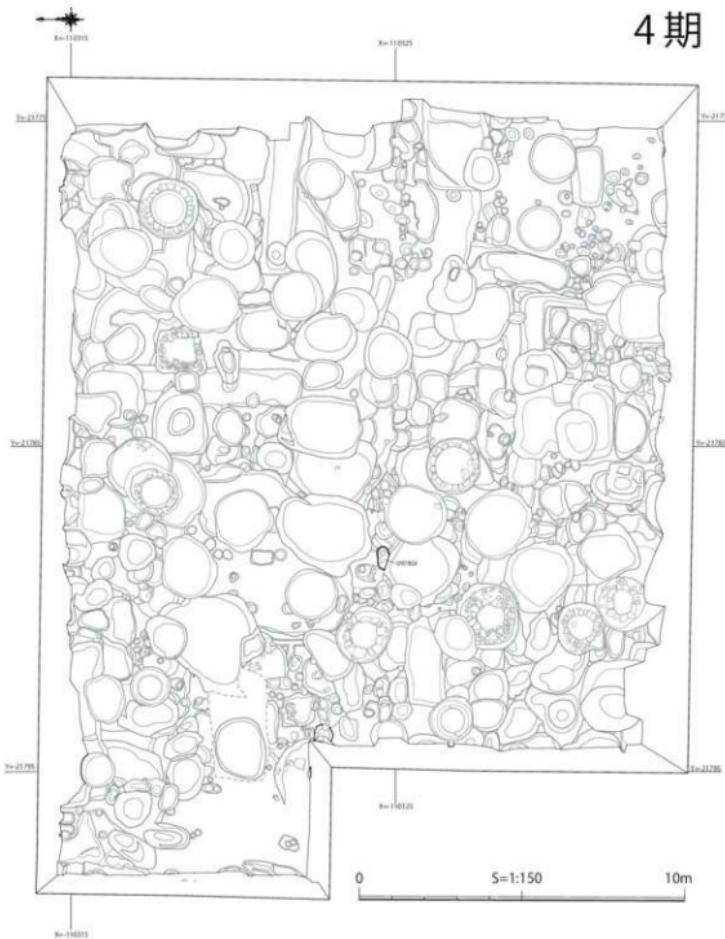


図 18 4期遺構図

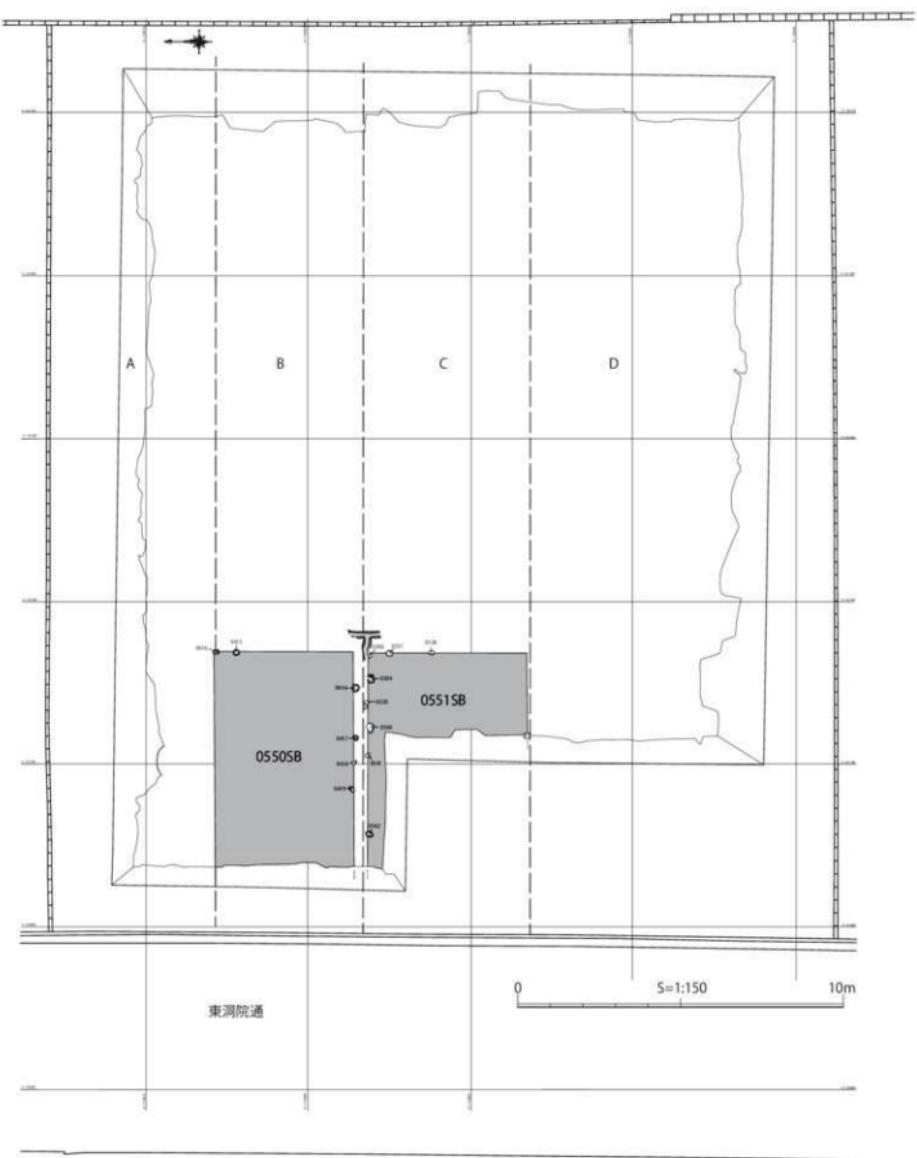


図 19 5・6期 建物配置図

5期

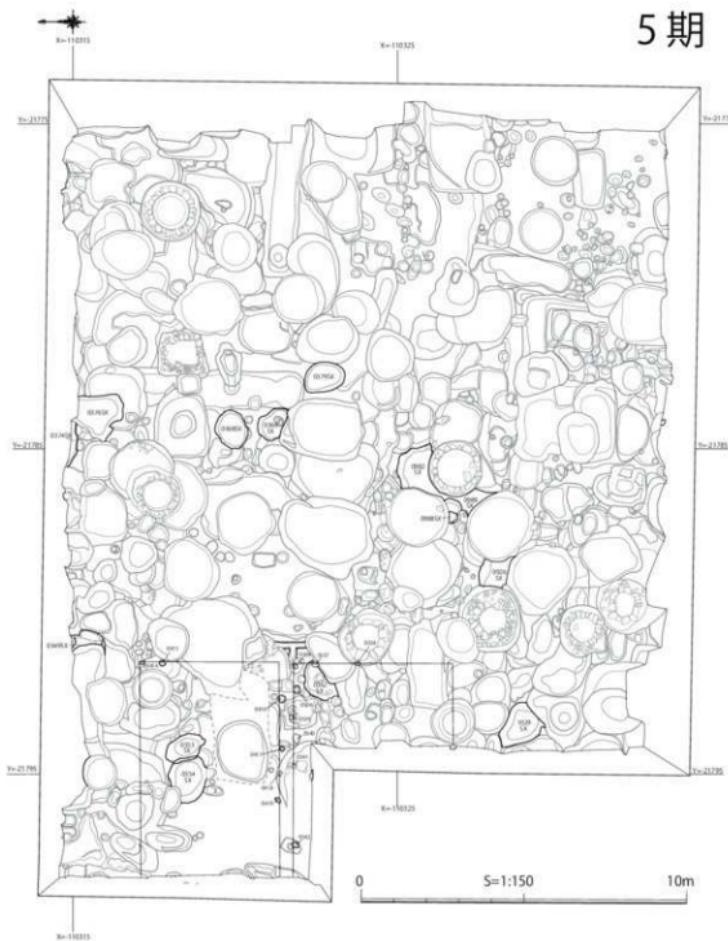


図20 5期遺構図

下、「掘立柱根石建」とする。)である。マチヤBの主屋である。

建物 0551SB (図 19・55)

0551SBは、南北間口(5)間(約4.9m、N 0.6+1.3+(1.1)+(1.3)+(0.6)S)、東西奥行7間以上(6.5m以上、W α+(0.8)+(0.8)+(0.8)+0.8+0.7+0.8+0.8 E)の独立屋の建物である。柱は、掘立柱根石建である。マチヤCの主屋である。

溝 0401SD (図 19)

0401SDは、建物 0550SBと建物 0551SBのウラにみられる、共同の雨落ち溝でT字である。マチヤBとマチヤCの境でもある。

残存規模は、延長は南北が0.91m、東西が0.79m、最深が0.18mである。

堆積層は、茶褐色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器が出土している。

土坑 0349SX

北区1Bグリットに位置する。西側を0321SXに、東側を0350SXに、南側を0331SX等に切られる。マチヤAの建物オクに位置するものとみられる。

残存規模は、長軸0.95m×短軸0.48m×深さ0.44m余りである。大部分が北壁に入り、主軸・形状共に不明である。

堆積層は、北壁の349-1・2層である。

出土遺物は、土師器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦質壺、鉄釘等が出土している。

土坑 0353SX (図 48)

北区1Aグリットに位置する。西側を0310SDに、東側を0356SXに切られ、南側の0396SXを切る。マチヤBの建物 0550SBの建物内中央の、オクに寄ったところに位置する。

残存規模は、長軸1.33m×短軸0.74m×深さ0.6m余りである。主軸はやや西に傾く南北方向で、平面形状は良く残っていて楕円形で、断面形状は皿状である。

堆積層は、図48の1~3層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、瓦質土器、白磁等が出土している。

土坑 0354SX (図 48)

北区1Aグリットに位置する。北側を0357SXに切られ、南側の0395SX(P)柱穴や0396SX等を切る。0550SBの建物内中央近くで、土坑 0353SXの西側に接する位置にある。マチヤBの建物 0550SBの建物内である。

残存規模は、長軸1.53m×短軸1.17m×深さ0.5m余りである。主軸は西に傾く東西方向N72°Wで、平面形状は楕円形で、断面形状は皿状である。

堆積層は、図48の1~3層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、軟質陶器、瓦質土器、瓦、白磁、青磁等が出土している。

土坑 0362SX

北区 2B グリットに位置する。南側を 0328SX と 0914SX に、西側や北側を柱穴等に切られる。マチヤ C の建物 0551SB の建物内で、そのオクの北東隅に位置している。

残存規模は、長軸 1.28m × 短軸 0.91m × 深さ 0.26m 余りである。主軸は不明で、平面形状は円形で、断面形状は皿状である。

堆積層は、灰茶褐色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦質土器、瓦、鉄釘等が出土している。

土坑 1029SX

北区 3B グリットに位置する。北側を 0932SX と 0903SX に、西側を 0606EX と 0933EX に、南側を 0909SX に切られる。マチヤ D の建物オクに位置しているとみられる。

残存規模は、長軸 1.28m × 短軸 0.91m × 深さ 0.33m 余りである。主軸は西に傾く南北方向 N40°W で、平面形状は梢円形で、断面形状は皿状である。

堆積層は、上層が灰色細砂質シルト層、下層が灰褐色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、青磁、白磁等が出土している。

土坑 0374SX

北区 1C・1D グリットに位置する。西側を 0048SX に切られ、東側の 0376SX を切る。マチヤ A の廃棄土坑と考えられる。

残存規模は、長軸 1.39m × 短軸 0.24m × 深さ 1.6m 余りである。大部分が北壁に入り、主軸・形状共に不明である。

堆積層は、北壁の 374-1 ~ 8 層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、肥前系陶器、備前系陶器、瀬戸美濃系陶磁、瓦質土器、瓦等が出土している。

土坑 0376X（図 49）

北区 1D グリットに位置する。西側を 0374SX に、南側を 0412SX に切られる。0374SX と共に、マチヤ A の廃棄土坑と考えられる。

残存規模は、長軸 1.68m × 短軸 1.41m × 深さ 1.4m 余りである。北側が北壁に入り、主軸は西に傾く南北方向 N9°W 余りで、形状は五角形で、断面は逆台形である。

堆積層は、北壁の 376-1 ~ 7 層である。なお、上層の 376-1 ~ 4 層は、溝 0370SD の堆積物である可能性がある。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶磁、瓦質土器等が出土している。

土坑 0366SX

北区 2D グリットに位置する。西側を 0385SX に、南側を 0327SX に切られ、中央の柱穴 0367P を切る。建物 0550SB のマチヤ B に係わる、廃棄土坑と考えられる。

残存規模は、長軸 1.16m × 短軸 0.81m × 深さ 0.25m 余りである。主軸はやや西に傾く南北方向

N37° W で、平面形状は楕円形で、断面形状は皿状である。

堆積層は、上層が暗灰色シルト質粗砂層、下層が灰色粗砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、青磁等が出土している。

土坑 0368SX

北区 1D・2D グリットに位置する。西側を 0382SX に切られる。建物 0550SB のマチャ B に係わる、廃棄土坑と考えられる。

残存規模は、長軸 1.22m × 短軸 0.81m × 深さ 0.62m 余りである。主軸は東に傾く東西方向 N70° E で、平面形状は楕円形で、断面形状は皿状である。

堆積層は、上層が灰色シルト質粗砂層、下層が灰色粗砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、備前系陶器、常滑系陶器、瓦質土器、瓦等が出土している。

土坑 0379SX

北区 2D グリットに位置する。東側を 1431SX に、西側を 0367SX に切られる。建物 0551SB のマチャ C に係わる、廃棄土坑と考えられる。

残存規模は、長軸 1.3m × 短軸 0.92m × 深さ 0.64m 余りである。主軸は西に傾く南北方向 N22° W で、平面形状は楕円形で、断面形状は皿状である。

堆積層は、上層が砂礫混りの灰黒色シルト質粗砂層、中層が灰褐色シルト質粗砂層、下層が灰色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、渥美系陶器、常滑系陶器、信楽系陶器、丹波系陶器、瓦質土器、白磁等が出土している。

土坑 0982SX

南区 3C グリットに位置する。南側を 0608SE に、西側を 0807SX に切られる。

建物 0551SB のマチャ C に係わる、廃棄土坑と考えられる。

残存規模は、長軸 1.73m × 短軸 1.62m × 深さ 0.35m 余りである。主軸は攪乱により不明であるが、東西方向 N70° E 前後とみられ、平面形状は方形で、断面形状は皿状で浅い土坑と考えられる。

堆積層は、上層が灰褐色シルト質細砂層、下層が暗灰褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、中世須恵器、常滑系陶器、信楽系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、白磁等が出土している。

土坑 0988SX

南区 3C グリットに位置する。北側を 0807SX に、東側を 0989SX に切られる。

建物 0551SB のマチャ C に係わる、廃棄小土坑と考えられる。

残存規模は、長軸 0.36m × 短軸 0.26m × 深さ 0.28m 余りである。主軸は攪乱により不明であるが、南北方向と思われ、平面形状は楕円形、断面形状は皿状と考えられる。

堆積層は、暗灰色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、瓦質土器等が出土している。

土坑 0926SX

南区 3C グリットに位置する。南側を 0617SX に、西側を 0722SE に、東側を 0812SX に切られる。マチヤ D に係わる、廃棄土坑と考えられる。

残存規模は、長軸 0.88m × 短軸 0.82m × 深さ 0.79m 余りである。主軸・形状等は攪乱により不明である。

堆積層は、灰褐色粗砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦質土器等が出土している。

【6期】(図 19・21・55)

5 期と 6 期に跨る建物遺構については、記述が重複するので省略する。

6 期の遺構は、京 X 期中の時期の遺構である。

時代は、室町幕府管領の畠山氏と斯波氏の家督争いに始まり、それが細川氏と山名氏の勢力争いに発展し、さらに 8 代将軍足利義政の後継争いが加わり、京都だけではなく全国規模に及んだ応仁・文明の乱（1467～1477）の時期に相当すると思われる。

遺構の分布は、5 期と同じで、町家建物内オクの 0321SX・0331SX・0357SX・0913SX・0916SX・0927SX・0932SX・0909SX・0920SE 等の遺構と、マチヤ B・C に跨るウラ口にはほど近い位置に 0339SX と 0334SX の大形土坑を検出した。5 期におけるマチヤ毎の廃棄土坑は姿を消し、共同使用とみられる大形の廃棄土坑と思われるものに変わっている。また、調査区内においては、5 期同様、敷地ウラに明確な井戸、トイレ、柵（堀）を確認できなかった。井戸とトイレについては、調査区外に存在する可能性が高い。しかし、マチヤ C の建物 0562SB 内と、その南のマチヤ D またはマチヤ E の建物内と考えられる所には、ウチ井戸 0913SE と井戸 0920SE が確認できる。

土坑 0321SX

北区 1B グリットに位置する。西側を 0319SX に、南側を 0053SE 等に切られ、東側の 0331SX と 0349SX と南側の 0331SX を切る。マチヤ A の建物が建物 0550SB とほぼ同じ規模であるとすると、オクに位置するものとみられる。

残存規模は、長軸 3.04m × 短軸 1.04m × 深さ 0.89m 余りである。大部分が北壁に入る。主軸は東西方向 N90° E で、建物と同じ方向である。平面形状は、南側のみの確認であるが、この状況が北側でも同じであれば長方形となり、床面は平である。残存遺構からは、床面に柱穴や礎石、階段等は確認してはいないが、その形状から半地下水式土坑（以下、「穴蔵」という。）と考えられる。

堆積層は、北壁の 321-I ~ 7 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、中世須恵器、瀬戸美濃系陶器、備前系陶器、常滑系陶器、瓦質土器、瓦質磚、瓦、白磁、青磁等が出土している。

土坑 0331SX

北区 1B グリットに位置する。西側を 0053SE に、北側を 0321SX に、西側を 0351SX に切られる。マチヤ A の建物 0550SB のオクに位置するものと推測される。

残存規模は、長軸 1.68m × 短軸 1.05m × 深さ 0.57m 余りである。主軸・形状は不明である。

堆積層は、上層が茶褐色細砂質シルト層、下層が暗灰色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、瓦質土器等が出土している。

土坑 0357SX

北区 1A グリットに位置する。西側を 0310SX に切られ、0354SX を切る。マチヤ B の建物 0550SB の中央部北妻壁際に位置するものと思われる。

残存規模は、長軸 1.68m × 短軸 1.05m × 深さ 0.21m 余りである。主軸は東西方向 N60° W で、平面形状は梢円形で、断面形状は皿状である。

堆積層は、茶褐色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、信楽系陶器、瓦質土器等が出土している。

井戸 0913SE

北区 3B グリットに位置する。南側を 0620SE に、北側を 0916SE に切られ、東側の 0916SX を切る。マチヤ C の建物 0551SB のオクの南妻壁側に位置するものと思われる。

残存規模は、長軸 1.31m × 短軸 0.26m × 深さ 0.72m 余りである。主軸・形状共に西壁 1 に入り不明である。

堆積層は、西壁 1 の 913-1 ~ 8 層である。

出土遺物は、土師器等が出土している。

土坑 0916SX

北区 3B グリットに位置する。西側を 0913SE に、南側を 0620SE に、東側を 0603SK 穴藏に切られる。マチヤ C の建物 0550SB のオクの南妻壁側に位置するものと思われる。

残存規模は、長軸 1.23m × 短軸 1.09m × 深さ 0.33m 余りである。主軸・形状は不明である。

堆積層は、砂礫を多く含む灰褐色シルト層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、青磁等が出土している。

土坑 0927SX

北区 3B グリットに位置する。北側を 0621SX と 0911SX に、東側を 0072SE に切られる。マチヤ D の建物の北東隅オクに位置するものと思われる。

残存規模は、長軸 0.97m × 短軸 0.71m × 深さ 0.3m 余りである。主軸・形状は不明である。

堆積層は、上層は砂礫混りの灰褐色シルト質粗砂層で、下層は灰褐色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、丹波系陶器、常滑系陶器、備前系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦等が出土している。

土坑 0932SX

北区 3B グリットに位置する。北側を 0931SX に、南側を 0606SE に切られ、1029SX を切る。マチヤ D の建物の北東妻壁側に位置するものと思われる。

残存規模は、長軸 0.54m × 短軸 0.49m × 深さ 0.56m 余りである。主軸は東西方向の N0° E で、平面形状は梢円形で、断面形状は皿状である。

6期

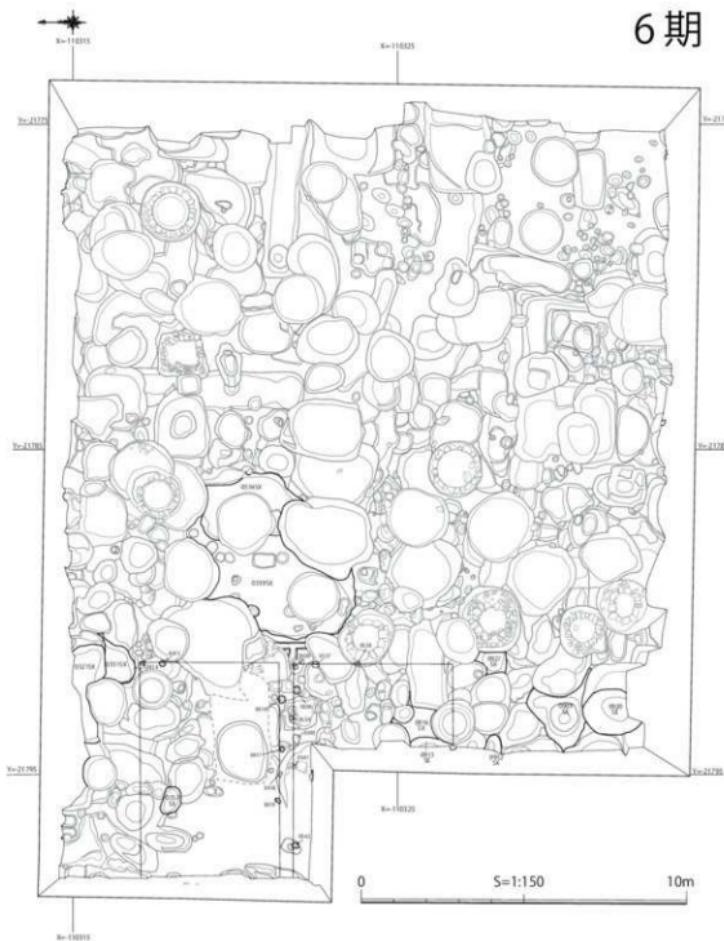


図21 6期遺構図

堆積層は、西壁 1 の 932-1 ~ 4 層である。

出土遺物は、土師器等が出土している。

土坑 0909SX

北区 3B・4B グリットに位置する。東側を 0928SX に切られ、北側の 1029SX や 0933SX を切る。マチヤ D の建物のオク近くに位置するものと思われる。

残存規模は、長軸 2.7m × 短軸 1.74m × 深さ 0.31m 余りである。主軸・形状は不明であるが、浅い皿状の遺構である。

堆積層は、シルトブロックを含む暗褐色砂質層である。

出土遺物は、土師器等が出土している。

井戸 0920SE

北区 4B グリットに位置する。上層を 0602SK に、北側を 0909SX に、西側を 0930SE に切られる。建物がマチヤ B やマチヤ C と同規模であれば、マチヤ D かマチヤ E になる町家建物内のオク近くに位置するものと思われる。

残存規模は、長軸 1.87m × 短軸 1.38m × 深さ 1.6m 余りである。主軸は南北方向の N16° E で、平面形状は楕円形、断面形状は深い。南壁に残された堆積構造からは井戸とはしにくいが、最下層の底に曲物状の痕跡を僅かに残していたので井戸としておく。

堆積層は、南壁の 920-1 ~ 3 である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、備前系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦等が出土している。

土坑 0339SX

北区 1C・2B・2C グリットに位置する。西側を 0335SX に、北側を 0126SX と 0112SX に、南側を 0072SE・0326SX に、東側を 0334SX・0383SX・0032SX 等に切られる。マチヤ B とマチヤ C に跨る、2 区画のウラに作られた大形土坑である。この土坑については、下層堆積物に焼土・炭・壁土等を含んでおり、何らかの火災の一時的な処理土坑と考えられる。

残存規模は、長軸 5.57m × 短軸 4.46m × 深さ 0.31m 余りである。主軸は南北方向の N35° E で、平面形状は楕円形、断面形状は急激に落ち込む逆台形である。

堆積層は、上層は暗灰褐色細砂質シルト層で、中層は茶褐色シルト質細砂層で、下層は焼土・炭を含む褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、中世須恵器、常滑系陶器、備前系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、白磁、青磁、銅錢、銅製鎔金具、鉄釘等が出土している。

土坑 0334SX

北区 1C・2C グリットに位置する。西側を 0032SX に、北側を 0112SX に、南側を 0326SX に、東側を 0032SX や 0364SX 等に切られ、西隣の大形土坑 0339SX を切る。マチヤ B とマチヤ C に跨る、2 区画のウラに作られた大形土坑 0339SX を切る、後続する土坑である。この土坑については、一時的な廃棄土坑ではなく、日常的に使用されていた廃棄土坑の一つとみている。

残存規模は、長軸 2.98m × 短軸 1.7m × 深さ 0.52m 余りである。主軸は南北方向の N0° EW で、平面形状は不正長方形、断面形状は皿状である。

堆積層は、暗灰色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、縁釉陶器、中世須恵器、常滑系陶器、瓦質土器、青磁、鉄釘等が出土している。

【7期】(図 22・23・55・56)

7期の遺構は、京X期新から京XI期古(初)の時期の遺構で、6期の遺構数より主要な遺構だけで、さらに4倍に増えている。江戸期を除いて、中世では最も遺構数が多い時期となっている。なお、正確に京XI期古の時期の遺構は、北区の 0343SX・0344SX・0347SX・0348SX・0358SX と洪水遺構 0310SD の 6 遺構のみで、他は京X期新に属する。

時代は、応仁の乱終了(1477)後も国人や民衆の不安や不満は解消されず、文明 17 年(1485)の山城国一揆では畠山両派が追放され、長享 2 年(1488)の加賀一向一揆では一揆派が加賀を領有した。京都では、公家は没落し、武家は帰郷し、乱の疎開者は盜賊・一揆・疫病・火災等の発生が頻発したことから歸京しないものも多かった。公家屋敷・武家屋敷・寺社が多数あった上京が焼け、商工業者が多数居住していた下京が焼け残ったことは、その後の京都の復興と下京の活況をもたらした。また、社会不安からくる町衆の信仰心と自治権確立への高まりは、一向宗や法華宗の受容となり、それは明応 9 年(1500)の祇園祭の復活へと繋がっていく時期に相当すると思われる。

7期とみられる建物遺構 0560SB・0561SB・0562SB・0564SB の 4 栋を、復元推測した。6期同様に北側や南側に建物遺構が無かったのではなく、攪乱が多く建物を把握できなかったためで、柱穴や礎石等の存在から建物遺構は存在していたものと考えている。特に建物 0562SB の南には建物 0563SB が存在していたことは、主屋敷地オクのハナレである建物 0564SB の存在からも首肯されよう。

この7期の遺構の分布は、町家建物内と敷地オクに分かれる。建物内の遺構は、マチヤ B が土坑 0303SX・0322SX・0342SX・0352SX・0381SX・0335SX、マチヤ C が土坑 0340SX・0910SX・0307SX・0914SX、マチヤ D が 0922SX・0912SX・0934SE・0931SX・0911SX・0945SX・0934SE・0970SX・0928SX、マチヤ E の建物自体は不明ながら土坑 0936SE・0957SX・0918SX 等の遺構が考えられる。ウラには敷地オクまでに、マチヤ B では土坑 0347SX・0373SX・0412SX・1404SX・1415SX・1421SX・1427SX、マチヤ C では土坑 0364SX・0383SX・1430SX・1432SX・1433SX・1435SX、マチヤ D では土坑 0997SX・0951SX・0952SX・0962SX・0970SX・1002SX・1512SX・1513SX・1103SX・1490SX、マチヤ E では土坑 1496SX・1102SX 等の遺構に分けられる。

今回は、明確な柵(塀)を復元できなかったが、柵(塀)の存在を遺構の配置から確認することができる。井戸は、マチヤ D のウチ井戸 0934SE と、マチヤ E のウチ井戸 0936SE の 2 基が確認できる。トイレは、マチヤ B では可能性のあるものとして 0373SX が、マチヤ C では 0383SX が、

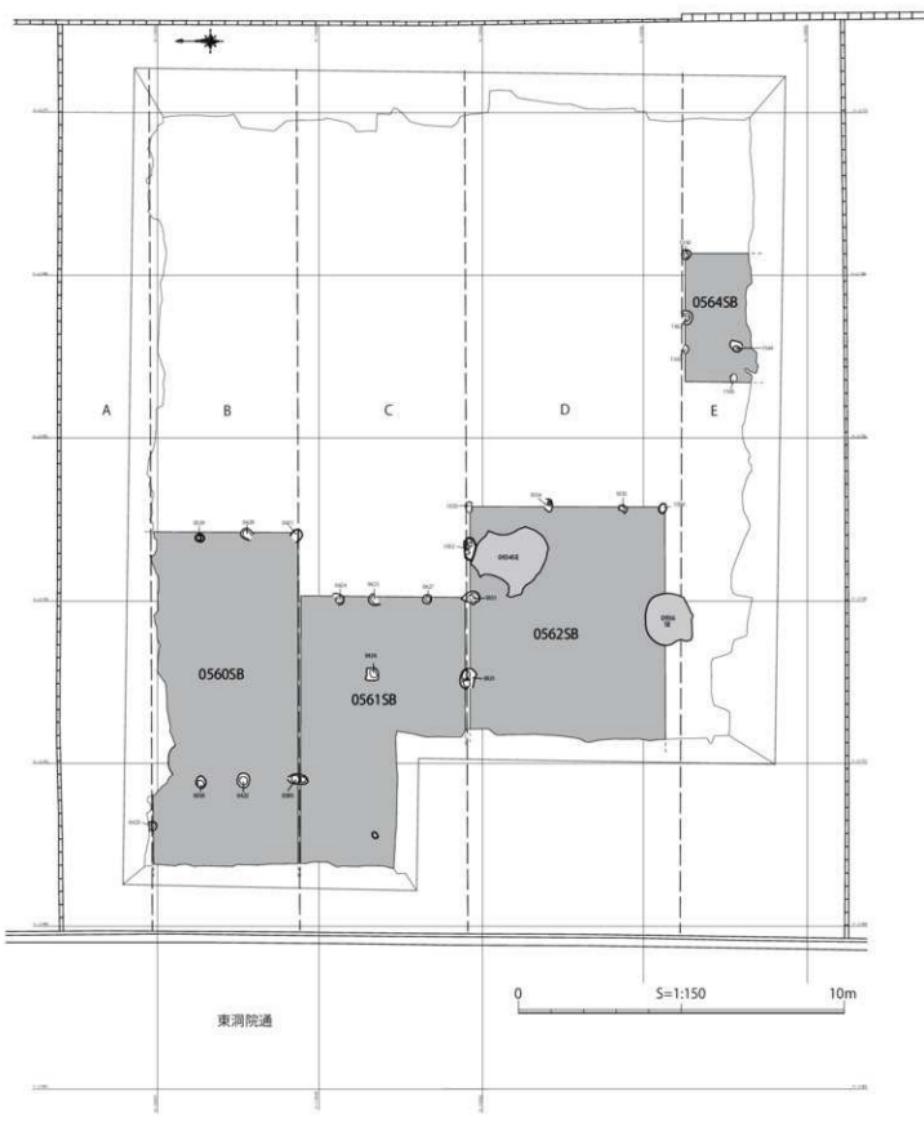


図 22 7期建物配置図

7期

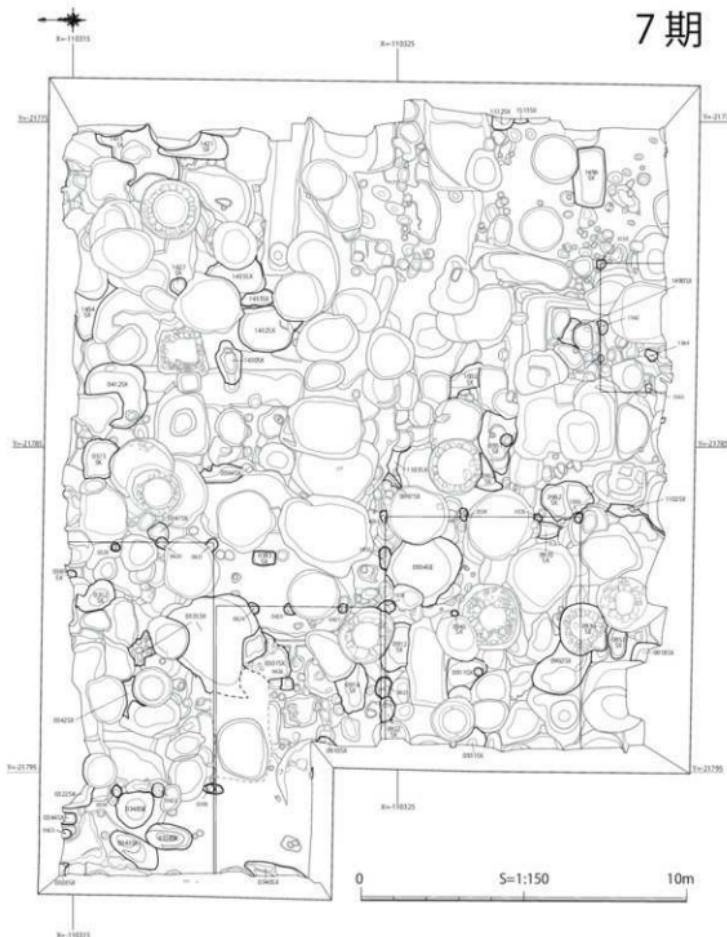


図23 7期遺構図

マチヤ E では可能性のあるものとして 1496SX 等がある。トイレが明確に確認できないマチヤ区画でも、攢乱により切られ土坑 SX としたもののどれかが、トイレに該当するものとみられる。

町家建物 0560SB・0561SB・0562SB・0564SB (図 22)

東洞院通側にオモテを向けるマチヤである。主軸は N90° EW である。この内、路にオモテを向ける 3 棟の建物から、調査地内の凡そのマチヤ敷地境界間口幅を、北側からマチヤ A～E の 5 区画 (A=0.2m 以上、B=4.5m、C=5.1m、D=約 6m、E=2.5m 以上) と考えた。0560SB と 0561SB の間は約 6cm、0561SB と 0562SB の間は約 15cm 離れていると考えている。この 3 棟の町家建物の他に、主屋を攢乱のために確認できないが、オクに位置する副屋的な建物 0564SB を、マチヤ D において 1 棟復元できた。

建物 0560SB (図 22・55)

0560SB は、南北間口 (3) 間 (約 4.5m、N (1.5)+1.5+1.5 S)、妻行きである東西奥行 6 間以上 (9.0m 以上、W α +1.5+(1.5)+(1.5)+(1.5)+(1.5) E) の独立屋の建物である。東側から推定 5 間目に南北柱列が並ぶ。柱は、掘立柱建と礎石建が一棟の中で使用されているようにみられる。浅い礎石建の柱穴と深い柱穴の両者がみられる。マチヤ B の主屋である。

建物 0561SB (図 22・56)

0561SB は、南北間口 (4) 間 (約 5.1m、N (1.2)+1.2+1.5+1.2 S)、東西奥行 3 間以上 (7.2m 以上、W α +2.4+2.4+2.4 E) の独立屋の建物である。柱は台木又は礎石建である。マチヤ C の主屋である。

建物 0562SB (図 22・56)

0562SB は、南北間口 (5) 間 (約 6.0m、N (1.2)+(1.2)+(1.2)+(1.2)+1.2 S)、東西奥行 4 間以上 (5.6m 以上、W α +(1.4)+(1.4)+1.4+1.4 E) の独立屋の建物である。柱は、妻側を中心にその多くが掘立柱根石建であるが、棟の平 (ウラ) 側では礎石建である。折衷である。マチヤ D の主屋である。

建物 0564SB (図 22・56)

0564SB は、本来東洞院通にオモテを向ける、マチヤ E の未検出の主屋 0563SB オクに建てられた建物で、副屋に相当する建物と考えられる。南北間口 (1) 間以上 (約 1.5m 以上、N 1.5+ α S)、東西奥行 (4) 間 (4.0m 以上、W 1.0+1.0+(1.0)+1.0 E) の独立屋の建物と考えられる。北側のマチヤ D から、北壁が約 0.5m 離れる。建物 0560SB が敷地の最もオクでないことから、想定される主屋 0563SB から廊下で繋いで、その間を中庭として奥座敷的な使用を意図した副屋であった可能性もある。柱は礎石の深さが浅いが、全て掘立柱根石建である。

土坑 0303SX・0322SX・0340SX

北区 IA・2A グリットに位置する。3 基共に上層を 0310SD に切られ、どれも壁面に入る。0303SX はマチヤ A の、0322SX はマチヤ B の、0340SX はマチヤ C のオモテに位置する。

0303SX の残存規模は、長軸 0.37m × 短軸 0.28m × 深さ 0.46m 余りである。大部分が北壁と西壁に入り、主軸・形状共に不明である。

堆積層は、北壁・西壁 2 の 303-1・2 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦質土器等が出土している。

0322SX の残存規模は、長軸 0.98m × 短軸 0.69m × 深さ 0.9m 余りである。大部分が北壁に入り、主軸・形状共に不明である。

堆積層は、北壁の 322-1 ~ 6 層である。

出土遺物は、土師器、瓦質土器等が出土している。

0340SX の残存規模は、長軸 1.92m × 短軸 0.47m × 深さ 0.56m 余りである。大部分が西壁に入る。主軸は南北方向の N10° E で、平面は楕円形で、断面は不明である。

堆積層は、北壁の 340-1 ~ 3 層である。

出土遺物は、土師器、瀬戸美濃系陶器、常滑系陶器、瓦質土器等が出土している。

土坑 0352SX (図 44)

北区 1C グリットに位置する。西側を 0350SX に、北側を 0345SX に、東側を 0336SX に、南側を 0351SX 等に切られる。マチヤ B の建物 0560SB 内オクの北壁近くに位置する。

残存規模は、長軸 1.17m × 短軸 0.93m × 深さ 0.42m 余りである。主軸は南北方向の N30° W で、平面形状は楕円形、断面形状は皿状である。

堆積層は、灰褐色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器等が出土している。

土坑 0347SX (図 46)

北区 1C グリットに位置する。西側を柱穴に切られる。建物 0560SB ウラの軒下に位置する。

残存規模は、長軸 0.6m × 短軸 0.58m × 深さ 0.26m 余りである。主軸は南北方向の N30° W 余りで、平面形状は隅丸方形、断面形状は皿状である。

堆積層は、黒褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、白磁等が出土している。

土坑 0364SX (図 45)

北区 1C グリットに位置する。西側を 0334SX に、北側を 0112SX 等に切られる。マチヤ B の建物 0560SB ウラから約 2m 東側のオクに位置し、マチヤ C にもかかる。

残存規模は、長軸 1.37m × 短軸 0.57m × 深さ 0.47m 余りである。主軸は南北方向の N0° EW で、平面形状は溝状で、断面形状は皿状である。

堆積層は、図 45 の 12 ~ 16 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、備前系陶器、丹波系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、青磁等が出土している。

土坑 0373SX (図 49)

北区 1C・1D グリットに位置する。西側を 0372SX に、南側を 0375SX 切られる。建物 0560SB ウラから 2m 余りオクのマチヤ A 境近くに位置する。トイレの可能性がある。

残存規模は、長軸 1.2m × 短軸 1.08m × 深さ 0.35m 余りである。主軸は南北方向の N0° EW 余りで、平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形である。

堆積層は、図 49 の 1・2 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、白磁等が出土している。

土坑 0412SX

北区 1D グリットに位置する。東側を 0375SX に、上部を 0370SD に切られ、西側の 0376SX を切る。建物 0560SB ウラから 3.7m 余りオクのマチャ A 境近くに位置する、中規模の廃棄土坑と考えられるものである。

残存規模は、長軸 2.18m × 短軸 1.88m × 深さ 0.46m 余りである。主軸は南北方向の N0° EW 余りで、平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形である。

堆積層は、上層が褐色シルト質細砂層、中層が茶灰色シルト質細砂層、下層が灰褐色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器等が出土している。

土坑 1404SX

東区 1D グリットに位置する。東側を 1405SX に、南側を 1115SX に切られ、西側の 0376SX を切る。建物 0560SB ウラから 6.3m 余りオクのマチャ A 境近くに位置する。中規模の廃棄土坑と考えられる。

残存規模は、長軸 1.96m × 短軸 0.85m × 深さ 0.22m 余りである。主軸や形状は不明である。

堆積層は、灰黄色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、丹波系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、青磁、鋳型片等が出土している。

土坑 1427SX

東区 1D・1E グリットに位置する。南側を 1111SE に切られる。建物 0560SB ウラから 7.5m 余りオクに位置する。

残存規模は、長軸 0.52m × 短軸 0.45m × 深さ 0.69m 余りである。主軸は不明で、平面形状は円形、断面形状は逆台形で深い。

堆積層は、灰色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器等が出土している。

土坑 1415SX

東区 1E グリットに位置する。西側を 1119SX と 1417SX に、上部を 1415SX に、南側を 1421SX に切られ、東側の 11110SX と 1414SX を切る。建物 0560SB ウラから 11m 余りオクに位置する、中規模の廃棄土坑と考えられるものである。

残存規模は、長軸 2.93m × 短軸 1.96m × 深さ 0.8m 余りである。主軸は不明で、平面形状は長楕円形、断面形状は逆台形状である。

堆積層は、東壁の 1415-1・2 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器等が出土している。

土坑 1421SX

東区 1E グリットに位置する。東側を 1419SX や 1420SX に、南側を 1122X に切られる。建物

0560SB ウラから 11.7m 余りオクに位置する、中規模の廃棄土坑と考えられるものである。

残存規模は、長軸 2.16m × 短軸 0.83m × 深さ 0.48m 余りである。主軸は南北方向の N0° EW 余りで、平面形状は長い楕円形、断面形状は鉢状である。

堆積層は、灰褐色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、中世須恵器、常滑系陶器、備前系陶器、瓦、白磁等が出土している。

土坑 0335SX (図 42)

北区 1B・1C グリットに位置する。東側を 0126SX に、北側を 0460SX に、南側を 0312SX に切られる。東側の 03339SX の大形土坑を切る。建物 0560SB オクの南側から建物 0561SB オクの北側にかけ、マチヤ B とマチヤ C に跨る 2 区画の大形土坑である。2 棟の柱穴を壊して存在する。この土坑については、堆積物に焼土塊・炭・壁土等を含んでおり、2 棟に係わる何らかの火災の一時的な処理土坑と考えることができる。

残存規模は、長軸 3.1m × 短軸 3.06m × 深さ 0.8m 余りである。主軸は東に傾く南北方向の N30° E 余りで、平面形状は不定形な菱形状で、断面形状は逆台形で深い。

堆積層は、図 42 a-a' の 1 ~ 5' の 6 層である。

出土遺物は、土師器、山茶碗、常滑系陶器、瓦質土器、瓦、白磁、青磁、鋳型片、鉄釘、砥石、銅錢等が出土している。

土坑 0910SX

南区 2B グリットに位置する。西側を 0337SX に切られる。東側の 0361SX を切る。マチヤ C 建物 0561SB の中央部に所在する、浅い小土坑である。

残存規模は、長軸 0.61m × 短軸 0.2m × 深さ 0.15m 余りである。主軸・形状等は不明である。

堆積層は、西壁 1 の 910-1 層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、瓦質土器、青磁等が出土している。

土坑 0914SX

南区 2B グリットに位置する。西側を柱穴に、北側を 0328SX に、東側を 0008SE に切られる。北側の 0362SX を切る。建物 0561SB オクの南壁近くに位置する。

残存規模は、長軸 1.34m × 短軸 1.05m × 深さ 0.39m 余りである。主軸は東西方向で南北方向の N80° E 余りで、平面形状は不定形で、断面形状は皿状である。

堆積層は、上層が灰褐色シルト質粗砂層、下層が砂礫混りの褐色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、瓦質土器、白磁等が出土している。

土坑 0307SX

北区 2B グリットに位置する。北側を 0312SX に、西側を試掘トレンチに切られる。建物 0561SB オクの、北壁近くに位置する。中央を 0312SX に切られるため別遺構としているが、0335SX と同一の遺構である可能性がある。

残存規模は、長軸 1.64m × 短軸 1.33m × 深さ 0.27m 余りである。主軸と平面形状等は不明で、断面形状は逆台形である。

堆積層は、堆積物に焼土塊・炭、大型礫を多数含み、暗褐色シルト質粗砂層である。これは、0335SX の下層とよく似ている。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、丹波系陶器、常滑系陶器、古瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、青磁、砥石、鉄釘、鉄製刀子等が出土している。

土坑 0383SX

北区 2C グリットに位置する。0339SX を切る。建物 0561SB ウラから僅かに 1.3m 余りオクに位置する。マチヤ C のウラに設置された、小型のトイレの可能性がある。

残存規模は、長軸 0.7m × 短軸 0.46m × 深さ 0.3m 余りである。主軸は南北方向の N0° EW 余りで、平面形状は長方形で、断面形状は方形で可成り真直ぐに掘りこまれている。

堆積層は、上層が灰褐色シルト質細砂層、下層が暗灰色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦質土器、青磁等が出土している。

土坑 1430SX

東区 1D・2D グリットに位置する。西側を 0370SD に切られる。建物 0561SB ウラから 7m 余りオクに位置する。

残存規模は、長軸 1.38m × 短軸 0.87m × 深さ 0.59m 余りである。主軸は東西方向の N80° E 余りで、平面形状は長楕円形で、断面形状は浅い皿状である。

堆積層は、明灰色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、常滑系陶器、丹波系陶器、瓦質土器、瓦等が出土している。

土坑 1432SX

東区 2D グリットに位置する。北側を 1111SE に、南側を 1112SX に切られる。建物 0561SB ウラから 7.9m 余りオクに位置する。東側の 1433SX や 1435SX と共に連続する廃棄土坑と思われる。

残存規模は、長軸 1.7m × 短軸 1.44m × 深さ 0.51m 余りである。主軸は南北方向の N0° EW 余りで、平面形状は楕円形で、断面形状は逆台形である。

堆積層は、上層が暗灰茶褐色細砂質シルト層、下層が黄灰褐色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、白磁、青磁等が出土している。

土坑 1433SX

東区 2D グリットに位置する。北側を 1111SE に、南側を 1112SX に、東を 1435SX に切られる。建物 0561SB ウラから 9.2m 余りオクに位置する。東側の 1435SX や西側の 1432SX と共に連続する廃棄土坑と思われる。

残存規模は、長軸 0.98m × 短軸 0.53m × 深さ 0.12m 余りである。主軸は南北方向の N4° W 余りで、平面形状は楕円形で、断面形状は逆台形である。

堆積層は、茶褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、常滑系陶器、瓦質土器等が出土している。

土坑 1435SX

東区 2D グリットに位置する。北側を 1111SE に、南側を 1446SD に、東側を 1113SX に切られる。建物 0561SB ウラから 9.7m 余りオクに位置する。西側の 1432SX や 1433SX と共に連続する廃棄土坑と思われる。

残存規模は、長軸 1.78m × 短軸 1.45m × 深さ 0.43m 余りである。主軸は南北方向の N0° EW 余りで、平面形状は楕円形か、断面形状は逆台形である。

堆積層は、茶褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦質土器、白磁、青磁等が出土している。

土坑 0922SX

南区 2B グリットに位置する。西側を 0628SE に切られる。マチヤ D の建物 0562SB 内の中央で、北壁に接する位置と考えられる。小さな土坑である。

残存規模は、長軸 0.8m × 短軸 0.45m × 深さ 0.57m 余りである。主軸は東西方向の N0° EW 余りで、平面形状は楕円形で、断面形状は浅い皿状である。

堆積層は、灰褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、瀬戸美濃系陶器、常滑系陶器等が出土している。

土坑 0911SX

南区 3B グリットに位置する。北側を 0636SK に、西側を 0622SE に、東側を 0621SK 等に切られる。マチヤ D の建物 0562SB 内の中央部で、0931SX と東西に並ぶ。

残存規模は、長軸 1.22m × 短軸 1.13m × 深さ 0.7m 余りである。主軸・形状は不明である。

堆積層は、灰褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、瓦質土器、瓦等が出土している。

土坑 0912SX

南区 2B・3B グリットに位置する。北側を 0012SE に、南側を 0636SK に切られる。マチヤ D の建物 0562SB 内の中央で、土坑 0922SX より東側の北壁に接する位置である。

残存規模は、長軸 1.59m × 短軸 0.85m × 深さ 0.55m 余りである。主軸は東西方向の N70° W 余りで、平面形状は楕円形かとみられ、断面形状は皿状である。

堆積層は、灰褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、備前系陶磁器、漆椀片等が出土している。

土坑 0902SX

南区 3B・4B グリットに位置する。北側を 0929SX に、東側を 0960SX に、南側を 0936SE に、上を 0928SX 等に切られる。西側の 0909SX を切る。マチヤ D の建物 0562SB 内の南壁際に存在する。

残存規模は、長軸 1.62m × 短軸 1.4m × 深さ 0.66m 余りである。主軸は西に傾く南北方向の N60° W 余りで、平面形状は不定形、断面形状は皿状である。

堆積層は、灰色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、石鍋等が出土している。

土坑 0931SX

南区 3B グリットに位置する。北側を 0913SE に、東側を 0620SE に切られる。南側の 0932SX を切る。マチヤ D の建物 0562SB 内の中央部で、0911SX と東西に並ぶ。

残存規模は、長軸 0.92m × 短軸 0.55m × 深さ 0.86m 余りである。主軸・形状は不明である。

堆積層は、西壁 1 の 931-1 ～ 4 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦質土器等が出土している。

井戸 0934SE (図 42)

南区 2C・3C グリットに位置する。西側を 0815SX に、東側を 0807SX に切られる。南側の 0947SX を切る。マチヤ D 建物 0562SB オクの北東隅に所在するウチ井戸である。

残存規模は、掘方が長軸 2.42m × 短軸 2.17m × 深さ 1.45m 余りである。主軸は南北方向の N10° W 余りで西に傾く、平面形状は菱形から円形、断面形状は逆台形から垂直に掘りこまれている。最下部に曲げ物とみられる有機質の痕跡を、僅かに残していた。

堆積層は、上層は図 51 断面の 934-1 ～ 5 層で、中層が茶褐色シルト質粗砂層、下層が灰色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、丹波系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、白磁、青磁、鎔型片、碁石、銅錢、鉄釘、火打石等が出土している。

土坑 0970SX

南区 3C グリットに位置する。北側を 0812SX に、西側を 0617SX に、南側を 0969SX に切られる。マチヤ D の建物 0562SB 内のオク、南東隅の壁際に存在する。

残存規模は、長軸 0.65m × 短軸 0.51m × 深さ 0.23m 余りである。主軸は南北方向の N0° EW 余りで、平面形状は溝状か楕円形、断面形状は皿状である。

堆積層は、灰褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器等が出土している。

土坑 0951SX

南区 3C・3D グリットに位置する。北側を 0953SX に、南側を 0708SX 等に切られる。マチヤ D の建物 0562SB ウラから約 3.4m 東側のオク中央部に存在する。廃棄土坑とみられる。

残存規模は、長軸 2.2m × 短軸 1.22m × 深さ 0.58m 余りである。主軸は東西方向の N76° E 余りで、平面形状は不定形な楕円形、断面形状は皿状である。

堆積層は、暗灰色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、白磁等が出土している。

土坑 0952SX

南区 3C グリットに位置する。北側を 0608SE に切られる。東側の 0951SX 切る。マチヤ D の建物 0562SB ウラから約 0.9m 東側中央部に位置し、0951SX の西側に位置する。

残存規模は、長軸 1.03m × 短軸 0.72m × 深さ 0.53m 余りである。主軸は南北方向の N25° E で、平面形状は不定形、断面形状は皿状である。

堆積層は、暗灰色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、青磁等が出土している。

土坑 0962SX

南区 3C・4C グリットに位置する。西側を 0704SX に切られる。マチヤ D の建物 0562SB ウラの南隅、マチヤ E との境に位置する。廃棄土坑であろう。

残存規模は、長軸 1.63m × 短軸 1.25m × 深さ 0.77m 余りである。主軸は南北方向の N5° E で、平面形状は不定形な楕円形、断面形状は皿状である。

堆積層は、灰褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦質土器、青磁等が出土している。

土坑 1002SX

南区 3D グリットに位置する。西側を 0953SX に、南側を 0983SX に、北側を 0991SX に切られる。マチヤ D の建物 0562SB ウラから約 3.4m 東側のオク中央部に存在する。

残存規模は、長軸 0.97m × 短軸 0.67m × 深さ 0.31m 余りである。主軸は南北方向の N27° W で、平面形状は溝状、断面形状は浅い皿状である。

堆積層は、暗灰褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器等が出土している。

土坑 1512SX

東区 3E グリットに位置する。南側の 1513SX に切られる。マチヤ D の建物 0562SB ウラから約 11.8m 東側の東壁際に位置する。

残存規模は、長軸 0.69m × 短軸 0.4m × 深さ 0.57m 余りである。主軸・形状等は不明である。

堆積層は、東壁の 1512-1・2 層である。

出土遺物は、土師器、瓦質土器等が出土している。

土坑 1513SX

東区 3E グリットに位置する。南側の 1514SX に、北側の 1512SX に切られる。マチヤ D の建物 0562SB ウラから約 12m 東側の東壁際に位置する。

残存規模は、長軸 0.46m × 短軸 0.15m × 深さ 0.44m 余りである。主軸・形状等は不明である。

堆積層は、東壁の 1513-1・2 層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、瓦、瓦質土器、鋳型片等が出土している。

井戸 0936SE

南区 4B グリットに位置する。南側を 0604SE に切られる。西側の 0902SX 等を切る。マチヤ E の推定建物 0563SB オクの北壁際北東隅に所在するとみられる、平石組みのウチ井戸である。

残存規模は、掘方が長軸 1.6m × 短軸 1.44m × 深さ 0.82m 余りである。平面形状は井戸掘りに用いていた階段を南西側に備える円形、断面形状は垂直に掘りこまれている。

堆積層は、上層は茶褐色細砂質シルト層、下層が灰色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、常滑系陶器、備前系陶器、信楽系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質

土器、白磁、青磁等が出土している。

土坑 0918SX

東区 4B グリットに位置する。西側を穴蔵 0602SK に、東側を 0803SX に切られる。マチヤ E の推定建物 0563SB のオクに位置するようである。

残存規模は、長軸 1.08m × 短軸 0.62m × 深さ 0.67m 余りである。主軸・形状等は不明である。

堆積層は、東壁の 918-1 ~ 5 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦質土器等が出土している。

土坑 0957SX

南区 4B グリットに位置する。東側を 0604SE に切られる。マチヤ E の推定建物 0563SB オクに、井戸 0936SE の南側に接して存在する。

残存規模は、長軸 0.94m × 短軸 0.59m × 深さ 0.21m 余りである。主軸は東西方向の N90° EW で、平面形状は楕円形、断面形状は皿状である。

堆積層は、灰色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器等が出土している。

土坑 1496SX (図 51)

東区 4E グリットに位置する。北側を 1497SX に、東側を 1500SX に切られる。マチヤ E のウラの建物 0564SB から約 1.6m 東側に位置する。トイレ遺構である可能性がある。

残存規模は、長軸 1.84m × 短軸 1.03m × 深さ 0.58m 余りである。主軸は東西方向の N90° EW で、平面形状は長方形、断面形状は逆台形である。

堆積層は、図 51 の 1496-1 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦質土器、瀬戸美濃系陶器、白磁等が出土している。

土坑 0343SX (図 43)

北区 1A グリットに位置する。東側の 0358SX を切る。マチヤ B の建物 0560SB オモテに近い位置にある。

残存規模は、長軸 1.71m × 短軸 0.82m × 深さ 0.4m 余りである。主軸は東西方向の N37° E で、平面形状は楕円形、断面形状は浅い皿状である。

堆積層は、図 43 b-b' 0343-1 ~ 4 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、信楽系陶磁、丹波系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器等が出土している。

土坑 0344SX

北区 0A グリットに位置する。北側は北壁に入る。西側を 0343SX に、東側を 0322SX に切られる。マチヤ B との境で、マチヤ A に位置する。

残存規模は、長軸 0.45m × 短軸 0.36m × 深さ 0.36m 余りである。主軸は南北方向の N0° EW で、平面形状は長方形、断面形状は逆台形である。

堆積層は、北壁の 344-1・2 層である。

出土遺物は、土師器等が出土している。

土坑 0348SX (図 43)

北区 1A グリットに位置する。東側を 0304SX に切られる。南側の 0357SX や西側の 0358SX を切る。0343SX や 0358SX と共に、マチヤ B の建物 0560SB オモテに近い位置にある。

残存規模は、長軸 1.24m × 短軸 1.12m × 深さ 0.4m 余りである。主軸は東西方向の N43° W で、平面形状は隅丸三角形、断面形状は浅い皿状である。

堆積層は、図 43 b-b' 0348-6・7 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦質土器、瓦、青磁等が出土している。

土坑 0358SX (図 43)

北区 1A グリットに位置する。西側を 0343SX に切られる。土坑 0343SX や 0348SX と共に、マチヤ B の建物 0560SB オモテに近い位置にある。

残存規模は、長軸 1.84m × 短軸 0.8m × 深さ 0.14m 余りである。主軸は東西方向の N8° E で、平面形状は楕円形、断面形状は浅い皿状である。

堆積層は、図 43 b-b' 0358-5 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、瓦質土器等が出土している。

土坑 0347SX (図 46)

北区 1C グリットに位置する。マチヤ B の建物 0560SB ウラの軒下に位置する。

残存規模は、長軸 0.64m × 短軸 0.56m × 深さ 0.28m 余りである。主軸は南北方向の N3° W で、平面形状は円形、断面形状は浅い皿状である。

堆積層は、図 46 a-a' 0347-1 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、備前系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、白磁、青磁等が出土している。

【7-8期】(図 24)

7-8期の遺構は、京XI期古の初めの時期と思われるもので、東洞院通側を抉るような洪水遺構 0310SD のみである。この洪水を契機として、周辺のマチヤ環境は一掃される。

時代は、室町幕府 11 代将軍足利義澄の時代で、永正 4 年（1507）に幕府権力を掌握していた細川京兆家の内部対立から、細川政元が暗殺された永正の錯乱が起こった。この事件を契機として、畿内では將軍家を巻き込んで、各勢力が対立し衝突していく時代に相当すると思われる。

洪水遺構 0310SD (図 24)

北区 1A・1B・2A・2B グリットに位置する。その検出範囲は、東洞院通側のほぼ北区の西側張り出し部にあたる。その流路の規模は、調査区内では北区西壁 2 から東へ 4.1 ~ 4.5m 余り、深さは 0.4 ~ 0.7m 余りが削られ窟んでいるのを確認できる。東岸側が特に抉られている状況が、南壁 2 の断面からも観察される。東洞院通側のみがこの様な状態であることから、道路を流れた洪水が道路幅を越えてマチヤ建物を壊し、地面を抉り大きな被害をもたらしたと考えることがで

きる。

堆積層は、南壁2と西壁1・2の0310-1～8層である。この層内には、多量の円礫が含まれているが、特に0310-3～7層には多数の円礫（φ3～17cm）が含まれていた。

この堆積層には遺物も含まれており、土師器、縁釉陶器、中世須恵器、常滑系陶器、備前系陶器、信楽系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、白磁、青磁、壁土、滑石、砥石、鉄釘、丸太材等が出土している。

洪水の時期は、その明確な年代を示せないが、16世紀前葉頃の永正5～17年（1508～1520）の記録類^{3・4)}に頻出する、大雨と洪水が原因ではないかと考えられる。

【8期】（図25・26・57）

8期の遺構は、京X期古から京XI期中の初めの時期の遺構である。洪水後、壊されたマチヤの残材は解体撤去され、立面図にみられるように西側が35.9m～東側が36.4m余りに整地された後に、洪水で壊された東洞院通東側溝が復旧される。築地については、今回の調査地内では構造物の痕跡を確認できなかったので、存在したかどうかは今のところ不明である。そして、敷地内の一画である調査区内にも、東洞院通東側溝である溝0201SDが、南北方向の溝0370SDと東西方向の溝1446SDが設けられ、東壁に入り規模ははっきりしないが、建物0571SB-1が1棟建つ。この他にも、少なくとも作業施設、さらに井戸やトイレ等が存在したものとみられる。

この敷地の新しい住人は、竹田法印という人物とその一族とみられる。大永2年（1522）9月14日付「竹田法印定盛請文案」（鶴川家文書）⁵⁾は、幕府に敷地の安堵を請う文書である。この地とは、「東洞院東頬南北者（錦少路四条坊門）一町、東西廿五丈」としており、まさに調査地を含む、左京四条四坊三町の西側の地である。

竹田法印が、活況を呈する下京に居住し始めた時代とは、下京の町衆を中心に勢力を広げていた日蓮宗が、天文元年（1532）に浄土真宗本願寺派の門徒（一向衆）の入京の噂が広がったことに対し、管領細川晴元や支配下の六角定頼、木沢正長、茨木長隆等と手を結び、武装した日蓮宗の町衆である法華宗徒が救援し、山科本願寺の焼き討ちや伊丹城の救援など、大規模な法華一揆が始まった。さらに、天文5年（1536）3月の延暦寺との宗教問答に端を発する摩擦は、日蓮宗が「法華宗」を名乗ることの差し止めを室町幕府に求めたが、これも延暦寺が敗訴した。これにより、延暦寺全山と大衆は洛中洛外の法華衆の撃滅を決議した。同年7月、洛中洛外の日蓮宗二十一本山に対して、延暦寺の末寺となり上納金を支払うように迫ったが要求を拒否された。延暦寺は近江の守護六角定頼の援軍を得て、7月23日に延暦寺と六角勢が総勢6万人を動員して京都市中に押し寄せ、法華衆2万人と交戦するという事態「天文法華の乱」（「天文法難」）に達した。法華衆は5月下旬から下京に要害の溝を開いて延暦寺の攻撃に備えていたため、一時は法華衆が有利であったが、次第に劣勢になっていた。そして、7月28日までに最後の本圧寺が落ち、延暦寺・六角勢は法華衆に勝利した。この時、日蓮宗二十一本山を焼き払い、法華衆の3千人とも1万人ともいわれる人々を殺害したと伝える。さらに、延暦寺と六角勢が放った火は、下京の全

7-8 期

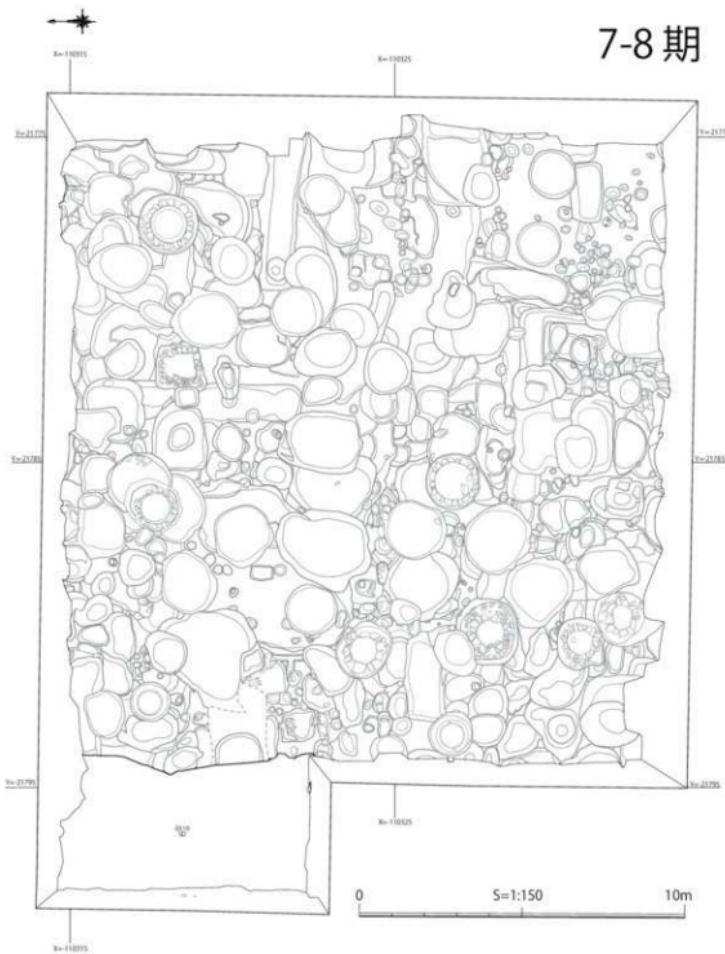


図 24 7-8 期間 洪水範囲図

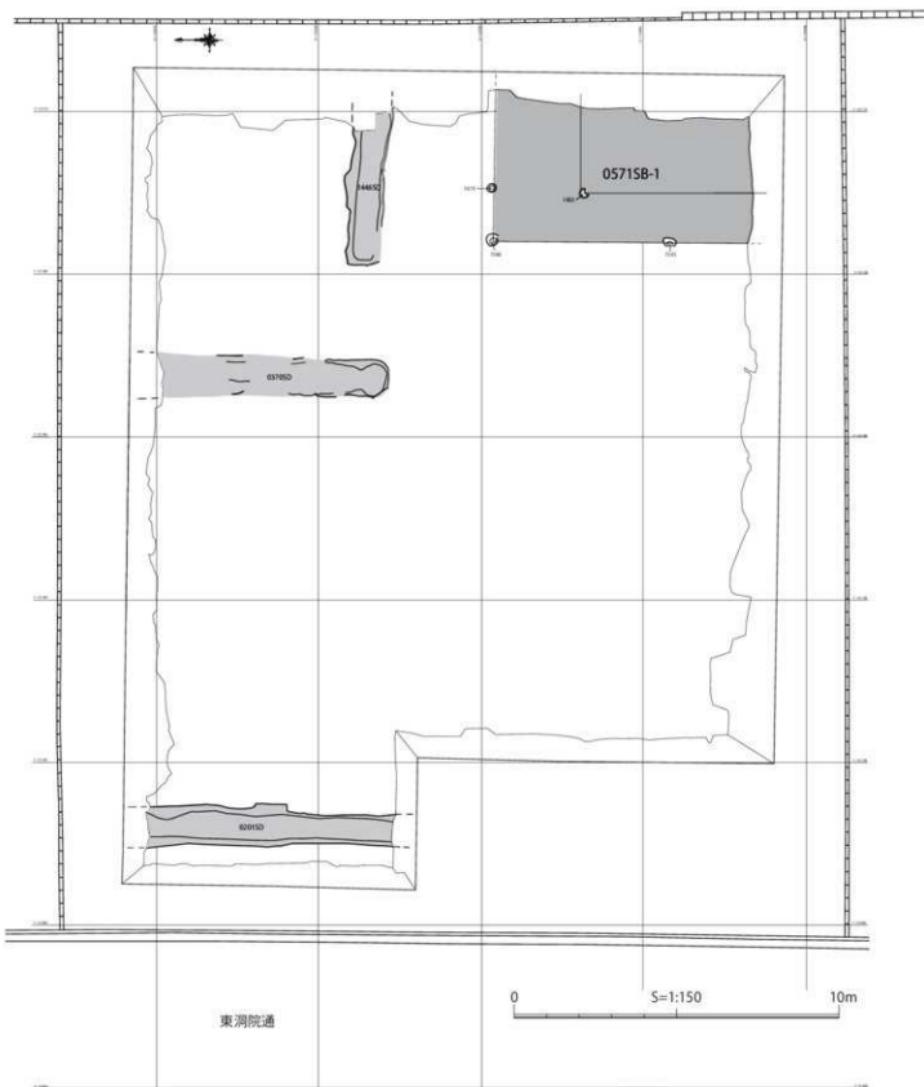


図25 8期建物配置図

8期

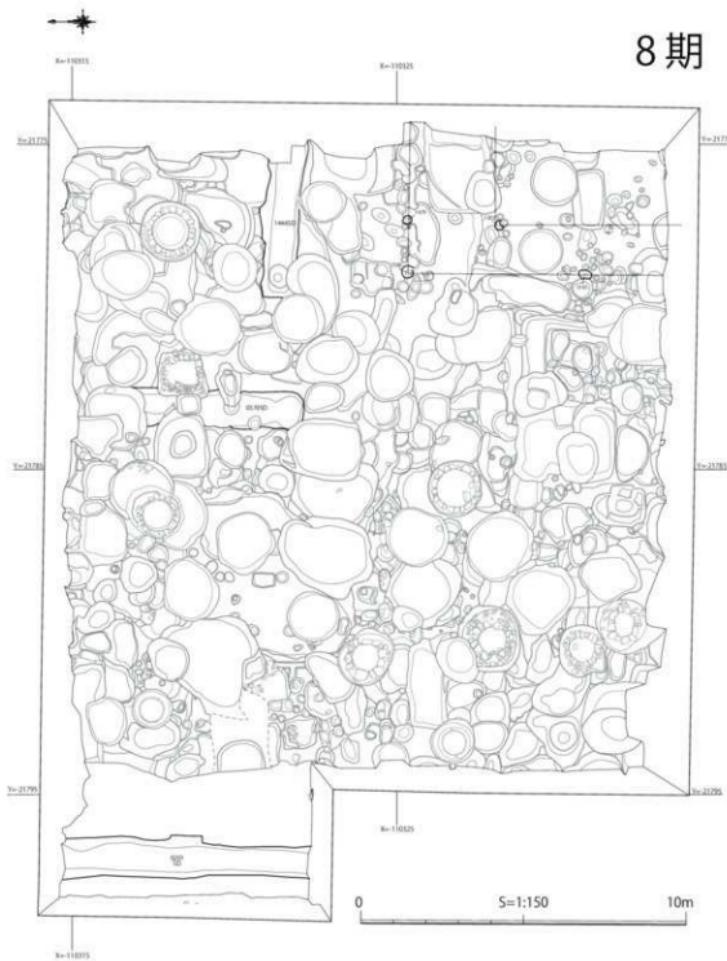


図26 8期遺構図

域と上京の3分の1余りを焼失したという。こうして、下京の町衆の自治と隆盛を主導し精神的にも支えてきた法華衆は壊滅し、法華衆徒は洛外に追放され、堺等に逃避した。以後6年間、京都において日蓮宗は、禁教となる。この時期に相当するのではないかと思われる。

建物 0571SB-1（図25・57）

0571SB-1は、東区東壁際に建物の北西角の一部が確認できるが、全体像は不明である。さらに、建物 0571SB-1は次期のやや規模の大きい建物 0571SB-2の柱穴に切られている。南北間口2間以上（5.5m以上、N (2.75)+(2.75)+α S）、東西間口2間以上（約3.2m以上、W 1.6+(1.6)+α E）の独立屋の建物である。主軸はN90°EWである。西側から1間目に南北柱列が並ぶ。柱は、礎石建である。礎石の基礎掘方は、直径約0.4mの円形で、深さ約0.4m、掘方内に礎多數を入れたもので、礎石は全て失われていた。

のことから考えられる建物構造を、後続する建物 0571SB-2を参考にして考えてみる。

東西間口が狭く南北間口が広いことから、マチヤ的な構造物を考えることができる。南北間口2間又はそれ以上で西側からの平入り、東西奥行2間以上の構造物が可能である。しかし、この建物の敷地全体に占める配置からは、路にも面していないのに、マチヤ構造の建物が何故この広い敷地内のこの位置に必要なのかは、疑問が残る。

次に、西端から東へ1間目(1.6m)の2列目に柱列があること、建物 0571SB-2では北から2列目の柱掘方が大きくこれを母屋柱とし、北から3列目を棟と考えるならば、桁行は不明ながら妻は梁行2間(5.5m、2.75+2.75)に、南北に庇各1間(2.75m)と東西に短い庇各1間(1.6m)が付く、東西棟の四面庇入母屋造の建物を考えることも可能である。その場合の規模は、図57の様に大部分が東壁に入るため桁行は分からないが、想像を逞しくして、母屋が6間ならば庇を加えて12.8m余りに、母屋が10間ならば庇を加えて19.2m余りに、梁行2間に長い一間庇が廻る妻行(約11m)の建物に復元することができる。

なお、建物の廃絶時期については、建物 0571SB-1に礎石まで焼けた跡などは無いが、天文法華の乱による破損、破壊が原因の一つと考えることはできる。

東側溝 0201SD（図25）

北区1A・2Aグリットに位置する。洪水遺構 0310SDの上に新たに設けられた、南北方向の東洞院通の東側溝である。

その残存規模は、北壁から南壁2までの延長約7.6m、幅0.99～1.27m、深さ0.36～0.56m余りである。

主軸は南北方向のN0°EWで、断面形状は逆台形である。

堆積層は、北壁・南壁2の201-1～5層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、青磁、銅錢、鐵釘、鎔型片、石鍋、笏谷石製の用途不明品等が出土している。

東側溝 0201SDは、平安京条坊の推定される東側溝よりも、芯々で2.6m余り東側に位置している。どの様な基準でこの溝が新たに設けられたかは不明ではあるが、残存する洪水遺構 0310SD

下の7期の遺構の位置からも、東側溝0201SDと同じ位置に7期以前の側溝が存在したとは思えない。何らかの意図が存在するであろうが、今のところは不明である。

溝0370SD（図25）

北区1D・2Dグリットに位置する。北壁側を0127SXに、西側を0369SXに、南側を0327SXに、東側を0386SXと1429SXに切られる。西側の0412SXや東側の1430SXを切る。

その残存規模は、北壁から南へ延長5.25m余り、幅1.1～1.15mと安定し、深さは0.27～0.33m余りで、南端が丸く意図的に收められている。主軸は南北方向のN0°EWで、断面形状は逆台形である。

堆積層は、上層を大きく攪乱されていたこともあり、灰褐色シルト質細砂層1層で取り上げを行った。しかし、北壁のみに残る土坑0376SXの376-1～4層が、この溝の堆積物であるとすると、その幅は2m以上で、0.8m以上の深さがあったことになる。

出土遺物は、土師器、肥前系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、青磁等が出土している。土師器が、僅かしか出土していない。

溝の性格については、溝1446SDと共に不明である。

溝1446SD（図25）

北区2Eグリットに位置する。西側を1147SXに、上を1151SXに、南側を1124SXや1437SXに切られる。西側の1435SXを切る。

その残存規模は、東壁から西へ延長4.93m余り、幅1.2～1.65m余り、深さは0.5～1.1m余りで、西端が丸く意図的に收められている。主軸は東西方向のN87°Wで、断面形状は逆台形である。溝0370SDとは3.9m離れている。

堆積層は、東壁の1446-1～7層である。

その幅は、東壁断面からは2m余りと考えられ、少なくとも1.1m余りの深さがあったことになる。雨落ち溝とは異なる。

出土遺物は、土師器、信楽系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器等が出土している。

溝の性格については、溝0370SDと共に不明である。

【9期】（図27・28・57）

9期の遺構は、京XI期中の時期の遺構である。天文法華の乱（1536）による直接の被害（火災の焼土面や礎石の火災痕等）は不明である。しかし、近隣の火災の可能性を示すのではないかと思われる炭・炭化物の存在は、東側溝0201SDの堆積物201-1～5層の最下層5層中に、溝0370SDの0376-1～4層の下から2層目の376-3層中に、溝1446SDの1446-1～7層の4・5層中に多く含まれている。これらのことから天文法華の乱後に建物0571SB-1は壊され、解体撤去されと思われる。この天文法華の乱（1536）以後に調査区内で確認できるものは、建物0571SB-1と同じ位置に同規模で建て替えられた可能性の高い建物0571SB-2、何時建てられたかやや不明ではあるが建物0570SB、そして井戸0930SE、東側溝0201SD、溝0370SD、溝1446SD、廃棄土坑と

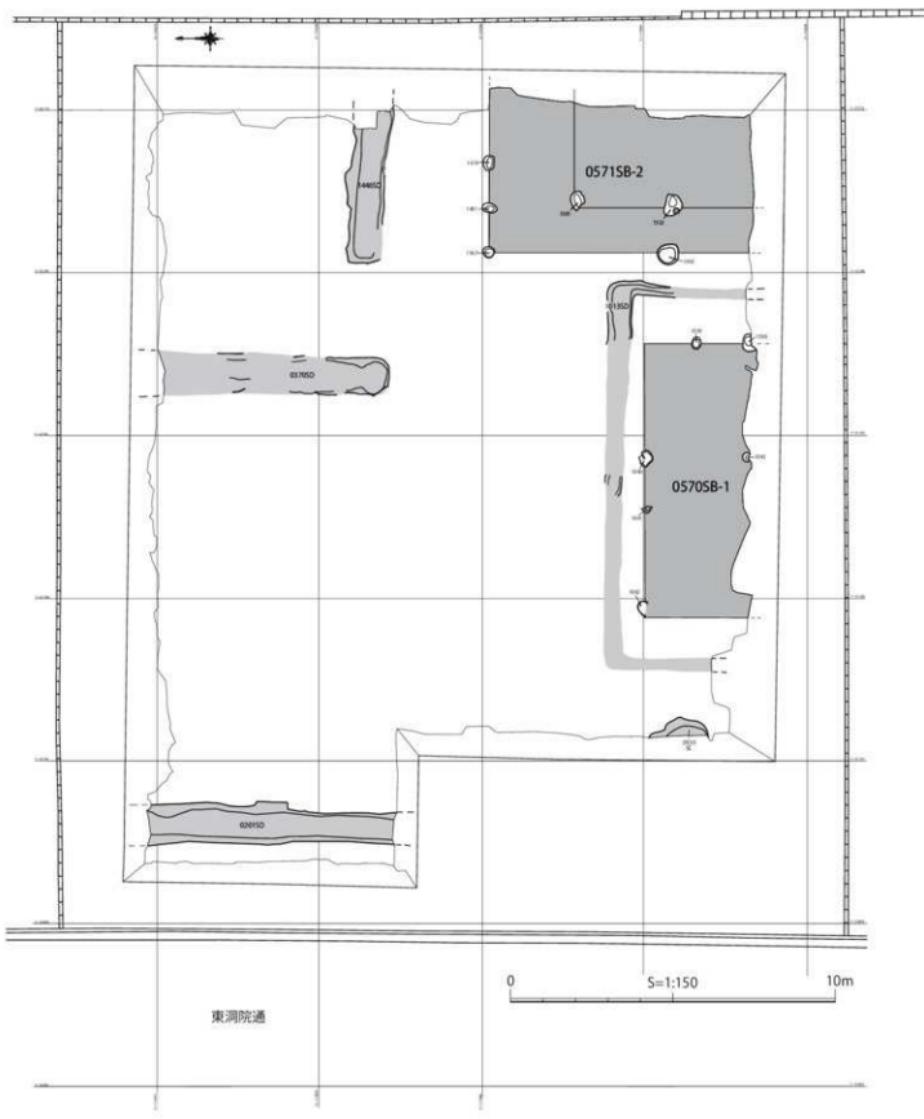


図27 9～11期 建物配置図

9期

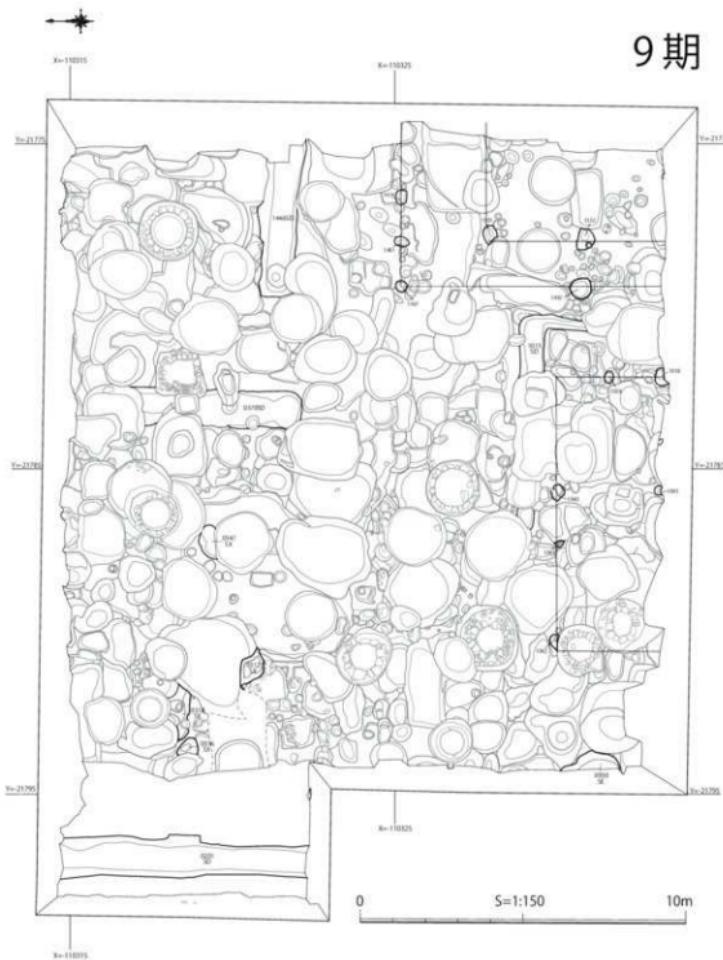


図28 9期遺構図

みられる土坑 0318SX・0356SX・0312SX 等がある。

この天文法華の乱（1536）の勃発時に、この土地の住人は、おそらく分家が住む堺や洛外に避難していたのではないかと思われる。それは、同規模の建物を同じ位置に立て直すという行為 자체が、8期の建物を建てた者が生存しているからこそ可能で、繰り返し同じ規模で同じ作業を繰り返し行いたいという意思が強くはたらいているように思えるからである。

時代は、天文 11 年（1542）に六角定頼の斡旋で朝廷から京都帰還を許す勅許が再び下りたが、天文 16 年（1547）には六角定頼の仲介で延暦寺と日蓮宗との間に和議が成立し、ようやく帰還するに至った。室町幕府では 12 代將軍足利義晴から 13 代將軍足利義輝の時代で、家臣や守護との争いに度々京都を追われながらも將軍職を確保し続け、対立勢力との戦いに明け暮れ、義輝は松永久通と三好三人衆に永禄の変（1565）で殺害された時期に相当する。

建物 0570SB（図 27・57）

0570SB は、南区の南壁際に建物の北側の一部が確認できるもので、全体像は不明である。この建物の北側と東側には、雨落溝 1013SD が残る。

攪乱が多く不明な点も多いが、桁行である東西間口 5 間（8.5m、W (1.7)+(1.7)+1.7+(1.7)+(1.7) E) の均等間で、梁行である南北間口 2 間以上（3.2m 以上、N (1.6)+1.6+α S）の均等間の独立屋である。主軸は N90° EW の東西棟である。柱は、礎石建である。礎石の基礎掘方は、直径が 0.3 ~ 0.5m の円形か楕円形で、深さ約 0.3m、掘方内に礫を複層入れたもので、礎石は全て失われていた。

この建物構造を、考えてみる。

東西間口が均等であり、切妻造とする考え方である。東西間口（桁行）5 間 × 南北間口（梁行）2 間以上とすることが可能である。

次に、柱の位置の確認できないものが増えるが、南面に 1 間を加えた入母屋造を考えることもできる。1 間の廻り庇を取ると、母屋が桁行 3 間（5.1m）× 梁行 1 間以上（1.6m 以上）となる。これでは、奥行きが狭すぎるので、少なくとも梁行は 2 間が必要であろう。これに、雨落ち溝の北側と東側の幅の違いから、北側（裏）を除いてコ字に廻り縁を想定できる。この建物の性格と復元規模については、総括で後述する。

なお、この建物 0570SB の建設時期については、柱穴内の遺物が少ないので、雨落ち溝 1013SD の遺物に頼りたいところであるが、土師器の小片のみで全く出土しておらず明らかでない。ここでは建物配置や他の遺構との関係から 9 期としたが、10 期前後の建物である可能性も否定できない。廃絶時期についても、遺構の切り合いから京 XIII 期には、確實に廃絶しているのが分かるが、後述する建物 0571SB-2 と同時期の京 XIII 期古の内である可能性が高い。

溝 1013SD（図 27）

南区と東区に跨る 3C・3D・4D グリットに位置する。西側を 0812SX や 0708SX 等に、南側を 1489SX や 0716SX 等に、上を 1012SX が切る。西側では多くの遺構が攪乱しているため、その存在を確認できない。溝は、建物 0570SB の北側から北東で直角に南に曲がって東側にその存在を確認できる。現況では北側と東側のみか確認できないが、その位置から建物 0570SB の南側を空

けるコ字か□字に廻る、建物周辺の雨水排水溝を兼ねた雨落ち溝と思われる。

その残存規模は、北溝が延長 6.6m 余り、幅 0.51 ~ 0.73m 余り、深さは 0.24 ~ 0.39m 余りで、主軸は東西方向の N90° EW で、断面形状は逆台形である。東溝は北溝よりも幅が細く、延長 2.08m 余り、幅 0.34 ~ 0.51m 余り、深さは 0.16 ~ 0.22m 余りで、主軸は南北方向の N0 ~ 4° E で、断面形状は逆台形である。排水は西に流されていた。建物 0570SB から溝 1013SD の芯々距離は、北溝が 0.98m、東溝が 1.58m とやや広く離れている。

堆積層は、上層が黄灰色細砂質シルト層、下層が地山小塊を含む灰黄色細砂質シルト層である。炭や焼土は含まない。

出土遺物は、土師器の小片のみが出土している。

建物 0571SB-2（図 27・57）

0571SB-2 は、東区東壁際に建物の北西角の一部が確認できるもので、全体像は先行遺構である建物 0571SB-1 と共に不明である。南北間口 2 間以上（5.6m 以上、N (2.8)+(2.8)+ α S）、東西間口 3 間以上（約 4.2m 以上、W 1.4+1.4+(1.4)+ α E）の独立屋の建物である。主軸は N90° EW の東西棟である。西側から東へ 1 間目に南北柱列が並ぶのは、建物 0571SB-1 と同じである。柱は、礎石建である。礎石の基礎掘方は、建物 0571SB-1 よりも大きく直径約 0.4 ~ 0.6m の楕円形か円形で、深さ約 0.3 ~ 0.4m、掘方内に礎を入れて複数層固めたもので、礎石は全て失われていた。

のことから考えられる、建物構造を考えてみる。

東西間口が狭く南北間口が広いことは、先行建物と同じである。しかし、ここではマチヤ的な構造物を考えることは、困難である。西端から東へ 1 間目（1.4m）の 2 列目に大形の柱列があることから、北から 2 列目を母屋柱とし、北から 3 列目を棟とし、桁行は不明ながら妻は梁行 2 間（5.6m、N 2.8+(2.8) S）に、南北に庇各 1 間（2.8m）、東西にも庇各 1 間（1.4m）が付く、東西棟の入母屋造の建物を考えることができる。その場合の規模は、図 57 の様に大部分が東壁に入るため桁行は分からないが、想像を逞しくして、母屋が 6 間ならば庇を加えて 11.2m 余りに、母屋が 10 間ならば庇を加えて 16.8m 余りに、梁行 2 間に長い一間庇が前後に付く妻行（11.2m）の建物に復元することができる。

なお、建物の廃絶原因については、火災などの痕跡が無いこと、新たな堆積物も存在しないことから災害ではなく、解体されたのだと思われる。その年代は、建物が無くなった後に作られた廃棄土坑の年代等から、京Ⅲ期古の内とみられる。

土坑 0312SX（図 42）

北区 2B グリットに位置する。南側の 0307SX や、北側の 0335SX を切る。東側溝 0201SD 東肩から約 4.86m 東側に位置する。

残存規模は、長軸 1.3m × 短軸 0.72m × 深さ 0.64m 余りである。主軸は東西方向の N70° W で、平面形状は菱形、断面形状は皿状である。

堆積層は、図 42 の a-a' 0312-9 ~ 11 層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、丹波系陶器、信楽系陶器、瀬戸美濃系陶器、

瓦質土器、白磁、石鍋、砥石等が出土している。

土坑 0318SX

北区 1B グリットに位置する。北側を 0045SE に切られる。西側の 0349SX や、東側の 0335SX を切る。東側溝 0201SD 東肩から約 3.1m 東側に位置する。

残存規模は、長軸 1.76m × 短軸 0.68m × 深さ 0.12m 余りである。主軸は不明で、平面形状は長方形か、断面形状は皿状である。

堆積層は、褐色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、白磁、銅錢等が出土している。

土坑 0356SX

北区 1B グリットに位置する。西側の 0353SX を切る。東側溝 0201SD 東肩から約 2.7m 東側に位置する。

残存規模は、長軸 0.73m × 短軸 0.58m × 深さ 0.43m 余りである。主軸は東西方向の N80° W で、平面形状は楕円形、断面形状は皿状である。

堆積層は、灰褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、信楽系陶器、瀬戸美濃系陶器等が出土している。

井戸 0930SE

南区 4B グリットの西壁 1 階に位置する。南側の 0602SK に切られる。北側の 0935SX や東側の 0920SE・0909SX を切る。屋敷の調査区内で明確な、唯一の井戸である。東側溝 0201SD の南側延長上の、築地があったとするとその東側近くに位置する井戸と考えられる。

残存規模は、長軸 2.9m × 短軸 0.74m × 深さ 0.98m 余りで、大部分が西壁 1 に入り、正確な大きさは不明である。井戸の井筒部についても、本体は西壁内にあり断面をかすめているにすぎないが、大きな井戸である。主軸は不明で、平面形状は円形か、断面形状は鉢形である。

堆積層は、西壁 1 の 930-1～9 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器等が出土している。

井戸の廃絶時期については、井筒を調査できていないので正確には分からぬ。掘方内から出土した遺物からは、京 XI 期中に掘削されたことは確實であるが、京 XII 期古（前半）まで存在していたかは不明である。しかし、位置的にも重要な場所にあり、ここでは京 XII 期古（前半）までの存在を考えておきたい。

【10期】(図 27・29・57)

10 期の遺構は、京 XI 期新～京 XII 期古（前半）の時期の遺構である。この時期には、9 期の主要遺構である建物 0570SB、建物 0571SB-2、井戸 0930SE があり、新たな廃棄土坑とみられる土坑 0315SX・0336SX・0349SX・0903SX・0999SX・1011SX・1017SX・1428SX 等がある。廃棄土坑と考えられるものが、位置を決めて設けられているように感じられる。また、出土遺物についても、この時期のものには特徴がみられる。9 期からの遺構については、前述の通りである。

10期

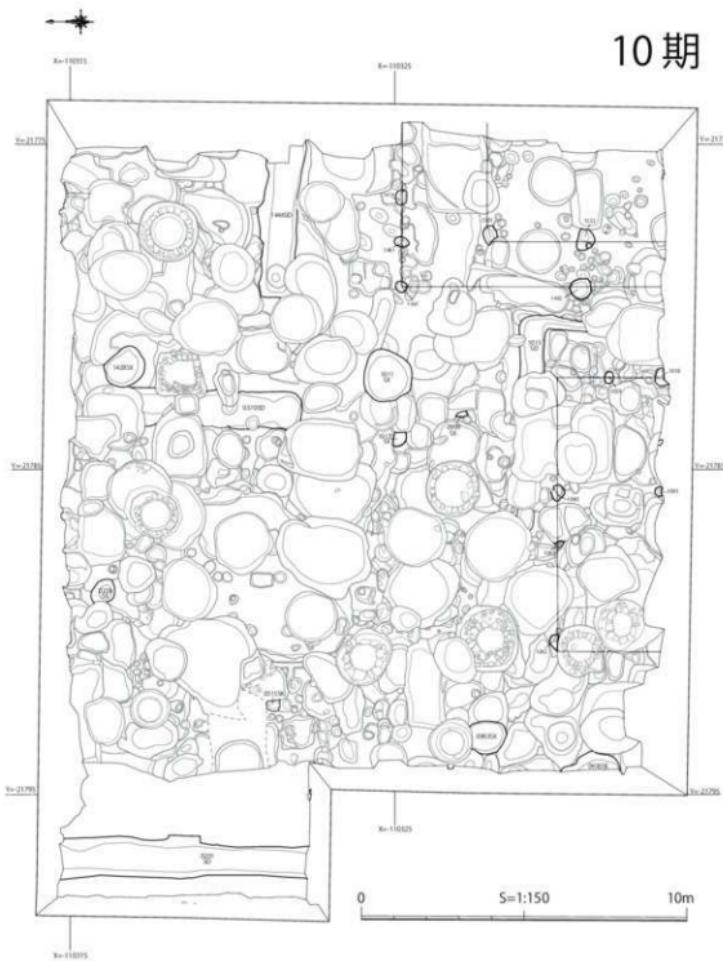


図29 10期遺構図

時代は、室町幕府15代將軍足利義昭を擁して織田信長が入京（1568）してから、豊臣秀吉の時代を経て、慶長5年（1600）関ヶ原の戦い、慶長8年（1603）徳川幕府成立前後までの時期に相当すると思われる。

土坑 0336SX（図44）

北区1Cグリットに位置する。西側の0352SXを切る。

残存規模は、長軸0.9m×短軸0.67m×深さ0.52m余りである。主軸は東西方向のN50°Wで、平面形状は楕円形、断面形状は皿状である。

堆積層は、図44図a-a'0336-1・2層である。

出土遺物は、土師器、山茶碗、信楽系陶器、常滑系陶器、染付等が出土している。

土坑 0903SX（図50）

南区3Bグリットに位置する。西側の0932SXを、南側の1029SXを切る。北側の0620SEに切られる。井戸0930SEの北東約2mに位置する。

残存規模は、長軸1.17m×短軸1.01m×深さ0.14m余りである。主軸は南北方向で、平面形状は楕円形、断面形状は皿状である。

堆積層は、図50a-a'0903-1層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、中世須恵器、信楽系陶器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器等が出土している。

土坑 1011SX

東区2D・3Dグリットに位置する。西側の01019Xを、南側の1020SXを切る。西側の0380SXに切られる。廃棄土坑と考えられる。

残存規模は、長軸1.64m×短軸1.54m×深さ0.71m余りである。主軸は東西方向で、平面形状は円形に近く、断面形状は逆台形である。

堆積層は、灰茶褐色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、備前系陶器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、肥前系陶器、肥前系磁器、青磁、瓦等が出土している。

土坑 1017SX

南区2Dグリットに位置する。東側の1019SXに切られる。廃棄土坑と考えられる。

残存規模は、長軸0.43m×短軸0.38m×深さ0.15m余りである。主軸は不明で、平面形状は円形とみられ、断面形状は皿状である。

堆積層は、灰褐色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、備前系陶器、常滑系陶器、華南三彩陶器、肥前系磁器、石鍋、瓦等が出土している。

土坑 1428SX

東区1Dグリットに位置する。西側の0412SXを切る。溝0370SDに接する東側に位置する。廃棄土坑と考えられる。

残存規模は、長軸 1.29m × 短軸 1.05m × 深さ 0.67m 余りである。主軸は南北方向の N40°W で、平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形である。

堆積層は、上層が灰褐色シルト質細砂層、下層が茶褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、肥前系磁器、肥前系陶器、瓦質土器、瓦、染付等と、他に混入と考えられる京焼系陶器が出土している。

【11期】(図 27・30)

11期の遺構は、京 XII 期古（後半）の時期の遺構である。この時期には、9・10期の主要遺構である建物 0570SB、建物 0571SB-2 が解体撤去され、井戸 0930SE、溝 0370SD、溝 1446SD が埋められ、何故か東側溝 0201SD も埋められてしまう。これらの主要遺構に代わって、大形の廃棄土坑を含む多数の土坑が、一時期に現れる。主要な土坑には、土坑 0306SX・0319SX・0337SX・0351SX・0375SX・0369SX・0326SX・0332SX・0346SX・0365SX・0367SX・0327SX・0377SX・0904SX・0954SX・0983SX・1464SX・1470SX・1494SX・1499SX・1500SX・1514SX 等がある。特に 2C・2D グリットに集中する廃棄土坑群は、少しづつ重なる切り合いを確認できるもので、少なくとも 7 基から成る、楕円形鉢型の土坑である。最初は、やや小型の 0332SX・0346SX・0365SX の 3 基が近接して掘削され、その後その南側に一辺が 2 ~ 3m の 0377SX・0367SX → 0326SX → 0327SX の順に掘削されている。この場所に廃棄土坑が集中重複する理由は、周辺障害物や廃棄物を運搬する距離、屋敷空間の広さ等から、この場所でなければいけない、何かがあったようである。強いて言うならば、12期の建物 0580SB が溝 1310SD との間に既に予定されていて、この建物予定地を避けて北側に集中したように見える。他は、建物 0570SB 周辺の廃棄土坑 0904SX・0954SX・0983SX 等や、建物 0571SB-2 周辺の廃棄土坑 16164SX・1470SX・1494SX・1499SX・1500SX・1514SX 等がある。各建物の下や周辺に小規模なものが設けられているように思われる。

この地に屋敷を構えていた竹田法印が、幕府の扶持と屋敷を得て江戸に下るまでの時期から、その直後の時期と捉えることができる。

時代は、慶長 5 年（1600）関ヶ原の戦い、慶長 8 年（1603）徳川幕府成立前後から、江戸城並びに城下町第一段階である江戸城慶長期天下普請が終了する慶長 19 年（1614）頃までの時期に相当すると思われる。

土坑 0319SX

北区 1A グリットに位置する。北側の 0322SX を、南側の 0359SX を切る。東側を 0003SE に切られる。

残存規模は、長軸 2.5m × 短軸 0.89m × 深さ 1.3m 余りである。主軸・形状共に不明、断面形状は逆台形である。

堆積層は、北壁の 319-1 ~ 5 層である。

出土遺物は、土師器、丹波系陶器、常滑系陶器、瓦質土器、瓦、青磁、染付等が出土している。

土坑 0337SX (図 44)

北区 1B・1C グリットの北壁際に位置する。西側の 0352SX を切る。北側を 0411 SX に切られる。残存規模は、長軸 0.98m × 短軸 0.16m × 深さ 0.3m 余りである。主軸・形状共に不明である。

堆積層は、上層が灰黄色シルト質細砂層、下層が灰色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、壺、瓦、青磁等が出土している。

土坑 0351SX (図 44)

北区 1B・1C グリットに位置する。北側の 0350SX に切られる。

残存規模は、長軸 1.57m × 短軸 1.1m × 深さ 0.27m 余りである。主軸は東西方向の N80° E、平面形状は隅丸方形、断面形状は皿状である。

堆積層は、図 44 d-d' 0351-3 ~ 5 層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、京焼系陶器、常滑系陶器、瓦質土器、青磁等と、他に混入と考えられる京焼系陶器が出土している。

土坑 0375SX

北区 1C・1D グリットに位置する。西側の 0049SE に切られる。南側の 0369SX を、北側の 0373SX を切る。井戸である可能性もあるが、井筒部は 0049SE に壊されており不明である。

残存規模は、長軸 1.98m × 短軸 1.96m × 深さ 0.81m 余りである。平面形状は円形、断面形状は逆台形である。

堆積層は、灰褐色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、信楽系陶器、備前系陶器、常滑系陶器、信楽系陶器、瓦質土器、瀬戸美濃系陶器等が出土している。

土坑 0369SX (図 48)

北区 1C・1D グリットに位置する。北側を 0375SX に、東側を 0386SX に切られる。東側の 0370SD を切る。

残存規模は、長軸 2.17m × 短軸 1.73m × 深さ 0.43m 余りである。主軸は東西方向の N80° E、平面形状は隅丸方形、断面形状は皿状である。

堆積層は、図 48 の 0369-1 ~ 5 層である。

出土遺物は、土師器、丹波系陶器、備前系陶器、信楽系陶器、常滑系陶器、瓦質土器、青磁等が出土している。

土坑 0332SX

北区 2C グリットに位置する。東側の 0334SX と西側の 0339SX を切り、北側を 0205SX に、南側を同時期の 0326SX に切られる。

残存規模は、長軸 0.8m × 短軸 0.29m × 深さ 0.16m 余りである。主軸・形状共に不明である。

堆積層は、上層が灰褐色細砂質シルト層、下層が褐灰色粗砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、中世須恵器、丹波系陶器、備前系陶器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、青磁等が出土している。

土坑 0346SX

11期

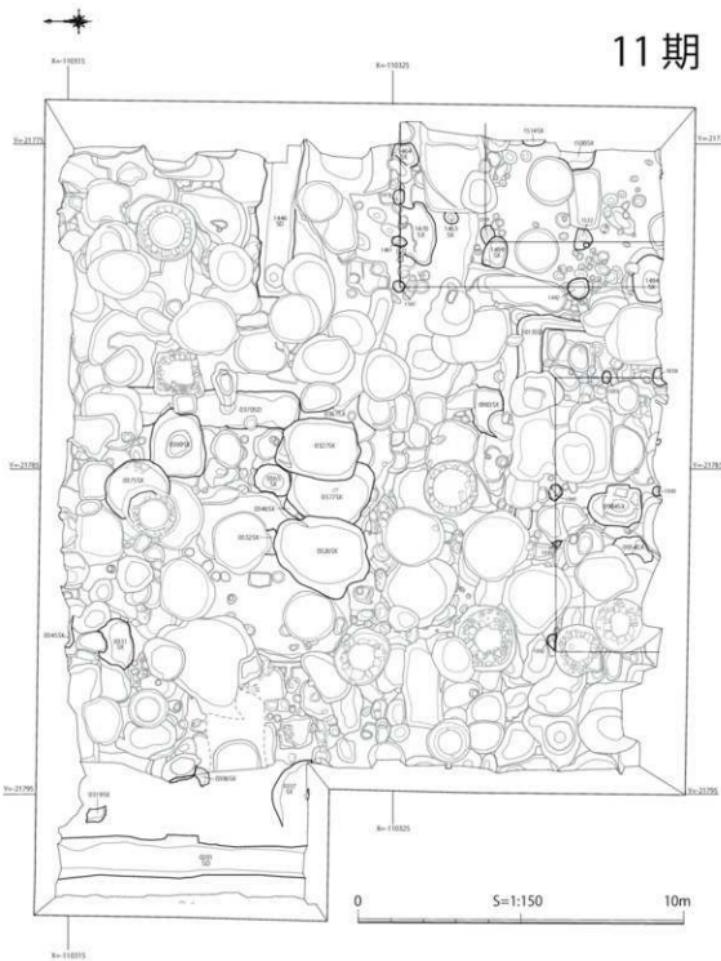


図30 11期遺構図

北区 2C グリットに位置する。北側の 0334SX を切る。ほぼ同時期の遺構である南側の 0326SX と 0377SX に切られる。

残存規模は、長軸 0.85m × 短軸 0.3m × 深さ 0.22m 余りである。主軸・形状共に不明である。

堆積層は、上層は黄灰色シルト質細砂層、下層は灰色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、信楽系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦が出土している。

土坑 0365SX (図 45)

北区 2C グリットに位置する。北側の 0364SX を切る。

残存規模は、長軸 2.04m × 短軸 0.9m × 深さ 1.15m 余りである。主軸は南北方向の N8° E、平面形状は楕円形、断面形状は逆フラスコ状である。

堆積層は、図 45 a-a' 0365-1 ~ 11 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、常滑系陶器、瓦質土器、白磁、青磁等が出土している。

土坑 0367SX

北区 2D グリットに位置する。西側を 0327SX に、東側を 0379SX に、南側を 0125SX に切られる。北側の 0370SD を切る。0326SX・0377SSX・0327SX と共に同一場所に所在する大形土坑の一つである。

残存規模は、長軸 2.42m × 短軸 1.52m × 深さ 0.38m 余りである。主軸は南北方向の N0° EW、平面形状は不明、断面は急激に落ち込む逆台形である。

堆積層は、灰褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦質土器、瓦、青磁等が出土している。

土坑 0377SX

北区 2C グリットに位置する。西側を 0326SX に、東側を 0327SX に切られる。北側の 0346SX を切る。0326SX・0367SSX・0327SX と共に同一場所に所在する大形土坑の一つである。

残存規模は、長軸 2.42m × 短軸 1.52m × 深さ 0.38m 余りである。主軸は南北方向の N13° E、平面形状は楕円形か、断面は急激に落ち込む逆台形。

堆積層は、灰褐色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器等が出土している。

土坑 0326SX

北区 2C グリットに位置する。北側の 0332SX を、東側の 0377SX を切る。0377SX・0367SSX・0327SX と共に同一場所に所在する大形土坑の一つである。

残存規模は、長軸 3.06m × 短軸 2.33m × 深さ 0.58m 余りである。主軸は南北方向の N23° E、平面形状は不定形な楕円形、断面は急激に落ち込む逆台形である。

堆積層は、褐色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、信楽系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器（羽釜ミニュチュア）、瓦、白磁、青磁等が出土している。

土坑 0327SX

北区 2D グリットに位置する。北側の 0366SX を、東側の 0367SX を、西側の 0377SX を切る。

0377SX・0367SSX・0326SXと共に同一場所に所在する大形土坑の一つである。

残存規模は、長軸 2.61m × 短軸 1.77m × 深さ 0.73m 余りである。主軸は南北方向の N13° E、平面形状は隅丸方形、断面は急激に落ち込む逆台形である。

堆積層は、上層は灰褐色砂礫層、下層は黄灰褐色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、丹波系陶器、備前系陶器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、白磁、青磁、染付等が出土している。

土坑 0904SX (図 49)

南区 4C グリットに位置する。南側を 0605SX に切られる。

残存規模は、長軸 1.66m × 短軸 1.26m × 深さ 0.43m 余りである。主軸は南北方向の N0° EW、平面形状は隅丸方形、断面は緩やかな皿状である。

堆積層は、図 49 a-a' 0904-1 ~ 4 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦等が出土している。

土坑 0954SX

南区 4C グリットに位置する。南側を 0605SX に切られる。

残存規模は、長軸 1.28m × 短軸 0.65m × 深さ 0.26m 余りである。主軸・形状は不明である、断面は鉢形である。

堆積層は、灰色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、信楽系陶器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、白磁、鋳型等が出土している。

土坑 0983SX

南区 3D グリットに位置する。北側の 1002SX と、西側の 0951SX を切る。

残存規模は、長軸 1.46m × 短軸 0.95m × 深さ 0.42m 余りである。主軸は東西方向の N90° E、平面形状は菱形、断面は急激に落ち込む逆台形である。

堆積層は、暗灰褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、信楽系陶器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦等が出土している。

土坑 1464SX

東区 3E グリットに位置する。西側の 1471SX に切られる。

残存規模は、長軸 0.64m × 短軸 0.61m × 深さ 0.37m 余りである。主軸は東西方向の N80° E、平面形状は隅丸方形、断面は鉢形である。

堆積層は、暗灰褐色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器等が出土している。

土坑 1470SX (図 52)

東区 3E グリットに位置する。北側の 1002SX と、西側の 0951SX を切る。

残存規模は、長軸 1.94m × 短軸 0.71m × 深さ 0.42m 余りである。主軸は東西方向の N83° E、

平面形状は楕円形、断面は皿状である。

堆積層は、図 52 a-a' 1470-1 ~ 4 層である。

出土遺物は、土師器、白磁、染付等が出土している。

土坑 1499SX

東区 3E グリットに位置する。西側を 1486SX が切る。

残存規模は、長軸 1.01m × 短軸 0.7m × 深さ 0.2m 余りである。主軸は東西方向の N80° W、平面形状は楕円形、断面は皿状である。

堆積層は、灰褐色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、信楽系陶器、染付等が出土している。

土坑 1494SX

東区 4E グリットに位置する。西側を 0716SX に、東側を 1495SX に切られる。

残存規模は、長軸 1.9m × 短軸 1.16m × 深さ 0.63m 余りである。主軸は東西方向、平面形状は楕円形、断面は鉢形である。

堆積層は、南壁の 1494-1 ~ 3 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、白磁等が出土している。

土坑 1500SX

東区 4E グリットの東壁際に位置する。北側の 1497SX に切られる。

残存規模は、長軸 1.94m × 短軸 0.71m × 深さ 0.82m 余りである。主軸・形状は不明、断面は皿状である。

堆積層は、東壁の 1500-1・2 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、白磁、染付等が出土している。

土坑 1514SX

東区 3E グリットの東壁際に位置する。北側の 1513SK を切る。

残存規模は、長軸 0.71m × 短軸 0.16m × 深さ 0.4m 余りである。主軸・形状は不明である。

堆積層は、東壁の 1514-1 層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器等が出土している。

【12期】(図 31・32・56)

12期の遺構は、京廻期中・新の時期の遺構で、期間的には長い。この時期には、東洞院通側ではなく広い敷地内中央に、小規模な建物 0580SB が新たに 1 棟のみ建てられる。マチヤとは異質な性格の建物であることは、明らかである。井戸は 2 基あり、東洞院通側のオモテに井戸 0301SE が、敷地オクに井戸 1497SE が設けられる。これらの主要遺構と廃棄土坑とみられるものが 8 基ある。主要な土坑には、土坑 0350SX・0357SX・0929SX・1419SX・1437SX・1460SX・1461SX・1487SX 等がある。オモテ側にある土坑は 0350SX・0357SX・0929SX で、オクにある土坑は 1419SX・1437SX・1460SX・1461SX で、建物横にある土坑は 1487SX のみである。土坑の大き

さもオクが格段に大きいが、その位置も明確に異なる。その中間に建物 0580SB が建てられているように思われる。

なお、この京戸期中の初めには、調査区よりも北側の敷地は売却されたようで、『寛永十四年 洛中絵図』⁶¹⁾には松平下總守京屋敷が記されている。調査区が属する南側には、記載はない。

時代は、江戸城慶長期天下普請が終了する慶長 19 年（1614）前後からで、元和元年（1615）大坂夏の陣で豊臣家が滅亡し、元和 5 年（1619）伏見城の廃城が決定され、京都が武家政治の舞台から遠ざかっていく時期に相当すると思われる。

建物 0580SB（図 31・56）

0580SB は、南区の 2C・2D・3C・3D で確認できるもので、西側の擾乱により詳細は不明な点が多い。

桁行である東西間口 5 間（6.5m、W (1.3)+(1.3)+(1.3)+1.3+ 1.3 E）の均等間で、梁行である南北間口 4 間（4.8m、N (1.2)+(1.2)+(1.2)+1.2 S）の均等間である。主軸は東西棟で、N89°W に傾く独立屋である。切妻造りであろう。柱は、掘立柱根石建である。礎石の基礎掘方は、直径が 0.3 ~ 0.4m の円形か楕円形で、深さ約 0.3m 余りに礎石があり、掘方底に礫を複層入れたものである。

なお、この建物 0580SB の建設時期については、柱穴内の遺物が極少ないので明らかでない。ここでは建物配置や他の遺構との関係から 12・13 期としたが、12 期のみである可能性も否定できない。廃絶時期についても、13 期の 0921SE が建物に隣接するので残るものとして示した。

井戸 0301SE

北区 1B・2B グリットに位置する。市教委試掘第 1 トレンチ下からの検出である。

残存規模は、長軸 1.97m × 短軸 1.55m × 深さ 0.93m 余りである。主軸は東西方向の N80°W、平面形状は台形、断面は逆台形である。

堆積層は、上層が灰黄色シルト質粗砂層、下層が灰黄色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、肥前系陶器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、染付、焼塩壺等が出土している。

土坑 0350SX（図 44）

北区 1B グリットに位置する。南側の 0351SX を、東側の 0352SX を切る。

残存規模は、長軸 0.96m × 短軸 0.66m × 深さ 0.24m 余りである。主軸は東西方向の N15°E、平面形状は楕円形、断面は皿状である。

堆積層は、図 44 の b-b' 0350-1・2 層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、信楽系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、白磁等が出土している。

土坑 0357SX（図 46）

北区 1C グリットに位置する。北側の 0336SX を、西側の 0352SX を切る。東側の 0329SX に切られる。

残存規模は、長軸 1.46m × 短軸 1.0m × 深さ 0.66m 余りである。主軸は東西方向の N30°E、平面形状は楕円形、断面は逆台形である。

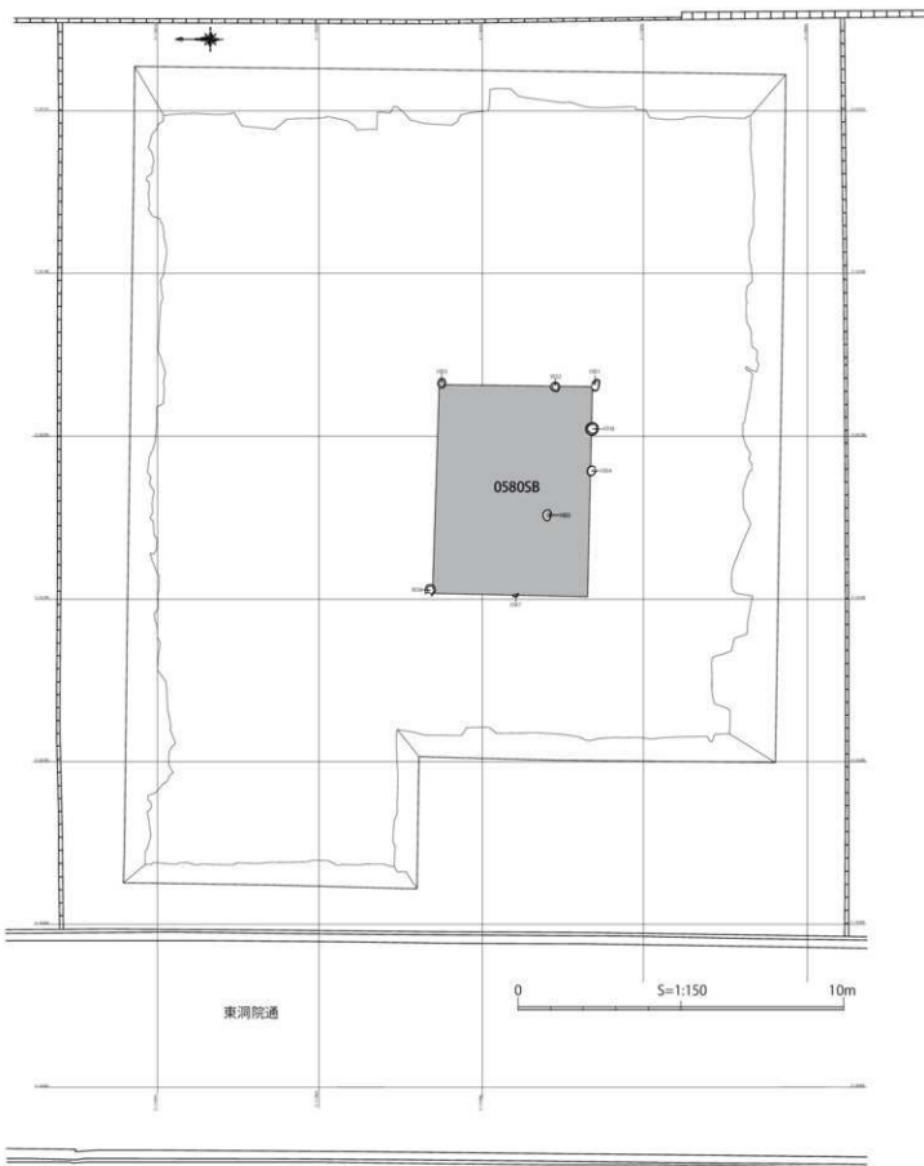


図31 12・13期 建物配置図

12期

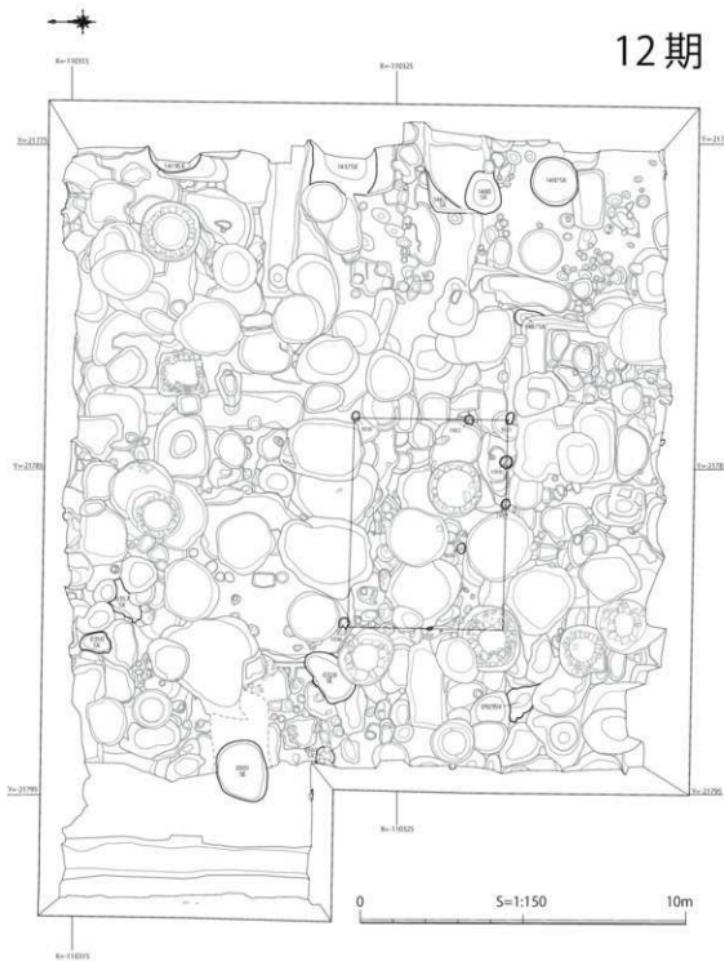


図32 12期遺構図

堆積層は、図 44 の a-a' 0357-8 ~ 11 層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、瓦質土器等が出土している。

土坑 0929SX

南区 3B グリットに位置する。南側の 0902SX を切る。

残存規模は、長軸 1.44m × 短軸 0.91m × 深さ 0.08m 余りである。主軸は東西方向の N40° W、平面形状は梢円形、断面は皿状である。

堆積層は、灰色シルト質粗砂層である。

出土遺物は、土師器、瓦質土器等が出土している。

土坑 1419SX

東区 1E グリットに位置する。南側の 1421SX を切る。東壁に大部分が入るため明らかではないが、井戸である可能性をもつ。

残存規模は、長軸 1.64m × 短軸 0.69m × 深さ 0.55m 余りである。主軸は不明、平面形状は円形、断面は逆台形である。

堆積層は、東壁の 1419-1 ~ 3 層である。

出土遺物は、土師器、肥前系陶器、信楽系陶器、瀬戸美濃系陶器、白磁、染付等が出土している。

土坑 1437SX

東区 2E グリットに位置する。北側の 1446SD を切る。西側を 1124SX に、南側を 1472SX に切られる。廃棄土坑とみられる。

残存規模は、長軸 2.3m × 短軸 1.48m × 深さ 1.6m 余りである。主軸は東西方向とみられるが、東壁に大部分が入るため明確ではない。平面形状は方形、断面は逆台形である。

堆積層は、東壁の 1437-1 ~ 11 層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、丹波系陶器、信楽系陶器、常滑系陶器、信楽系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、白磁、青磁、埴輪等が出土している。

土坑 1460SX

東区 3E グリットに位置する。北側を 1313SX に切られる。

残存規模は、長軸 1.33m × 短軸 1.1m × 深さ 0.44m 余りである。主軸は東西方向の N83° E、平面形状は梢円形、断面は皿状である。

堆積層は、灰色シルト質細砂層である。

出土遺物は、土師器、須恵器、常滑系陶器、信楽系陶器、丹波系陶器、肥前系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦、青磁、焼塙壺等が出土している。

土坑 1461SX (図 52)

東区 3E グリットに位置する。北側を 1313SX に切られる。

残存規模は、長軸 1.8m × 短軸 0.61m × 深さ 0.29m 余りである。主軸は不明、平面形状は東側の 1313SX に切られ三角形に残り、断面は皿状である。

堆積層は、図 52 の b-b' 1461-1 ~ 3 層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、常滑系陶器、肥前系陶器等が出土している。

土坑 1487SX

東区 3D グリットに位置する。南側の 1013SD を切る。トイレである可能性がある。

残存規模は、長軸 0.9m × 短軸 0.41m × 深さ 0.42m 余りである。主軸は南北方向の N9° E、平面形状は長方形に近い楕円形で、断面は逆台形である。

堆積層は、灰色粗砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、信楽系陶器、丹波系陶器、肥前系陶器、瀬戸美濃系陶器、肥前系磁器、瓦、青磁、染付等が出土している。

【13期】(図 31・33・56)

13期の遺構は、京ⅩⅢ期古の時期の遺構である。この時期には、12期同様に東洞院通側にはマチヤではなく、広い敷地内中央に建物 0580SB が 1棟のみ建っている状態が継続していたと思われる。この時期の井戸は 1基あり、建物の南に井戸 0921SE がある。廃棄土坑とみられるものは、土坑 0906SX・1012SX の 2基で、建物の南側にある。トイレと思われる 1439SX が 1基、建物の東側にみられる。

時代は、北近畿地域において史上最大級の地震である寛文 2年（1662）「寛文地震」（日向断層・花折断層北部が起震断層）が発生した頃から、基本土層 5.7～12 層の堆積が生じた、延宝 2年（1674）・延宝 4年（1674）頃の鴨川洪水^①までの時期に相当すると思われる。

井戸 0921SE

南区 4C グリットに位置する。東側を 0704SX に、西側を 0604SE に切られる。南側の 0954SX を切る。

残存規模は、長軸 2.01m × 短軸 1.98m × 深さ 1.2m 余りである。主軸は円形、断面は垂直に落ちる逆台形である。

堆積層は、上層が茶褐色細砂質シルト層、下層が灰色粗砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、中世須恵器、信楽系陶器、常滑系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、瓦、白磁、木柾等が出土している。

土坑 0906SX

南区 4C・4D グリットに位置する。

残存規模は、長軸 1.72m × 短軸 1.0m × 深さ 0.45m 余りである。主軸は東西方向の N90° EW、平面形状は三角形、断面は鉢状である。

堆積層は、シルトを多く含む暗褐色細砂層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、信楽系陶器、瀬戸美濃系陶器、瓦質土器、白磁等が出土している。

土坑 1012SX

南区 3D・4D グリットに位置する。溝 1013SD を切る。

残存規模は、長軸 1.7m × 短軸 1.2m × 深さ 0.44m 余りである。主軸は南北方向の N20° W、平面形状は台形、断面は逆台形である。

堆積層は、暗灰色細砂質シルト層である。

出土遺物は、土師器、常滑系陶器、瓦質土器、瓦等が出土している。

土坑 1439SX (図 51)

東区 2E グリットに位置する。トイレ遺構と思われる。

残存規模は、長軸 1.34m × 短軸 1.07m × 深さ 0.16m 余りである。主軸は南北方向の N0° EW、平面形状は方形、断面は皿状である。

堆積層は、図 51 の a-a'1439-1・2 層である。

出土遺物は、土師器、肥前系陶器、肥前系磁器等が出土している。

以後、江戸期の 14 期～17 期の遺構の詳述は行わず、概要のみとする。

【14 期】(図 34・35・58)

14 期の遺構は 3 面の遺構で、京 X III 期古・中の時期の遺構である。この時期になって、ようやく東洞院通側にマチヤが戻る。

14 期とみられる建物遺構は、建物 0230SB・0231SB の 2 棟しか復元推測できなかった。その原因は、礎石建又は台木による基礎構造であるためだと思われる。このため、復元できなかった場所に建物が無かったわけではなく、攪乱が多く建物を把握できなかったためで、柱穴や礎石等の歴次の存在、土坑や溝の分布から建物遺構は存在していたものと考えている。

14 期においても、明確な柵（塀）は復元できていない。可能性の高いのは、マチヤ A とマチヤ B の境の柵（塀）0232SA とした 1 条のみである。これにマチヤ C とマチヤ D の間の東西溝 1312SD がある。しかし、柵（塀）の存在を、遺構の配置から推測することはできる。マチヤの主軸は N90° EW である。この内、路にオモテを向ける 2 棟の建物から、調査地内の凡そマチヤ敷地境界間口幅を、北側からマチヤ A～E の 5 区画 (A=約 0.2m 以上、B= 約 4.9m、C= 約 5.8m、D= 約 6.6m、E= 約 1.5m 以上) と考えた。マチヤ B 建物 0560SB とマチヤ C の間は約 10cm、マチヤ C とマチヤ D 建物 0231SB の間は約 20cm、マチヤ D 建物 0231SB とマチヤ E の間も約 20cm 離れていると考えている。

明確な井戸は、マチヤ D の井戸 0807SE のみである。トイレは、マチヤ B の建物 0230SB オクの 0202SX と敷地オクの石組 1429SX、マチヤ C 敷地オクの 1311SX、マチヤ D 敷地オクの石組 0826SX が可能性の高いものである。

この 14 期の他の主要な遺構は、マチヤ B に土坑 0204SX (図 53)・1301SX・1302SX・1304SX・1306SX 等、マチヤ C に土坑 0206SX・0808SX・0816SX・0820SX・1308SX・1309SX・1310SX・1321SX 等、マチヤ D に土坑 0801SX・0802SX・0806SX・0808SX・0811SX・0812SX・0814SX・0815SX・0819SX・0823SX・1314SX・1315SX・1319SX 等、マチヤ E に土坑 0803SX・0804SX (図 54)・0809SX・0810SX・0813SX・1318SX 等の遺構がある。

13期

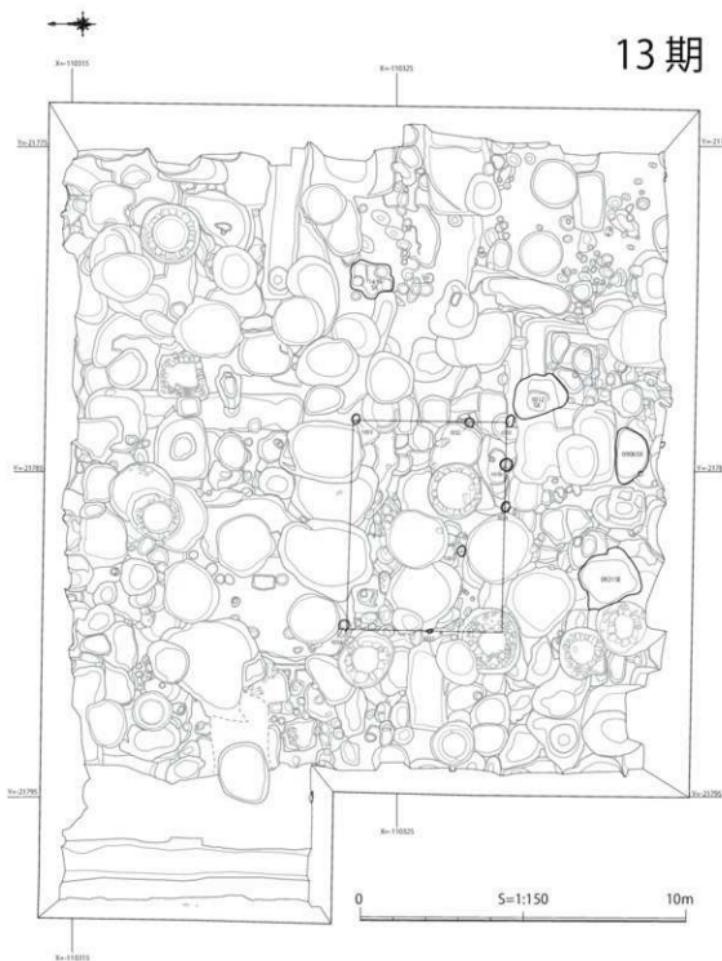


図33 13期遺構図

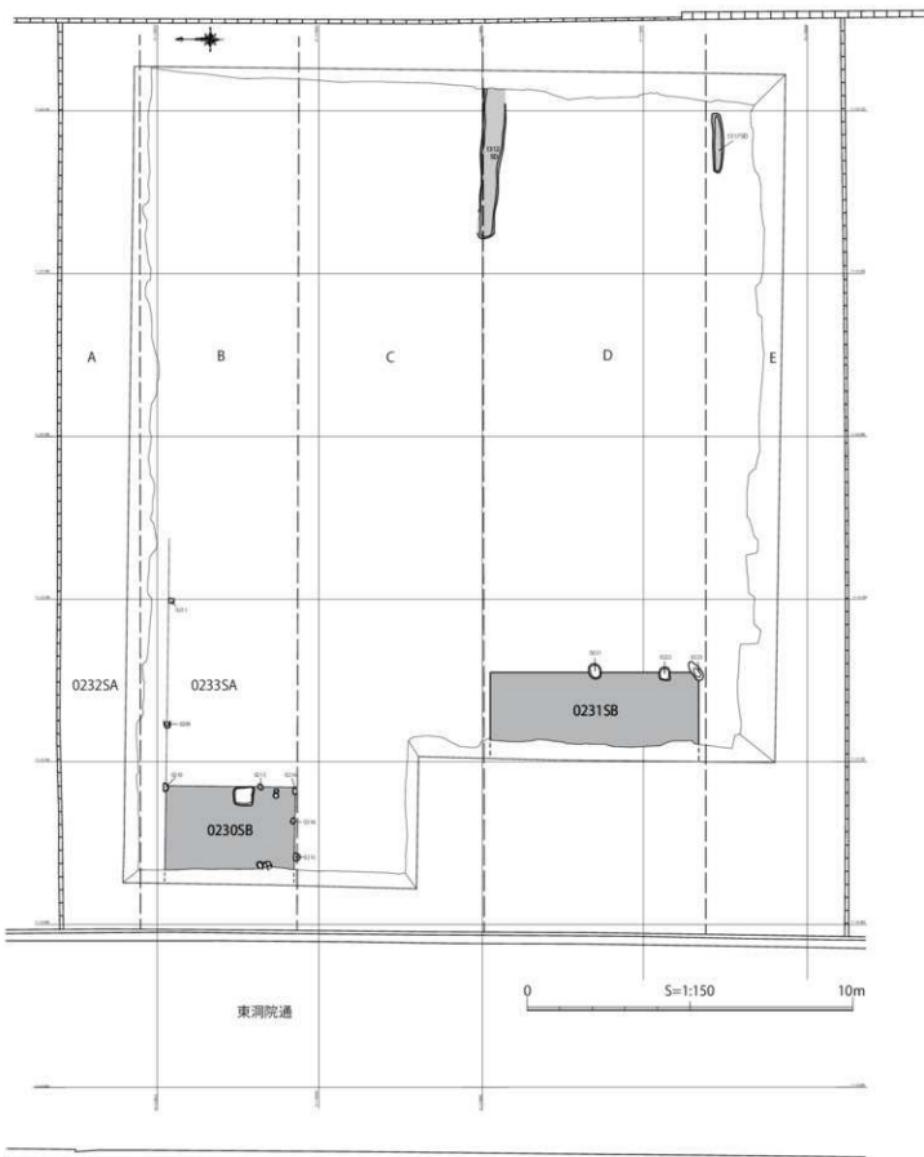


図 34 14期建物配置図

14期

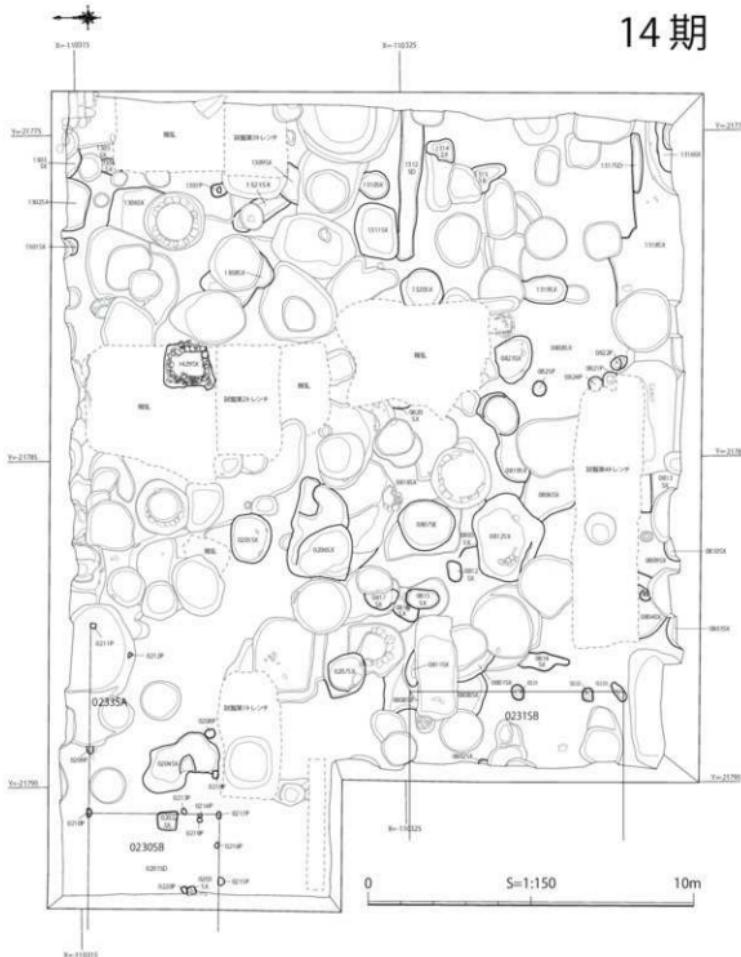


図35 14期遺構図

時代は、基本土層 5-7 ～ 12 層の堆積が生じた延宝 2 年(1674)・延宝 4 年(1674)頃の鴨川洪水から、
基本土層 5-1 ～ 6 層の堆積が生じた元禄 15 年(1702)頃の洪水⁹⁾の時期の間に相当すると思われる。

建物 0230SB (図 34・58)

0230SB は、南北間口 4 間 (約 4.0m、N (0.9)+(1.0)+(1.0)+1.1 S)、妻行きである東西奥行 2 間以上 (2.0m 以上、W α +1.0+1.0 E) の独立屋の建物である。主軸は N90° EW である。柱は、台木又は礎石建である。マチヤ B の主屋である。建物のオク壁の南から 2 間目にトイレ遺構と思われる土坑 0202SX がある。

建物 0231SB (図 34・58)

0231SB は、南北間口 6 間 (約 6.4m、N (0.7)+(1.3)+(1.3)+(1.3)+(0.7)+1.1 S)、妻行きである東西奥行は不明である。独立屋の建物である。主軸は N90° EW である。柱は、台木又は礎石建である。マチヤ D の主屋である。

溝 1312SD (図 34)

東区 3E グリットに位置し、東壁に入る。マチヤ C とマチヤ D の境である。

残存規模は、延長 4.61m × 幅 0.51 ～ 0.66m × 深さ 0.13m 余りである。主軸は東西方向の N90° EW、断面は皿状である。

堆積層は、暗灰色粗砂質シルト層である。

【15期】(図 36・37・58)

15 期の遺構は 2 面の遺構で、京 X III 期中～京 X IV 期中の時期の遺構である。多数のマチヤがみられる。

15 期とみられる建物遺構は、建物 0150SB の 1 棟のみを復元推測できた。その原因は、やはり礎石建又は台木による基礎構造であるためだと思われる。14 期と同じように、擾乱が多く建物を把握できなかったためで、建物遺構は存在していたものと考えている。

15 期においても、明確な柵（塀）は復元できていない。可能性の高いのは、マチヤ A とマチヤ B の境の柵（塀）0151SA とした 1 条のみである。これにマチヤ C とマチヤ D の間の東西溝 0630SD 下層と、マチヤ D とマチヤ E の間の東西溝 1215SD がある。しかし、柵（塀）の存在を、遺構の配置から推測することはできる。マチヤの主軸は 14 期と同じ N90° EW である。この内、路にオモテを向ける 1 棟の建物と、境界溝 0630SD 下層・1215SD から、調査地内の凡そマチヤ敷地境界間口幅を、北側からマチヤ A ～ E の 5 区画 (A=0.1m 以上、B= 約 4.9m、C= 約 5.3m、D= 約 7.6m、E= 約 1.5m 以上) と考えた。マチヤ B 建物 0150SB とマチヤ A の間は約 66cm、マチヤ C とマチヤ D の間は溝幅約 36cm、マチヤ D とマチヤ E の間も溝幅約 36cm 離れていると考えている。

各マチヤにおける井戸と考えられるものは、マチヤ B の建物 0150SB ウラに井戸 0051SX・0126SX・0144SX が、マチヤ C の建物は不明であるが建物ウラの雨落ち溝を南北溝 0109SD と考えると建物内オクの南壁近くに 0105SX と 0719SE が、マチヤ D も建物は不明であるが 0704SX

(図 54)・0708SX・0722SX がある。トイレと考えられるものは、マチヤ B では敷地オクに 0386SX と 1221SX が、マチヤ C の建物ウラに 0120SX と 0121SX が、マチヤ D の敷地オクに 0710SX・1213SX・1217SX が可能性の高いものである。穴蔵 (= 半地下式土坑) は、調査区内ではこの 15 期のものが最初で、2 基ある。マチヤ B の建物 0150SB オクの南壁際に、東側から入る 0107SK (+ 奥に一段高い 0106SX を付加) と、マチヤ E の敷地オクのハナレと考えられる北側に穴蔵と考えられる 1220SK がある。

この 15 期の他の主要な遺構は、マチヤ B に土坑 0101SX・0113SX・0115SX・0122SX・0050SX・0128SX・0112SX・0068SX・0108SX (図 53)・0129SX・0130SX・1201SX・1203SX・1208SX・1206SX・1207SX 等、マチヤ C に土坑 0102SX・0103SX・0114SX・0337SX・0116SX・0703SX (図 54)・0720SX・0110SX・0119SX・0111SX・0125SX・1210SX・1225SX・1226SX 等、マチヤ D に土坑 0717SX・0701SX・0702SX・0731SX・0705SX・0706SX・0707SX・0709SX・0711SX・0730SX・1209SX・1214SX・1216SX・1218SX・1219SX・1224SX・1225SX 等、マチヤ E に土坑 0729SX・0713SX・0714SX・0715SX・0725SX 等の遺構がある。

時代は、基本土層 5-1 層上面を焼土面とする宝永 5 年 (1708) 「宝永の大火」¹⁰⁾ 頃から、基本土層 3-1 ~ 5 層の堆積が生じた元文 5 年 (1740) ~ 延享元年 (1744) 頃の洪水¹¹⁾ の時期の間に相当すると思われる。この 18 世紀は、洪水の多い時期で、特定の時期を限定することはできない。

建物 0150SB (図 36・58)

0150SB は、不明な点が多いが南北間口 4 間 (約 4.3m、N(1.0)+(1.0)+(1.0)+1.3 S)、妻行きである東西奥行は不明である。主軸は N90° EW である。独立屋の建物である。柱は、台木又は礎石建である。マチヤ B の主屋である。建物オクの南壁近くに穴蔵 0170SK がある。また、マチヤ A との境には、柵 (塀) 0151SA がある。

溝 0630SD 下層 (図 36)

東区 2B・2C・2D グリットに位置し、西壁に入り東洞院通東側溝に流れ込んでいたと考えられる。マチヤ C とマチヤ D の境である。

残存規模は、東西延長 11.31m × 幅 0.2 ~ 0.52m × 深さ 0.18m 余りである。主軸は東西方向の N90° EW、断面は逆台形である。

堆積層は、暗灰色シルト質粗砂層である。

溝 1215SD (図 36)

東区 4E グリットに位置する。マチヤ D とマチヤ E の境である。

残存規模は、東西延長 1.75m × 幅 0.34m × 深さ 0.08m 余りである。主軸は東西方向の N90° EW、断面は皿状である。

堆積層は、暗灰褐色シルト質粗砂層である。

溝 0109SD (図 36)

東区 1C・2C グリットに位置する。マチヤ C の主屋ウラの雨落ち溝である。

残存規模は、南北延長 2.12m × 幅 0.45 ~ 0.55m × 深さ 0.16m 余りである。主軸は南北方向の

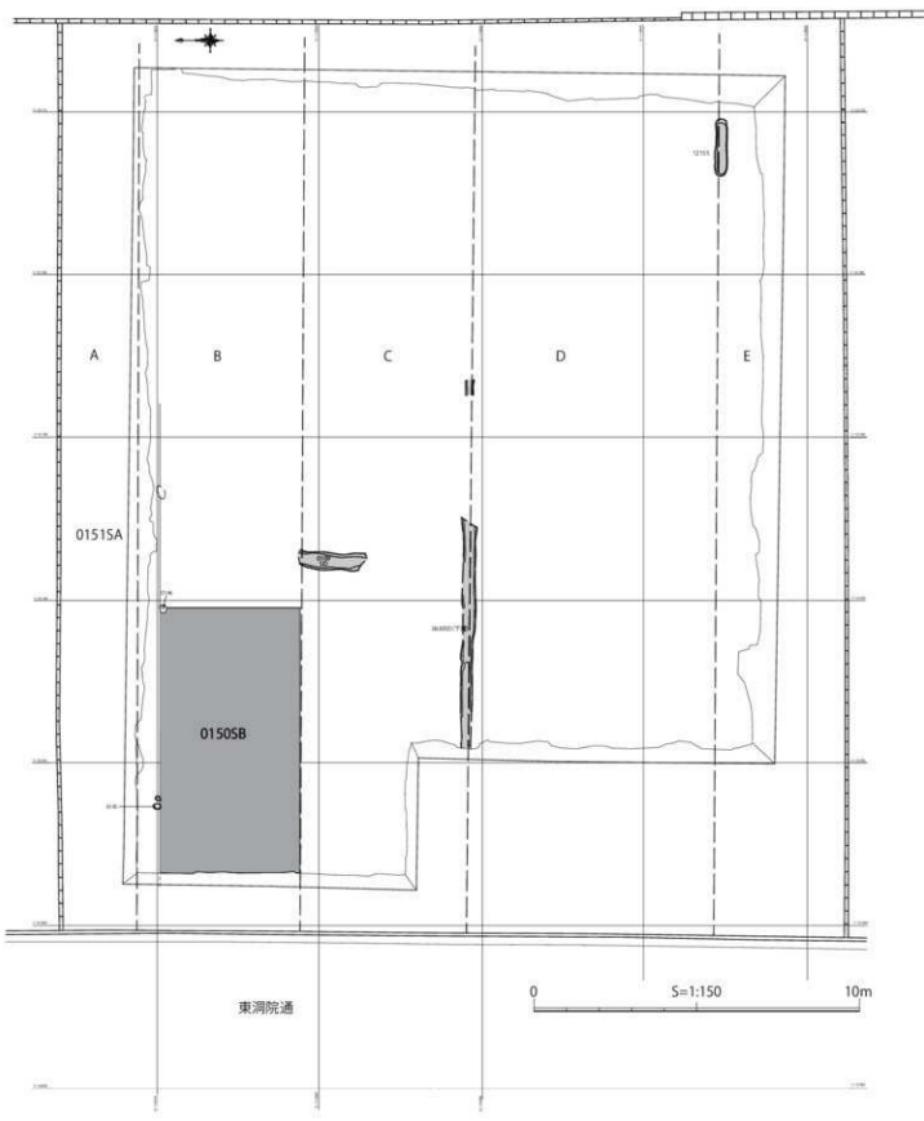


図 36 15期建物配置図

15期

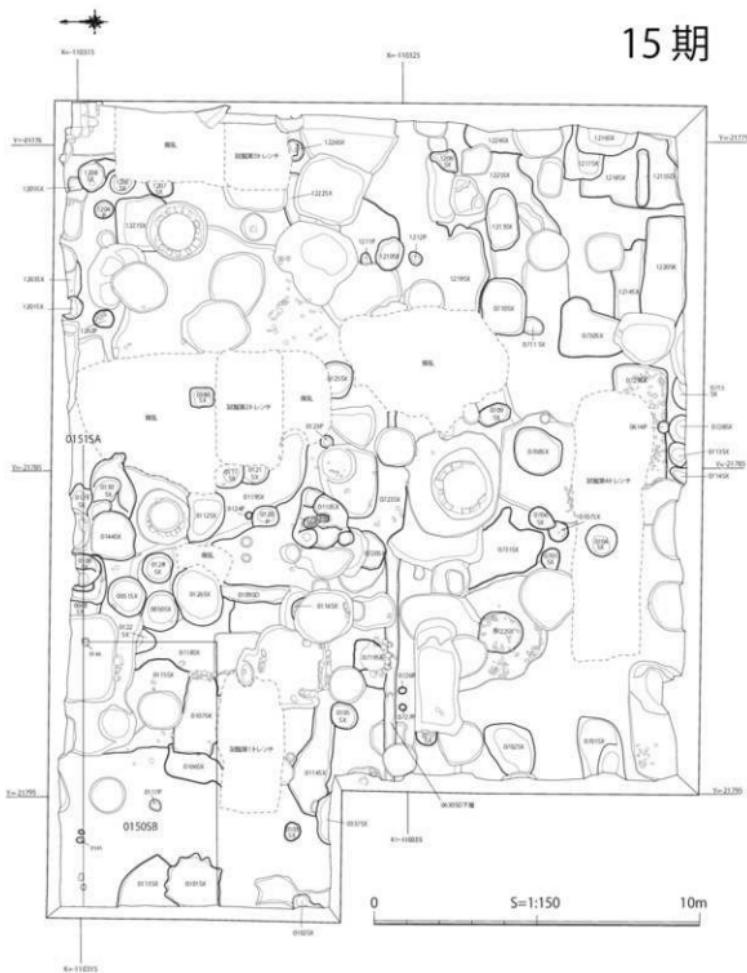


図37 15期遺構図

N0 ~ 3° E、断面は皿状である。

堆積層は、黄灰色細砂層である。

【16期】(図 38・39)

16期の遺構は1面の遺構であるが、京XIV期中～京XV期中の「天明の大火」から「元治の大火」までの時期の遺構のみを分けた。

16期とみられる建物遺構は、復元推測できなかった。やはり礎石建又は台木による基礎構造であるためだと思われる。

16期においても、明確な柵（堀）は復元できていない。しかし、マチヤAとマチヤCの間の東西溝0002SDと、マチヤCとマチヤDの間の東西溝0630SD上層がある。マチヤの主軸はこれまでの主軸方向とは異なり、僅かに東に傾くN88 ~ 89° Wである。境界溝である0630SD上層と0002SDから、調査地内の凡そそのマチヤ敷地境界間口幅を、北側からマチヤA～Eの芯々で5区画(A=0.5m以上、B=約5.25m、C=約5.25m、D=約7.2m、E=約2.3m以上)と考えた。各マチヤ間は、0630SD上層と0002SDでは溝幅がマチヤ間となる。

各マチヤにおける井戸と考えられるものは、マチヤBの井戸0053SE・0019SE・1114SEが、マチヤCでは0006SE・0018SEが、マチヤDでは0620SE・0622SE・1125SEが、マチヤEでは0604SE・0609SEある。トイレと考えられるものは、マチヤDの敷地オクに1146SXが可能性の高いものである。穴蔵(=半地下式土坑)は、マチヤBでは0004SKと敷地オクのハナレに石の階段を持つ0001SKが、マチヤCでは0013SKとこれを拡張した0022SK+0021SKと敷地オクのハナレに1122SKが、マチヤDでは0603SKが、マチヤEでは0602SKと0095SKが穴蔵と考えられる。

この16期の他の主要な遺構は、マチヤBに土坑0020SX・0028SX・0023SX・0048SX・0049SX・0127SX・1103SX・1105SX・1115SX・1116SX・1117SX・1119SX・1121SX・1122SX等、マチヤCに土坑0009SX・0010SX・0032SX・0030SX・0037SX・0038SX・0044SX・1112SX・1113SX等、マチヤDに土坑0621SK・0618SX・0626SX・0624SX・0611SX・1143SX・1472SX・1139SX・1142SX・1127SX・1144SX・1149SX等、マチヤEに土坑0612SX・0616SX・0632SX・0633SX・0615SX・0094SX・00716SX等の遺構がある。

時代は、基本土層3-1層上面の天明8年(1788)「天明の大火」¹²⁾から、基本土層2-1層上面の元治元年(1864)「元治の大火」¹³⁾頃の時期に相当すると思われる。

溝0002SD (図38)

東区OA・OBグリットに位置し、北壁に入り東洞院通東側溝に流れ込んでいたと考えられる。マチヤAとマチヤBの境である。

残存規模は、東西延長4.71m×幅0.3 ~ 0.54m以上×深さ0.3m余りである。主軸は東西方向のN88°W、断面は鉢形である。

堆積層は、西壁2の002-1層である。

出土遺物には、多量の本瓦葺きの丸瓦と平瓦がある。

溝 0630SD 上層 (図 38)

東区 2B・2C・2D グリットに位置し、溝 0630SSD 下層と同じく西壁に入り東洞院通東側溝に流れ込んでいたと考えられる。マチャ C とマチャ D の境である。

残存規模は、東西延長 10.1m × 幅 0.48 ~ 0.72m × 深さ 0.2m 余りである。主軸は東西方向の N89° W、断面は逆台形である。

堆積層は、暗褐色灰色粗砂層である。

【17期】(図 40・41・58)

17期の遺構は1面の遺構であるが、京XV期中～京XV新の「元治の大火」から明治時代前期までの時期の遺構のみを分けた。

17期とみられる建物遺構は、マチャ B の建物 0100SB の1棟のみ復元推測できた。やはり礎石建又は台木による基礎構造であるためだと思われる。マチャの主軸はこれまでの主軸方向とは異なり、僅かに西に傾く N89° E である。

17期においても、明確な柵（塀）は復元できていないし、区画溝も検出していない。調査地内の凡そのマチャ敷地境界間口幅を、北側からマチャ A ~ E の芯々で5区画 (A=0.3m 以上、B=約 5.3m、C= 約 5.2m、D= 約 7.9m、E= 約 1.2m 以上) と考えた。

各マチャにおける井戸と考えられるものは、マチャ B の井戸 0003SE・0004SE・0050SE・1120SE が、マチャ C では 0007SE・0008SE・0628SE・0012SE・0627SE が、マチャ D では 0606SE・0608SE・1128SE・1129SE が、マチャ E では 0605SE である。トイレと考えられるものは、マチャ B が 1101SX、マチャ D が 1137SX の可能性の高い。穴藏 (=半地下式土坑) は、マチャ D の 0603SK が穴藏と考えられる。

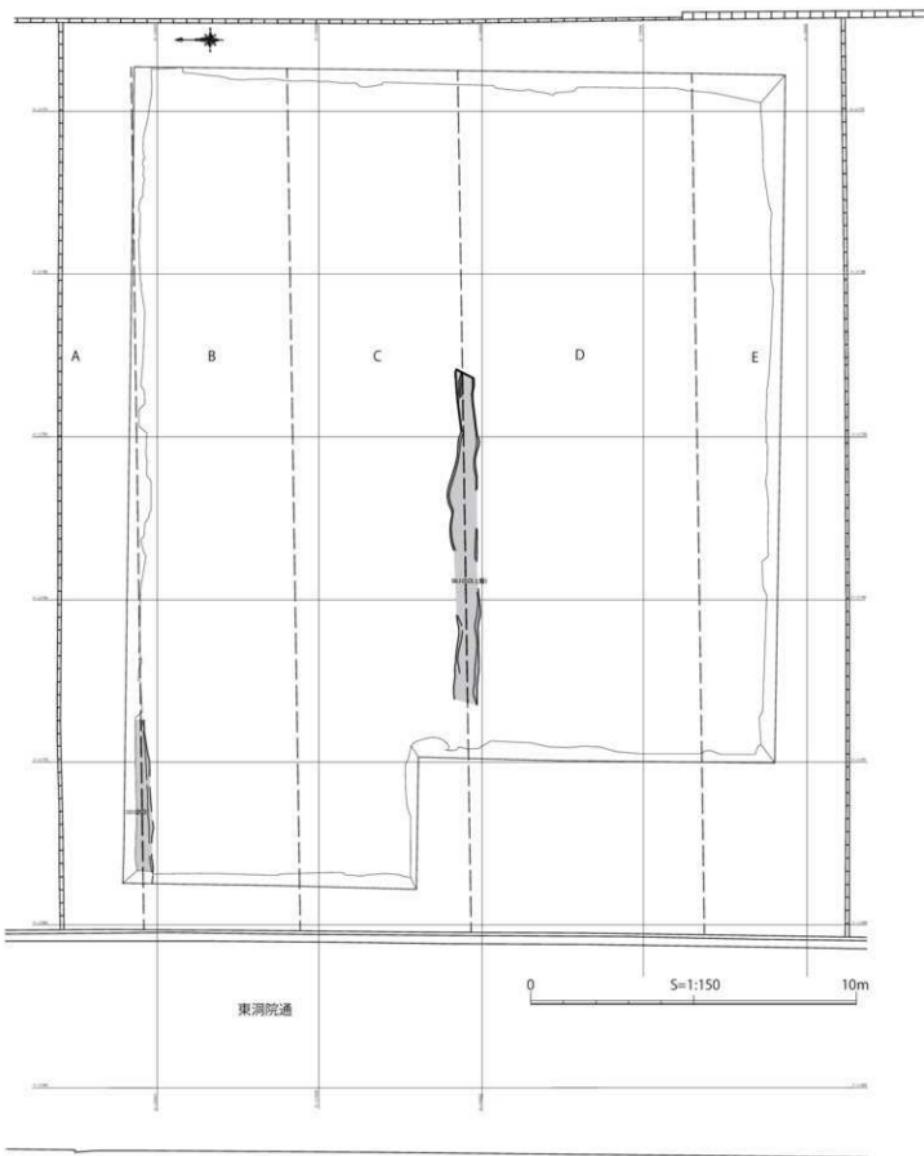
この17期の他の主要な遺構は、マチャ A に土坑 0099SX・0054SX 等、マチャ B に土坑 0329SX・0067SX・0129SX・1102SX・1111SX・1104SX・1122SX 等、マチャ C に土坑 0005SX・0104SX・0015SX・0016SX・0017SX・0047SX・0031SX・1130SX・1124SX 等、マチャ D に土坑 0609SX・0617SX・0637SX・0623SX・1140SX・1138SX 等、マチャ E に土坑 0601SX 等の遺構がある。

時代は、基本土層 2-1 層上面の元治元年 (1864) 「元治の大火」から、明治時代前期の頃の時期に相当すると思われる。

建物 0100SB (図 58)

0100SB は、不明な点が多いが南北間口 5 間 (約 5.1m、N 1.1+1.0+(1.0)+(1.0)+1.0 S)、妻行きである東西奥行 2 間以上 (約 2m 以上、W α +1.0+1.0 E) である。主軸は、僅かに西に傾く N89° E である。

独立屋の建物である。柱は、台木又は礎石建である。床東礎石も僅かに残る。マチャ B の主屋である。井戸 0003SE は、建物 0100SB のウラに位置する。



16期

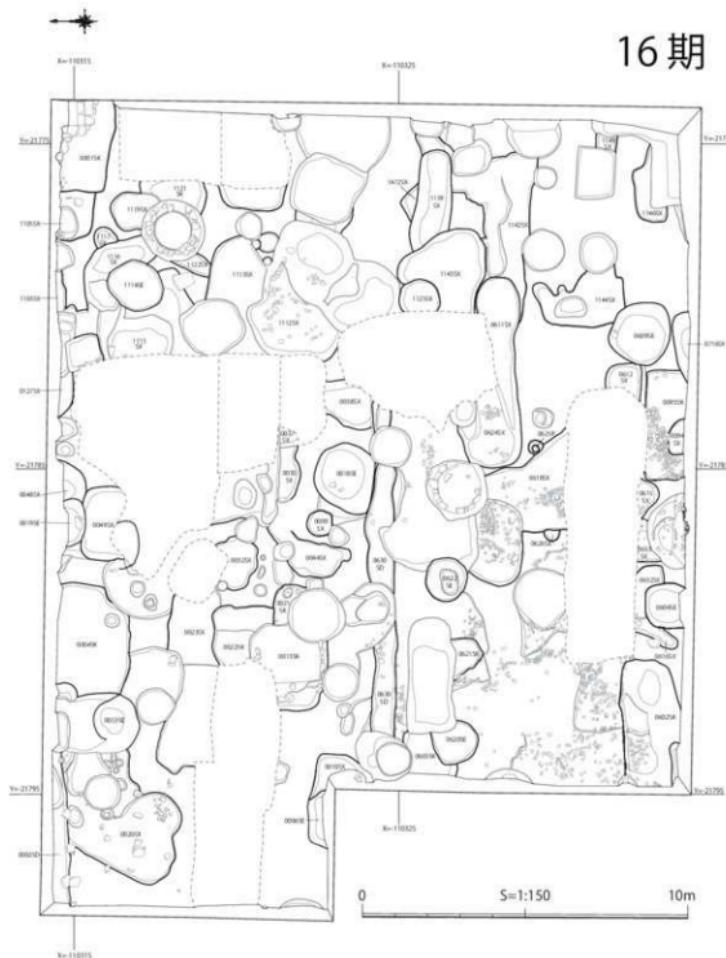


図39 16期遺構図

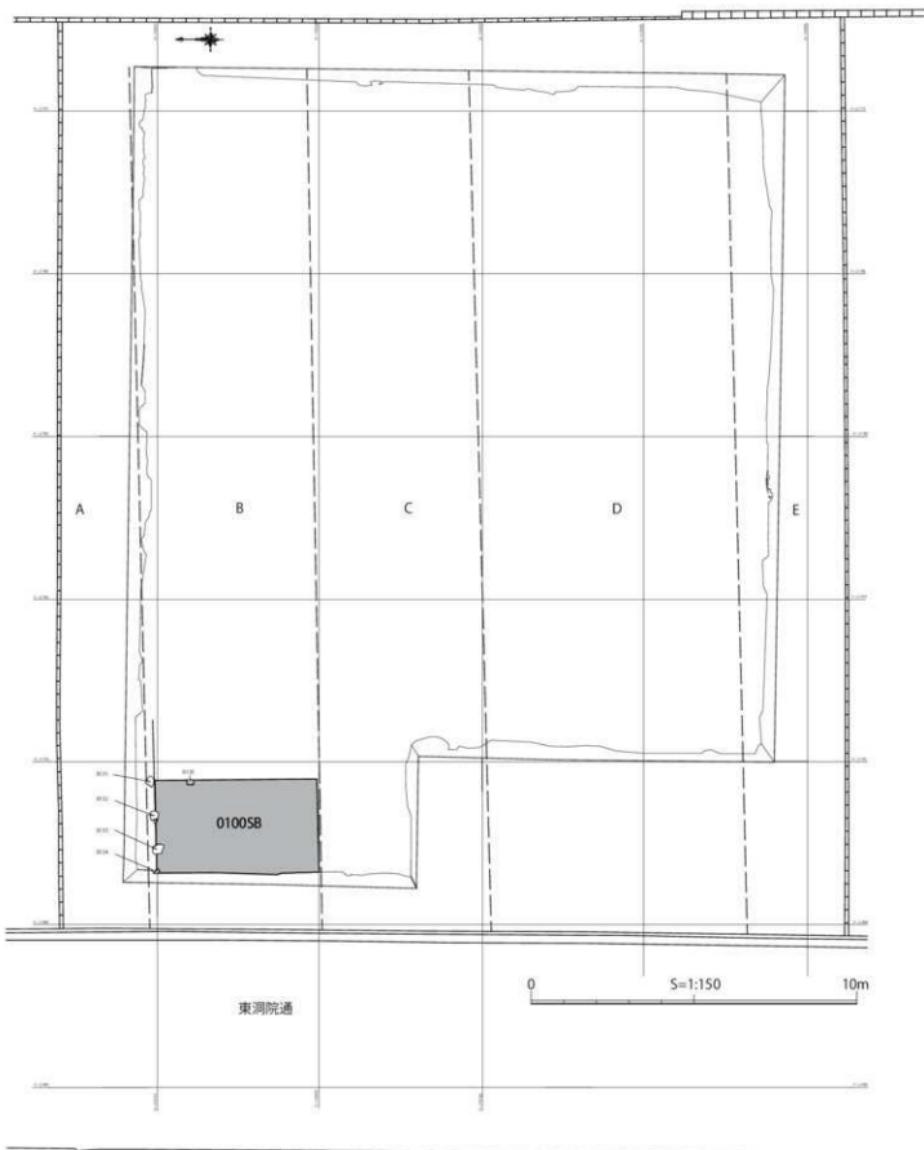


図 40 17期 建物配置図

17期

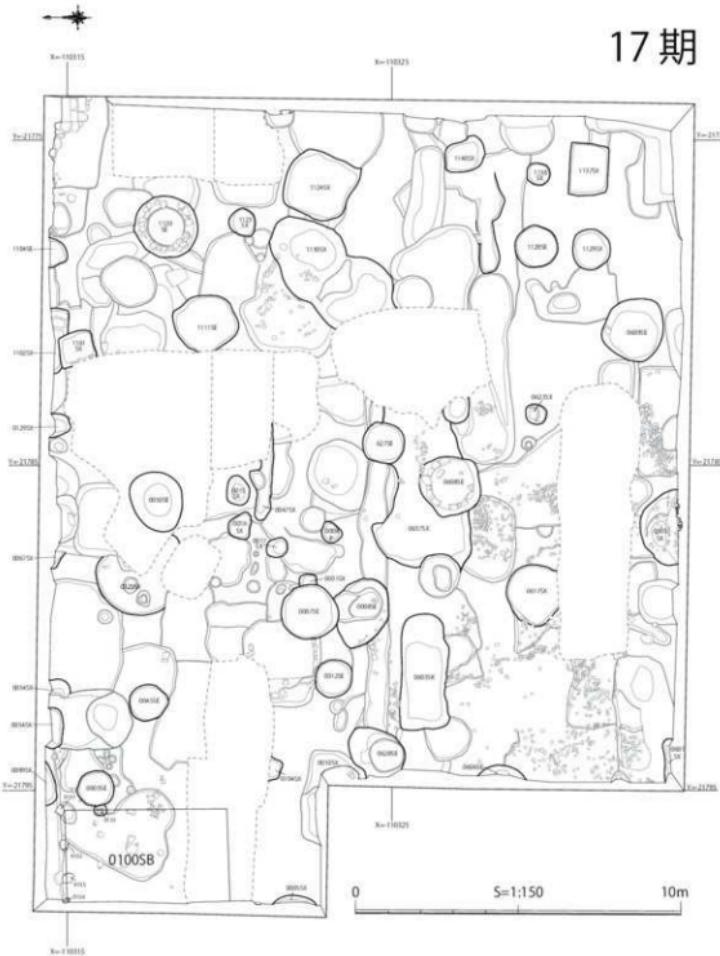


図41 17期遺構図

北区 4 面 -1

0396SX・0323SX・0312SX・0318SX・0335SX 平面・断面図

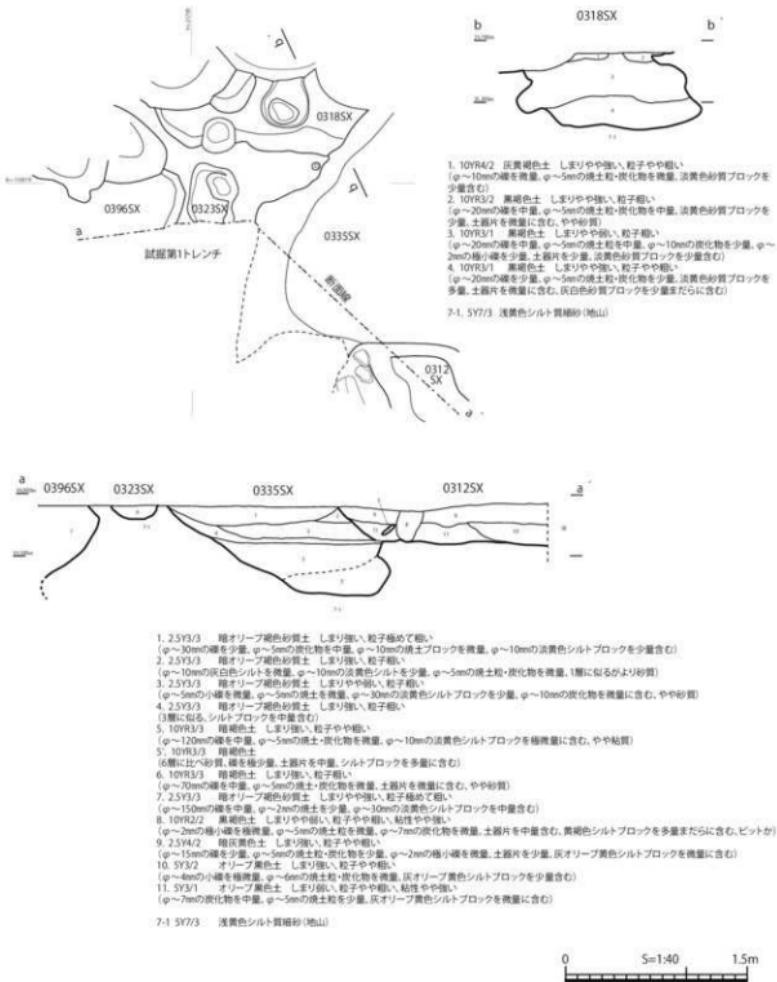
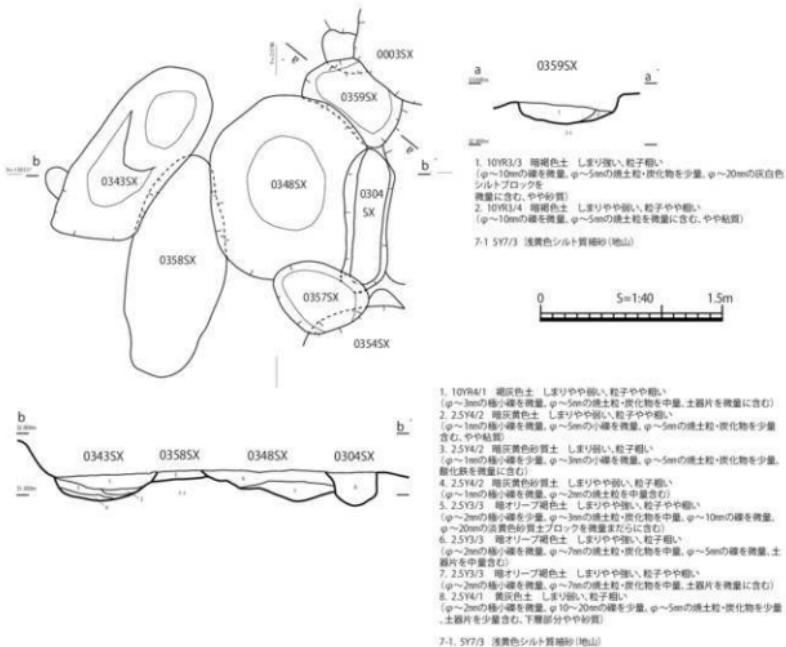


図 42 部分平面・断面図 I

北区 4面 -2

0343SX・0348SX・0304SX・0358SX・0359SX 平面・断面図



0304SX 平面・断面図

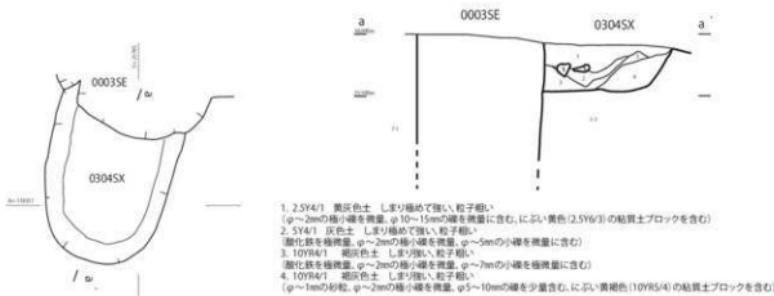
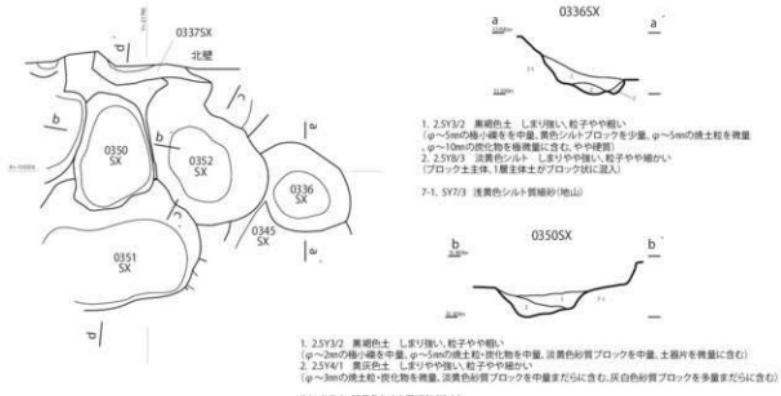


図 43 部分平面・断面図

北区4面-3

0350SX・0351SX・0352SX・0336SX 平面・断面図



0318SX平面・断面図

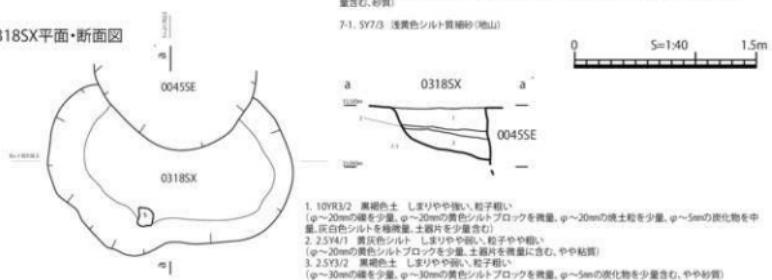


図 44 部分平面・断面図 3

北区4面-4

0327SX・0364SX・0365SX・0366SX・0368SX・0516SX 平面・断面図

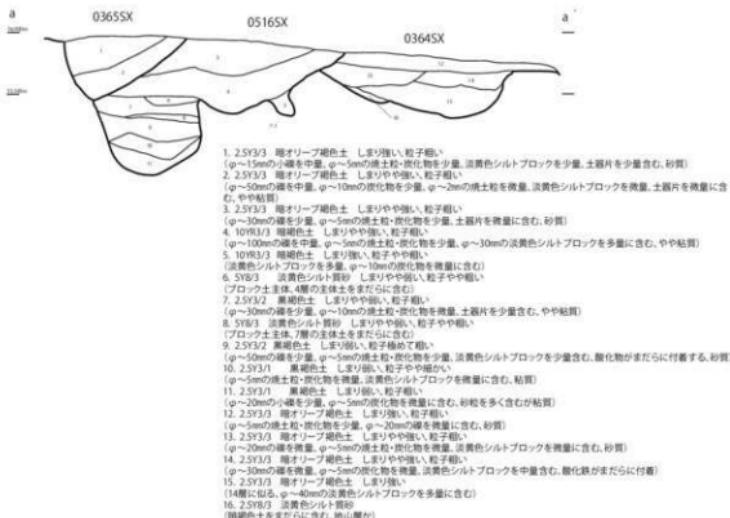
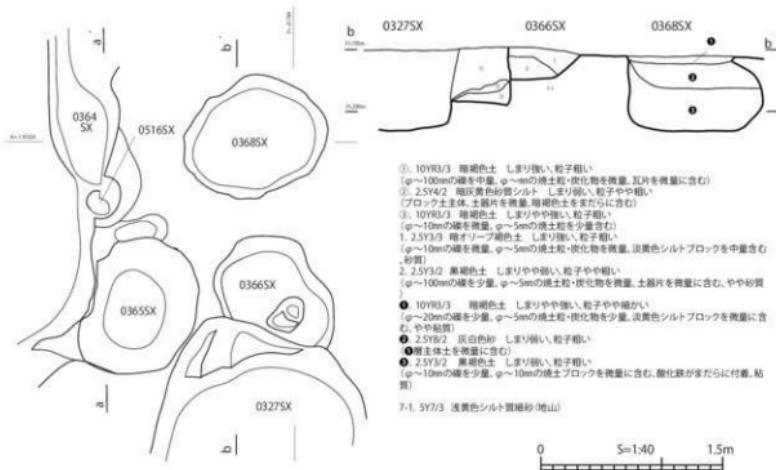
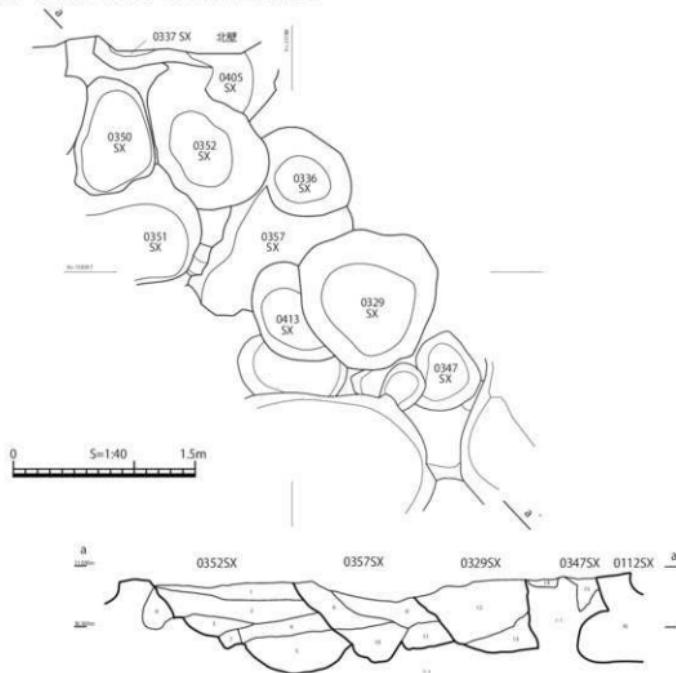


図45 部分平面・断面図4

北区 4 面 -5

0352SX・0357SX・0329SX・0347SX 平面・断面図



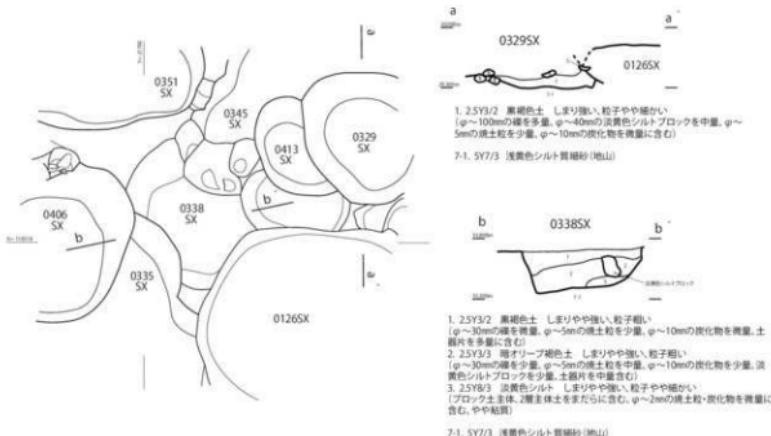
1. 2.5Y3/2 黒褐色土 しまり強い 粒子やや細い
(φ10~20mmの礫多く含む。φ>5mmの礫多く含む。φ～5mmの淡土粒・炭化物を少量。φ～10mmの淡黄色シルトブロックを少量。土塊片を微量に含む)
2. 2.5Y3/3 明オリーブ褐色土 しまり強い、粒子細い
(φ>20mmの礫多く含む。φ～5mmの淡土粒・炭化物を少量。φ～20mmの淡黄色シルトブロックを中量。砂質)
3. 2.5Y3/2 黒褐色土 しまり強い 粒子細い
(φ～20mmの礫多く含む。φ～5mmの淡土粒・炭化物を微量。淡黄色シルトブロックを少量。褐色色をまだらに含む)
4. 2.5Y3/2 黒褐色土 しまりやや強い、粒子粗い
(φ～30mmの礫多く含む。φ～5mmの淡土粒・炭化物を微量。淡黄色シルトブロックを微量含む)
5. 2.5Y3/2 黒褐色土 しまり強い 粒子粗い
(φ～50mmの礫多く含む。φ～5mmの淡土粒・炭化物を少量。淡黄色シルトブロックを少量含む。やや粘質)
6. 2.5Y3/2 黒褐色土 しまりやや強い、粒子粗い
(4層主として土中に含む。根理混入)
7. 10YR3/3 明褐色土 しまり強い 粒子やや粗い
(φ～10mmの礫多く含む。φ～20mmのシルトブロックを少量。φ～5mmの淡土粒・炭化物を少量。土塊片を少量含む)
8. 2.5Y3/3 明オリーブ褐色土 しまり強い、粒子粗い
(φ～30mmの礫多く含む。φ～5mmの淡土粒・炭化物を微量。φ～30mmの淡黄色シルトブロックを少量含む。やや粘質)
9. 2.5Y3/2 黑褐色土 しまりやや強い、粒子粗い
(φ～10mmの小礫を少量。φ～5mmの淡土粒・炭化物を少量。φ～20mmの淡黄色シルトブロックを少層。土塊片を少量含む。砂質)
10. 2.5Y3/3 明オリーブ褐色土 しまり強めで強い、粒子粗い
(φ～30mmの礫多く含む。φ～10mmの小礫を少量。φ～5mmの淡土粒・炭化物を少量。φ～20mmの淡黄色シルトブロックを少層。土塊片を少量に含む。砂質)
11. 2.5Y3/2 黑褐色土 しまり強めで強い、粒子粗い
(φ～40mmの礫多く含む。φ～5mmの淡土粒・炭化物を微量。φ～40mmの淡黄色シルトブロックを中量。土塊片を少量含む。砂質)
12. 2.5Y3/3 明オリーブ褐色土 しまりやや強い、粒子粗い
(φ～30mmの礫多く含む。φ～5mmの淡土粒・炭化物を微量。φ～30mmの淡黄色シルトブロックを多量に含む。やや粘質)
13. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土 しまりやや強い、粒子粗い
(φ～30mmの礫多く含む。φ～5mmの淡土粒・炭化物を微量。φ～20mmの淡黄色シルトブロックを中量含む。酸化鉄分がまだらに付着)
14. 2.5Y3/2 黑褐色土 しまり強めで強い、粒子粗い
(φ～10mmの礫多く含む。φ～2mmの淡土粒・炭化物を微量。土塊片を微量に含む。砂質)
15. 2.5Y3/3 黑褐色土 しまり強い、粒子粗い
(φ～10mmの礫多く含む。φ～5mmの淡土粒・炭化物を少量。φ～10mmの淡黄色シルトブロックを少量含む。砂質)
16. 2.5Y3/3 明オリーブ褐色土 しまり強い、粒子細め
- (φ～30mmの礫多く含む。φ～10mmの淡土粒・炭化物を少量。φ～30mmの淡黄色シルトブロックを中量。土塊片を中量含む。砂質)

7-1. 5Y7/3 (淡黄色シルト質細砂) 地山

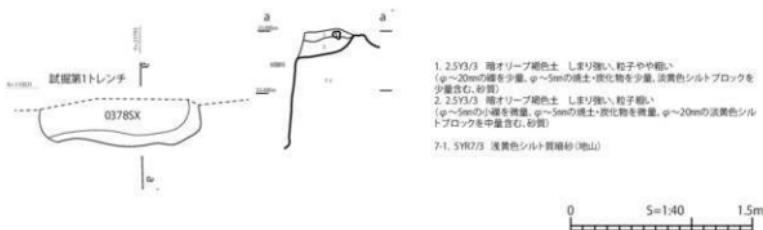
図 46 部分平面・断面図 5

北区4面-6

0338SX・0329SX 平面・断面図



0378SX 平面・断面図



0306SX平面・断面図

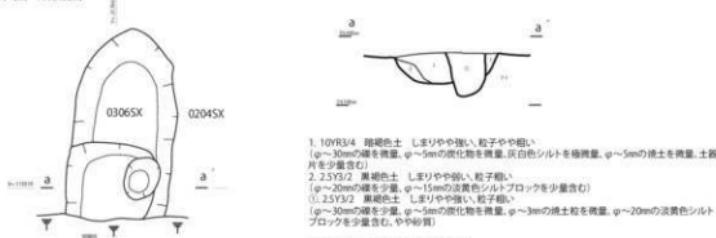
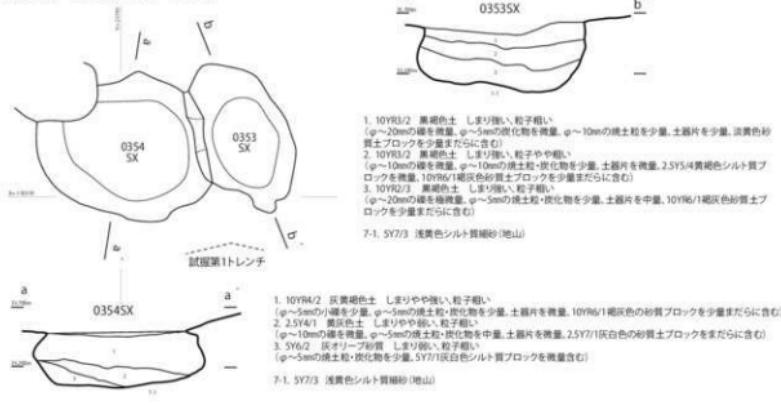


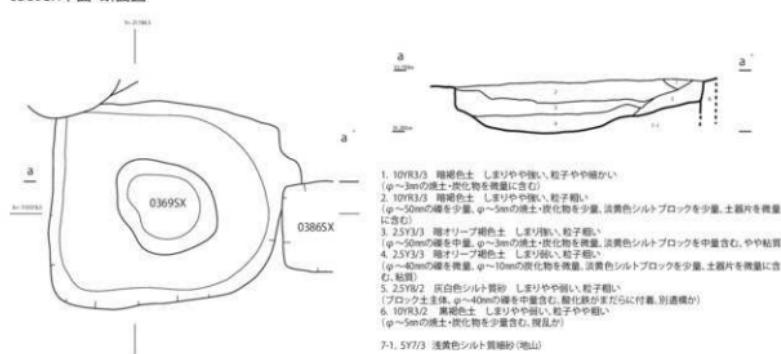
図47 部分平面・断面図 6

北区 4 面 -7

0353SX・0354SX 平面・断面図



0369SX平面・断面図



0305SX平面・断面図

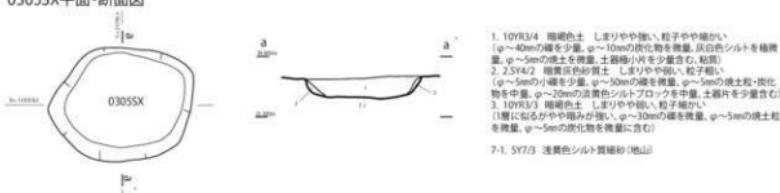
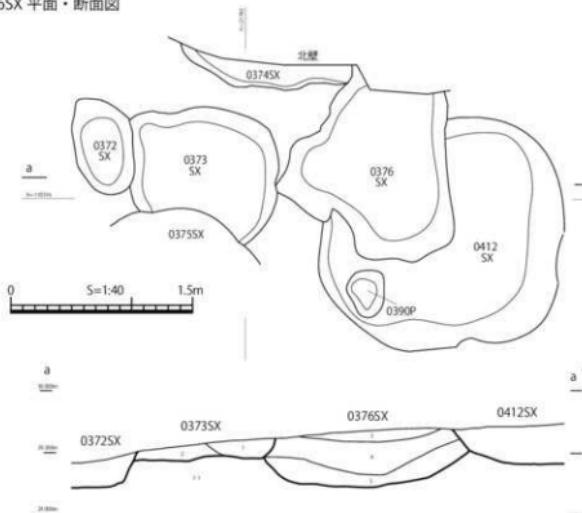


図 48 部分平面・断面図 7

北区 4面 -8

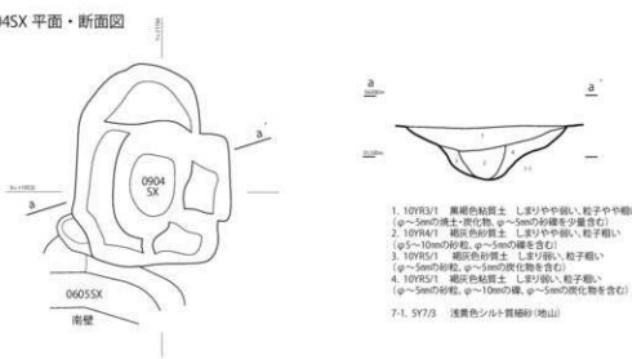
0373SX・0376SX 平面・断面図



- SY3/2 オリーブ色葉面相砂 しまりやや弱い、粒子粗い
(φ～40mmの塊を少量、φ～5mmの塊・土粒・炭化物を少量。φ～10mの淡黄色シルトブロックを中量含む)
底質：灰褐色土、しりけ弱い、粒子粗い
- SY4/2 淡黄色土 しまり弱い、粒子粗い
(φ～40mの塊を中量含む)
- SY4/2 淡黄色土 しりけ弱い、粒子粗い
(φ～10mの塊を少量、黄土粒・炭化物を微量、淡黄色シルトブロックを微量に含む)、砂質
- 10YR3/4 灰褐色土 しまり弱い、粒子やや細い
(φ～100mの塊を微量、φ～10mの塊・土粒・炭化物を多量、淡黄色砂を微量、土源片を多量に含む)、やや粘質
- 2.5Y3/3 淡オリーブ色葉面相砂 しりけ弱い、粒子やや粗い
(φ～100mの塊を中量、φ～10mの砂土粒を微量、土源片を多量、淡黄色が質シルトを中量まだらに含む)、やや粘質
- 7-1. SY7/3 淡黄色シルト質細砂 (地山)

南区 4面 -1

0904SX 平面・断面図



- 10YR3/3 黒褐色粘土質土 しまりやや弱い、粒子やや粗い
(φ～5mの塊・土粒・炭化物、φ～5mmの砂粒を少量含む)
- 10YR4/1 灰褐色粘土質土 しまりやや弱い、粒子粗い
(φ～10mの砂粒、φ～5mmの砂を含む)
- 10YR3/3 黑褐色粘土質土 しまり弱い、粒子粗い
(φ～5mの砂粒、φ～5mmの炭化物を含む)
- 10YR5/1 灰褐色粘土質土 しまり弱い、粒子粗い
(φ～5mの砂粒、φ～10mの砂、φ～5mmの炭化物を含む)
- 7-1. SY7/3 淡黄色シルト質細砂 (地山)

図49 部分平面・断面図 8

南区 4面 -2

0903SX・0927SX・0907SE 上層平面・断面図

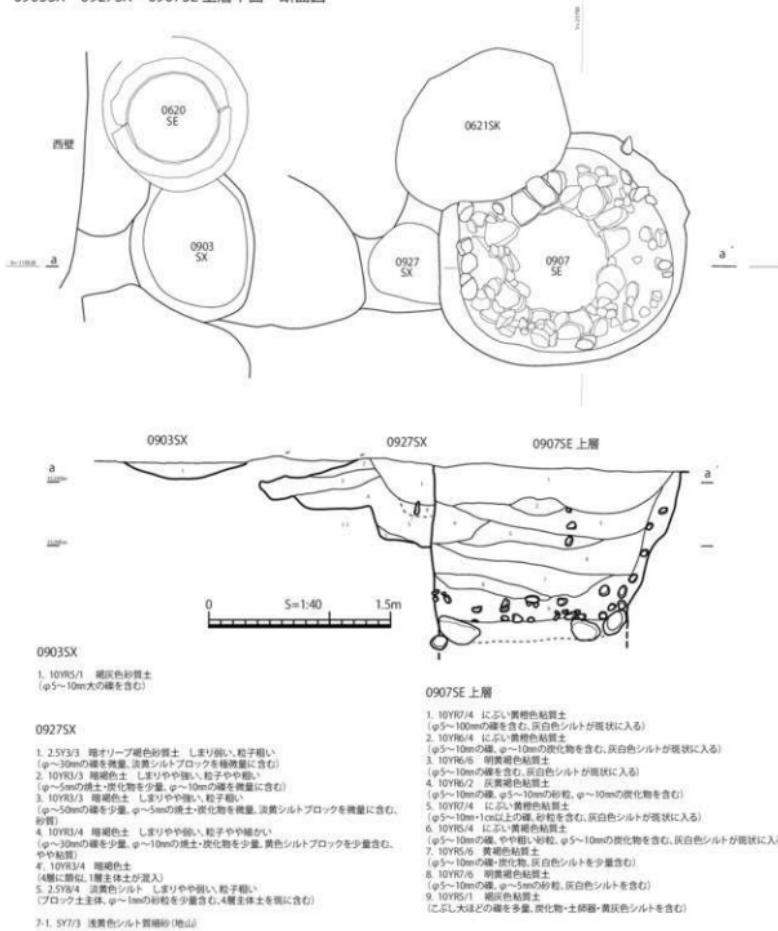
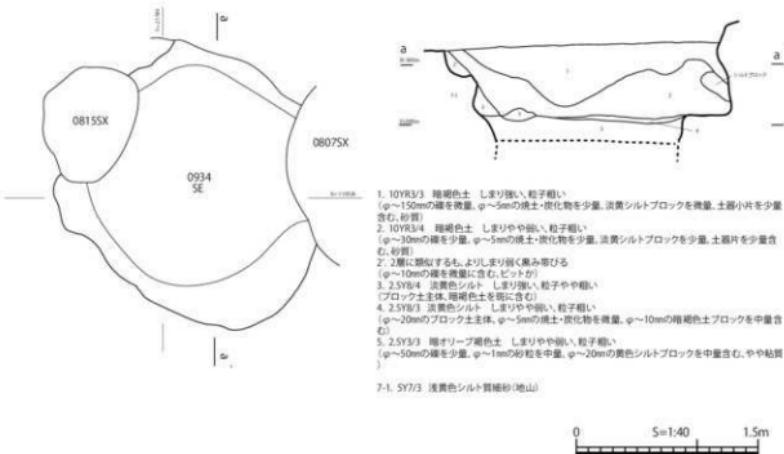


図 50 部分平面・断面図 9

南区 4面 -3

0934SE 上層平面・断面図



東区 4面 -1

1439SK平面・断面図

1496SX 平面・断面図

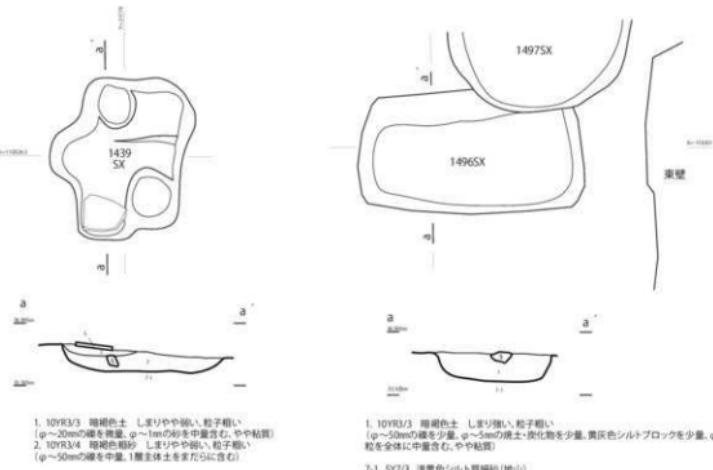


図 51 部分平面・断面図 10

東区 4 面 -2

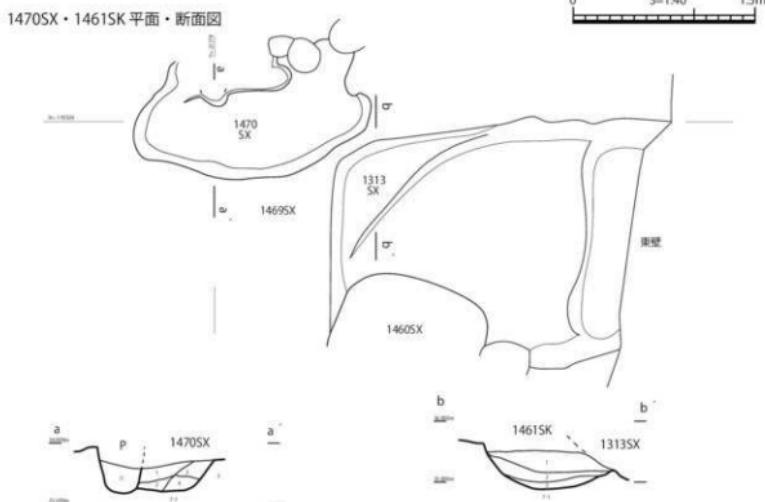
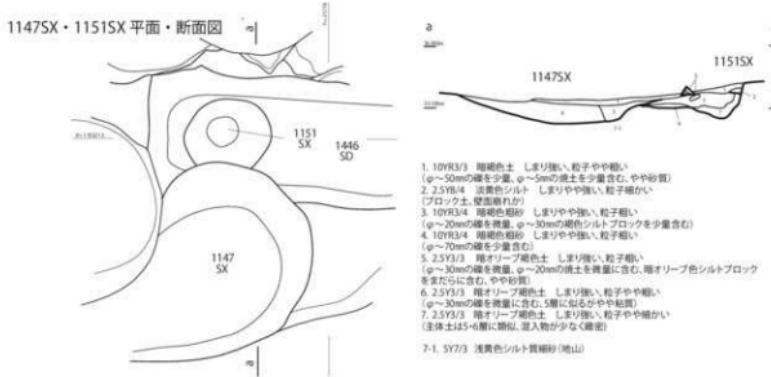
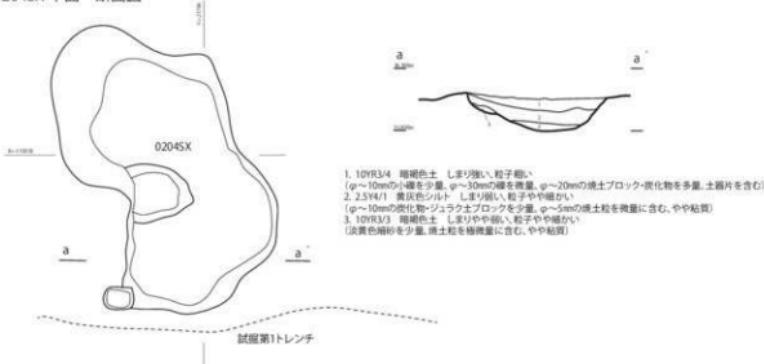


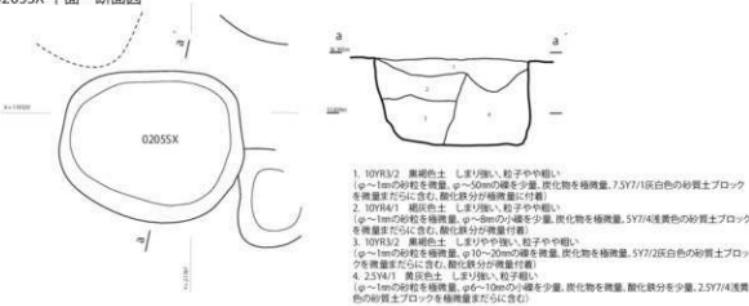
図 52 部分平面・断面図 11

北区 3 面

0204SX 平面・断面図



0205SX 平面・断面図



0 S=1:40 1.5m

北区 2 面

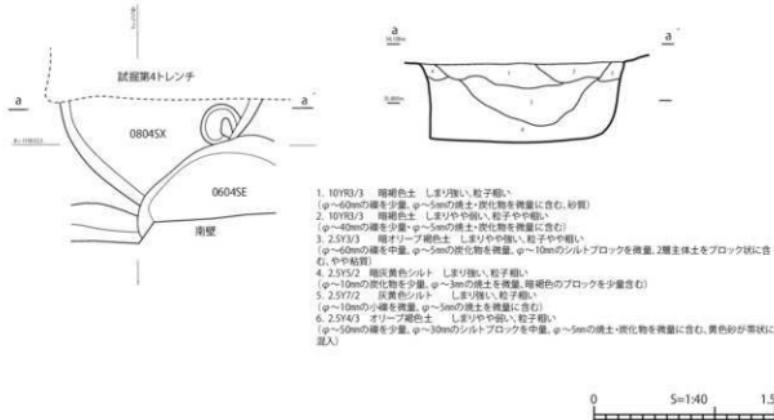
0108SX 平面・断面図



図 53 部分平面・断面図 12

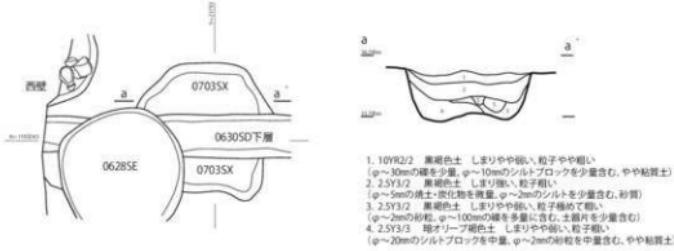
南区 3 面

0804SX平面・断面図



南区 2 面

0703SX 平面・断面図



0704SX 平面・断面図

(試験第4トレンチ内)

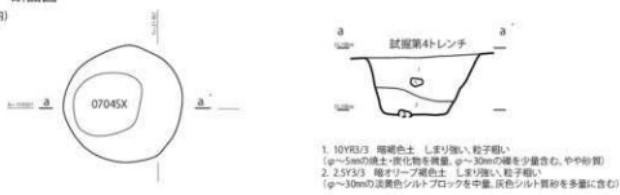


図 54 部分平面・断面図 13

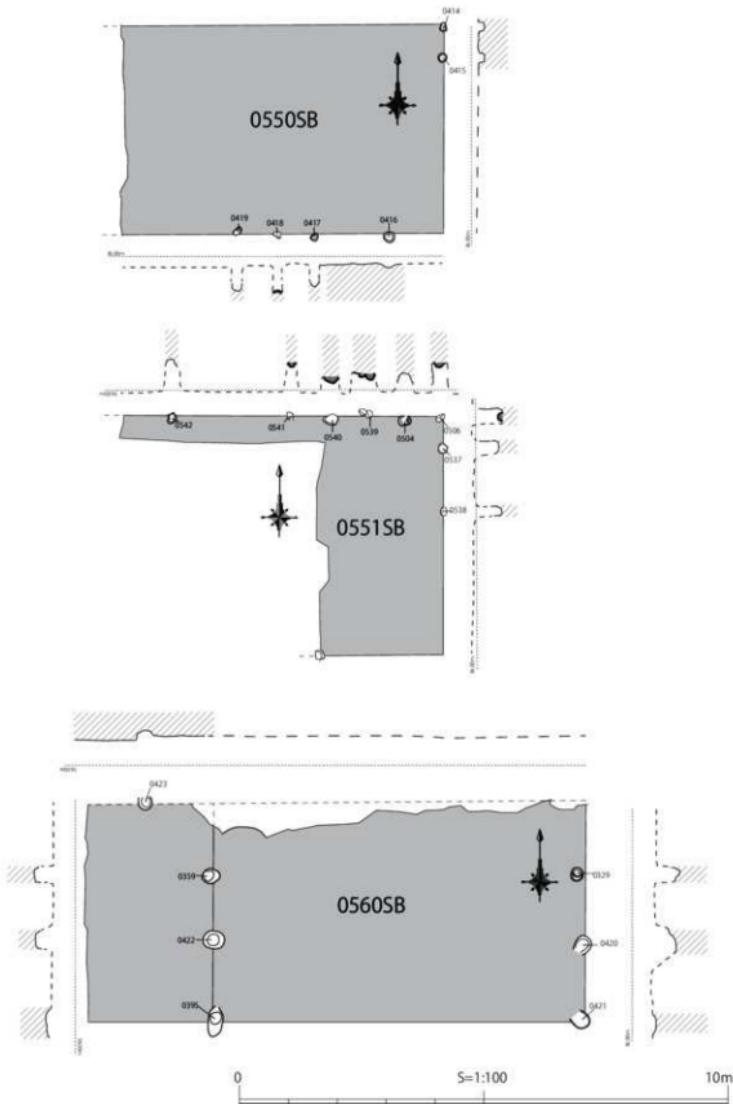


図 55 建物平面・断面図 1

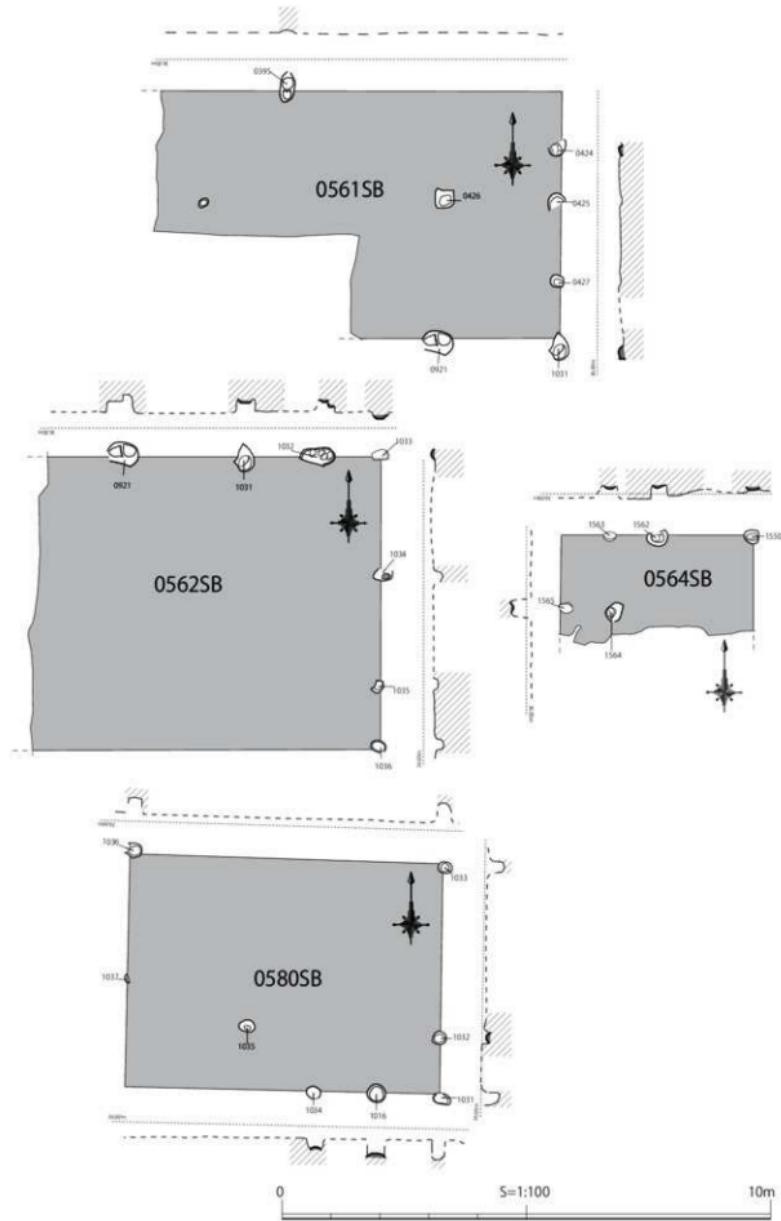


図 56 建物平面・断面図 2

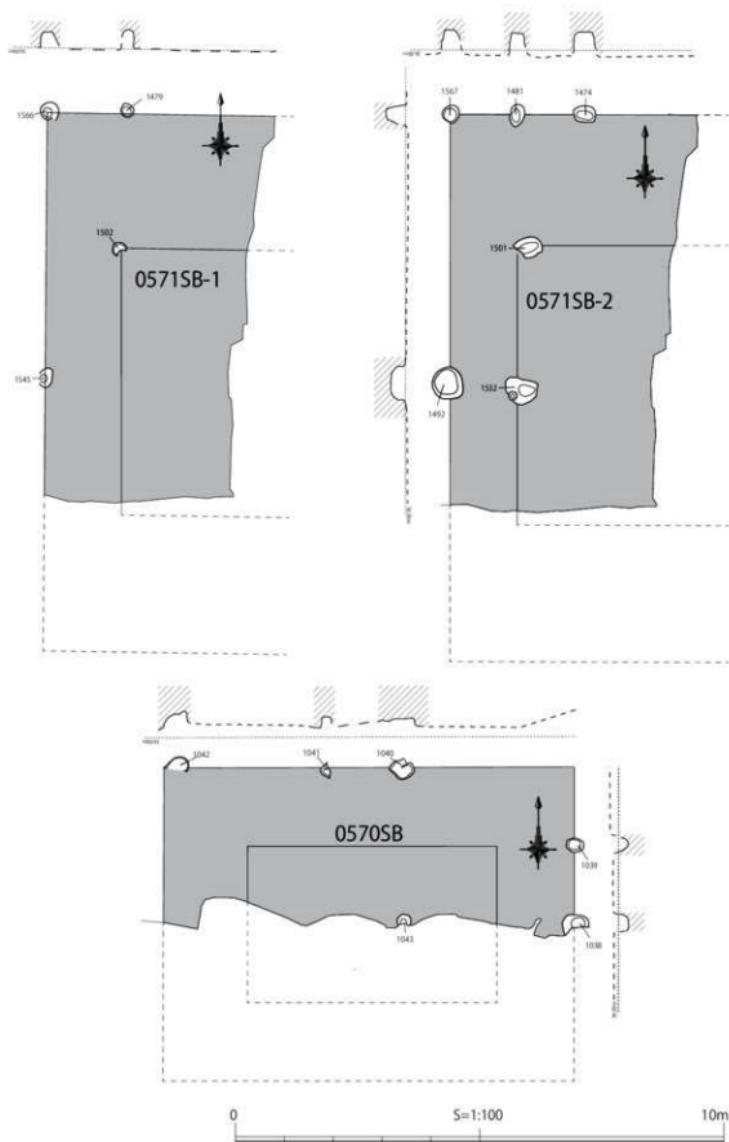


図57 建物平面・断面図 3

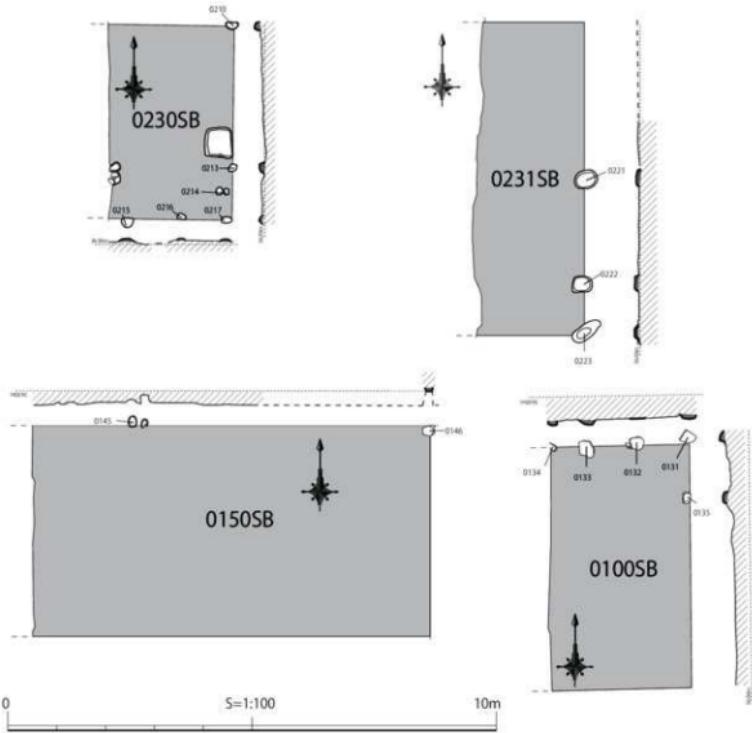


図 58 建物平面・断面図 4

[引用参考文献]

- 柏田有香「まとめ『平安京在京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡』」京都市理蔵文化財発掘調査報告書 2015-7, (公財)京都市理蔵文化財研究所, 2015 年。
- 上本俊和ほか「京マチヤの原形・変容・伝播に関する研究」—建物先行型論と棟持柱祖形論にもとづく建築コレージュ形態史論—」『住宅総合研究財团研究論文集』No.34, 研究No.0611, 2007a 年。
 - 上本俊和「京マチヤの原形ならびに形態生成」『平安京の住まい』京都大学学術出版会, 2007b 年。
 - 丸山俊明「京都の町家と聚楽第」昭和堂, 2014 年。
- 立命館大学歴史都市防災研究所「京都歴史災害年表」「京都歴史災害研究」第 6 号, 2006 年。
- 中島惣太郎「鴨川水害史(1)」「京大防災研究所年報」第 26 号 B-2, 1983 年。
- 「四七七 竹田法印定鑄請文案」「大日本古文書」第 10 集 16 (鎌川家文書之二)。東京大学出版会
- 「寛永十四年 洛中絵図」(宮内庁所蔵)吉川弘文館, 1969 年。
- 「洛中絵図 寛永後萬治前」(京都大学附属図書館所蔵・旧中井家所蔵)臨川書店, 1978 年。
- 前掲 3)
- 前掲 3)
- 股座真実子・谷端輝「宝永大火当日に何が起きたか—火災図と文献史料に基づく被災状態の復原—」『歴史都市防災論文集』Vol.6 号, 2012 年。
- 前掲 3)
- 塙本章宏・中村琢巳「歴史的建造物の被災履歴と火災図を統合した「天明の大火」被災範囲の復原」『歴史都市防災論文集』Vol.5 号, 2011 年。
- 長尾泰源・谷端輝・浅生将「火災図を用いた「元治の京都大火」被災範囲の復原」『歴史都市防災論文集』Vol.6 号, 2012 年。

第4章 遺物

第1節 遺物の概要

今回出土した遺物は、表3のコンテナパット（P27）98箱であった。土師器、須恵器、瓦器、黒色土器、瓦質土器、中世須恵器、輸入陶磁器、国産陶磁器等の土器及び土製品、建築材としての瓦製品、鉄製品、銭貨を含む銅闇連製品、石製品、木製品などである。遺物の時期は、平安時代の物を僅かに含むが、主たるものは鎌倉時代後期から江戸時代の期間のものである。

以下には、大まかな時期区分毎に、さらに遺構毎に出土遺物の概要を記述する。

表3 出土遺物概要表

時代	内容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
鎌倉時代～ 江戸時代	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、中世須恵器、輸入陶磁器、国産陶磁器等の土器及び土製品、建築材としての瓦製品、鉄製品、銭貨を含む銅闇連製品、石製品、木製品	98	土師器282点、須恵器1点、中世須恵器4点、瓦器2点、瓦質土器35点、輸入陶磁器1点、国産陶磁器92点、鉄製品8点、銅闇連製品47点、銭貨39点、瓦製品16点、石製品8点、木製品1点 560点	0	85
合計		98 箱	13 箱	0 箱	85 箱

第2節 出土遺物

実測を行ったものは、各遺構出土遺物の中でも最も新しい相の遺物群から実測が可能なものを選別したものであり、実測個体が最も新しい遺物ではない。よって、各遺構の出土遺物全体の総合的な判断であり、各実測個体の評価ではない。また、各遺物の分類型式¹⁾、成形調整、年代（京編年）、法量等については、主に表4～14の遺物観察表に示した。

1. 土器及び土製品・木製品

【2期】

土坑 0933SX（図59）

001～003は土師器の皿である。004は土師器の台付皿である。皿の底部に台を張り付ける。005は口縁部の立ち上がりの短い、瓦質土器の羽釜である。006は大和系瓦器の碗底部である。内面に暗文がみられる。007は東播系中世須恵器の片口鉢である。0933SXは、004・006から京VII期中の14世紀前葉頃の遺構と考えられる。

土坑 0363SX（図69）

397～410は土師器の皿で、403～409は小型の皿、410はコースター形の皿である。411は樟

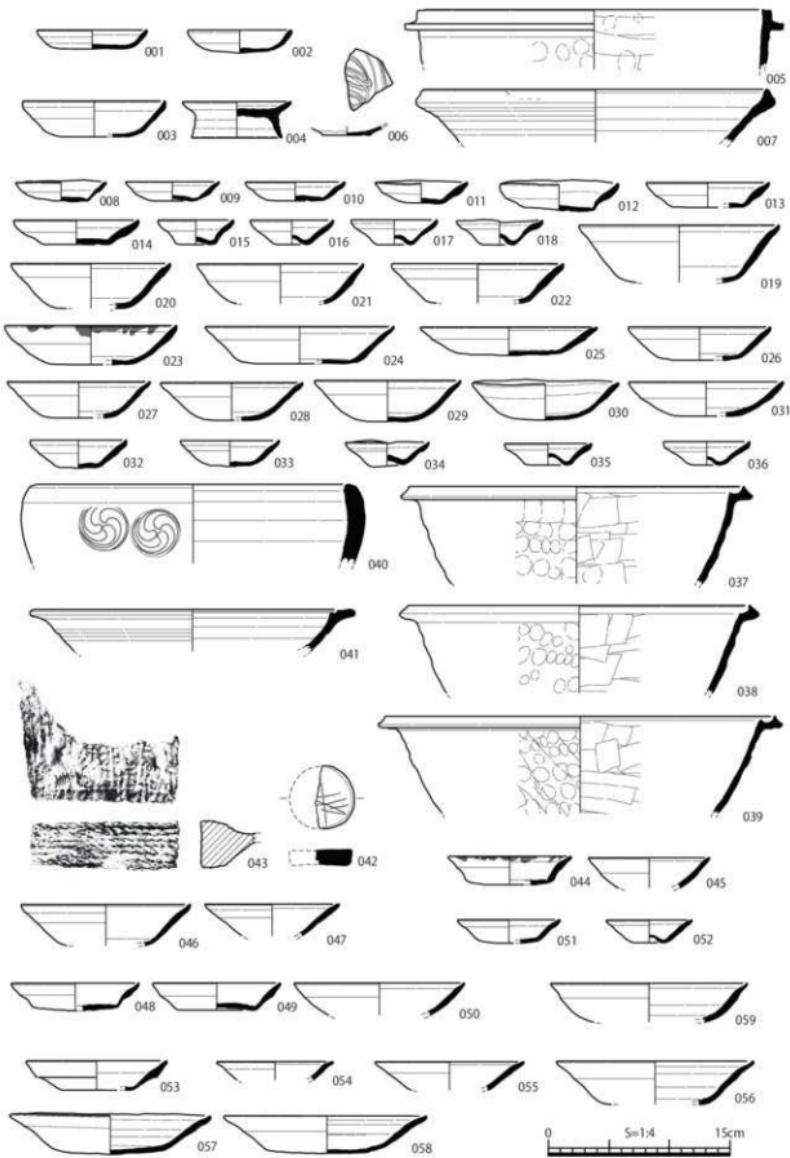


図 59 遺物実測図 1 (0933SX (001 ~ 007)、0349SX (008 ~ 045)、0353SX (046 ~ 047)、0362SX (048 ~ 050)、0374SX (051 ~ 052)、1103SX (053 ~ 058)、1102SX (059))

葉系瓦器の高台を喪失した後の碗底部である。412は瓦質土器もしくは瓦器の鍋で、鍔や口縁部の拡張はみられない。413と414は瓦質土器の鍋である。415は中世須恵器の小壺かと思われるが不明である。0363SXは、411・414から京VII期中の14世紀前葉頃の遺構と考えられる。

【4期】

土坑 0361SX (図 67)

341・342は土師器の皿で、342はへそ皿系の小型の皿である。0361SXは、342から京IX期新の15世紀前葉頃の遺構と考えられる。

【5期】

土坑 0349SX (図 59)

008～036・044・045は土師器の皿で、015～018・034～036はへそ皿系の小型の皿である。037～039は瓦質土器の鍋である。040は瓦質土器の奈良火鉢で、外面に巴文のスタンプを押す。041は瀬戸美濃系（古瀬戸後期）の折縁深皿である。042は土師器の面子と考えられるものである。043は瓦製の壇とも思われるものであるが、その用途は不明である。0349SXは、010・015・016・018・021・025～035・045から京X期古の15世紀中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 0353SX (図 59・60)

046・047は土師器の皿である。0353SXは、047から京X期古の15世紀中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 0362SX (図 59)

048～050は土師器の皿である。0362SXは、048～050から京X期古の15世紀中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 0374SX (図 59)

051・052は土師器の皿で、052はへそ皿系の小型の皿である。0374SXは、051・052から京X期古の15世紀中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 0379SX (図 60)

065・066は土師器の皿である。0379SXは、065・066から京X期古の15世紀中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 0366SX (図 60)

093～096は土師器の皿で、096はへそ皿系の小型の皿である。0366SXは、093・094・096から京X期古の15世紀中葉頃の遺構と考えられる。

【6期】

土坑 0321SX (図 60)

060～064は土師器の皿で、061はへそ皿系の小型の皿である。487は円形の中央に円孔（6mm）があり、その周りに巴文8個を配す銅金具である。0321SXは、060～064から京X期中の15世

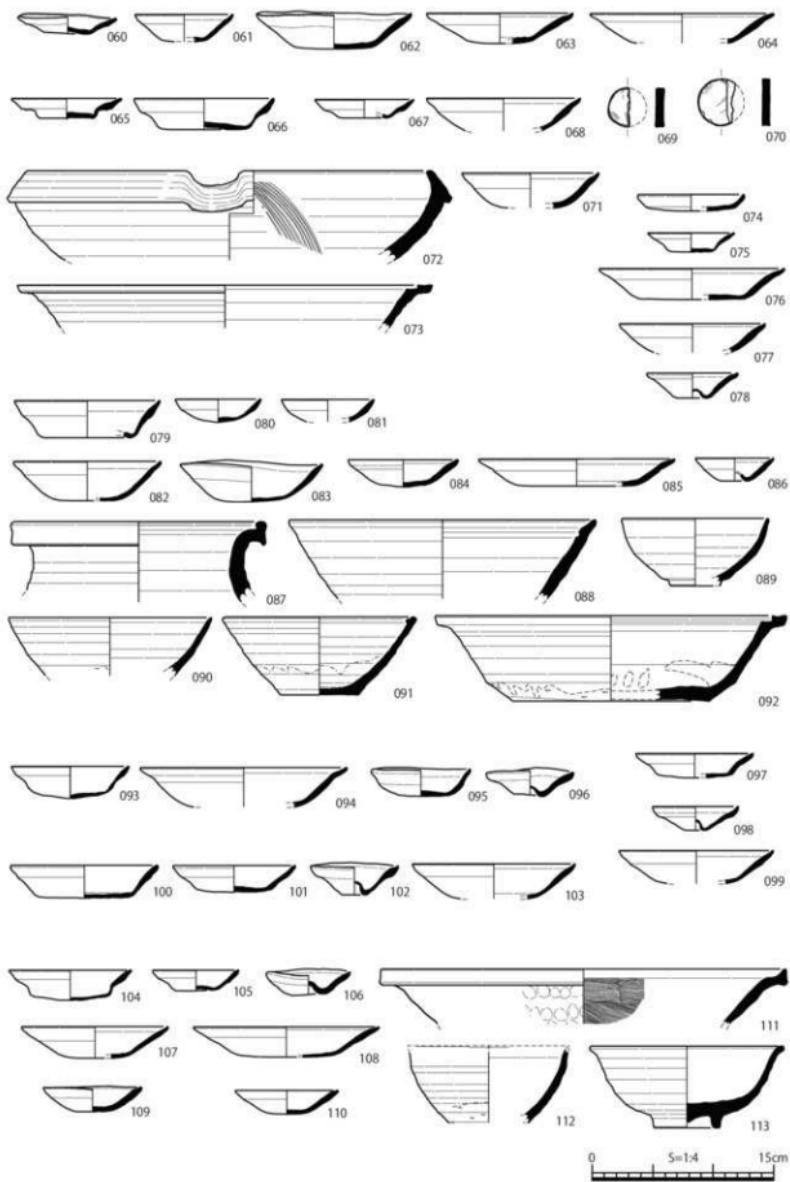


図 60 遺物実測図 2 (060 ~ 064)、065 ~ 066)、067 ~ 070)、071 ~ 073)、074 ~ 078)、079 ~ 092)、093 ~ 096)、097 ~ 099)、0375SX (100 ~ 103)、井戸 0934SE (104 ~ 113)

紀後葉頃の遺構と考えられる。

土坑 0357SX (図 69)

395・396は土師器の皿である。0357SXは、396から京X期中の15世紀後葉頃の遺構と考えられる。

土坑 0339SX (図 77)

471は円形の座金具である。0339SXは、他の出土遺物も含め京X期中の15世紀後葉頃の遺構と考えられる。

【7期】

土坑 1103SX (図 59)

053・055～058は土師器の皿である。054は白磁の端反皿である。1103SXは、055～058から京X期新の15世紀末頃・16世紀初の遺構と考えられる。

土坑 1102SX (図 59)

059は土師器の皿である。1102SXは、059から京X期新の15世紀末・16世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0307SX (図 60)

067・068は土師器の皿である。069・070は土師器の土製円盤で、面子か燈芯押えともいわれるが用途不明品である。0307SXは、067・068から京X期新の15世紀末・16世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0335SX (図 60)

074～078は土師器の皿で、078はへそ皿系の小型の皿である。518は銅貨で、「元祐通宝」である。0335SXは、074～078から京X期新の15世紀末・16世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0342SX (図 60)

079～086は土師器の皿で、086はへそ皿系の小型の皿である。087は常滑系陶器の広口壺である。088は被熱した丹波系陶器の擂鉢である。089～092は瀬戸美濃系陶器（古瀬戸中期・後期）で、089は天目茶碗、090は平碗、091は擂鉢形小鉢、092は折縁深皿である。

0342SXは、079～081・084・085から京X期新の15世紀末・16世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0373SX (図 60)

097～099は土師器の皿で、098はへそ皿系の小型の皿である。0373SXは、055～058から京X期新の15世紀末・16世紀初頃の遺構と考えられる。

井戸 0934SE (図 60)

04～110は土師器の皿で、106はへそ皿系の小型の皿である。111は瓦質土器の鍋である。112は瀬戸美濃系陶器（古瀬戸後期）の天目茶碗である。113は龍泉窯系青磁碗である。0934SEは、104～110から京X期新の15世紀末・16世紀初頃の遺構と考えられる。

井戸 0936SE (図 61)

114～118は土師器の皿で、118はへそ皿系の小型の皿である。119・120は備前系陶器の甕である。

121は信楽系陶器の壺である。113は龍泉窯系青磁碗である。0936SEは、114～117・120から京X期新の15世紀末・16世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 1490SX (図 61)

122～127は土師器の皿で、127はへそ皿系の小型の皿である。1490SXは、122～127から京X期新の15世紀末・16世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0343SX (図 61)

128・130は土師器の皿である。129は瀬戸美濃系陶器（古瀬戸後期）の平碗である。0343SXは、128・130から京XI期古（初）の16世紀前葉の遺構と考えられる。

土坑 0347SX (図 61)

131は土師器の皿である。0347SXは、131から京VI期古（初）の16世紀前葉の遺構と考えられる。

土坑 0348SX (図 61)

132は土師器の皿である。0348SXは、132から京VI期古（初）の16世紀前葉の遺構と考えられる。

【7-8期】

洪水遺構 0310SD (図 62・63)

135～160は土師器の皿で、142・159・160はへそ皿系の小型の皿である。161は土師器の羽釜である。162～164は瓦質土器の羽釜で、163は小型の羽釜である。165は瓦質土器の鍋である。166～169は瓦質土器の火鉢である。170は東播系中世須恵器の片口鉢である。171～173は常滑系陶器の壺である。174は備前系陶器の壺である。175～178は瀬戸美濃系陶器（古瀬戸中期・後期）で、175は擂鉢形小鉢、176は浅鉢、177は天目茶碗、178は直縁大皿である。179は白磁合子の身である。180は龍泉窯系青磁碗である。181は滑石製の石鍋である。0310SDは、135・136・147・157から京XI期古の16世紀前葉頃の遺構と考えられる。

【8期】

東側溝 0201SD (図 63・64)

182～211は土師器の皿で、190・206・209はへそ皿系の小型の皿である。212は土師器の小型环球形の灯明台である。213・214は瓦質土器の羽釜である。215～217・219・221は瓦質土器の鍋である。218・220は瓦質土器と同じ器形の土師器の鍋で、被熱が原因なのか、模倣土器かは不明である。222～225は瓦質土器の火鉢である。226は須恵器で京都窯窯系の鉢である。227は北部系山茶碗の底部である。228は東播系中世須恵器の片口鉢である。229は瀬戸美濃系陶器（大窯）の天目茶碗である。230は信楽系陶器の広口壺である。231は京都系陶器の丸碗である。232・233は龍泉窯系青磁の碗である。234は染付の皿である。0201SDは、185・186・204・229～231から京XI期古～京XII期古（後半）の16世紀前葉～17世紀初の遺構と考えられる。

溝 1446SD (図 66)

288～297は土師器の皿で、288・290・295～297はへそ皿系の小型の皿である。298は常滑

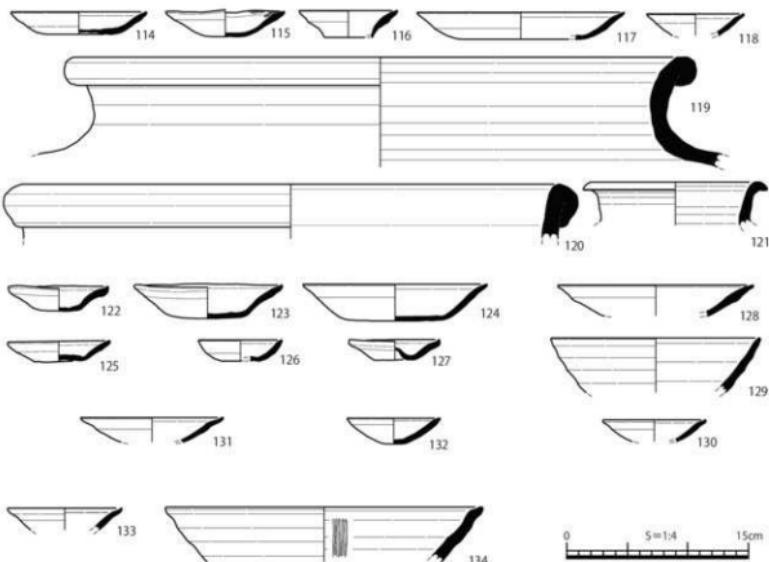


図 61 遺物実測図 3 (井戸 0936SE (114～121)、1490SX (122～127)、0343SX (128～130)、0347SX (131)、0348SX (132)、0356SX (133・134))

系陶器で片口鉢である。299 は信楽系陶器の壺である。300 は丹波系陶器の擂鉢である。301 は備前系陶器の擂鉢である。302 は瀬戸美濃系陶器（古瀬戸中期）の鉢皿である。302 は瀬戸美濃系陶器（大窯）の丸皿である。304 は同安窯系青磁碗である。1446SD は、290・293・294・299・300・303 から京 XI 期古～京 XII 期古（後半）の 16 世紀前葉～17 世紀初の遺構と考えられる。

溝 0370SD (図 69)

390・391 は肥前系陶器で、390 は火入で 391 は染付水指である。時期は京 X Ⅱ 期新～京 X Ⅲ 期古頃に属すとみられるもので、遺構の時期と合わない。混入品か。392 は瀬戸美濃系陶器で志野建水と思われる。0370SD は、他の出土土器や 392 から京 XI 期古～京 XII 期古（後半）の 16 世紀前葉～17 世紀初の遺構と考えられる。

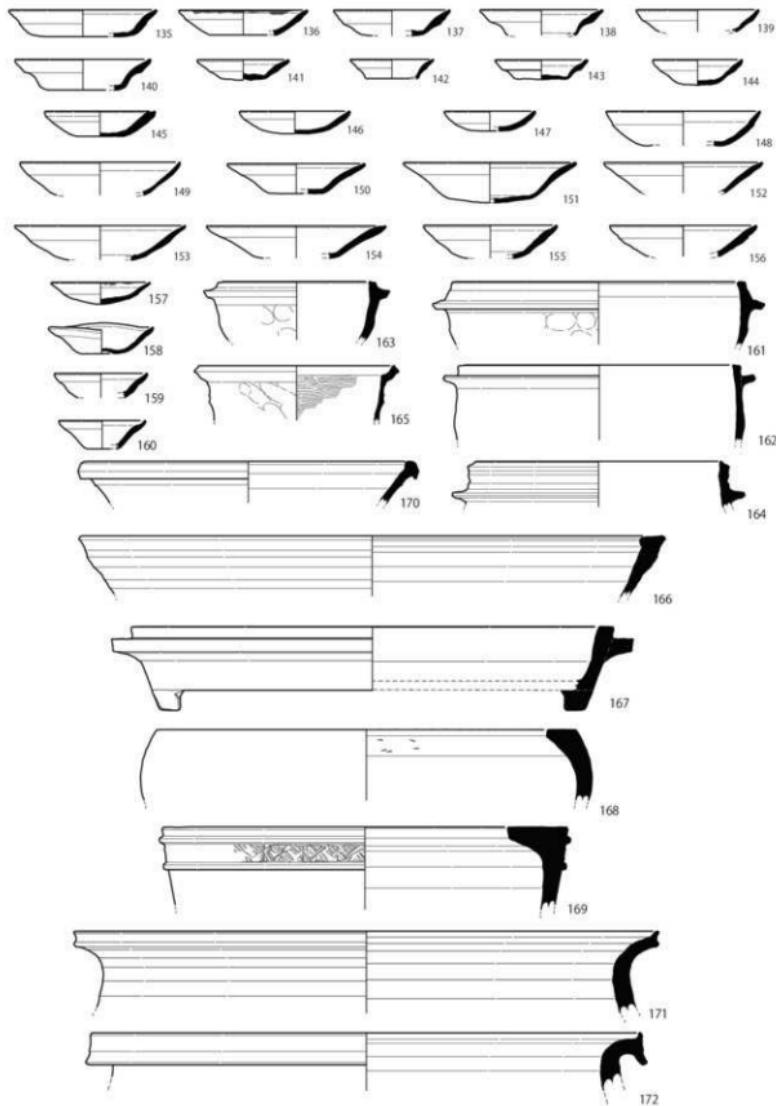
【9期】

土坑 0312SX (図 60)

071 は土師器の皿である。072 は備前系陶器の擂鉢である。073 は瀬戸美濃系陶器（古瀬戸後期）の折縁深皿である。0312SX は、071 から京 XI 期中の 16 世紀中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 0356SX (図 61)

133 は土師器の皿である。134 は信楽系陶器の擂鉢である。0356SX は、133・134 から京 XI 期中



0 5=14 15cm

図 62 遺物実測図 4 (洪水遺構 0310SD (135 ~ 172))

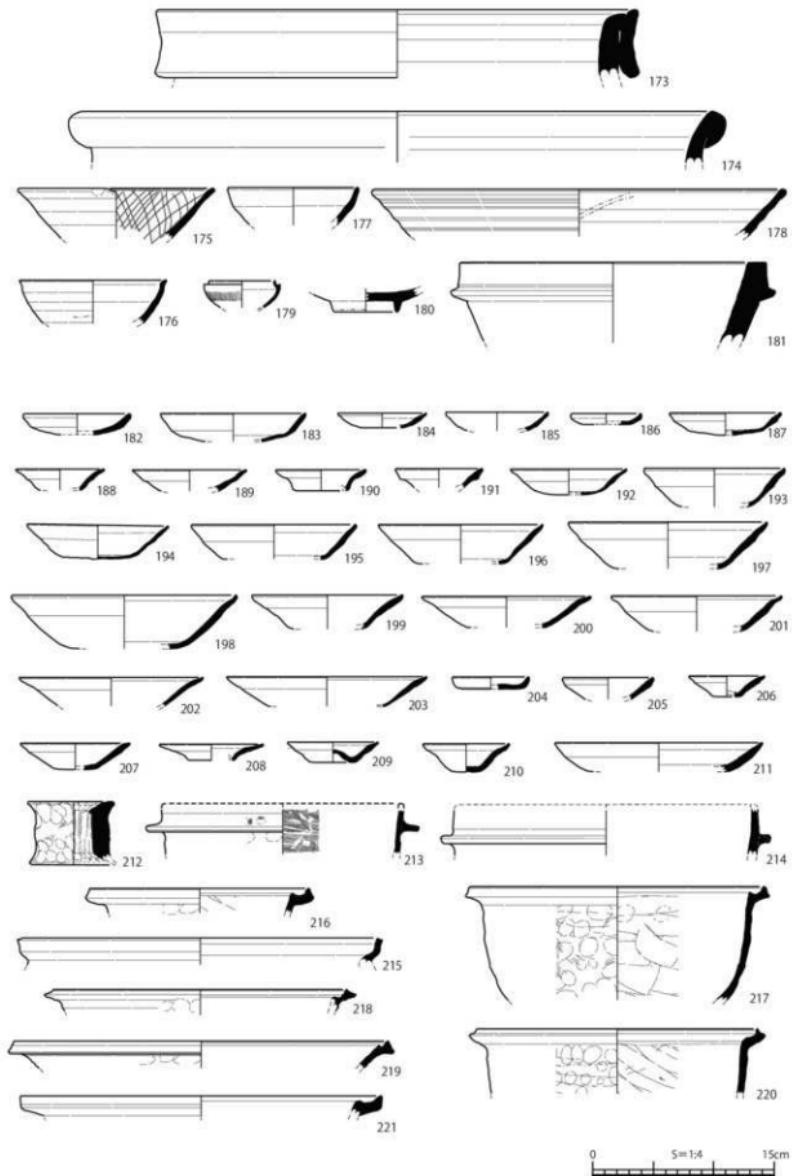


図63 遺物実測図5 (洪水遺構 0310SD (173~181)、東側溝 0210SD (182~221))

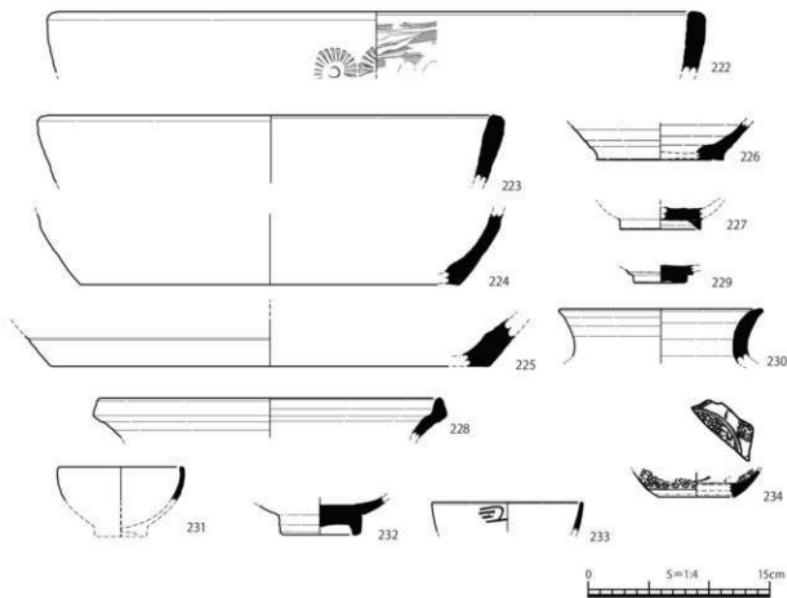


図 64 遺物実測図 6 (0201SD (222 ~ 234))

の 16 世紀中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 0318SX (図 78)

504 は銅貨で、「祥符通宝」である。0318SX は、他の出土土器から京 XI 期中の 16 世紀中葉頃の遺構と考えられる。

【10 期】

土坑 0903SX (図 65)

235 は土師器の皿である。236 は瓦質土器の大形羽釜である。237 は信楽系陶器で擂鉢である。238 は瀬戸美濃系陶器（大窯）の天目茶碗である。0903SX は、236 ~ 238 や他の出土土器から、京 XI 期新～京 X II 期古（前半）の 16 世紀中葉・末頃の遺構と考えられる。

土坑 0315SX (図 65)

239 は土師器の皿である。240 は信楽系陶器で擂鉢である。0315SX は、240 や他の出土土器から、京 XI 期新～京 X II 期古（前半）の 16 世紀中葉・末頃の遺構と考えられる。

土坑 0336SX (図 65)

241 は信楽系陶器の擂鉢である。242 は染付皿で、見込みに牡丹文を描く。0336SX は、他の出土土器や 241 から、京 XI 期新～京 X II 期古（前半）の 16 世紀中葉・末頃の遺構と考えられる。

土坑 1017SX (図 66)

287 は華南三彩の破片で、器形は鉢又は皿と思われる。1017SX は、他の出土土器から京 XI 期新～京 X II 期古（前半）の 16 世紀中葉・末頃の遺構と考えられる。

土坑 1011SX (図 69)

393 は龍泉窯系青磁の陰刻木葉文大盤皿である。449・450 は右巻三巴文珠文軒丸瓦で、珠文の復元数は 449 が 19 で、450 が 17 である。1011SX は、他の出土土器と軒丸瓦から京 XI 期新～京 X II 期古（前半）の 16 世紀中葉・末頃の遺構と考えられる

【11期】

土坑 0375SX (図 60)

100～103 は土師器の皿で、102 はへそ皿系の小型の皿である。0375SX は、100 や他の出土土器から京 X II 期古（後半）の 16 世紀末～17 世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 1470SX (図 65)

243 は土師器の皿である。244 は白磁の皿である。1470SX は、243 や他の出土土器から京 X II 期古（後半）の 16 世紀末～17 世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0306SX (図 65)

245・246 は土師器の皿である。247 は瀬戸美濃系陶器（大窯）の志野向付で、見込に鉄釉梅花文を描く。0306SX は、245～247 は京 X II 期古（後半）の 16 世紀末～17 世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0326SX (図 65)

249 は土師器の皿である。248 は土師器の羽釜ミニチュアである。0326SX は、249 や他の出土土器から京 X II 期古（後半）の 16 世紀末～17 世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0332SX (図 65)

250・251 は土師器の皿である。252・253 は備前系陶器で、252 は徳利で、253 は鉢である。254 は瀬戸美濃系陶器（大窯）の平碗である。0332SX は、252・253 から京 X II 期古（後半）の 16 世紀末～17 世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0337SX (図 65)

255 は土師器の皿である。0337SX は、255 や他の出土土器から京 X II 期古（後半）の 16 世紀末～17 世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0346SX (図 65)

256～259 は土師器の皿である。260 は信楽系陶器の建水で、側面に「ノ」字をヘラで記す。261～263 は瀬戸美濃系陶器（大窯）で、261 は天目茶碗、262 は稜皿、263 は志野向付で見込に鉄釉梅花文を描く。0346SX は、262・263 から京 X II 期古（後半）の 16 世紀末～17 世紀初頃の遺構と考えられる。

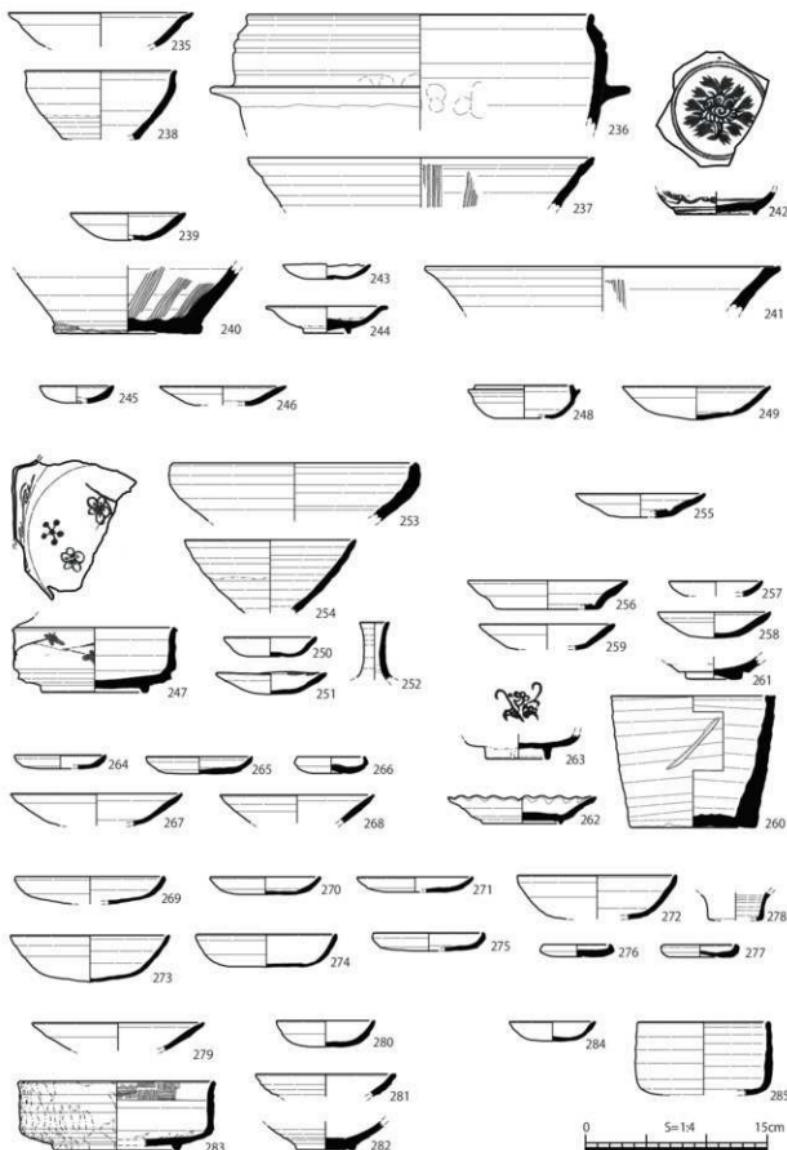


図 65 遺物実測図 7 (0903SX (235 ~ 238)、0315SX (239・240)、0336SX (241・242)、1470SX (243・244)、
0306SX (245 ~ 247)、0326SX (248・249)、0332SX (250 ~ 254)、0337SX (255)、0346SX (256 ~ 263)、
0350SX (264 ~ 268)、0351SX (269 ~ 278)、0365SX (279 ~ 283)、0377SX (284・285))

土坑 0351SX (図 65)

269～277は土師器の皿である。278は京焼系陶器の餌入れか小壺であるが、混入品とみられる。0351SXは、270～274・276・277から京XⅡ期古（後半）の16世紀末～17世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0365SX (図 65)

279・280は土師器の皿である。281～283は瀬戸美濃系陶器（大窯）で、281は丸皿、282は平碗、283は黄瀬戸向付である。0365SXは、281～283から京XⅡ期古（後半）の16世紀末～17世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0377SX (図 65)

284は土師器の皿である。285は瀬戸美濃系陶器（大窯）の志野向付である。0377SXは、284・285から京XⅡ期古（後半）の16世紀末～17世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0983SX (図 65)

286は瀬戸美濃系陶器（大窯）の黄瀬戸筒形碗状の向付である。0983SXは、286や他の出土土器から、京XⅡ期古（後半）の16世紀末～17世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 1499SX (図 65)

305は信楽系陶器の擂鉢である。306は染付碗で、見込に花文を入れる。1499SXは、306や他の出土土器から、京XⅡ期古（後半）の16世紀末～17世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 1500SX (図 65)

307は土師器の皿である。308は瓦質土器の練鉢である。309は信楽系陶器の擂鉢である。310は瀬戸美濃系陶器（大窯）の天目茶碗である。311は染付皿で、見込に芭蕉の葉にとまる鳥を描いた花鳥文である。312も染付皿であるが、文様は内外面共に太く渾む。1500SXは、307・308・310から、京XⅡ期古（後半）の16世紀末～17世紀初頃の遺構と考えられる。

【12期】

土坑 0350SX (図 65)

264～268は土師器の皿である。0350SXは、268から京XⅡ期中・新の17世紀前葉～中葉頃の遺構と考えられる。

井戸 0301SE (図 66)

313・314は土師器の皿である。315は瓦質土器の鍋である。317は肥前系陶器の丸碗である。318は瀬戸美濃系陶器（大窯）の端反皿である。319は染付皿である。0301SEは、313・314・317・318から京XⅡ期中・新の17世紀前葉～中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 0328SX (図 67)

320は染付の碗で、口縁部を六分割の輪花とし、内面に花文を描く。0328SXは、320や他の出土土器から、京XⅡ期中・新の17世紀前葉～中葉頃の遺構と考えられる。

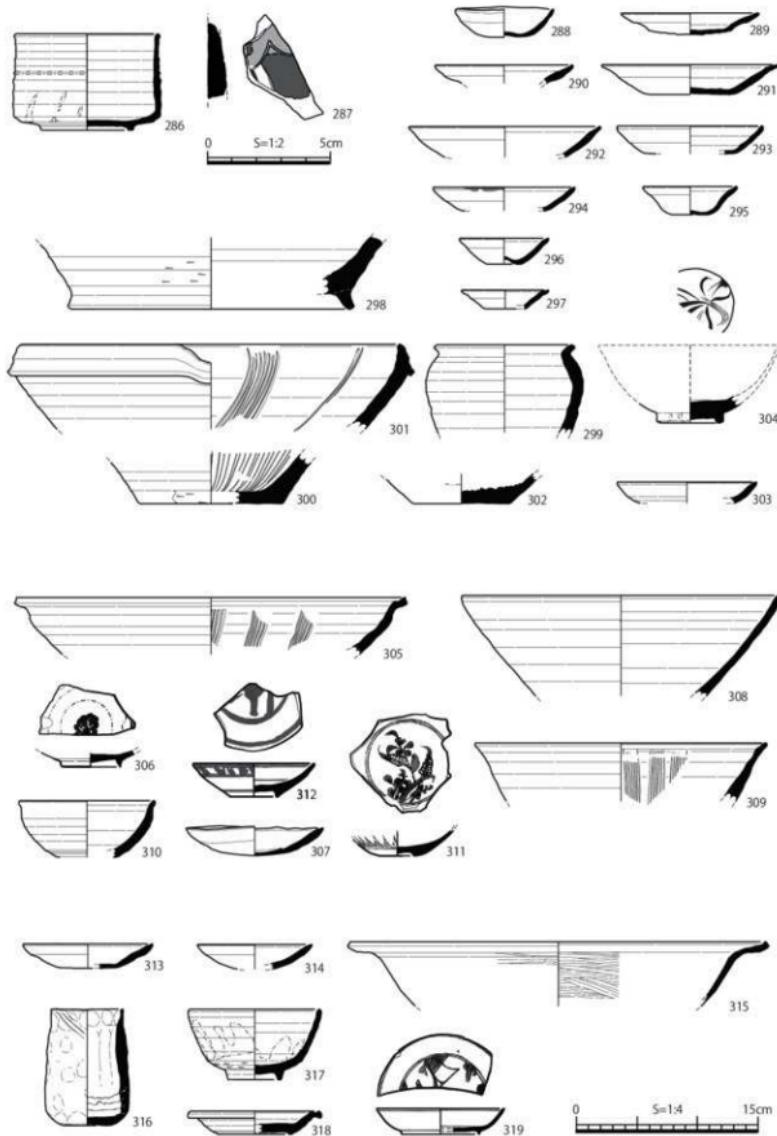


図 66 遺物実測図 8 (0983SX (286)、1017SX (287)、満 1446SD (288 ~ 304)、1499SX (305・306)、
1500SX (307 ~ 312)、井戸 0301SE (313 ~ 319))

土坑 0357SX (図 67)

321～336は土師器の皿である。337は土師器の羽釜である。瓦質土器の模倣土器か。338は備前系陶器の鉢である。339は龍泉窯系青磁の碗である。340は染付の小杯か小碗である。0357SXは、332や他の出土土器から、京XⅡ期中・新の17世紀前葉～中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 1437SX (図 67)

343～348は土師器の皿である。349は瓦質土器の風炉である。350は丹波系陶器の片口擂鉢である。351は信楽系陶器の擂鉢である。352～356は瀬戸美濃系陶器(大窯)で、352は志野端反皿、353は丸皿、354は志野丸皿、355は内禿の折縁皿、356は天目茶碗である。357は龍泉窯系青磁の蓮弁文碗で、見込に「顧氏」のスタンプ陽刻印文を押す。1437SXは、343・345～348・350・354～356から京XⅡ期中・新の17世紀前葉～中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 1460SX (図 67)

358・359は土師器の皿である。360は土師器の焼塩壺である。361は丹波系陶器の擂鉢である。362は信楽系陶器の擂鉢である。363～365は肥前系陶器で、363は鉢、364は向付、365は鉄絵皿である。366は瀬戸美濃系陶器の志野菊皿である。1460SXは、360・361から京XⅡ期中・新の17世紀前葉～中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 1461SX (図 68)

367・368は土師器の皿である。369・370は肥前系陶器の皿で、見込に鉄絵で花文を描く。1461SXは、370や他の出土土器から京XⅡ期中・新の17世紀前葉～中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 1487SX (図 68)

371・372は土師器の皿である。373は土師器の鍋である。374は瓦質土器の炮烙鍋である。375・376は信楽系陶器の擂鉢である。377は龍泉窯系の青白磁花瓶(花入)である。378は染付皿で、見込に松草文を描く。1487SXは、372・373・377から京XⅡ期中・新の17世紀前葉～中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 1497SX (図 68)

379・380は土師器の皿である。381は土師器の粘土紐巻上痕を残す鉢状のもので、用途不明品である。平安京左京四条四坊四町でも出土例がある。382・383は瓦質土器の香炉で、側面に382は菱形文のスタンプを、383は菊形文のスタンプを押す。384は瀬戸美濃系陶器(古瀬戸中期)の花瓶(花入)である。385は瀬戸美濃系陶器(大窯)の志野丸碗である。386は瀬戸美濃系陶器(登窯)の天目茶碗である。387は白磁碗である。388は青磁蓮弁文の碗である。389は染付皿で、見込に花文を描く。1497SXは、386や他の出土土器から京XⅡ期中・新の17世紀前葉～中葉頃の遺構と考えられる。

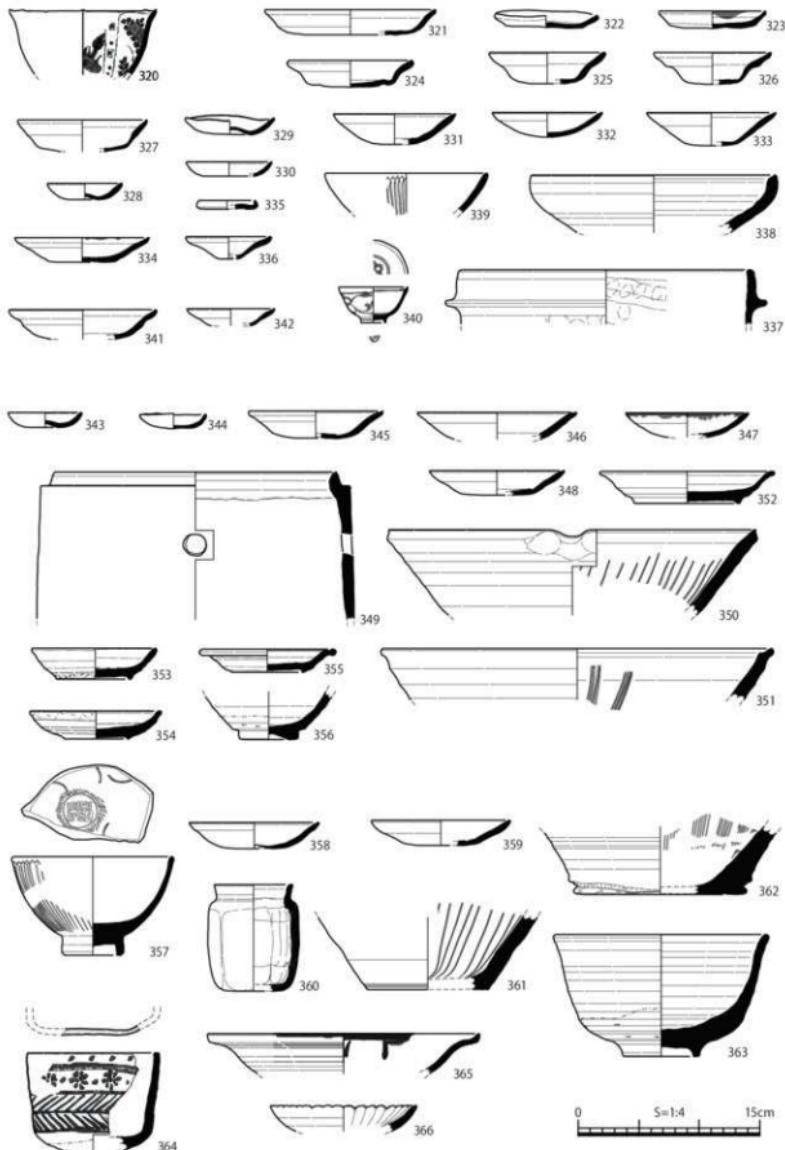


図 67 遺物実測図 9 (0328SX (320)、0357SX (321～340)、0361SX (341・342)、1437SX (343～357)、1460SX (358～366))

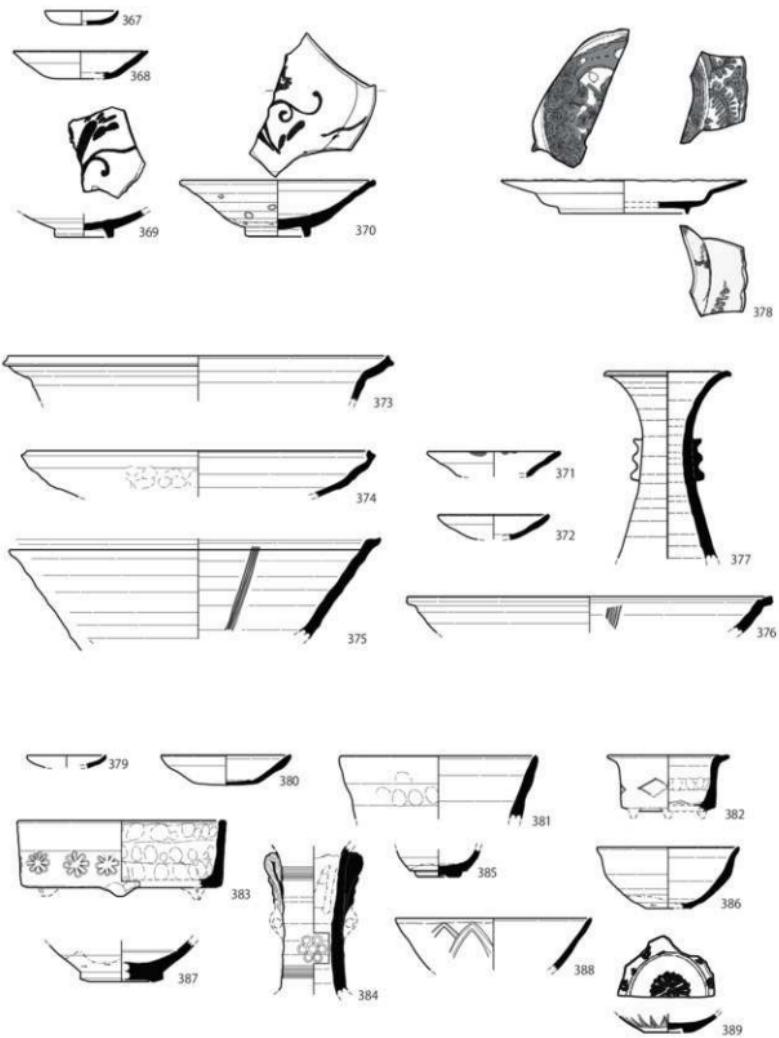


図 68 遺物実測図 10 (1461SX (367～370)、1487SX (371～378)、1497SX (379～389))

【13期】

土坑 0921SX (図 69)

394 は木製品の木槌である。0921SX は、他の出土土器から京XIII期古の 17世紀中葉～後葉頃の遺構と考えられる。

【14期】

土坑 1317SX (図 70)

416～419 は土師器の皿である。420 は瓦質土器の釜である。421 は常滑系陶器の片口小瓶か。422 は瀬戸美濃系陶器（登窯）の天目茶碗である。423 は肥前系陶器の皿である。1317SX は、

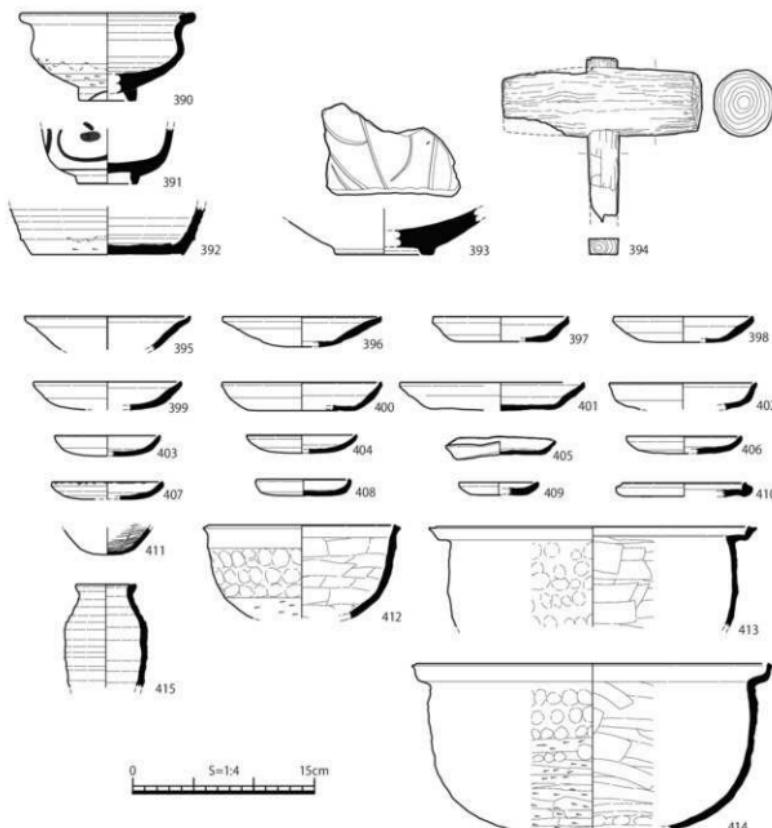


図 69 遺物実測図 11 (溝 0370SD (390～392)、1011SX (393)、0921SX (394)、0357SX (395・396)、0363SX (397～415))

421・422 や他の出土土器から京XⅢ期古・中の17世紀後葉～18世紀初頃の遺構と考えられる。

土坑 0105SX (図 70)

424 は京焼系陶器の犬形か獅子形の水滴である。0105SX は、他の出土土器から京XⅢ期古・中の17世紀後葉～18世紀初頃の遺構と考えられる。

【15期】

土坑 0109SX (図 70)

425 は土師器の皿である。0109SX は、他の出土土器から、京XⅢ期中～京XIV期中の17世紀初～18世紀末の遺構と考えられる。

土坑 0723SX (図 70)

426 は土師器の土製円盤である。0723SX は、他の出土土器から、京XⅢ期中～京XIV期中の17世紀初～18世紀末の遺構と考えられる。

土坑 1215SX (図 70)

427 は土師器の皿である。428 は瓦質土器の火鉢である。429 は肥前系陶器の鉄絵皿で、見込に柳葉文を描く。1215SX は、他の出土土器から京XⅢ期中～京XIV期中の17世紀初～18世紀末の遺構と考えられる。

【16期】

溝 0002SD (図 70)

430～432 は土師器の皿で、430 はへそ皿である。433 は土師器の焼塩壺である。434・435 は丹波系陶器の擂鉢である。0002SD は、他の出土土器から、京XIV期中～京XV期中の18世紀末～19世紀中葉頃の遺構と考えられる。

穴蔵 0004SK (図 70)

436 は土師器の胞衣壺である。433 は土師器の焼塩壺である。434・435 は丹波系陶器の擂鉢である。0004SK は、436 や他の出土土器から京XIV期中～京XV期中の18世紀末～19世紀中葉頃の遺構と考えられる。

溝 0630SD (図 70)

438～440 は土師器の皿である。441・442 は瀬戸美濃系陶器（登窯）で、441 は志野小壺、442 は茶入れか汁次の蓋と思われる。443 は肥前系磁器の染付丸碗で、外面に網目文を描く。0630SD は、436 や他の出土土器から京XIV期中～京XV期中の18世紀末～19世紀中葉頃の遺構と考えられる。

土坑 1116SX (図 70)

444 は備前系陶器の大甕である。大甕自体は、京XII期古のもので、外面肩部には「大かめあつらへ 叶」と、2行にヘラ書き銘文を入れる。1116SX は、他の出土土器から京XIV期中～京XV期中の18世紀末～19世紀中葉頃の遺構と考えられる。

【17期】

井戸 0012SE (図 70)

437 は京焼系陶器の急須で、急須口下に「道八」の銘がある。0012SE は、他の出土土器から京 X V 期中～京 X V 期新の 19 世紀中葉～末頃の遺構と考えられる。

2. 瓦製品 (図 71～75)

軒瓦は江戸時代中期以降のものを除いて、軒丸瓦は 5 種 10 個体、軒平瓦は 4 種 4 個体であった。他に、丸瓦 2 個体と平瓦 2 個体を図示した。

445～453・459 の軒丸瓦は、瓦当内区が尾から頭に至る方向で呼称するところの右巻三巴文で、その内区の巴尾先が明確な圈線が接続して圈線となるものが 445～453 で、圈線とならないものが 459 で、全て瓦当外区に珠文を連ねる。447 は、瓦当面に范中心を表す点を残すもので、室町時代のものと考えられる。7-8 期洪水遺構 0310SD から出土した。449・450 は瓦当径が 18cm を越える大型軒丸瓦で、方広寺の軒丸瓦である可能性がある。10 期土坑 1011SX から出土した。451～453 は右巻三巴文 18 珠文の玉縁式の同范瓦で、全長 30.6～31.5cm、幅 11.5～11.7cm、高さ 7.1～9.2cm、3 個体共に焼け歪みが激しく、瓦当面は銀化している。体部外面は縱板ナデ、体部内面はコビキ B、吊り紐痕が残り、451・453 では体部内面に棒状叩きを残す。釘穴を瓦当側から斜めに穿孔する。側面は二面成形である。451・452 は 14 期土坑 0815SX から、453 は 15 期土坑 0721SX から出土した。459 は右巻三巴文 15 珠文の瓦で、全長 (27.0) cm、幅 13.0cm、高さ 7.1cm で、同范は無い。体部外面には縱板ナデが、体部内面にはコビキ B が認められるが、吊り紐痕や棒状叩き痕はみられない。釘穴は直ぐ体部外面から穿孔している。459 は 16 期土坑 0624SX から出土した。451～453 よりはやや製作時期が遅れるものとみられる。

445・446・448・454 の軒平瓦は、445 が唐草文、446 が剣頭文、448 が均整 5 子葉 3 転唐草文、454 が均整 5 子葉 2 反転唐草文である。445 は平安時代末～鎌倉時代、446 は折り曲げ造りであり平安時代後期・末、448 は内区と外区の境に区画線を廻らす領貼付け造りで、法住寺殿や鹿苑寺で出土例があり室町時代のものと考えられる。454 は、中心飾りが 5 子葉で唐草は 2 反転し、第 2 唐草の外側には子葉は付かない。全長は不明であるが、瓦当厚は 4.6cm、上弦幅は 21.6cm である。側面は一面成形である。454 は 14 期土坑 0815SX から出土した。

455・456 は玉縁式丸瓦である。全長は 29.0～30.5cm、幅 14.1～14.2cm、体部外面は縱板ナデ、体部内面はコビキ B で吊り紐痕を残すが、棒状叩きはみられない。側面は二面成形である。455・456 共に区画溝である溝 0002SD から出土している。

457・458 は平瓦である。長さ幅等も不明である。凹面は丁寧な横板ナデで、凸面は離れ砂に縱板ナデ、側面は一面成形である。457・458 共にこれも区画溝の溝 0002SD から出土している。

これらの瓦の内で多く出土している、451～453 の軒丸瓦、454 の軒平瓦、455・456 の丸瓦、457・458 の平瓦は、戦国時代～江戸時代前期の製作技法²⁾ をもち、北区のマチヤ A とマチヤ B の境界溝である溝 0002SD で出土量が多いことなどから、マチヤ A 北側の松平下総守京屋敷の瓦



図 70 遺物実測図 I2 (1317SX (416～423)、1215SX (424)、0109SX (425)、0723SX (426)、
1215SX (427～429)、溝 0002SD (430～435)、穴藏 0004SK (436)、井戸 0012SE (437)、
0630SD (438～443)、1116SX (444))

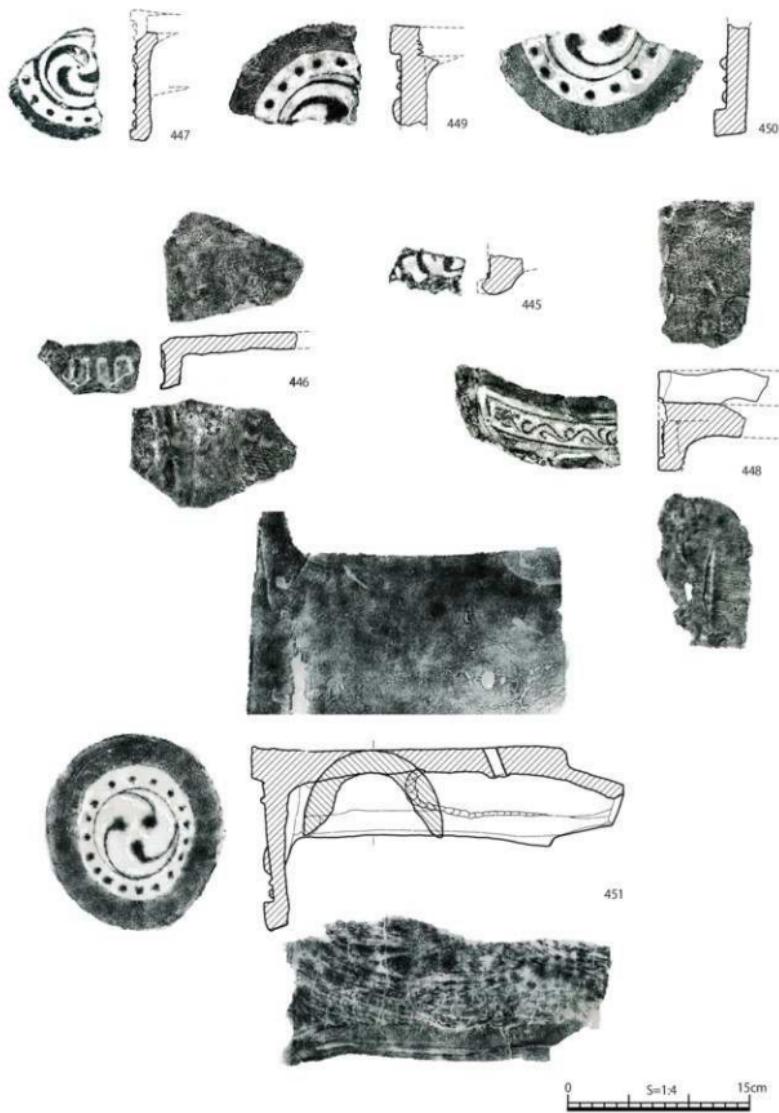


図 71 遺物実測図 13 (1102SX (445)、1011SX (446・449・450)、溝 0310SD (447)、0953SX (448)、0815SX (451))

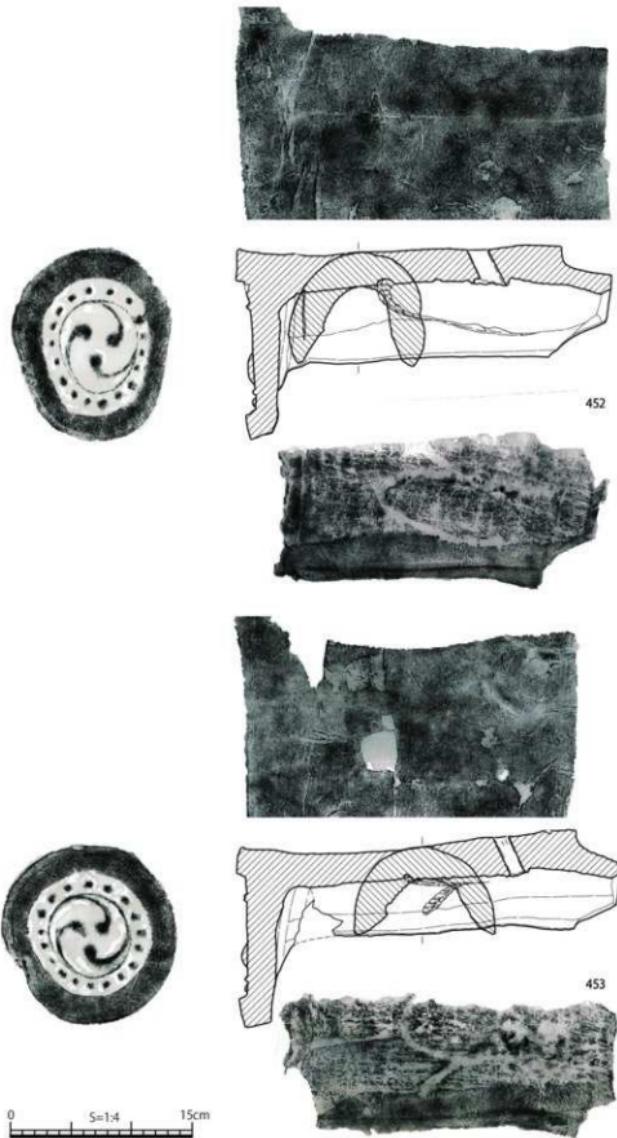


図 72 遺物実測図 14 (0815SX (452・453))

である可能性が高いと考えられる。

また、大型軒丸瓦 449・450 は、10 期土坑 1011SX より出土していて、瓦の所用先と詳細な時期が判明すると、この 10 期の年代を補強・補正してくれるものと期待される。

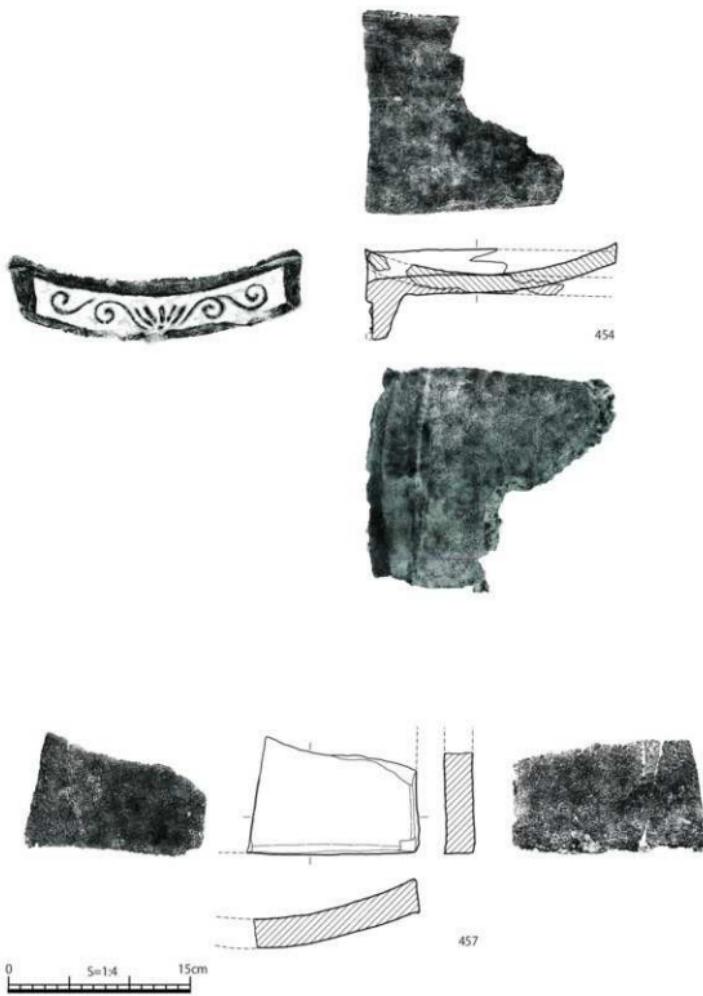


図 73 遺物実測図 15 (0721SX (454)、溝 0002SD (457))

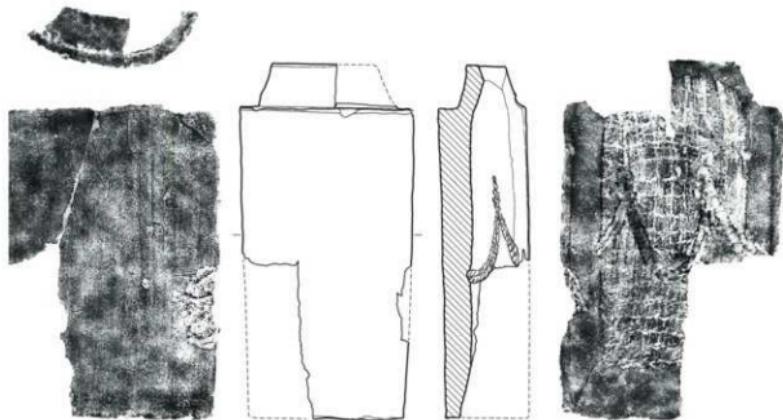
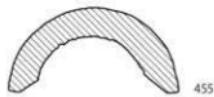
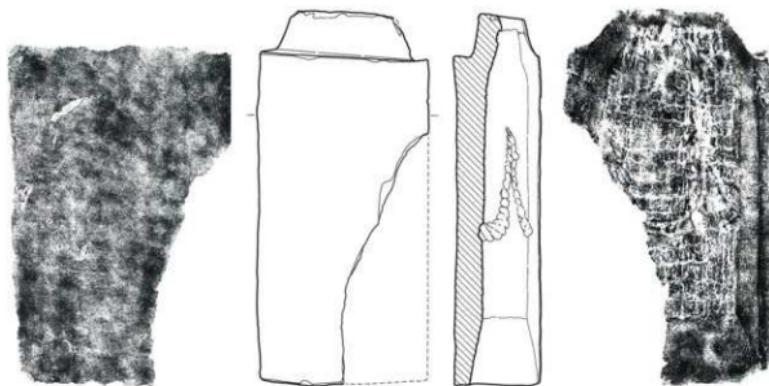


図 74 遺物実測図 16 (溝 1002SD (455)、溝 0002SD (456))

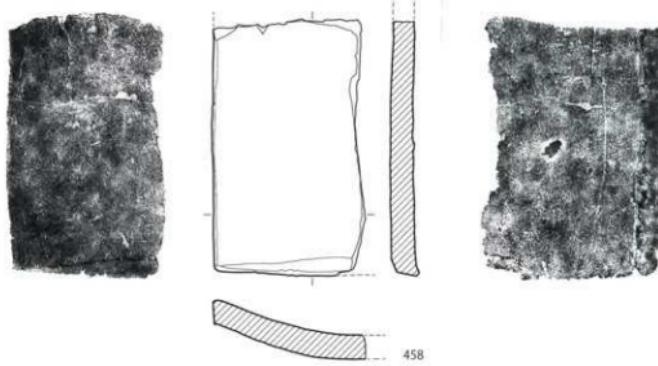
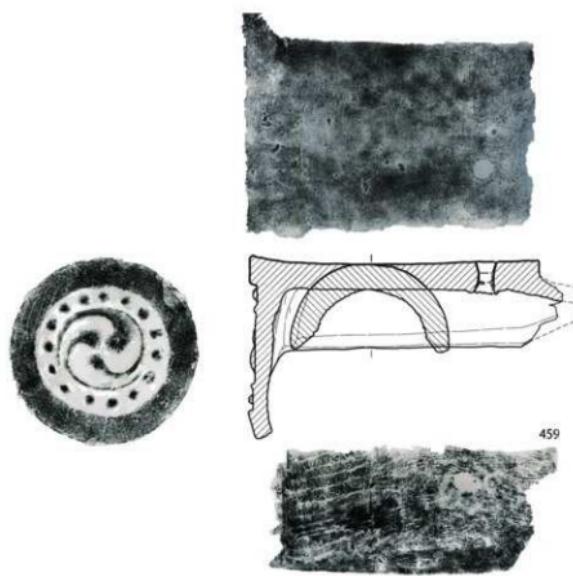


図 75 遺物実測図 17 (溝 0002SD (458)、0624SX (459))

3. 鉄製品（図 76）

鉄製品は、刀子・小柄・短刀・菜切包丁・釘類（釘・鎧等）が出土している。

460・461は刀子か小柄とみられるもので、460は小柄の切先の可能性もあるもので、461の小柄は銅製の柄を備える。2点ともに3面包含層から出土している。

462～464は短刀である。短刀といってもどの様な用途に用いられていたかは不明である。

462が15期土坑0118SXより、463が2面包含層より、464が3面包含層より出土している。

465・466は菜切包丁である。465が14期土坑1320SXから、466が14期土坑0808SXから出土している。

467は今回出土資料中で最も大型の釘で、復元長は19.5cmである。4面の包含層から出土した。釘類はその他にも約63点と多くを占める。最も小さいものは3cm（1寸）余りで、最大のものは実測した467の19.5cm（6寸）で、破片としては4面包含層を中心に出土している。

4. 銅製品（図 77）

銅製品は、次項の銅鋳造関連品に示す坩堝・取鍋・銅滓等の4面からの出土から、直接的な炉や製作道具の出土はみられなかったものの、調査区の近くで製造がおこなわれていたことは疑えない状況である。このため、下層から上層までの出土銅製品について、実測可能なものを網羅的に集めたものが図77である。全てが調査区周辺で作られたものではないが、この中に生産品が含まれている可能性はある。

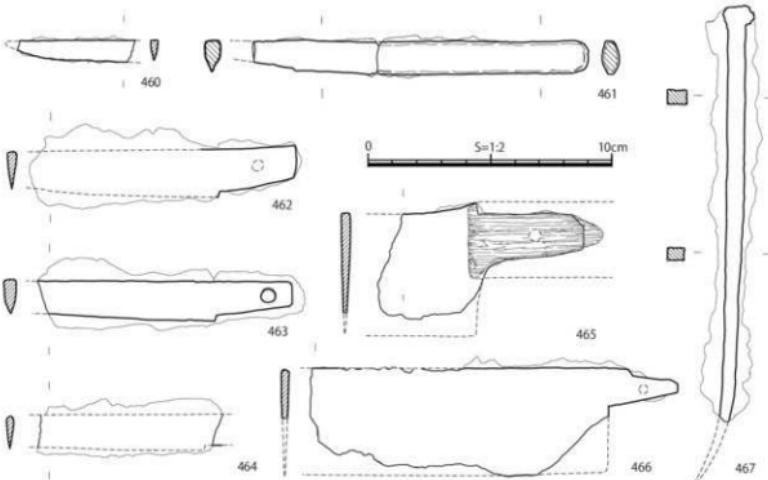


図 76 遺物実測図 18 (0118SX (462)、1320SX (465)、0808SX (466)、3面包含層 (460・461・463・464)、4面包含層 (467))

468・469・470・471は銅金具の内でも、座金具といわれるものである。468は菱形を二重の溝で8分割とし、中央に釘穴（φ0.5cm）を穿つ。469は22弁の菊座をもち、中央に方形釘穴（0.3×0.5cm）を穿つ。470は文様をもたない円形金具の周縁を折り曲げたもので、中央に方形釘穴（0.5×0.4cm）を穿つ。471は円形薄板無縁の無文金具で、中央に方形釘穴（0.8×0.7cm）を穿つ。468は17期土坑0033SXから、471は6期土坑0339SXから、469は3面包含層から、470は2面包含層から出土した。

472・473は円形（φ2.1～2.3cm）の何かの容器の蓋か飾り紐を通す金具と思われるもので、摘みもしくは紐通し用の薄板の帯が上部に付く。472は16期穴蔵0602SKから、473は16期穴蔵0603SKから出土した。

474・475・476・477は製品なのか加工途中の薄板材なのは不明であるが、474には銅の針金を輪にした引紐金具を付けている。474・477は4面の包含層から、475は17期土坑1124SXから、476は16期土坑0621SXから出土した。

478は6mm幅の板材の縁に打たれたU字状の縁金具で、釘穴径1.5mmが2カ所、6cm開けてみられる。478は土坑1313SXから出土した。

479は小判型の銅の薄板に、打ち出し技法で宝珠1個と二重圈線文1個を打ち出したものである。用途は不明である。479は1面土坑0624SXから出土した。

480は建築材や仏具等の銅金具で、宝珠部分を欠く。長押や欄干等の隅部分に使用されたのではないかと思われるが詳細は不明。厚い所で3mmの厚みがあり、方形釘穴が2穴（0.3×0.3cm、0.7×0.7cm）みられる。480は2面包含層より出土した。

481は六花弁状の銅金具であるが、釘穴は確認できない。表面には樹木状のものと、地をナマコ打ちし、その上に金箔を押す。481は3面包含層から出土した。

482は厚さ1mmの円盤状のもので、加工中のものかもしれない。用途は不明である。482は1面土坑1139SXから出土した。

483は完形品で、金具幅5mm、金具厚3mm、断面山形、棒状材又は鞘状のものを締める締金具とみられる。483は6期土坑0321SXから出土した。

484は完形品で、捩り釘とみられる。484は2面包含層から出土した。

485・486は断面四角の棒状品で、加工材とみられる。485は15期土坑0128SXから、486は16期土坑1132SXから出土した。

487は円形の中央に円孔（6mm）があり、その周りに円文8個を配するもので、加工中のものである。用途は不明である。487は16期穴蔵0045SKから出土した。

488・489は488が円形の透し板で、489が針金状の棒状材で作られた、燈心押えかと思われる。488・489は16期土坑0624SXから出土した。

490は鍋の口縁部（復元口径23cm）の破片と思われるものである。490は17期土坑1124SXから出土した。

491～499はキセル（煙管）の破片である。491～495はキセルの雁首である。496・497は肩

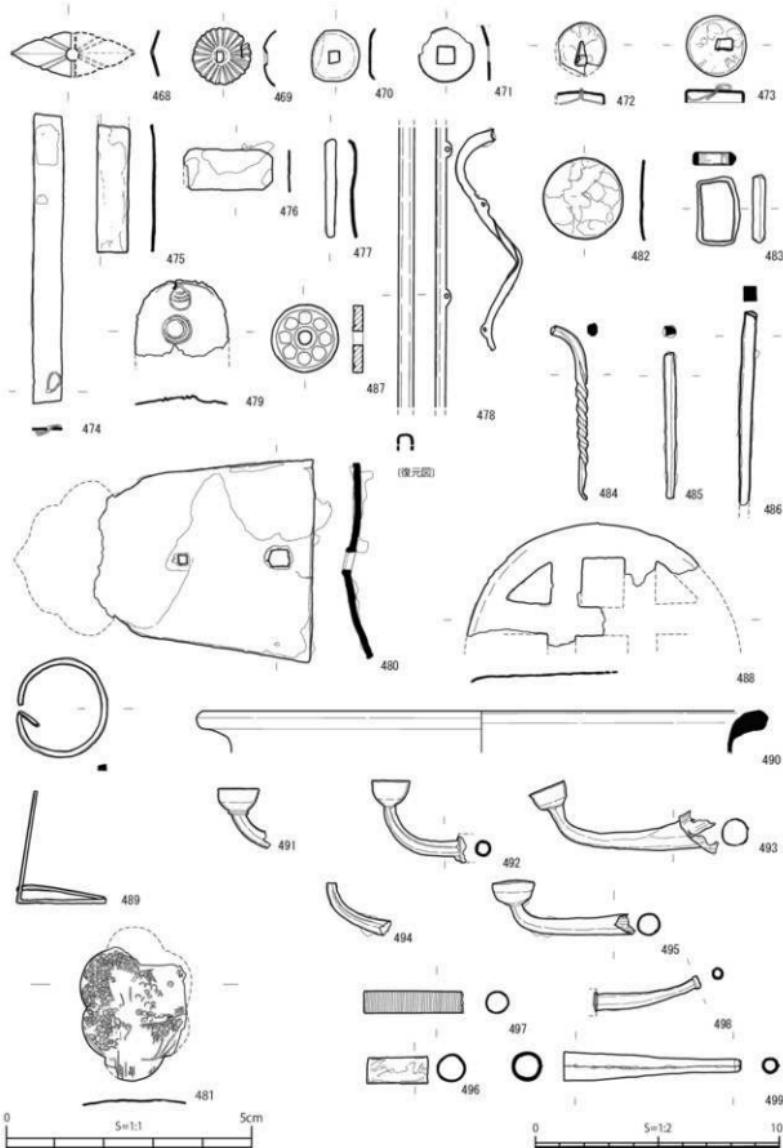


図 77 遺物実測図 19 (0039SX (468)、0339SX (471)、0602SK (472)、0603SK (473)、1124SX (475・490)、
0621SX (476)、1313SX (478)、0624SX (479・488・489)、1139SX (482)、0321SX (483)、0128SX (485)、
1132SX (486)、穴藏 0045SK (487)、井戸 0050SE (493)、0723SX (495)、穴藏 0602SK (496)、1113SX (498)、
井戸 0018SE (499)、1面包含層 (494)、2面包含層 (470・480・484・491・492)、3面包含層 (469・481)、
4面包含層 (474・477・497))

である。498・499は吸口である。491は火皿下の部分に補強帯をもつこと、498は吸口部に補強帯を付加していることから、この二つは最も古い一群（古泉 I A）³⁾に属するものである。比較的古い形式のキセルのみが出土している。490は17期土坑1124SXから、491・492・494は2面包含層から、493は15期井戸0050SEから、495は15期土坑0723SXから、496は穴藏0602SKから、497は4面包含層から、498は17期土坑1113SXから、499は16期井戸0018SEから出土した。

これらのお他にも、四面体の細い棒状品や小判型の薄板等がある。銅製品の最も古いものは、471円形薄板無縁の無文金具が6期土坑0339SXから、477・483・497が4面包含層から出土している。出土位置は、北区よりも東区と南区に多いことが指摘できる。

5. 錢貨（図78）

500～534の19種類35枚と、判読ができなかった535の1枚と、536～538の3枚の無文銭がある。渡来銭は18種29枚である。最も古い銭種は開元通宝（初鋤は武徳4年（621））で、最も新しい

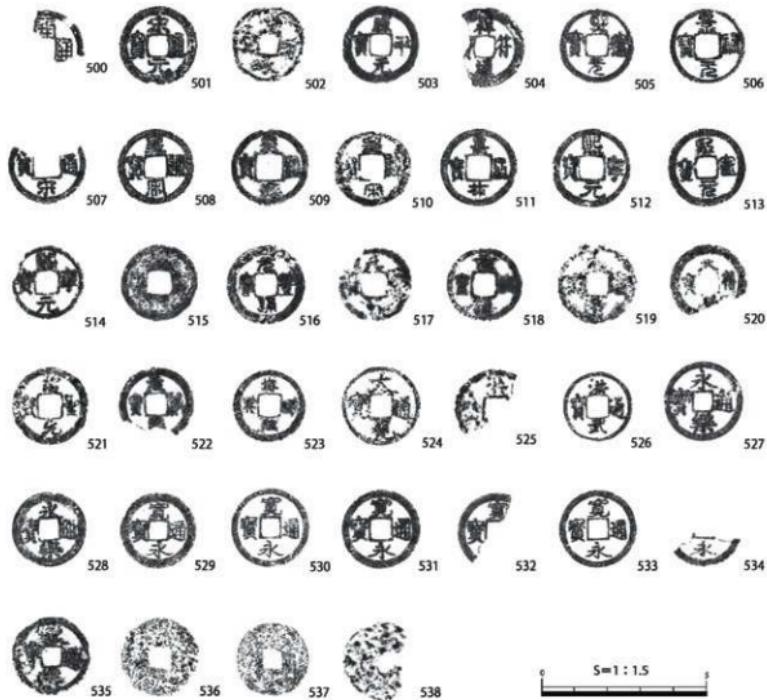


図78 遺物実測図20（0919P（500）、満0201SD（501）、0623SX（502）、0318SX（504）、穴藏0013SK（507）、0023SX（508）、0624SX（517）、0335SX（518）、0723SX（519）、0907SX（520）、0934SX（521）、0621SX（523）、0301SX下層（524）、0020SX（529～532）、0346SX（536）、1143SX（538）、1面包含層（515）、2面包含層（506・509・511・512・526・534・537）、3面包含層（503・505・510・513・514・516・522・525・527・528・533）、4面包含層（535））

ものが永楽通宝（篆書・初鋤は永楽9年（1411））である。九州で出土の多い洪武通宝は2枚で、無背である。日本の錢貨は、529～534までの古寛永通宝6枚のみである。この内、529～532の4枚は重なった状態で出土した。

なお、536の無文錢は、11期・京XII期古（後半）の土坑0346SXから出土している。堺の環濠都市遺跡で出土した、16世紀中頃から後半の錢范にこの無文錢があり注意される。⁴⁾

6. 銅鑄造関連品（図79）

この銅鑄造関連品とは、溶解炉・坩埚・取鍋・屏風・羽口・鋳型・銅滓等であるが、調査では坩埚・取鍋・銅滓のみであった。鋳型と考えられるものは、真土の外れた土型の小片が出土したのみで、形状が判明するものは無かった。

539～550は銅の溶解物が内面に付着した、半球状の坩埚である。539～546は口径が6.2～7.6cm、高さが2.5～2.9cmで、小型の坩埚である。547～550は口径が9.0～10.2cm、高さが3.2～3.7cmである。今回、これ以上の大きさの坩埚は出土していない。調査地南側のNo③平安京左京四条四坊四町の調査では、江戸時代前期の鋳造関連遺物が出土しているが、そこでは口径19cm、高さ8.3cmや、口径が約23cm、高さが10cm、口径が28cm、高さが約12cmといった大きなものが出土している。539・542・543・548は4面包含層から、540・544・545・547・549は3面包含層から、541・546は2面包含層から、550は16期の土坑1113SXから出土した。

551・552は銅の溶解物が内面に付着した、内溝する碗状の取鍋である。552は柄が共造りになったもので、551も同じ形状のものである可能性が高い。

551・552は4面の12期・京XII期中・新で東壁際の土坑1437SXから出土した。確実に、調査区内で江戸時代前期に鋳造が行われていたことを示す資料とみることができる。

553は、不純物が混ざった長辺7.9×短辺6.5×厚み2.3cmの銅滓である。553は15期の井戸0150SEから出土した。

坩埚や取鍋の大きさは、生産物の大きさに規定されるものであり、本調査区内で製作されてい

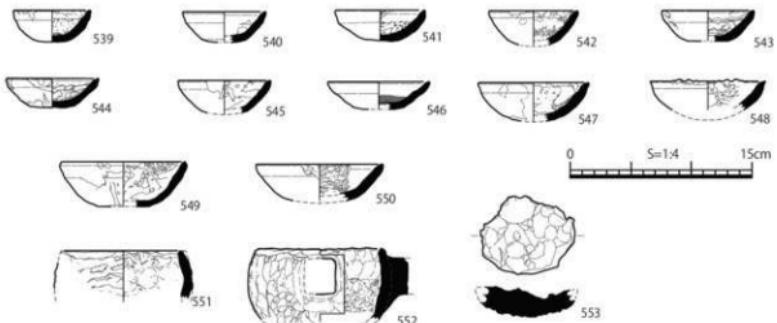


図79 遺物実測図21（井戸1113SE（550）、1437SX（551・552）、井戸0150SE（553）、2面包含層（541・546）、3面包含層（540・544・545・547・549）、4面包含層（539・542・543・548））

たものが比較的小型の製品を扱っていたことを示すものであろう。また、その生産年代が、12期・京XII期中・新まで確実に上がることが明らかとなった。さらに、その生産位置が、調査区東壁周辺から東側が中心であったことが、土坑 1437SX や土坑 1113SX などの位置から推測される。

7. 石製品（図 80・81）

石製品には滑石製石鍋（181・7-8 期洪水遺構 0310SD、14 期土坑 0205SX、14 面土坑 0808SX 等）、砂岩製碁石（7 期井戸 0934SE）、砂岩製砥石（7 期土坑 0307SX、7-8 期洪水遺構 0310SD、17 期井戸 0045SE）、結晶片岩製砥石（11 期土坑 1470SX）、チャート製（鞍馬石）火打石（7 期井戸 0934SE）、軽石製壺すりカ（17 期井戸 1128SE）、笏谷石製不明品（3 面包含層）、花崗岩製春日燈籠火袋（17 期井戸 1111SE、16 期土坑 1125SX）、花崗岩製石臼（16 期穴藏 0602SK）、花崗岩製漬物石（14 期柱穴 0210P、1 面包含層）等があり、他に下記の硯と茶臼がある。

1) 砚（図 80）

硯は調査区内から 50 点出土した。この内、実測した 4 点も含め頁岩製（高島石、鳴滝石カ）が 45 点、結晶片岩製が 4 点、赤色系輝緑凝灰岩製が 1 点ある。

554 は頁岩製（高島石、鳴滝石カ）で、ほぼ完形品である。硯の岡中央が極端に舟底形に擦り減る。硯背（裏面）には、線刻で中央に所有者名と左側に住所らしきものが「。。之□江 □□□丁」と見えるが判読できない。554 は 4 面包含層から出土した。

555 は頁岩製（高島石、鳴滝石カ）で、出土品中では最も小型の硯であり、完形品である。555 は 4 面包含層から出土した。

556 は頁岩製（高島石、鳴滝石カ）で、硯面丘中央を舟底形に深く擦り、軽量化のためか硯背（裏側）を斜めに切り取る。器面に墨痕が残る。556 は 4 面包含層から出土した。

557 は赤色系輝緑凝灰岩製（若狭鳳石、長門赤間石カ）の大型硯の小破片である。硯縁を二段にて落すもので、硬く重い。ここで製作したものであるかは、分からない。557 は 11 期土坑 0345SX から出土した。

他に製作途中とみられる半製品、破損品、硯の大きさに切られた加工材などがある。4 面では、2 期の土坑 0363SX から頁岩製が 2 個、土坑 0502SX から輝緑凝灰岩製が 1 個、5 期の土坑 0354SX から頁岩製が 1 個、6 期の土坑 0338SX から頁岩製が 1 個、土坑 0909SX から頁岩製が 1 個、7 期の土坑 0305SX から頁岩製が 1 個、土坑 0335SX から頁岩製が 1 個、柱穴 0522P から頁岩製が 1 個、土坑 0902SX から頁岩製が 1 個、土坑 0911SX から頁岩製が 1 個、土坑 0928SX から輝緑凝灰岩製が 1 個、土坑 0974SX から頁岩製が 1 個、土坑 0977SX から頁岩製が 1 個、土坑 1421SX から頁岩製が 1 個、7-8 期の洪水遺構 0310SD から頁岩製が 3 点、8 ~ 11 期の溝 1446SD から輝緑凝灰岩製が 1 個、9 期の土坑 0312SX から頁岩製が 1 点、11 期の土坑 0345SX から頁岩製が 1 個、土坑 0954SX から頁岩製が 1 個、13 期の土坑 0921SX から頁岩製が 1 個、4 面包含層から頁岩製が 3 点出土した。3 面では、14 期の溝 1317SD から頁岩製が 1 個、土坑 1302SX から頁岩製が 1 個、3 面包含層から頁岩製が 1 個出土した。2 面では、15 期の土坑 0723SX から頁岩製が 1 個、井戸

0719SE から頁岩製が 1 個、土坑 0206SX から頁岩製が 1 個、土坑 1205SX から頁岩製が 1 個、土坑 1216SX から頁岩製が 1 個、土坑 1218SX から頁岩製が 1 個、2 面包含層から頁岩製が 1 点出土した。1 面では、16 期の土坑 0621SX から頁岩製が 1 個、土坑 1112SX から頁岩製が 1 個、土坑 0602SX から頁岩製が 1 個と輝緑凝灰岩製が 1 個出土した。17 期の土坑 0605SX から頁岩製が 1 個、1 面包含層から頁岩製が 1 個出土した。

これらのことから、2 期の京 VIII 期中には土坑 0363SX や土坑 0502SX から頁岩製と輝緑凝灰岩製

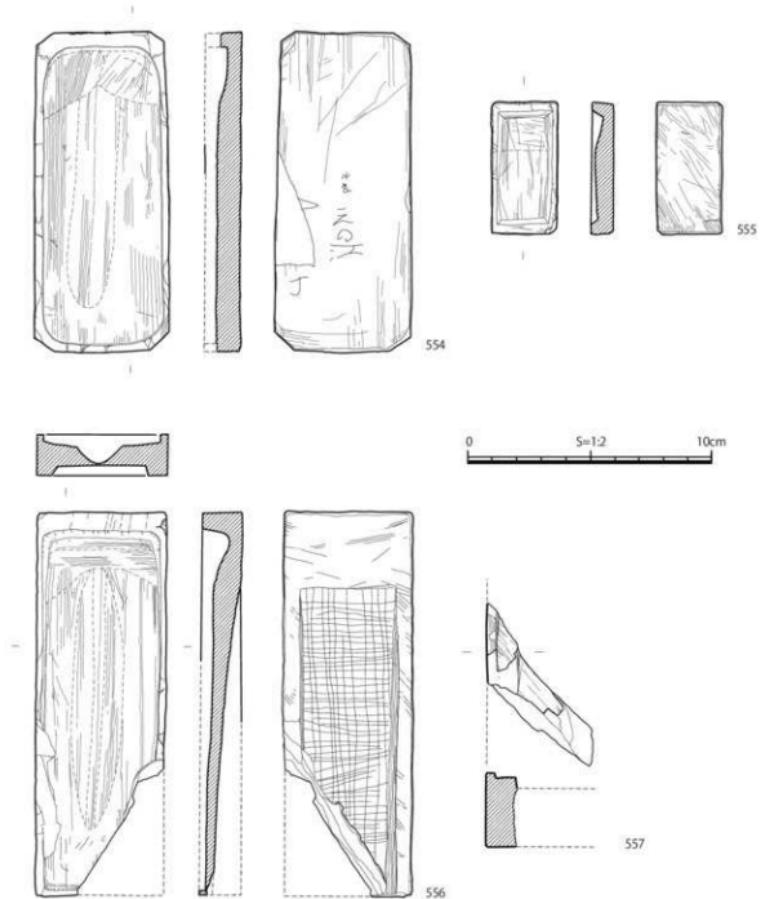


図 80 遺物実測図 22 (4 面包含層 (554 ~ 556)、0345SX (557))

の出土があることから、既にマチヤの位置は不明ながら一画で硯（・砥石）の生産が既に始まっていたことが明らかとなった。さらに、5期の土坑0354SXの存在、6期の土坑0338SX・土坑0909SXの存在から、マチヤBの建物0550SBにおいて生産が継続されていたことも明らかになった。さらに、7期には、土坑0305SX・土坑0335SX・土坑0911SX・土坑0928SX・土坑0974SX・土坑0977SX・土坑1421SXの存在からも、マチヤBの建物0560SBにて主に生産が行われ、それは南側のマチヤであるCやDにも拡大して生産が行われていた可能性が高いように思われた。

2) 茶臼 (図81)

茶臼は7点出土した。この内下臼が5点、上臼が2点あり、上臼と下臼がセットとなるものが1セットある。

558は輝緑岩製の下臼で、白面は端まであり8分割とする。受皿径(40.0cm)、受皿深さ(3.0cm)、軸孔径(ϕ 2.0cm)、含み0.2cmで、白底面は浅い抉りとする。一乘谷朝倉遺跡出土例(三輪1978)に近いものと考えられる。559は15期土坑0105SXから出土した。

559は砂岩製の下臼で、白面は端まであり8分割とする。溝は深い溝間に浅い溝を設ける。受皿径(39.0cm)、軸孔(方形)1.8×1.8cm、含み0.2cmで、白底面は深い抉りとする。被熱している。559は17期穴蔵0603SKから出土した。

560は斑レイ岩製の上臼と下臼のセットで、白面は端まであり8分割とする。上臼小片と下臼

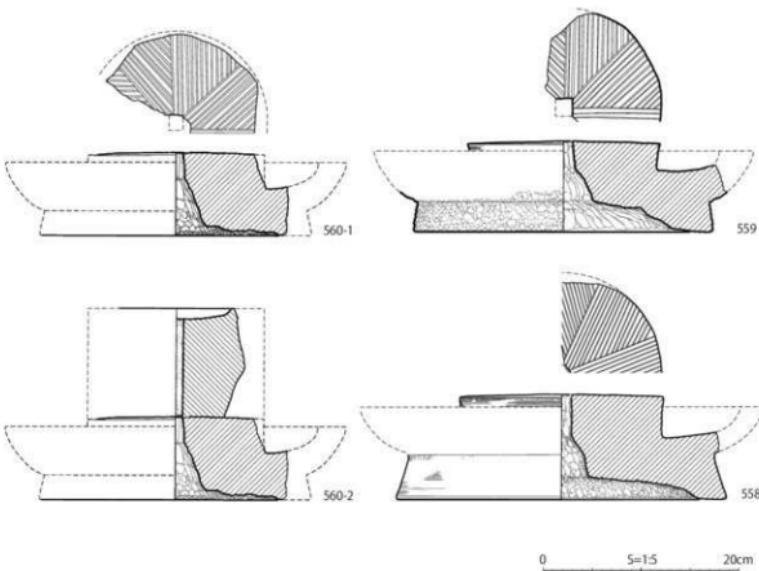


図81 遺物実測図23 (0105SX (558)、0603SX (559)、0012SX (560))

1/2が残る。受皿径（35.0cm）、軸孔下臼（方形）1.5×1.5cm、含み0.2cm、供給孔径（円形）1.5cm、窪み径11.2cm、窪み深1.0cm、上縁幅（7.0cm）である。560は17期井戸0012SEから出土した。

他の3点は16期穴蔵0602SKで花崗岩製上臼が、14期土坑0808SXで砂岩製下臼が、17期土坑1124SXで砂岩製下臼が出土している。

実測した3点は、15期や17期から出土しているが、どれも戦国～江戸時代前期³⁾のものであり、伝世していた可能性が高い。

8. 貝・骨

貝と骨は実測を行っていないが、出土遺構を記しておく。

アカニシが、11期土坑0980SXから1個、15期土坑0723SXから1個、16期井戸0053SEから1個、16期土坑1143SXから2個、16期土坑0111SXから1個、17期土坑0015SXから1個、4面包含層から2点出土した。

アワビが、16期土坑0111SXから1個、17期土坑0039SXから1個、17期土坑1110SXから1個が出土した。

ウチムラサキ（オオアサリ）が、15期土坑1124SXから1個、16期土坑1124SXから1個、17期井戸0045SEから3個、17期土坑0617SXから1個が出土した。

トリガイが、16期井戸0055SEから1個、17期土坑0617SXから1個、17期土坑1142Xから1個、17期土坑1124SXから1個が出土した。

サザエが、15期土坑1225SXから1個、16期土坑1143SXから1個、16期土坑1110SXから1個が出土した。

ヤマトシジミが、16期穴蔵0602SKから1個、4面包含層から1個出土した。

ハマグリが、17期土坑1124SXから1個、17期井戸1120SEから1個出土した。

アサリが、17期井戸1120SEから1個出土した。

マグロの背骨が17期土坑0033SXから1個、マサバの主上顎骨が17期井戸0045SEから1個、鳥の脚骨が16期土坑1124SXから1個、犬の中支骨が17期井戸1120SEから1個出土した。

貝類は、最も古い遺構がアカニシを出した11期土坑0980SXで、戦国～江戸時代前期の時期である。一般に食されるようになるのは、やはり江戸時代からであることをよく示している。

〔引用参考文献〕

- 1) 鶴柄俊夫「京都・土師器皿の分類と変遷」『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社、1999年
- ・松藤和人「同志社キャンパス内出土の上器・陶磁器の編年」『同志社キャンバス内出土の遺構と遺物』同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編二、同志社大学校地学術調査委員会、1978年
- ・宇野隆大他「京都大学埋蔵文化財調査報告」Ⅱ、京都大学埋蔵文化財研究センター、1981年
- ・横田洋三「出土上・下師恩扁平試案」『平安京跡研究調査報告』第五輯、古代学協会、1981年
- ・横田洋三「土師器皿の分類と編年綱」『平安京跡研究調査報告』第十一輯、古代学協会、1984年
- ・横田洋三「土師器皿（Bタイプ系）の器形、規格の変化と製作技術について」『平安京跡研究調査報告』第十二輯、古代学協会、1984年
- ・伊野近富「『かわらけ』考」『姫京都府理藏文化財調査研究センター五周年記念論集』1987年
- ・中世土器研究会編『概説 中世の上器・陶磁器』真陽社、1995年
- ・九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000年

- ・全国シンポジウム「中世窯業の諸相」実行委員会編『中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年一』2005 年
 - ・御瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター編『江戸時代のやきもの』2006 年
 - ・藤澤良祐「総論」「愛知県史 別編窯業 2 中世・近世 濱戸系」愛知県、2007 年
 - ・角谷江津子『近世京焼の考古学的研究』雄山閣、2016 年
 - ・関西陶磁研究会編『軟質施釉陶器の成立と展開』2004 年
 - ・関西陶磁研究会編『京焼の成立と展開』2006 年
 - ・家原圭太「燒造窯」「平安京在京二条三坊一町」京都文化博物館調査研究報告第 16 集、2004 年
- 2) 山口誠司「製作技法からみた畿豐期城郭の瓦—伏見城豐後橋北詰出土資料を中心に—」『中世城郭研究』第 31 号 中世城郭研究会 2017 年
- ・山崎信二「近世京都の瓦」「近世瓦の研究」同成社 2008 年
 - 3) 古泉弘編『江戸を覗る』柏書房、1983 年
 - ・都立学校道路調査会『江戸 都立一橋高校地点』1985 年
 - 4) 横木晋一「貨幣考古学序説」慶應義塾大学出版会、2009 年
 - 5) 桐山秀穂「日本における茶臼の研究」「古代学研究所研究紀要」第 6 程、古代学協会、1996 年
 - ・桐山秀穂「蓮華文系茶臼の型式と編年」「考古学雑誌」第 99 卷第 2 号、2017 年

第5章 総括

第1節 竹田法印と洛中洛外図屏風

1) 竹田家の家系

竹田家は、室町時代～戦国時代の京都において、隆盛を誇った医師・薬師の家系¹⁾である。

竹田家は藤原摂家九条家の流れをくむ竹田中納言公定からと伝えるが、その出自はよくわからない。明確なのは、中祖である昌慶からである。江戸住まい直後までの竹田家当主の系譜をみてみる。

昌慶は、応安2年（1369）明國に入り、金鯱道士に従い医学や牛黃丹等の秘方秘術を受け、永和4年（1378）に彩色本草等の医学書や鍼灸治療の経穴を示す銅人形をもって帰朝した。足利義満に仕えて法印に叙され、後円融天皇の侍医になった。三条御倉町に方一町（図82の「竹田すいちく」屋敷地カ）を賜う。康暦2年（1380）死す。

善祐（善慶）は、昌慶の弟と伝えられる。応永17年（1405）死す。

助岳は、『寛政重修諸家譜』には抜け落ちるが、これは『寛永系図伝』に伝うもので、善祐と助岳が混同して記されたのが原因であるという家譜の指摘に従う。助岳は応永19年（1412）に後小松天皇に薬を献じて平癒し、法眼に叙せられ、同28年に稱光天皇不豫に際し医薬を進めて法印に昇る。宝徳2年（1450）死す。

定盛（昭慶）は、康正2年（1456）に、『延寿類要』を撰述した。長禄2年（1458）大型院の病快復の賞として法眼に、応仁2年（1468）足利義政の病氣平癒の功により法印に昇る。永正5年（1508）88歳にて死す。

定祐（秀慶）は、兄である定怡（宋慶）法眼が早世したため継いだもので、極楽寺（院）月海とも記される。後柏原天皇の病氣平癒により法印に叙任。大永8年（1528）79歳で死す。定栄（瑞竹）は、定祐（秀慶）の弟で、禁裏や幕府要人の診療を行っていた。他の兄である高定（薬師寺）や祖舜（大慶寺）は、僧となって、医療を行っていたようである。高定はその後、堺の竹田薬師家の祖となる。定怡（宋慶）の子である定雅（定詮）は大内氏に仕え、萩竹田家の祖となる。

定珪（清誉）は、法眼に、そして天文11年（1542）法印に昇る。足利義輝が天文中の良医を5人上げ、吉田盛方院淨忠、定珪、半井驥庵、瑞策祐竹、友秉坊の順であるとした。『寛政重修諸家譜』では天文19年（1550）に、『竹田家譜』では天正17年（1589）75歳にて死すと記す。弟に定弦（萬庵）がおり、弘治2年（1556）法眼、天正11年（1583）に法印に叙され、慶長13年（1608）に死す。

定加（雄譽）は、元亀2年（1571）に法眼、天正18年（1590）法印に叙される。豊臣秀吉の病気に当たり、盛方、定珪、驥庵、祐庵、祐乘に看護を怠ったとお咎めを受ける。天正年中、大政所を治療し馬一疋、米三百石あたえられる。文禄2年（1594）明使節の病を太閤の命により薬

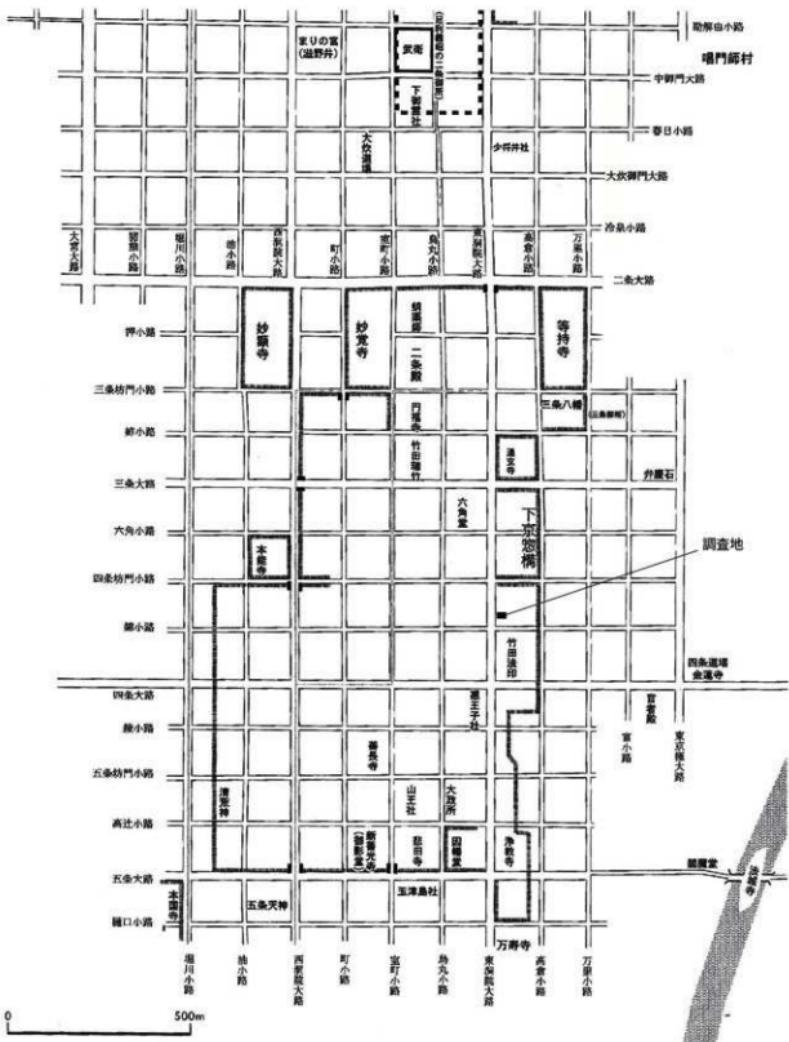


図 82 戦国期下京復元図と調査地（山田 2009 に一部加筆）

をあたえ贈答を得る。徳川秀忠の姫君に薬を奉り書状を賜る。慶長5年（1600）55歳で死す。

定宣は、慶長11年（1606）に法眼、慶長13年に徳川家康に拝謁し法印に昇る。元和3年（1617）徳川秀忠より、山城国葛野・相楽郡に本領500石を賜う。これより先、禁裏の療用があるため京都と江戸を隔年に住まう。慶安元年（1648）76歳で死す。兄弟（長男）の定白（宗雄）は法眼に叙し、豊臣秀頼に仕え元和元年（1615）大阪城で討ち死に。兄弟（次男）の秀慶は、最初秀頼に仕へていたが、父の遺命により大阪を去る。徳川家康に拝謁し、のち法印に叙す。元和元年死す。兄弟（弟）の定賢は元和3年に法眼に叙し、元和5年より紀伊徳川家に属し、紀州竹田家の祖となる。

定勝は、兄の定昌が寛永20年（1643）に没したため、建仁寺住職から還俗し、正保元年（1644）に徳川家光に拝謁し、寛文元年（1661）日番医となり、寛文5年（1665）法印に叙して御側衆になり、これより江戸に住まう。元禄7年（1694）65歳で死す。

これ以降の竹田家は、元禄13年（1700）『侍医分限記』²⁾によると、37家の奥医の記載があり、上から三番目の官位であった。

「知行高千三百石 外御役料二百俵（匙）

父養寿院 辰に五十三歳 竹田法印（定好）

屋敷小川町依田三右衛門隣」

2) 竹田家と「竹田ほういん」

調査地が竹田法印屋敷かどうかについては、二つの資料が符合することから動かないであろう。

一つは戦国時代の都市景観を描いた『洛中洛外図屏風（上杉本）』³⁾（巻頭図版1・2、図85）で、屏風絵であるがゆえの問題も多いが、それ以上に当時の京都の地理的な位置関係を押えたものとしては、史料的な価値が高い。竹田法印屋敷は、右隻三扇の中段にあって、室町通から東へ二筋目の東洞院通を追うと、祇園会で脇わう四条通があり、その一筋北の錦小路の北側であることが判明する。

もう一つは、大永2年（1522）9月14日付『竹田法印定盛請文書』『蟻川家文書』⁴⁾に記された、「東洞院東頬 南北者（錦少（小）路 四条坊門）一町、東西廿五丈」で、それは図82～84に示した範囲で、その規模まで明らかである。

しかし、この大永2年（1522）『竹田法印定盛請文書』の竹田法印とは、『大日本古文書』は「定盛」とするが、『実隆公記』が永正5年（1508）に88歳で没したと記している内容と整合しない。大永2年に竹田家で法印であったのは、『竹田家譜』によれば定祐（秀慶）である。この文書は、定祐（秀慶）が73歳の時に出したものと考えられる。

次に検出遺構と『洛中洛外図屏風（上杉本）』に描かれた建物が、同一の建物なのかという点については、どうであろうか。図85よりみてみる。この上杉本の製作時期は、永禄8年（1565）頃に足利義輝が発注していたものであるといわれ、竹田家の家系図では定珪法印の頃と考えられ

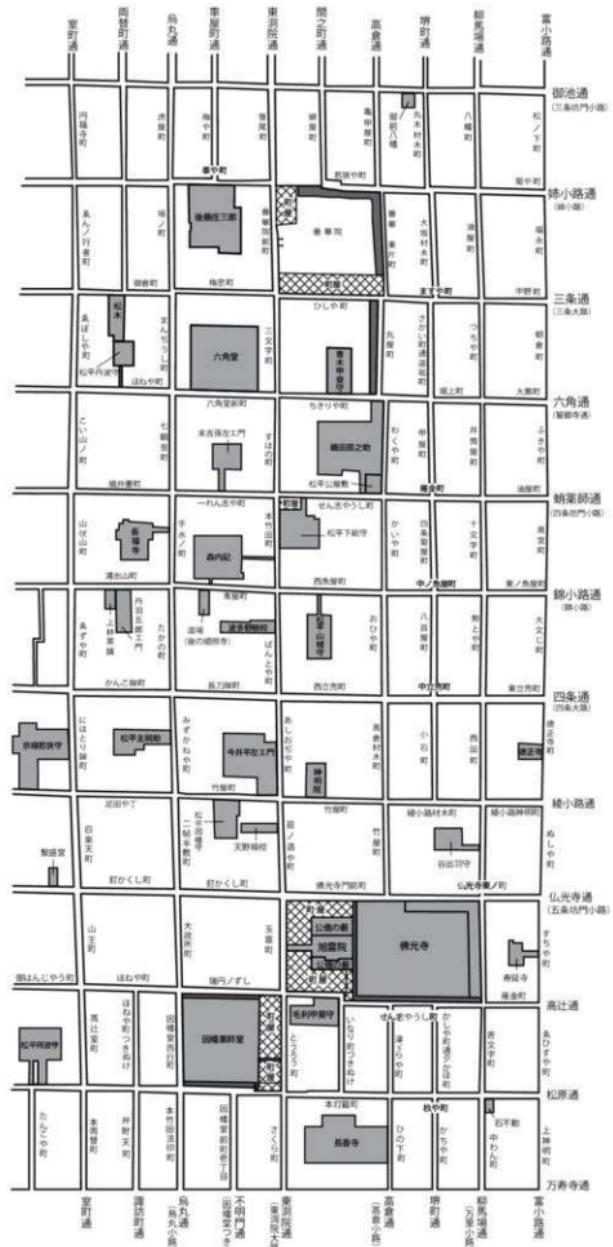


図 83 『寛永十四年洛中絵図』及び『洛中絵図寛永後萬治前』による調査地周辺屋敷図

る。

上杉本では、玄関は東洞院通東頬に板葺の棟門があり、板葺屋根で土真壁の土塀が、東頬と北頬を廻っているのがみえる。しかし、調査においては、門は調査区外と考えられ、土塀は東側溝0201SDの東側にも痕跡を残しておらず不明である。上杉本の2棟の建物についてはどうであろう。『洛中洛外図大観』では「切妻造・板葺・棟板・真壁・漆喰」とするが、妻下側が金雲で見えないため、今回の遺構からの復元建物案や、竹田瑞竹屋敷が同じ2棟で何れも「入母屋造・板葺・棟板・真壁」であることを考えると、2棟共に入母屋造であったと考えることが誤っているとは思えない。規模については西側の建物に南庇が付いていることは明らかであるが、奥の建物については特に特徴的な構造はみられないし、間口も不明である。しかし、僅かにずれて東西に並ぶ点は同じであり、調査地が竹田法印屋敷である可能性は、確実とは言えないまでも可なり可能性

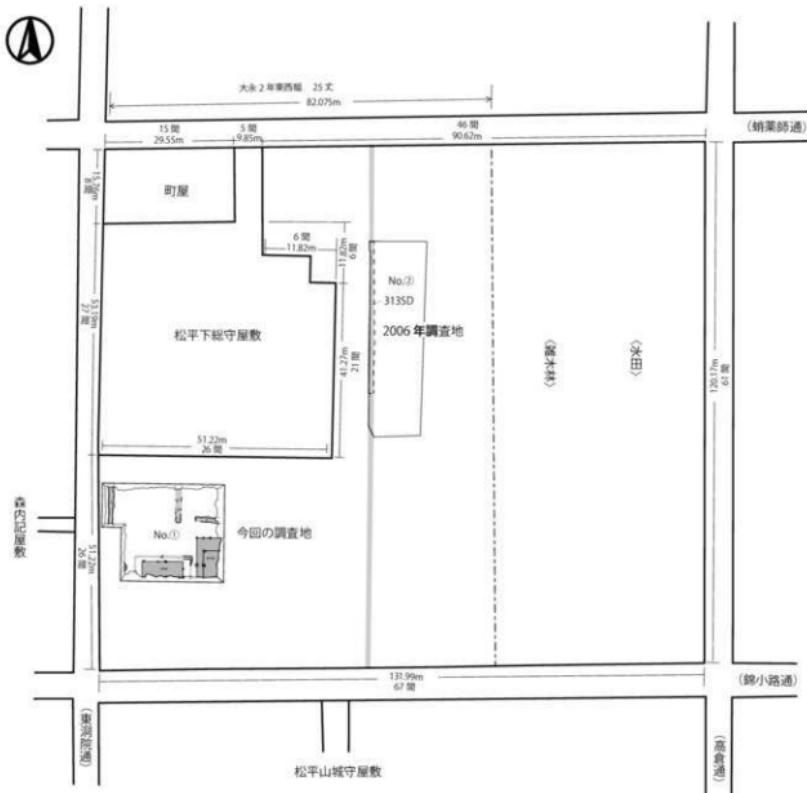


図 84 『寛永十四年洛中絵図』松平下総守屋敷と調査地

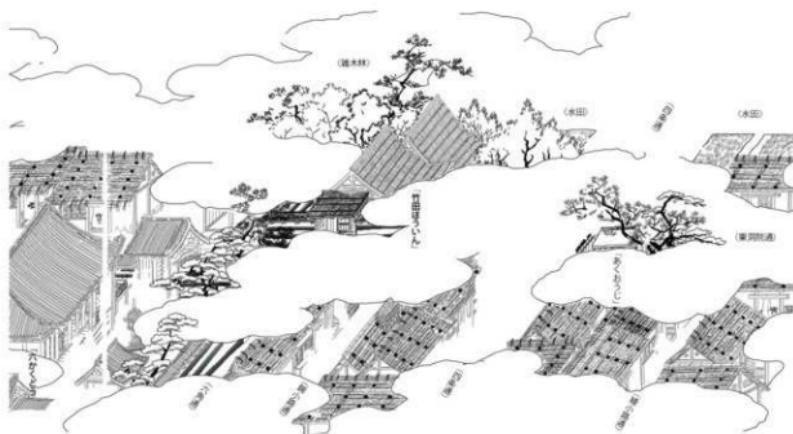


図 85 『洛中洛外図屏風（上杉本）』「竹田ほういん」屋敷周辺線描図

が高いといえよう。なお、敷地北側の描写は全くみられず、絵師にとっては全く興味のわかないものであったことは確実である。

第2節 遺構の変遷

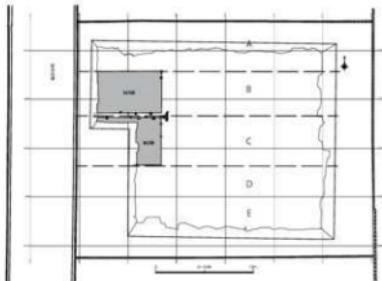
今回は、現地調査後の整理調査に、多大な時間を要した。これまで、平安京左京四条四坊三町における調査について、鎌倉時代後期～江戸時代末・明治時代前期までの遺構変遷を、17期に分けて事実報告のみ羅列してきた。以下には、建物変遷図を中心にして、図86調査地遺構変遷図により明らかとなった点を再確認しておきたい。

【4期以前】

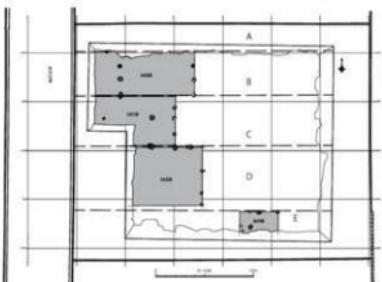
4期以前については、洪水遺構や擾乱遺構のため、建物遺構を復元できていないこともあり建物遺構が無かったような誤解を与えやすいが、2期以降は居住区となり建物があった可能性が高い。ただ、その規模は、同一時期内においては土坑の数をみても明らかなように極めて少なく、散在的に町家建物が存在していたのではないかと思われる。

ここで注目される遺物に、硯（砥石）がある。2期（京VII期中）の近接する土坑0363SXや土坑0502SXから、頁岩製・輝緑凝灰岩製の硯片が出土しており、以後7期（京X期新・京XI期古（初））まで遺物が出土しており、生産が継続していたと思われる。明暦3年（1657）『職人尽歌合』にあげる「硯切（すざきり）」と呼ばれる硯製作工人の工房と住まい、それに見せ棚（店）があったと推測できる。

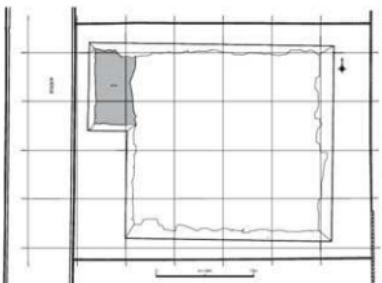
5・6期



7期



7-8期



【5・6期】

5・6期（京X期古・中）については、2棟のみしか建物を復元推測していないが、マチヤA～Dの存在を土坑などから復元した。5期の町屋建物は等質的で、マチヤのウラは土坑等への使用頻度が高くなっているが、敷地オクの使用が顕著に見られない。さらに、敷地オクに明確なマチヤ毎の井戸やトイレの存在が無く、共有している可能性が高いと考えられた。しかし、6期にはマチヤCとマチヤDの建物内と考えられるオクから、ウチ井戸が検出されており、等質なマチヤの中にあっても、次第にマチヤに差が生じているのを感じ取ることができる。

また、この6期は応仁・文明の乱（1467～1477）の時期に相当する。これまでにも指摘があるように、ここ下京では乱の直接の影響は全く感じられない状態である。³³⁾

【7期】

7期（京X期新～京XI期古（初））においても、4棟のみしか建物を復元推測していないが、東洞院通の路側東頬にマチヤが並んでいたことは疑えない。6期から7期への直接な転換は、おそらく6期の建物0550SBと建物0551SBが共に関係したとみられる、火災が原因ではないかと思われる。この火災は床面に焼上層ができるような大火ではなく、上屋を焼くようなものであったと考えられる。その時の火災処理坑である土坑0339SXや土坑0334SXの面積は、東頬の数棟が関係し、被害が生じたものであったと考えられる。

えられる。

7期の建物は、均質ではなく、それぞれに大きさが異なる。境界を示す柵（塀）は、明確に検出できていないが、マチヤ A～E の存在を土坑などから復元した。井戸は、6期同様にマチヤ D に 1 基と、マチヤ E とマチヤ D の境に 1 基の 2 基の、ウチ井戸を検出したが、他のマチヤでは検出していない。しかし、敷地オクの使用状況は格段に増大し、ハナレをもつマチヤ E や、トイレをもつマチヤ D があるなど、各マチヤの自主性が目立ってきてている。また、それ以上に驚かされるのが、その遺構数である。下京の活況を、この遺構数によって直接感じ取ることができる。

【7・8期】

7-8期（京XI期古（初））の東洞院通側からの抉るような洪水（洪水遺構 0310SD）により建物は倒壊し流され、井戸や土坑は埋まってしまったと考えられる。16世紀前葉頃の永正 5～17年（1508～1520）頃の記録類に頻出する、大雨と洪水が原因と考えられる。なお、この洪水は時間軸を経ずして複数回発生した可能性もある。

【8期】

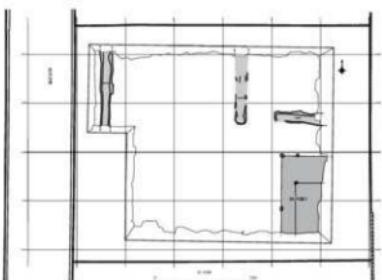
8期（京X期古～京XI期中（初））には、町衆は復興に向けて動いていたと思われるが、この時に応仁・文明の乱で荒廃していた公家や武士中心の上京ではなく、町衆を中心とした下京内に新たに進出し活路を見出そうと考えていた医師・竹田法印が、図 82 の下京の東端であるこの地に新たに居住⁶⁾する。おそらくこの一件には、本能寺が天文法華の乱後に帰洛するにおいて、方一町の用地を土倉の沢村氏から購入した天文 14 年（1545）の時（『熊谷家文書』『本能寺史料』と同じように、災害時などに被災者から土地を買い取り、広大で纏まった土地を手に入れ、転売する土倉等が深く関わっていたと思われる。この「地上げ」ともいえるような不動産売買を、竹田法印自身が行えたとは到底思ないので、ここでもその可能性が高いように思われる。⁷⁾

なお、これはあくまでも想像であるが、土地を手放した町衆の多くが代替え地として再居住した場所（土倉が提供もしくは提示した代替え地）が、『寛永十四年 洛中絵図』⁸⁾や『洛中絵図 寛永後萬治前』⁹⁾の下京懇構外南側の烏丸通松原南下るの、図 83 の「本竹田法印町」や「本武田法印丁」（現在の五条烏丸町）と記された所ではなかったかと思われる。寛文五年（1665）刊『京雀』には「もと竹町 今は五条からす丸町という」とあり、『寛文後期洛中洛外之絵図』では「五条からす丸町」と現町名に移り変わっているのが確認できる。

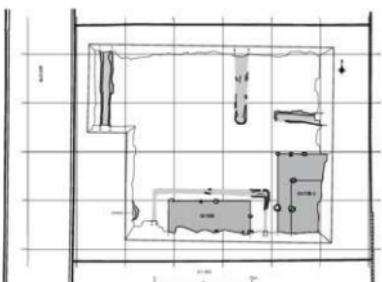
土地売買の完了と共に、大永 2 年（1522）9月 14 日付「竹田法印請文案」「鶴川家文書」が出され、室町幕府に敷地の安堵を請う文書の発給を願い出たといえる。敷地範囲についての検討は、前節で述べたとおりである。「東洞院東頬 南北者（錦少（小カ）路 四条坊門）一町、東西廿五丈」をしており、まさに調査地はその広大な面積の中の南西の一画に偏っている。

この敷地内の一画である調査区内にも、東洞院通東側溝である 0201SD が新たに設けられ、

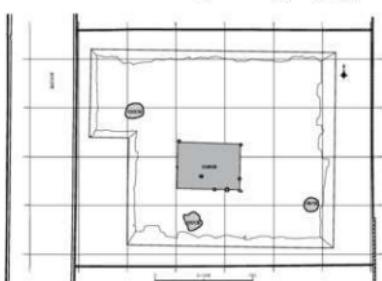
8期



9～11期



12・13期



南北方向の溝 0370SD と東西方向の溝 1446SD が掘られ、東壁に入り規模ははっきりしないが、建物 0571SB-1 が 1 棟建てられた。この他にも、少なくとも作業施設、使用人居住施設、井戸、トイレ等が存在したものとみられるが、調査区内には存在しない。建物 0571SB-1 の性格については、『洛中洛外図屏風（上杉本）』等から、竹田家の当初の主屋ではないかと考えられる。

しかし、天文 5 年（1536）に天文法華の乱^⑩が起こり、下京は全域が焼失し、法華衆徒は洛外に追放され、堺等に逃避した。以後 6 年間、京都において日蓮宗は、禁教となる。建物 0571SB-1 に焼けた痕跡などは無いが、天文法華の乱による破損、破壊が原因の一つと考えることができる。

【9期】

9期（京XI期中）において、天文法華の乱（1536）以後に調査区内で確認できるものは、建物 0571SB-1 と同じ位置に同規模で建て替えられた可能性の高い建物 0571SB-2、建物 0571SB-2 の西側で東洞院通との間に新たに建てられた雨落ち溝 1013SD を備えた建物 0570SB、建物 0570SB の西側に新たに設けられた井戸 0930SE、8期から継続する東洞院通の東側溝 0201SD、溝 0370SD、溝 1446SD、9期に作られた廃棄土坑とみられる土坑 0318SX・0356SX・0312SX・0347SX 等である。

先に考察したように、建物 0571SB-2 が主屋と考えられるのに対し、建物

0570SB は少し異なる。小規模な母屋は桁行 3 間 (5.1m) × 梁行 1 間以上 (1.6m 以上) で、『洛中洛外図屏風（上杉本）』を多用するならば、入母屋造りの母屋が桁行 3 間 (5.1m) × 梁行 2 間 (3.2m) の東西棟に、四面庇 1 間を加え、さらに北側を除くコ字に縁を想定することができる。診察所兼待合的な施設あるいは対面所ではないかと考えられる。先に建てられていた建物 0571SB-2 と東洞院通側の門（棟門）との間の、やや狭い範囲に建てられたと考えられる。調査区内には検出されなかったが、門（棟門）や土塀も、8 期に既に存在したかもしれないし、この建物 0570SB と共に新調された可能性もある。井戸 0930SE は、この建物 0570SB の西側で土塀との間に新たに掘られた井戸である。これらは、どれも同時に作られたように思える。

建物 0571SB-2 は、建物 0571SB-1 の後継建物で、竹田家の主屋と考えられる。やや大きく復元すると、桁行は不明ながら妻は梁行 2 間 (5.6m, N 2.8+(2.8) S) に、南北に庇各 1 間 (2.8m)、東西にも庇各 1 間 (1.4m) が付く、東西棟の入母屋造りの建物を考えることができる。その場合の規模は、『洛中洛外図屏風（上杉本）』を多用し想像を逞しくして、母屋が 6 間 (11.2m, W 1.4+(1.4 × 6)+(1.4) E) ならば庇を加えて 11.2m 余りに、母屋が 10 間 (16.8m, W 1.4+(1.4 × 10)+(1.4) E) ならば庇を加えて 16.8m 余りに、梁行 2 間に長い一間庇が前後に付く妻行 (11.2m) の建物であるから、母屋 6 間の方堂のような建物よりは、母屋 10 間に復元するのもよいように思われる。

廃棄土坑の 4 基は、土塀内の北西部に集まっており、明確に管理されている様子がうかがえる。南北方向の溝 0370SD と東西方向の溝 1446SD の性格については、よくわからない。ただ、この医師・竹田家の主屋等は、東洞院通の路側に近い所に作られ、敷地オクには作られていない。ではこの広い空間は何に使われていたのかが大きな問題となる。唯一の絵画資料である『洛中洛外図屏風（上杉本）』の「竹田ほういん」屋敷の周辺を線描きした図 85 でみていく。敷地東側の建物背後には、雑木林がある。樹種は不明ながら若松など 4 種類ほどがみられる。その南北範囲は北側が不明ながら、南側は四条通まで延びている。主屋の南側にも樹種の異なる林がみられる。これは松ではないが、庭木かもしれない。眼を祇園会山鉾巡行が行われている四条通に目を移すと、この林の背後に南北方向に幅の狭い水田が延び、所々に畦の描かれているのが確認できる。この水田は、四条通に切られている。敷地西側は、主屋の背後から金雲に阻まれこれ以上は分からぬ。これを図 82 から判断すれば、この南北に長い水田を高倉通西側に存在した下京惣構の堀跡に、雑木林はその西側の荒地となってしまった地域と考えることができる。この 2 本の溝の規模は、溝 0370SD が幅 1.1 ~ 1.15m × 深さ 0.27 ~ 0.33m (0.8m)、溝 1446SD が幅 1.2 ~ 1.65m × 深さ 0.5 ~ 1.1m と意外と深い。雨落ち溝とは、明らかに異なる。同様な逆台形の溝は、第 2 章第 3 節の No.② の周辺の調査¹¹⁾ でも検出された SD313 がある。この SD313 は上幅 2.4m × 下幅 0.6m × 深さ 1.6m の南北溝で、「遺物は少量しか出土していないが、16 世紀前半～中頃に開削され、16 世紀末頃に埋まったとみられる。」としているものである。図 84 から、この SD313 と溝 0370SD の溝芯々の東西間を測ると 39.4m (約 120 尺 = 12 文)、溝 1446SD と四条坊門小路（蛸薬師通）までの南北間は 75.5m (約 230 尺 = 23 文) となる。面積は 2,974.7m²、約 900 坪となる。こ

ここで考察の参考となるものが、No②調査地のSD313の東隣にある井戸SE458の存在であろうか。他にNo②調査地でこの時期の遺構はみられない。この後、ここを住居とするのは12期以降である。井戸SE458は、「井筒内からは15世紀代の土師器小片が出土しているだけであるが、上層からは16世紀末～17世紀初の土器類が出土している。」とするものである。生活痕の乏しい井戸の存在からも、やはりこの溝に囲まれた敷地は、竹田家にとって重要な生業「家菜」に係わる畠、薬草園や薬木園といったものと考えることはできないであろうか。No②調査地のSD313の東や、溝0370SDと土壌の間にについても、同様に薬草や薬木の栽培作業がおこなわれていたものと推測しておきたい。このため、主要建物は敷地の南側の東洞院通に近い、南西側に偏って設けられたのではないかと思われる。

【10期】

10期（京XI期新～京XII期古（前半））は、織田信長や豊臣秀吉の時代から慶長8年（1603）徳川幕府成立前後までの時期である。基本的には9期と大きく異なることはなく、主要遺構はそのまま継続し、廃棄土坑とみられる土坑3315SX・0336SX・0349SX・0903SX・0999SX・1011SX・1017SX・1428SX等が、位置を決めて設けられ、管理されている様子が感じられる。

【11期】

11期（京XII期古（後半））は、極めて短い時間幅の時期である。『寛政重修諸家譜』によれば、竹田法印定宣は元和3年（1617）に徳川秀忠より山城国葛野相楽両郡の本領500石を賜り、息子定昌と共に京都と江戸を隔年に住んだようである。さらに、竹田家屋敷の北西側には、図83・84のように將軍上洛という国家行事に備えて、元和9年（1623）か寛永3年（1626）以前には確実に松平下総守（奥平忠明）京屋敷¹²⁾が設置されていたと考えられる。

竹田家の江戸住まいにより、土地や建物は売却され、主要遺構の建物である建物0570SB、建物0571SB-2が順次解体撤去され、井戸0930SE、東側溝0201SD、溝0370SD、溝1446SDが埋められ、大小の廃棄土坑が無数に作られた時期である。

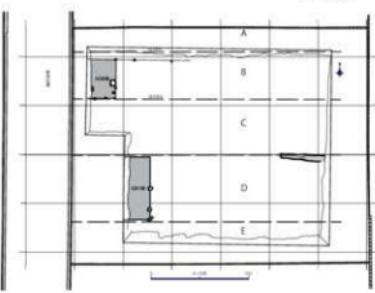
これにより、竹田家の屋敷は更地になったと考えられる。

なお、この廃棄土坑内から、数多くの茶器、花器、茶臼、香炉などが出土している。これも茶人¹³⁾であった竹田家の性格をよく物語る遺物といえるであろう。しかし、生業であるはずの製茶に係わる遺物（例えば茶研・石臼・匙・乳鉢・乳棒・秤等）については、茶臼としたものの中の幾つかが、石臼として使用されていた可能性は残るが、これを除くと1点も出土することがなかった。

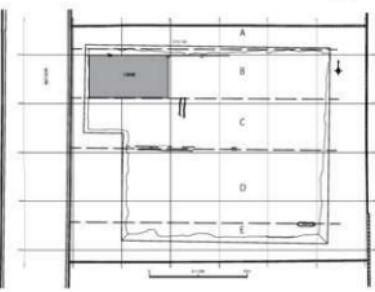
【12期・13期】

12期（京XII期中・新）・13期（京XIII期古）には、調査区内に小規模な建物0580SB（N89°Wに傾く独立屋）が、東洞院通側ではなくやや路から離れて新たに建てられる。マチヤとは異質な

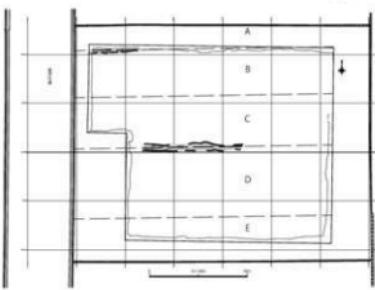
14期



15期



16期



性格の建物であることは、その位置からも建築構造からも明らかである。『寛政重修諸家譜』によれば、定昌の早世により還俗した竹田定勝が、寛文元年（1661）には幕府の日番医となり、寛文5年（1665）には御側衆となり江戸住まいとなったとしているが、それ以前から軸足は江戸にあったとみられる。よってこの建物0580SBは、竹田家としての門・塀といった家の構が、調査区内には確認できず、竹田家に関わる建物ではなかつたと考えられる。

京都町奉行の勤方手引書である「京都大名屋舗・拝領地并買得屋舗之事」『京都御役所向大概覚書』（享保2年（1717）頃成立）¹⁴⁾には、「三条通両替町東え入町」（現在の御倉町）に「竹田法印」の記載があり、屋敷の広さが「表口四間餘裏行貳拾三間餘 買得名代年久敷儀にて不相知」であったとしている。『洛中洛外図屏風（上杉本）』には竹田瑞竹屋敷（足利義満から拝領した旧竹田本家屋敷地）が、御倉町付近に描かれており、竹田家の屋敷のあったことが分かる。調査地は、『寛永十四年洛中絵図』（1637）では既に「本竹田町」とあり、以後中井家系絵図には「本（元）竹田町」とある。しかし、民間の絵図類には宝暦12年（1762）刊『京町鑑』まで「常円ノ町」としている。少なくとも、寛永14年以前に現在の元竹田町の土地を売り払い、町名に「元」が付く状態ではなかったかと考えられる。家系図の記載と齋藤が生じるが、当初は分家か分家が退転した後の御倉町の旧本家跡地の京屋敷（新築

したのか既存屋かは不明)に隔年に上京し一時に住まいしていた可能性もあるが、次第に江戸の本家は奥医に重点を置き、在京の分家が空き家の京屋敷が御倉町に残ったと考えるべきであろう。なお、御倉町の屋敷の廃邸については、詳細は不明であるが、宝曆期(1751~1764)頃であったと伝える。

また、12期には敷地オクに大形の土坑1419SX・1437SX・1460SX・1461SXや井戸1497SEが作られる。13期には井戸0921SE、土坑0906SX・1012SX、トイレ1439SXがみられた。

屋敷南西側の建物0570SBがあった所では、西側路側に町屋建物が存在した可能性もあるが、現状では建物0580SBがみられるだけで、東側においては銅製品の工房があった可能性が高い。551・552の取鍋は東壁際の土坑1437SXから出土しており、この12期から銅製品の生産が始まっていたことが明らかとなった。ここで何を作っていたかは、不明のままである。調査地南側のNo③平安京左京四条四坊四町¹⁵⁾では鏡鋳造遺構と鋳型等の遺物を出土しており、時期を同じくして銅製品の工人が何らかの理由で集住し始めたことを示すものである。キセル肩497が4面包含層から出土していることから、仮にこの調査区東側で生産されていた製品がキセル(煙管)であった場合、明暦3年(1657)『職人尽歌合』にあげる「煙管張り」と呼ばれるキセル製作工人の工房と住まいであったかもしれない。

その後、基本土層5.7~12層の堆積が生じている。延宝2年(1674)・延宝4年(1674)頃の鴨川洪水までの時期に相当するものと思われる。

【14期】

14期(京XⅢ期古・中)には、再びマチヤが復活する。復元推測した路にオモテを向ける2棟の建物から、調査地内の凡そマチヤ敷地境界間口幅を、北側からマチヤA~Eの5区画(A=0.2m以上、B=約4.9m、C=約5.8m、D=約6.6m、E=約1.5m以上)と考えた。建物、穴蔵、井戸、トイレ、廃棄土坑がセットで存在するが、各マチヤには差がみられる。

その後、基本土層5.7~12層の堆積が生じた延宝2年(1674)・延宝4年(1674)頃の鴨川洪水から、基本土層5.1~6層の堆積が生じた元禄15年(1702)頃の洪水の時期の間に相当すると考えられる。

【15期】

15期(京XⅢ期中~京XⅣ期中)においても、町家建物0150SBや境界溝0630SD下層・1215SDから、調査地内の凡そマチヤ敷地境界間口幅を、北側からマチヤA~Eの5区画(A=0.1m以上、B=約4.9m、C=約5.3m、D=約7.6m、E=約1.5m以上)と考えた。建物、穴蔵、井戸、トイレ、廃棄土坑が、14期同様にセットで存在し、各マチヤには差がみられる。廃棄土坑の数は、調査区内の各期の中でも最多となる。

基本土層5.1層上面を焼土面とする宝永5年(1708)「宝永の大火」頃から、基本土層3.1~5層の堆積が生じた元文5年(1740)~延享元年(1744)頃の洪水の時期の間に相当するものと思われる。

17期

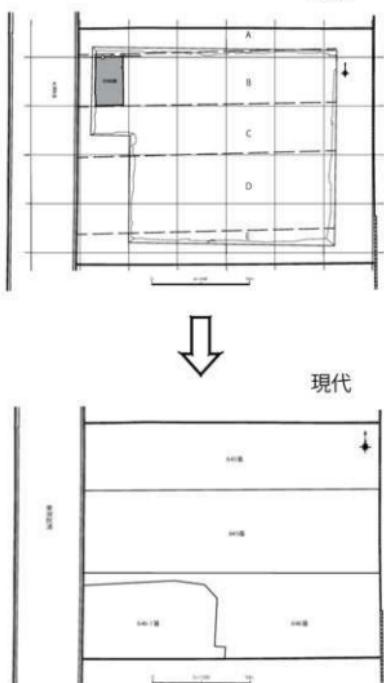


図 86 調査地遺構変遷図

【16期】

16期（京XIV期中～京XV期中）は、マチヤの主軸が始めて僅かに東に傾くN88°～89°Wとなった。境界溝である0630SD上層と0002SDから、調査地内の凡そマチヤ敷地境界間口幅を、北側からマチヤA～Eの芯々で5区画（A=0.5m以上、B=約5.25m、C=約5.25m、D=約7.2m、E=約2.3m以上）と考えた。建物、穴蔵、井戸、トイレ、廐棄土坑が、14期同様にセットで存在し、各マチヤには差がみられる。

「基本土層3-1層上面の天明8年（1788）「天明の大火」から、基本土層2-1層上面の元治元年（1864）「元治の大火」頃の時期に相当すると思われる

【17期】

17期（京XV期中～京XVI古）は、マチヤの主軸が現在と同じ僅かに西に傾くN89°Eとなる。マチヤ敷地境界間口幅を、北側からマチヤA～Eの芯々で5区画（A=0.3m以上、B=約5.3m、C=約5.2m、D=約7.9m、E=約1.2m以上）と考えた。

穴蔵の数も1基に減り、土坑数も少なくなっている。

「基本土層2-1層上面の元治元年（1864）「元治の大火」から、明治時代前期の頃の時期に相当すると思われる。

【現代】

元治元年（1864）「元治の大火」から、現代としたが、正確には近代の明治22年（1889）土地台帳制が施工された頃までになる。サブタイトルともなっている「京都市中京区東洞院通蛸薬師下る元竹田町643、645、646、646-1」の4筆が、調査地の番地である。17期のマチヤAが北側調査区外の639番-1・2、マチヤBが643番、マチヤCにマチヤDの北側半分を加えたものが645番に、マチヤEにマチヤDの南側半分を加えたものが646番（後に646-1番が分筆）である。このことから、マチヤDの分割は、地籍図が各自治体に整備設置されたよりも以前であったこ

とが明らかとなる。明治以降も用地の交換や借地の売買などを経て、今日の番地に至っていることが知られる。

今後は周辺の調査が進展し、左京四条四坊三町の全容がさらに明らかとなることを期待したい。

〔引用参考文献〕

- 1) 「竹田」『寛政重修諸家譜』巻第741、文化9年
『竹田家譜』(京大富士川文庫蔵) 文政13年
- 服部敏良『室町安上桃山時代医学史の研究』吉川弘文館、1971年
- 今谷明『京都・一五四七年』平凡社、1988年。
- 宗田一『竹田法印家と牛黄冨』『井筒薬品ニュース』36号
- 安井広通『竹田薬師院について』『日本医史学雑誌』
- 「大内氏と医者」「いやす・なおす・たもつ 解説シート』山口県文書館、2016年
- 『実隣公記』続群書類促完成会、1958～1967年
- 2) 香取敏光「江戸幕府の医療制度に関する史料(1) 一元禄十三年『侍医分限記』」
- 3) 今谷明『京都・一五四七年』平凡社、1988年
黒田日出男『謎解き洛中洛外図』岩波書店、1996年
- 柳沢上杉文化振興財團編『国宝 上杉本 洛中洛外図屏風』米沢市上杉博物館、2001年
- 下坂守『国宝・上杉本洛中洛外図大觀』小松社、2002年
京都文化博物館編『京を描く－洛中洛外図の時代－』京都府京都文化博物館、2015年
- 小島道裕『描かれた戦国の京都－洛中洛外図屏風を読む－』吉川弘文館、2009年
- 鷹狩俊夫『洛中洛外図の中の京都－都市としての視点から－』『國立歴史民俗博物館研究報告』第180集、2014年
- 4) 477 竹田法印定盛請文案』(永正二年九月十四日条)『大日本古文書』(蛭川家文書)、東京大学出版会
- 5) 吉村寧「応仁・文明の災」『京都歴史アトラス』中央公論社、1994年
- 6) 高橋康夫『京都中世都市史研究』思文閣出版、1983年
高橋康夫『洛中洛外』平凡社、1988年
- 高橋康夫・吉田伸之ほか編『国集日本都市史』東京大学出版会、1993年
- 黒田祐一郎『中世都市京都の研究』校倉書房、1996年
- 山田邦和『京都都市史の研究』吉川弘文館、2009年
- 7) 「(永禄十一年)九月四日付寺地免券」「本能寺史料」
河内裕芳「中世本能寺の寺地」と立地について一成立から本能寺の変まで』『立命館文学』609、2008年
- 8) 『寛永十四年 洛中絵図』吉川弘文館、1969年
- 9) 『洛中絵図 寛永後萬治前』(京都大学附属図書館所蔵・旧中井家所蔵)臨川書店、1978年
- 10) 今谷明『天文法華の足－武装する町衆－』平凡社、1989年
- 11) 東洋一・山本雅和・能芝妙子『平安京左京四条四坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書2008-12、(財)京都府京都文化財研究所、2009年
- 12) 藤川昌樹『徳川期京都における武家屋敷の成立』『近世武家集団と都市・建築』中央公論美術出版、2002年
- 13) 安井広通『天王寺屋会記』に登場する医師について』『日本医史学雑誌』第31巻1号、1985年
- 14) 『京都御役所向大概覚書』享保2年頃成立、清文堂出版、1988年
- 15) 植山茂・定森秀夫・南博史ほか『平安京左京四条四坊四町』京都文化博物館調査研究報告第9集、(財)京都府京都文化博物館、1993年

表4 土器等観察表

※ () は復元値か残存倉を示す。

器種 番号	地区	遺構番	遺構名	器種	器形	口径 cm	器高 cm	直径 cm * 厚 cm * g	成形調査の特徴	色調	年代	備考(型式・产地・時期等)
001	南区	4面	093SX	土師器	皿	(8.8)	(1.5)	(6.0)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ(右 側面)、底面ナゲ	7.5YR7/3	京焼中	
002	南区	4面	093SX	土師器	皿	(8.4)	(1.9)	(5.6)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	7.5YR8/1	京焼中 ~京焼 古	白色系
003	南区	4面	093SX	土師器	皿	(11.6)	(0.9)	(8.2)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	2.5YR8/1	京焼古	
004	南区	4面	093SX	土師器	台付皿	(8.3)	(3.0)	(7.4)	内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、底面ヨコナゲ 内面ヨコ板ナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指オサエ ナゲ	5YR5/6	~京焼 中	
005	南区	4面	093SX	瓦質土器	筒形	(24.0)				7.5Y7/1	京焼中 古	
006	南区	4面	093SX	瓦器	瓶			(4.0)	内面ヨコナゲ=壁文 外面ヨコナゲ、底面高台内ナゲ、高台點 付	2.5Y3/1	京焼中	大和型(近江型)
007	南区	4面	093SX	中世須恵器	片口鉢	(28.0)			内面輪郭ヨコナゲ 外面輪郭ヨコナゲ	10YR6/1	京焼古	東播系神出窯(森田第Ⅲ期1-2)
008	北区	4面	034SX	土師器	皿	7.4	1.6	4.1	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指オサエ ナゲ、底面指オサエ	5YR6/4	京焼新	光明晶
009	北区	4面	034SX	土師器	皿	7.6	1.6	3.4	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指オサエ ナゲ、底面指オサエ	7.5YR6/4	京焼新	
010	北区	4面	034SX	土師器	皿	8.0	1.6	4.6	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指オサエ ナゲ、底面指オサエ	10YR5/2	京X古 期	
011	北区	4面	034SX	土師器	皿	7.6	1.7	4.0	内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、見出ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指オサエ ナゲ、底面指オサエ	10YR3/2	京焼新	光明晶
012	北区	4面	034SX	土師器	皿	9.6	2.3	6.1	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指オサエ ナゲ、底面指オサエ	7.5YR2/4	京焼中 古	光明晶
013	北区	4面	034SX	土師器	皿	(10.0)	(2.0)	(5.8)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指オサエ ナゲ、底面指オサエ	7.5YR6/2	京焼新	
014	北区	4面	034SX	土師器	皿	10.2	2.0	6.0	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指オサエ ナゲ、底面指オサエ	10YR8/0	京焼新	
015	北区	4面	034SX	土師器	皿	(6.2)	(2.0)	(3.4)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指オサエ ナゲ、底面指オサエ	2.5Y8/1	京X古 期	白色系、へそ點
016	北区	4面	034SX	土師器	皿	(6.8)	(2.0)	(2.6)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	10YR3/4	京X古 期	
017	北区	4面	034SX	土師器	皿	(7.0)	(2.0)	(3.0)	内面ヨコナゲ 外面ナゲ、底面ナゲ	7.5YR8/4	京焼新	へそ點
018	北区	4面	034SX	土師器	皿	7.0	2.0	2.7	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指オサエ ナゲ、底面指オサエ	10YR8/2	京X古 期	
019	北区	4面	034SX	土師器	皿	(16.4)	(4.7)	(9.0)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	10YR7/3	京焼中	
020	北区	4面	034SX	土師器	皿	(13.0)	(0.7)	(7.2)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	10YR7/2	京X中	
021	北区	4面	034SX	土師器	皿	(13.6)	(0.3)	(9.2)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	5YR8/3	京X古 期	
022	北区	4面	034SX	土師器	皿	(14.0)	(0.3)	(8.4)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	7.5YR7/4	京焼中	
023	北区	4面	034SX	土師器	皿	(14.0)	(0.2)	(7.2)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	3YR7/3	京焼新	灯明晶
024	北区	4面	034SX	土師器	皿	(15.4)	(0.1)	(9.6)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	10YR8/2	京焼新	白色系
025	北区	4面	034SX	土師器	皿	(14.4)	(2.4)	(8.2)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	7.5YR8/1	京X古 期	
026	北区	4面	034SX	土師器	皿	(11.6)	(2.7)	(6.8)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	10YR8/3	京X古 期	
027	北区	4面	034SX	土師器	皿	(11.6)	(0.0)	(6.6)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	7.5YR7/4	京X古 期	
028	北区	4面	034SX	土師器	皿	11.6	3.1	7.0	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	7.5YR8/4	京X古 期	光明晶(底を欠く)
029	北区	4面	034SX	土師器	皿	(12.0)	(0.4)	(6.0)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	7.5YR7/4	京X古 期	
030	北区	4面	034SX	土師器	皿	12.0	3.1	7.8	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 面ナゲ	7.5YR8/4	京X古 期	光明晶

※ () は復元値か残存値を示す。

開拓番号	地区	遺構面	遺構名	器種	器形	口径 cm	高 cm	底径 cm ²	成形調整の特徴	色調	年代	備考(型式・産地・時期等)
031	北区	4面	0349SX	土師器	三	(12.6)	(2.9)	(6.0)	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部ナゲ、底部ナゲ	7.5YR8/6	京X古 ~	
032	北区	4面	0349SX	土師器	三	7.6	2.3	4.0	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ、底部ナゲ	7.5YR8/3	京X古	
033	北区	4面	0349SX	土師器	三	(8.0)	(2.3)	(4.6)	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ、底部ナゲ	7.5YR8/3	京X古 ~	
034	北区	4面	0349SX	土師器	三	6.8	2.0	2.8	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ、底部指オサエ~ナゲ	10YR8/3	京X古 ~	完形品
035	北区	4面	0349SX	土師器	三	(7.0)	(1.8)	(4.0)	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ、底部ナゲ	7.5YR8/3	京X古	へそ直
036	北区	4面	0349SX	土師器	三	7.0	1.9	3.6	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ、底部ナゲ	7.5YR8/3	京IX新	
037	北区	4面	0349SX	土師器	三	(27.4)			内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ	10YR7/2	京IX新 ~ 京X新	瓦質土器の模倣々
038	北区	4面	0349SX	瓦質土器	鍋	(28.0)			内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ	2.5Y7/1	京IX新 ~ 京X新	
039	北区	4面	0349SX	土師器	鍋	(32.0)			内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ	5Y7/1	京IX新 ~ 京X新	瓦質土器の模倣々
040	北区	4面	0349SX	瓦質土器	大鉢	(25.4)			内面ヨコナデ後に口縁近くをミガキ 外出口横頭ヨコナデ(巴文)タブレ2+ 2+2	5Y3/1	京IX中	奈良火鉢(立石浅鉢III)。円形で 口縁内溝なし。三巴文捺目スタンプ
041	北区	4面	0349SX	漬戸美濃系陶器	折腰皿	(26.0)			内面ヨコナデ、医輪ガタ 外底ヨコナデ、医輪ガタ	10YR1/3	京IX中	糸田美濃系(藤原古漬戸後尾期)
042	北区	4面	0349SX	土師器	蓋カ	底径 5.3			外底部)ナゲ~棒次のキズ (下)円孔が複数。(側面)ナゲ	10YR7/2	不明	直子
043	北区	4面	0349SX	土師器	瓦	端カ (11.2)	幅 8.0	高 3.8	内底部に継ぎタタキ	5Y3/1	不明	瓦質。粗い網目。用途不明品
044	北区	4面	0349SX	土師器	三	(10.0)	(2.3)	(6.4)	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ	7.5YR7/4	京IX中	灯明显
045	北区	4面	0349SX	土師器	三	(10.0)			内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部ナゲ	7.5Y7/3	京X古 ~中	
046	北区	4面	0353SX	土師器	三	(13.8)	(3.4)	(7.8)	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部ナゲ、底 部ナゲ	10YR8/2	京IX新	
047	北区	4面	0353SX	土師器	三	(11.0)	(2.7)		内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部ナゲ、	7.5YR8/4	京IX新 京X古	
048	北区	4面	0362SX	土師器	三	(10.4)	(2.3)	(7.0)	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ	7.5YR7/6	京X古	
049	北区	4面	0362SX	土師器	三	(10.4)	(2.2)	(6.6)	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ	7.5YR7/4	京X古 ~	
050	北区	4面	0362SX	土師器	三	(14.0)			内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部ナゲ	10YR8/1	京X古	
051	北区	4面	0374SX	土師器	三	(8.4)	(1.9)	(5.0)	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ	10YR7/3	京X古	
052	北区	4面	0374SX	土師器	三	(7.0)	(1.9)	(2.8)	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部ナゲ、底 部ナゲ	7.5YR8/2	京X古 ~	へそ直
053	南区	4面	1103SX	土師器	三	(11.4)	2.5	(6.0)	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ	10YR8/3	京X新	個人品カ
054	南区	4面	1103SX	貿易陶器	白磁環状器	(9.4)			内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	10Y7/1	京X古 ~ 京X新	
055	南区	4面	1103SX	土師器	三	(12.2)			内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部ナゲ	10YR8/2	京X新	
056	南区	4面	1103SX	土師器	三	(16.0)	(3.5)	(9.0)	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部ナゲ、底 部ナゲ	7.5YR8/2	京X新	
057	南区	4面	1103SX	土師器	三	16.4	3.4	9.2	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部ナゲ、底 部ナゲ	7.5YR8/2	京X新	1E江完
058	南区	4面	1103SX	土師器	三	16.5	3.1	9.8	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部ナゲ、底 部ナゲ	7.5YR8/4	京X新	1E江用
059	南区	4面	1103SX	土師器	三	(16.0)			内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ	7.5YR8/3	京X新	
060	北区	4面	0321SX	土師器	三	8.2	2.2	3.8	内面ヨコナデ 外出口横頭ヨコナデ、体部指オサエ ~ナゲ	10YR8/2	京X中	

番号	地区	遺構番	遺構名	器種	器形	口径 cm	高 cm	底径 cm * g	成形特徴	色調	年代	備考(型式・产地・時期等)
061	北区	4面	0321SX	土師器	皿	(10.0)	(2.2)	(4.0)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	7.5YR8/2	京X古 ～中	～そ皿
062	北区	4面	0321SX	土師器	皿	12.6	2.9	6.9	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	7.5YR8/4	京X中	
063	北区	4面	0321SX	土師器	皿	(12.0)	(2.5)	(5.8)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	7.5YR8/3	京X中	
064	北区	4面	0321SX	土師器	皿	(15.0)	(2.4)	(8.4)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	7.5YR8/3	京X中	
065	南区	4面	0379SX	土師器	皿	(9.0)	(2.0)	(5.0)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部指オサエ、底部指オサエ	7.5YR8/2	京X古	
066	南区	4面	0379SX	土師器	皿	(11.4)	(2.5)	(7.1)	内面ヨコナダ 外面ヨコナダ、底部指オサエ、底部指オサエ	10YR8/2	京X古	
067	北区	4面	0307SX	土師器	皿	(8.0)	(1.6)	(3.6)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部指オサエ、底部指オサエ	7.5YR7/4	京X新	
068	北区	4面	0307SX	土師器	皿	(12.6)	(2.7)		内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ	7.5YR8/3	京X新	
069	北区	4面	0307SX	土師器	円盤	直径 3.2	厚さ (0.6～ 0.7)	重量 (15g)	内面ヨコナダ 外面ナダ	7.5YR6/4	京X中 ～	面子き。復元は約10g。
070	北区	4面	0307SX	土師器	円盤	直径 3.8	厚さ (0.6)	重量 (16g)	内面ナダ 外面ナダ	7.5YR7/4	京X中 ～	面子き。復元は約15g。
071	北区	4面	0312SX	土師器	皿	(11.2)	(2.9)	(6.4)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	7.5YR8/3	京X中	
072	北区	4面	0312SX	横筋系陶器	皿鉢	(3.0)			内面軸ヨコナダ・ハケ10条以上 外面軸ヨコナダ	10YR6/1	京X新	横筋名(石井IVA～IVB)
073	北区	4面	0312SX	横戸美濃系陶器	折腰深皿	(34.0)			内面軸ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ		京X新	横戸美濃系(藤澤古窯)後醍醐期
074	北区	4面	0335SX	土師器	皿	(8.6)	(1.4)	(7.4)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	10YR7/3	京X新	
075	北区	4面	0335SX	土師器	皿	(7.0)	(1.6)	(4.0)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部指オサエ、底部指オサエ	10YR7/3	京X新	
076	北区	4面	0335SX	土師器	皿	(15.0)	(2.5)	(9.0)	内面ヨコナダス付番 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	7.5YR6/4	京X新	
077	北区	4面	0335SX	土師器	皿	(12.0)	(2.4)	(6.4)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	7.5YR8/3	京X新	
078	北区	4面	0335SX	土師器	皿	(7.4)	(2.1)	(2.6)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	10YR7/4	京X新	～そ皿
079	北区	4面	0342SX	土師器	皿	(12.0)	(3.1)	(8.4)	内面ヨコナダ、ス付番 外面口縁部ヨコナダ、体部指オサエ、底部指オサエ	7.5YR6/2	京X中	
080	北区	4面	0342SX	土師器	皿	(7.0)	(1.9)	(4.0)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	7.5YR7/3	京X新 ～	
081	北区	4面	0342SX	土師器	皿	(7.6)	(1.8)		内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	7.5YR7/3	京X新 ～	
082	北区	4面	0342SX	土師器	皿	(12.0)	(0.2)	(6.0)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ底部ナダ	SVR7/4	京X中	
083	北区	4面	0342SX	土師器	皿	(11.6)	(0.1)	(6.5)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	7.5YR7/6	京X新	
084	北区	4面	0342SX	土師器	皿	(9.0)	(2.2)	(5.6)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	7.5YR8/3	京X新 ～	
085	北区	4面	0342SX	土師器	皿	(16.0)	(2.3)	(10.0)	内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	7.5YR8/4	京X新 ～	
086	北区	4面	0342SX	土師器	皿	(8.4)	(1.9)	(2.4)	内面ヨコナダス付番 外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底部ナダ	10YR7/3	京X中	～そ皿
087	北区	4面	0342SX	常滑系陶器	広口壺	(20.0)			内面軸ヨコナダ 外面軸ヨコナダ	7.5Y4/1	京磯古 常滑名(中野6a型式)	
088	北区	4面	0342SX	丹波系陶器	皿鉢	(25.0)			内面軸ヨコナダ、ヘラ底丸周1条 内面ヨコナダス付番 外面軸ヨコナダ	5YR7/6	京磯中 ～新	丹波名(長谷川II期)、被熱(火にかけている)、複数な。
089	北区	4面	0342SX	瀬戸美濃系陶器	天日茶碗	(12.0)			内面軸ヨコナダ數脚 外面軸ヨコナダ、内面ヨコナダス付番 外面軸ヨコナダ	10YR2/1	京磯新 瀬戸美濃名(藤澤古窯)中野作期	
090	北区	4面	0342SX	瀬戸美濃系陶器	平瓶	(16.6)			内面軸ヨコナダス付番 外面軸ヨコナダ、内面ヨコナダス付番 外面軸ヨコナダ	10YR8/2	京磯新 瀬戸美濃名(藤澤古窯)中野作期	

※ () は復元値か残存値を示す。

開拓番号	地区	遺構番号	遺物名	器種	器形	口径 cm	高 cm	底径 cm	容積 cm ³	成形焼成の特徴	色調	年代	備考(型式・産地・時期等)
091	北区	4面	0342SX	瀬戸美濃系陶器	粗筋小鉢	(15.2)	(6.4)	(6.6)		内面凹板部ヨコナギ白化粧→灰粘ガケ 外面部ヨコナギ→台形化→鉄輪→ 灰粘ガケ→露窓。近底凹板部切り	10YR6/3	京X古 ~	瀬戸美濃系(藤原古瀬戸後醍醐
092	北区	4面	0342SX	瀬戸美濃系陶器	折縁浅皿	(28.0)	(7.0)	(16.0)		内面凹板部ヨコナギ白化粧→灰粘ガケ 外面部ヨコナギ→へーカケズリ、灰 粘→白粘ガケ、底部凹板部クリ	10YR7/2	京X新	瀬戸美濃系(藤原古瀬戸中期IV期)
093	北区	4面	0366SX	土師皿	皿	(9.6)	(2.6)	(6.2)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部指オサエ 、底部指オサエ	10YR7/1	京X新 ~	京X古
094	北区	4面	0366SX	土師皿	皿	(17.0)	(3.3)	(9.4)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部ナデ、底 部ナデ	7.5YR6/3	京X古 ~中	
095	北区	4面	0366SX	土師皿	皿	8.0	2.2	4.3		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部ナデ、底 部ナデ	10YR8/2	京X新	
096	北区	4面	0366SX	土師皿	皿	7.0	2.0	2.4		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部ナデ、底 部ナデ	10YR8/3	京X古 ~へそ	
097	北区	4面	0375SK	土師皿	皿	(9.6)	(2.0)	(6.2)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部指オサエ 、底部指オサエ	7.5YR6/6	京X新	
098	北区	4面	0375SK	土師皿	皿	(7.0)	(2.0)	(1.69)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部ナデ、底 部ナデ	7.5YR6/2	京X新 ~へそ	
099	北区	4面	0375SK	土師皿	皿	(12.6)	(2.7)	(6.8)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部ナデ、底 部ナデ	10YR8/1	京X新	
100	北区	4面	0375SK	土師皿	皿	(12.0)	(2.7)	(6.4)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部指オサエ 、ナデ、底部指オサエナーブル	7.5YR6/4	京X新	
101	北区	4面	0375SK	土師皿	皿	(10.0)	(2.2)	(6.0)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部指オサエ 、ナデ、底部指オサエナーブル	7.5YR6/2	京X古 ~	
102	北区	4面	0375SK	土師皿	皿	7.2	2.4	2.6		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部指オサエ 、ナデ、底部指オサエナーブル、底部 指オサエ	10YR8/2	京X中 ~	へそ
103	北区	4面	0375SK	土師皿	皿	(13.4)	(2.9)	(7.4)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部ナデ、底 部ナデ	7.5YR8/1	京X古	
104	南区	4面	0934SE	土師皿	皿	(10.0)	(2.5)	(6.6)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部指オサエ 、底部指オサエナーブル、板状鉢	7.5YR6/6	京X中 ~	篠
105	南区	4面	0934SE	土師皿	皿	7.0	1.7	4.0		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ2段、体部指オサ エ、底部指オサエ	7.5YR6/4	京X新	
106	南区	4面	0934SE	土師皿	皿	6.8	2.0	3.0		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部ナデ、底 部ナデ	7.5Y7/4	京X新 ~へそ	
107	南区	4面	0934SE	土師皿	皿	(11.0)	(2.6)	(6.0)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部指オサエ 、ナデ、底部ナデ	7.5Y7/4	京X新	
108	南区	4面	0934SE	土師皿	皿	(15.2)	(2.5)	(9.2)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部ナデ、底 部ナデ	7.5Y7/4	京X新	
109	南区	4面	0934SE	土師皿	皿	7.8	2.0	3.0		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部ナデ、底 部ナデ	7.5Y7/6	京X新	
110	南区	4面	0934SE	土師皿	皿	(8.4)	(2.0)	(4.0)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部ナデ、底 部ナデ	10YR8/3	京X新	
111	南区	4面	0934SE	瓦質土器	皿	(33.0)				内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部指オサエ 、スカリ	3Y/1	京X新	
112	南区	4面	0934SE	瀬戸美濃系陶器	天目系瓶	(13.2)				内面凹板部ヨコナギ鉄輪ガケ 外面部ヨコナギ鉄輪ガケ、下部は 露窓	3Y/1	京IX新 ~京X 中期	前川美濃系(藤原古瀬戸後醍醐II~
113	南区	4面	0934SE	貿易陶器22	青磁碗	(15.6)	(6.7)	(5.4)		内面凹板部ヨコナギ鉄輪ガケ 外面部ヨコナギ鉄輪ガケ、底部露 窓より裏面右側に無ハガ(露窓)ケ スカリ出凸部	3Y/1	京IX中 ~前	能楽窯系(山本IV型G期)
114	南区	4面	0936SE	土師皿	皿	11.0	1.9	6.5		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部ナデ、底 部ナデ	10YR8/1	京X新	白色系
115	南区	4面	0936SE	土師皿	皿	9.8	2.1	5.3		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部指オサエ 、ナデ、底部ナデ	10YR8/1	京X新	光明系
116	南区	4面	0936SE	土師皿	皿	(7.0)	(2.2)	(4.0)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部指オサエ	7.5YR7/3	京X新	
117	南区	4面	0936SE	土師皿	皿	(17.0)	(2.2)	(12.0)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部ナデ、底 部ナデ	10YR8/1	京X新	白色系
118	南区	4面	0936SE	土師皿	皿	(8.0)	(1.8)	(4.0)		内面ヨコナギ 外面部縁部ヨコナギ、体部ナデ、	10YR8/1	京X中 ~	白色系、へそ

※ () は復元値か残存値を示す。

規範番号	地区	造物番	造物名	器種	器形	口径cm	高さcm	底径cm×g	成形調査の特徴	色調	年代	備考(型式・产地・時期等)
119	南区	4面	0936SE	信楽系陶器	壺	(50.0)			内面同軸ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ	7.5YR6/1 京X古 ～中	信楽系(石井IV)	
120	南区	4面	0936SE	信楽系陶器	壺	(44.0)			内面ヨコナゲ→ハケ目 外面ヨコナゲ→ヨコナゲ	7.5YR6/2 京X新 ～近X	信楽系(石井IVB)	
121	南区	4面	0936SE	信楽系陶器	壺	(44.0)			内面同軸ヨコナゲ 外面ヨコナゲ	7.5YR5/3 京X中	信楽系(窯中B5期)	
122	東区	4面	1490SX	土師器	壺	8.1	2.1	3.8	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指ササエ 、底部指ササエ→ナゲ	10YR8/3 京X新		
123	東区	4面	1490SX	土師器	壺	12.1	2.8	6.7	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 部ナゲ	7.5YR7/3 京X新		
124	東区	4面	1490SX	土師器	壺	(15.0)	0.0	0.0	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 部ナゲ	10YR8/3 京X新		
125	東区	4面	1490SX	土師器	壺	8.2	1.7	4.1	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指ササエ 、底部指ササエ	10YR7/2 京X新	褐色系	
126	東区	4面	1490SX	土師器	壺	(6.8)	(1.8)	(3.0)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指ササエ 、底部指ササエ	7.5YR8/3 京X新 ～中		
127	東区	4面	1490SX	土師器	壺	7.3	1.7	3.3	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 部ナゲ	7.5YR7/4 京X新	～そ黒	
128	北区	4面	0343SX	土師器	壺	(16.0)	(2.5)	(0.8)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 部ナゲ	7.5YR8/1 京X古		
129	北区	4面	0343SX	瀬戸美濃系陶器	平壺	(17.0)			内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、底部ナゲ	5Y7/3 京X新	瀬戸美濃系(藤澤古窯口後期)青	
130	北区	4面	0343SX	土師器	壺	(8.4)	(1.8)		内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部指ササエ 、底部指ササエ	2.5YR/3 京X古	白色系	
131	北区	4面	0347SX	土師器	壺	(11.6)	(2.0)	(0.9)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ	2.5YR/3 京X古	白色系	
132	北区	4面	0348SK	土師器	壺	(7.6)	(2.1)	(2.2)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ底部 ナゲ	7.5YR7/4 京X中		
133	北区	4面	0356SX	土師器	壺	(9.4)			内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ	7.5YR8/2 京X古 ～中	信楽系(即中B5期)	
134	北区	4面	0356SX	信楽系陶器	瓶	(26.0)			内面ヨコナゲ・5条目 外面ヨコナゲ	10YR7/6 京X古 ～中	信楽系(即中B5期)、5条解、市鬼 化色、L被質。	
135	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(12.0)	(2.2)	(0.9)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ、底 部ナゲ、底部(窯盤)	10YR6/3 京X古	山科本郷寺a組	
136	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(10.4)	(2.1)	(5.8)	内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、体部ナゲ 、口縁部ナゲ	7.5YR8/2 京X古	灯明里、山科本郷寺c組	
137	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(9.4)	(2.1)	(5.2)	内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、体部指ササエ 、底部ナゲ	7.5YR6/6 京X古		
138	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(10.0)	(2.1)	(6.0)	内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、体部指ササエ 、底部ナゲ	10YR7/2 京X古		
139	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(10.0)			内面ヨコナゲ 外面指ササエ	10YR6/6 京X古		
140	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(11.0)	(2.6)	(7.0)	内面ヨコナゲ 外面口縁部ヨコナゲ、体部ナゲ底部 ナゲ	5YR7/6 京X中 ～		
141	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(7.4)	(1.6)	(0.8)	内面タテナゲ→ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、体部指ササエ 、底部ナゲ	10YR8/2 京X新		
142	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(6.8)			内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、体部指ササエ	7.5YR7/3 京X新	～そ黒	
143	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(7.6)	(1.6)	(4.6)	内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、体部指ササエ 、底部指ササエ	7.5YR6/3 京X新		
144	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(7.2)	2.1	(3.0)	内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、体部ナゲ、底 部ナゲ	10YR8/1 京X新	白色系	
145	北区	4面	0310SD	土師器	壺	9.0	2.1	4.0	内面ヨコナゲ、灯明里あり 外面ヨコナゲ、体部ナゲ、底 部ナゲ	5YR7/6 京X新 ～	灯明里	
146	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(9.0)	(1.9)	(6.0)	内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、体部ナゲ、底 部ナゲ	7.5Y7/4 京X新 ～京X 新		
147	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(7.4)	(1.6)	(4.4)	内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、体部ナゲ	10YR8/2 京X古	白色系	
148	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(12.6)	(2.9)	(6.6)	内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、体部ナゲ、底 部ナゲ	10YR8/1 京X中	白色系	
149	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(13.0)		(8.8)	内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、体部指ササエ→ナゲ	10YR8/1 京X古	白色系	
150	北区	4面	0310SD	土師器	壺	(11.2)	(2.5)	(4.6)	内面ヨコナゲ 外面ヨコナゲ、体部指ササエ →ナゲ、底部ナゲ	7.5YR8/4 京X古		

※ () は復元品か残存品を示す。

規 番 号	地 区	遺 構 面	遺 構 名	器 種	器 形	口 径 cm	深 高 cm	底 径 cm ²	成 形 特 徴	色 調	年 代	備 考
151	北区	4面	0310SD	土師器	直	(14.0)	(3.3)	(6.8)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナダ。体部ナダ。 底部ナダ	7.5YR8/2	京X古	
152	北区	4面	0310SD	土師器	直	(13.0)			内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナダ。体部ナダ。 底部ナダ	10YR8/2	京X中	
153	北区	4面	0310SD	土師器	直	(14.0)	(2.8)	(7.6)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナダ。体部ナダ。 底部ナダ	5YR8/3	京X中	
154	北区	4面	0310SD	土師器	直	(14.6)	(2.7)	(7.2)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナダ。体部ナダ。 底部ナダ	2.5Y8/1	京X中	
155	北区	4面	0310SD	土師器	直	(10.8)	(2.8)	(6.6)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナダ。体部ナダ。 底部ナダ	10YR8/3	京X新	
156	北区	4面	0310SD	土師器	直	(12.0)	(2.5)	(6.2)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナダ。体部ナダ	7.5YR6/4	京X新	
157	北区	4面	0310SD	土師器	直	(8.0)	(1.9)	(4.6)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナダ。体部ナダ。灯 明部。底部ナダ	2.5Y7/1	京IX古 古	灯明部
158	北区	4面	0310SD	土師器	直	8.5	2.2	3.3	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナダ。体部ナダ。底 部ナダ	7.5YR8/2	京X古	光形品
159	北区	4面	0310SD	土師器	直	(7.6)	(2.0)	(3.0)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナダ。体部ナダ。指 オサエ	7.5YR8/4	京X古	へそ垂
160	北区	4面	0310SD	土師器	直	(7.0)	(2.4)	(2.6)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナダ。体部ナダ。底 部ナダ	7.5YR8/3	京X新	へそ垂
161	北区	4面	0310SD	土師器	羽茎	(24.0)			内面ヨコハメ 外面口縁部ヨコナダ。体部指オサエ	7.5YR8/2	京謹中	
162	北区	4面	0310SD	瓦質土器	羽茎	(22.0)			内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナダ。体部指オサエ 、保形質	10YR8/1	京謹中 ～京謹 古	
163	北区	4面	0310SD	瓦質土器	羽茎	(12.0)			内面ヨコハメヨコハメ 外面口縁部ヨコハメ。体部指オサエ	2.5Y3/1	京謹中 ～京X 古	三足釜、ミチュアタ
164	北区	4面	0310SD	瓦質土器	羽茎	(20.0)			内面板ナギハメ(ハゲ目) 外面ヨコナデ	10YR5/1	京謹中	
165	北区	4面	0310SD	瓦質土器	鍋	(16.0)			内面ヨコハメ 外面口縁部ヨコナダ。体部指オサエ	2.5Y4/1	京IX新 ～京X 新	
166	北区	4面	0310SD	瓦質土器	火鉢	(47.4)			内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	10YR4/1	京謹古 ～京X 古	奈良火鉢(立石浅鉢)円形、脚あ り
167	北区	4面	0310SD	瓦質土器	火鉢	(40.0)	(6.9)		底部ハナレ砂をく	2.5Y8/2	京IX中	奈良火鉢(立石浅鉢)、方形4脚。 残存しているため、複数点の記 不明。
168	北区	4面	0310SD	瓦質土器	火鉢	(34.4)			内面ケズリ→ヨコナデ 外面ヘラモガキ	7.5Y6/4	京IX新 ～京X 新	奈良火鉢(立石浅鉢V)、円形。
169	北区	4面	0310SD	瓦質土器	火鉢	(33.0)			内面ヨコナデ 外面二重合掌+スタンプ。ヨコナデ →ヨコハメ(正面・側面) スタンプ(2.5×1.2)	5YR7/2	京IX新 ～京X 中	奈良火鉢(立石浅鉢V)、方形。
170	北区	4面	0310SD	中世須志器	片口鉢	(27.0)			内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	2.5Y5/1	京IX古 ～中	東澤系(森田須志型)
171	北区	4面	0310SD	常滑系陶器	便	(48.0)			内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	2.5Y5/1	京謹中	常滑系(中野5式)
172	北区	4面	0310SD	常滑系陶器	便	(45.0)			内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	10YR4/1	京謹古 ～中	常滑系(中野6b式)
173	北区	4面	0310SD	常滑系陶器	便	(39.0)			内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	10YR4/1	京IX新	常滑系(中野9式)
174	北区	4面	0310SD	備前系陶器	便	(51.6)			内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	10YR4/3	京IX古 ～中	備前系(石川IVA)
175	北区	4面	0310SD	廻戸美濃系陶器	板鉢形小鉢	(16.0)			内面ヨコナデ 外面ヨコナデ	5Y7/2	京謹新	廻戸美濃系(藤澤古廻戸中期IV期)。四目付平口。
176	北区	4面	0310SD	廻戸美濃系陶器	浅鉢	(12.0)			内面ヨコナデ 外面ヨコナデ。底輪ガケ 内面ヨコナデ。底輪ガケ	5Y8/1	京IX新	廻戸美濃系(藤澤古廻戸後期Ⅴ期)
177	北区	4面	0310SD	廻戸美濃系陶器	天日茶碗	(10.6)			内面底輪ガケ 外底底輪ガケ	7.5YR3/2	京謹新 ～京X 古	廻戸美濃系(藤澤古廻戸後期Ⅴ期)。天日茶碗B館。
178	北区	4面	0310SD	廻戸美濃系陶器	直鉢大皿	(33.4)			内面ヨコナデ→底輪(黄灰)+白色触カ 外面ヨコナデ→底輪(黄灰)	2.5Y7/3	京IX新	廻戸美濃系(藤澤古廻戸後期Ⅴ期)
179	北区	4面	0310SD	貿易陶器	白磁合子身	(5.4)			内面ヨコナデ。白磁触ガケ 内面ヨコナデ。白磁触ガケ 内面ヨコナデ。白磁触ガケ (底輪分離ガケなし)	10YR8/1	不明	
180	北区	4面	0310SD	貿易陶器	青磁			(5.0)	食付きのみ輪ハギ	2.5Y7/1	京謹中 ～京X 新	此東園系(山本F類)
181	北区	4面	0310SD	石製品	石鍋	(25.0)			内面ケズリ 外面ケズリ	5YR7/1	京謹中 ～京X 古	清石製石鍋(木戸皿類C)

測定番号	地区	遺構番	遺構名	器種	器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm * g	成形調板の特徴	色調	年代	備考(型式・产地・時期等)
182	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(8.6)	(1.7)		内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部未調整	2.5Y7/4	京焼古	
183	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(11.8)	(2.4)	(5.2)	内面ヨコナデ、底タブレ 外面口縁部ヨコナデ、体部未調整	2.5Y7/2	京焼古 ～中	褐色系(乙側焼成風)
184	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(7.2)	(1.2)	(0.3)	内面ヨコナデ 外面ホ淡青色	7.5Y7/6	京X新	
185	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(8.4)	(1.7)		内面ヨコナデ(ヨコナデ少)不明焼成 外面ホ淡青色	5YR6/3	京X中	
186	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(5.6)	0.9	(4.2)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、底未調整、底 部未調整	7.5YR6/3	京X新	
187	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(9.0)	(1.9)	(6.4)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部未調整、 底未調整	7.5YR6/4	京X新 ～京X 中	
188	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(7.2)	(1.8)	(0.6)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部指サエ	7.5YR6/5	京X新	
189	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(9.4)	(0.7)	(5.1)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部未調整	10YR5/2	京X中 ～京X 新	
190	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(7.4)	(1.8)	(4.6)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部未調整、 底未調整	10YR5/4	京X中 ～京X 古	～モザイ
191	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(7.0)			内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部未調整	10YR5/2	京X中 ～京X 古	
192	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(9.4)	(2.1)	(5.4)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ<未調 整>	10YR3/3	京焼中 ～京X 古	白色系
193	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(11.4)	(0.2)	(6.6)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部指サエ ～ア、底未調整	10YR5/2	京焼中 ～京X 古	
194	北区	4面	0201SD	土師器	皿	11.5	3.9	5.6	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、底未調整～指 サエ～ア、底未調整	7.5YR8/2	京焼中 ～京X 古	
195	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(13.4)	(2.8)	(8.4)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底 部ナデ	7.5YR8/3	京焼中 ～京X 古	白色系
196	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(13.4)	(0.3)	(7.8)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底 部ナデ	7.5YR8/6	京焼古 ～京X 古	白色系
197	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(16.2)	(0.8)	(9.4)	内面ヨコナデ(ヨコナデ)～(凹向)ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ～底未アザ、底 部ナデ	7.5YR8/2	京焼中	白色系
198	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(18.4)	(5.4)	(9.4)	内面ヨコナデ(ヨコナデ)～(凹向)ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ～ミガキ、底 部ナデ～ミガキ	10YR8/1	京X新 ～京X 中	白色系
199	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(12.2)	(0.0)	(6.6)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部未調整	7.5YR8/3	京焼中 ～京X 古	
200	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(13.6)	(2.6)	(6.6)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部未調整	10YR8/4	京X中	
201	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(14.0)	(3.0)	(6.0)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部未調整+ ナデ、底未調整	7.5Y7/4	京X中	
202	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(15.0)			内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR8/3	京焼中 ～京X 古	白色系
203	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(16.2)	(2.5)	(9.6)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ未調 整	10YR8/2	京焼中 ～京X 新	
204	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(6.2)	(1.0)	(5.6)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、底未調整	10YR8/2	京X新	白色系
205	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(7.4)	(2.0)		内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部未調整(指 正用)	7.5YR8/1	京焼中	
206	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(6.2)	(1.8)	(2.4)	内面ヨコナデ 外面ホ淡青色	10YR7/3	京X新 ～京X 中	白色系、～モザイ
207	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(9.0)	2.2	(8.6)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、未調整、底部 未調整	10YR7/4	京X中 ～京X 新	
208	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(8.4)	(1.4)	(8.8)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部未調整	7.5YR7/4	京焼中 ～京X 古	
209	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(7.4)	(1.6)	(8.8)	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底 部ナデ	7.5YR8/2	京X新 ～京X 中	白色系、～モザイ
210	北区	4面	0201SD	土師器	皿	(7.0)	(2.3)	(2.4)	内面ヨコナデ、(見込)ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底 部ナデ	10YR8/3	京焼中	白色系

用紙 番号	地区	遺構番	遺物名	器種	器形	口径 cm	高 cm	底径 直径 cm ¹ /g	形成調査の特徴	色・調 年代	備考(型式・産地・時期等)
211	北区	4面	0261SD	土師器	壺	(17.0)	(2.5)	(11.7)	内面ヨコナダ、外面部縁頭ヨコナダ。体部未調査	10YR7/2 京IX中 京X新	
212	北区	4面	0261SD	土師器	灯明白	(6.9)	5.2	7.0	内面ヒビアリ、外面部サエ、底部指オサエ	7.5YR6/8 不明	小型円形の燈明白。口縁を欠くが、注出完形品。
213	北区	4面	0261SD	瓦質土器	糞釜	(19.0)			内面ハラ口(板ナダ)、外面部縁ヨコナダ、糞下指オサエ	2.5Y8/1 京IX中	
214	北区	4面	0261SD	瓦質土器	糞釜	(23.8)			内面板ナダ、外面部ヨコナダ、煤付着	2.5Y8/1 京IX中	
215	北区	4面	0261SD	瓦質土器	鍋	(29.0)			内面ヨコナダ、ケズリ	2.5Y5/1 京IV古 ～中	
216	北区	4面	0261SD	瓦質土器	鍋	(18.0)			内面板ナダ、板ナダ	2.5Y8/1 京IV新 ～IX古	
217	北区	4面	0261SD	瓦質土器	鍋	(24.0)			内面板ナダ、外面部ヨコナダ、煤付着	10YR8/1 京IV古	
218	北区	4面	0261SD	土師器	鍋	(24.0)			内面ヨコナダ、外面部ヨコナダ、指オサエ	5YR7/4 京IX新	
219	北区	4面	0261SD	瓦質土器	鍋	(30.6)			内面ヨコナダ、ナダ	10YR1/6 京IX新	
220	北区	4面	0261SD	土師器	鍋	(23.0)			内面ヨコナダ、外面部ヨコナダ、開底下ヘラケ メナリナ上部	10YR8/2 京IX新	
221	北区	4面	0261SD	瓦質土器	鍋	(29.0)			外面部ヨコナダ、煤付着	2.5Y8/2 京IX中 ～IX新	
222	北区	4面	0261SD	瓦質土器	火鉢	(52.0)			内面指オサエ→板ナダ→ミガキ 外面部ヨコナダ→ミガキ	7.5Y7/2 京Ⅷ中 奈良火鉢(立石洗跡I)	
223	北区	4面	0261SD	瓦質土器	火鉢	(36.4)			内面板ナダ→ミガキ 外面部ヨコナダ→ミガキ	2.5Y6/1 京Ⅸ中 ～新 奈良火鉢(立石洗跡II)	
224	北区	4面	0261SD	瓦質土器	火鉢				(31.0) 内面ヨコナダ 外面部ヨコナダ→タフミガキ 底底面	10YR2/1 京IX新 奈良火鉢(立石洗跡III)	
225	北区	4面	0261SD	瓦質土器	火鉢				(36.0) 内面ヨコナダ→ヨコナダ 外面部ヨコナダ→ミガキ、A3.6cm割文スター ンを横に切付す、底底板ナダ→ミガキ	10YR1/3 京IX中 ～京IX 古 奈良火鉢(立石洗跡II)	
226	北区	4面	0261SD	須恵器	錐				(10.4) 内面ヨコナダ 外面部ヨコナダ、指ナダ。底部未 切付、中底無高台	3Y6/1 京IV新 京都藤原京(石井葉室原黒瓦 跡)、C4.	
227	北区	4面	0261SD	山茶碗	碗				(6.6) 内面ヨコナダ 外面部ヨコナダ、底部高台内切 盛り、貼付け蓋面	2.5Y7/1 京VI古 北部山茶碗(美濃根張室)型式	
228	北区	4面	0261SD	中世漆器	片口鉢	(28.0)			内面ヨコナダ、外面部ヨコナダ。 底底(?)ヨコナダ、底底板ナダ 外面部ヨコナダ、裏ね縁の自然転付着	10Y5/1 京V古 東福寺(森田第2回)	
229	北区	4面	0261SD	戸戸美濃系陶器	天日系碗			4.4 内面斜面約45度 底底(?)ヨコナダ出し高台	5YR5/2 京IV新 ～京IV 古 戸戸美濃系(藤澤大室)		
230	北区	4面	0261SD	信楽系陶器	広口壺	(26.4)			内面ヨコナダ 外面部ヨコナダ、自然転付着	5YR4/2 京VI古 信楽系	
231	北区	4面	0261SD	京窓系陶器	丸瓶	(10.4)			内面ヨコナダ、白字の輪+透明糊 (?)外側)	3Y8/1 京IV古 京窓系(中盤I期)	
232	北区	4面	0261SD	貿易陶器	青磁碗			6.0 内面ヨコナダ→ヨコナダ、見込みの輪糊 外面部ヨコナダ、底底内面はヘラ ケズリ出し高台(成形)、未施釉	5G6/1 京IV中 ～京IV 新 雞足巣系(山本IV類型)		
233	北区	4面	0261SD	貿易陶器	青磁碗	(12.2)			外面部縁上を青文。運送不明	5G6/1 京IV新 ～京IV 中 雞足巣系(小野進作文類型)	
234	北区	4面	0261SD	貿易陶器	染付瓶			(6.2) 内面ヨコナダはく軽く内所灰焼、(?) 内面ヨコナダ、外面部ヨコナダ、底底ナダ、 外面部花文、底底基筒造。養つきの 輪を繋ぐ取る(隠輪)	2.5YR2/2 京IX新 染付(小野C群1号)		
235	南区	4面	0903SX	土師器	壺	(15.0)	(2.8)	(9.0)	内面ヨコナダ 外面部ヨコナダ、体部ナダ、底 部ナダ	7.5YR8/3 京IV古 方	
236	南区	4面	0903SX	瓦質土器	大型羽釜	(28.0)			内面ヨコナダ 外面部ヨコナダ	7.5Y8/1 京X中 ～中	
237	南区	4面	0903SX	信楽系陶器	粗鉢	(28.0)			内面ヨコナダヨコナダ×2枚重り 外面部ヨコナダ	7.5YR6/6 京IV古 ～中 信楽系(御中B類)	
238	南区	4面	0903SX	戸戸美濃系陶器	天日系碗	(12.2)			内面ヨコナダヨコナダ×2枚重り 外面部ヨコナダ	京IV中 戸戸美濃系(藤澤大室2前半)	
239	北区	4面	015SX	土師器	壺	(9.4)	(2.3)	(2.6)	内面ヨコナダ 外面部ヨコナダ、体部ナダ、底 部ナダ	10YR7/3 京IV中 ～新	
240	北区	4面	015SX	信楽系陶器	粗鉢			(11.0) 内面ヨコナダヨコナダ×2枚重り 外面部ヨコナダ、底底未調査	5YR5/6 京IV新 信楽系(御中B類)		
241	北区	4面	036SX	信楽系陶器	粗鉢	(21.0)			内面ヨコナダ 外面部ヨコナダ	2.5Y8/2 京IV新 信楽系(御中B類)、6条幅	
242	北区	4面	036SX	貿易陶器	染付瓶			(6.4) 内面(込)牡丹文 外面部ヨコナダ、底底ヘラケズリ→斜 めに面部取り→斜付着、高台蓋に文様 なし。	2.5Y8/1 京X新 ～京IV 古 染付(小野C群VI類型)、牡丹文		

* () は復元値か残存倉を示す。

出典 番号	地区	遺構番	遺構名	器種	器形	口径 cm	高 cm	底径 cm * g	成形調節の特徴	色 調	年 代	備考(型式・产地・時期等)
243	東区	4面	1470SX	土師器	皿	(7.0)	(1.3)	(3.5)	内面ヨコナダ 外面オチテ、底部ナダ	10YR7/2	京III新	
244	東区	4面	1470SX	賀美陶器	白磁皿	(10.0)	(2.2)	(3.8)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、底輪郭丸取り 底輪郭ヨコナダ、底輪郭なし、高台付砂付茶、厚壁	2.5YR8/1	京III新～古 代	白磁(山本IV)細口盤
245	北区	4面	0306SX	土師器	皿	(6.0)	(1.5)	(5.0)	内面ヨコナダ 外表面オチテ、底輪郭オチニートテ	7.5YRS6	京III古	
246	北区	4面	0306SX	土師器	皿	(10.4)	(1.6)	(4.8)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部ナダ、底 輪ナダ	10YR8/2	京III古	
247	北区	4面	0306SX	瀬戸美濃系陶器	志野向付	(13.0)	(3.3)	(3.6)	内面輪ヨコナダ志野輪削→鉛輪削 花文、外表面ヨコナダ志野輪削→鉛輪削 花文、底部ケリ出し高台	10YR8/1	京III古	瀬戸美濃系(藤澤大室4束)、鉛輪 花文
248	北区	4面	0326SX	土師器	羽茎ミニシ ニア	(8.0)	(2.8)	(4.8)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部ナダ、底 輪ナダ	2.5YR7/3	京III新 ～以降	
249	北区	4面	0326SX	土師器	皿	(12.0)	(2.7)	(8.0)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部ナダ、底 輪ナダ	10YR8/0	京III古	
250	北区	4面	0332SX	土師器	皿	(7.4)	(1.6)	(5.2)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、底輪ナダ	10YR7/3	京III中	
251	北区	4面	0332SX	土師器	皿	9.0	1.8	4.2	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部ナダ、底 輪ナダ	10YR8/1	京III中	灯明皿
252	北区	4面	0332SX	南房系陶器	通利	2.3			内面輪ヨコナダ 外表面ヨコナダ	5YR6/4	京III新 ～京III 古	南房系(石井VB、東3号窯)
253	北区	4面	0332SX	南房系陶器	錦	(20.0)			内面輪ヨコナダ 外表面ヨコナダ	5YR5/2	京III新 ～京III 古	南房系(石井VB、東3号窯)
254	北区	4面	0332SX	瀬戸美濃系陶器	平柄	(14.0)			内面輪ヨコナダ灰釉セタ 外表面ヨコナダ灰釉ガケ、底部ケ リ出し高台	2.5Y7/4	京III新	瀬戸美濃系(藤澤大室3倍半)
255	北区	4面	0337SX	土師器	皿	(10.6)	(2.0)	(5.4)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部ナダ、底 輪ナダ	7.5Y7/4	京III古	
256	北区	4面	0346SX	土師器	皿	(13.0)	(2.4)	(8.4)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部指オサエ、底 輪ナダ	7.5YR7/4	京X中	
257	北区	4面	0346SX	土師器	皿	(7.8)	(1.3)	(4.4)	内面ヨコナダ 外表面オサエ、底部ナダ	7.5YR7/4	京III新	
258	北区	4面	0346SX	土師器	皿	(9.0)	(2.1)	(3.8)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部ナダ、底部ナ ダ	7.5YR7/4	京III中 ～	
259	北区	4面	0346SX	土師器	皿	(11.0)	(2.2)	(6.6)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部ナダ、底部ナ ダ	5YR6/4	京III中	
260	北区	4面	0346SX	信楽系陶器	建水	13.4	10.9	10.4	内面輪ヨコナダ 外表面ヨコナダ、ヘラ記号「フ」、底 輪未調節	7.5YR6/6	京III古 ～近世	信楽系(御中近世新・古相)
261	北区	4面	0346SX	瀬戸美濃系陶器	天日茶碗			4.6	内面輪ガケ 底輪ケリ出し高台、底輪	10YR8/2	京III新	瀬戸美濃系(藤澤大室)、天日茶 碗
262	北区	4面	0346SX	瀬戸美濃系陶器	俊皿	(12.0)	(2.3)	(6.6)	内面輪ヨコナダトゲノ輪×1(見込) 外表面輪ガケ、底輪(高台)輪ト ナシ、底輪ガケ	7.5YR4/3	京III古	瀬戸美濃系(藤澤大室4前半)
263	北区	4面	0346SX	瀬戸美濃系陶器	志野向付			(5.3)	内面ヨコナダ見込に(鉛輪)花文カ セ野輪ガケ、外表面ヨコナダと野輪ガ ケ、底部円軌ヨコナダ付、高台内に鉛 輪	10YR8/2	京III古	瀬戸美濃系(藤澤大室4後半)、見 込に鉛輪花
264	北区	4面	0350SX	土師器	皿	(7.4)	(1.1)	(6.2)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部ナダ、底 輪ナダ	7.5YR7/4	京III中	
265	北区	4面	0350SX	土師器	皿	(8.6)	(1.4)	(6.8)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部指オサエ 底輪指オサエ	7.5YR6/2	京III中	
266	北区	4面	0350SX	土師器	皿	(5.4)	(1.4)	(3.2)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、底部ナダ	10YR8/1	京III古	白色系
267	北区	4面	0350SX	土師器	皿	(14.0)	(2.6)	(5.3)	内面ヨコナダ 外表面ナダ	7.5YR7/4	京X中	
268	北区	4面	0350SX	土師器	皿	(12.4)			内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部ナダ	7.5Y7/3	京III中	
269	北区	4面	0351SX	土師器	皿	(12.0)	(2.3)	(8.0)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部指オサエ 底輪ナダ	2.5Y7/3	京III中	
270	北区	4面	0351SX	土師器	皿	(8.8)	(1.5)	(5.0)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部ナダ、底 輪指オサエ	10YR6/2	京III古	
271	北区	4面	0351SX	土師器	皿	(9.4)	(1.2)	(5.0)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、底部ナダ	7.5YR7/3	京III古	
272	北区	4面	0351SX	土師器	皿	(13.0)	(3.6)	(8.2)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ、体部ナダ、底 輪ナダ	2.5YR8/1	京III古	
273	北区	4面	0351SX	土師器	皿	(13.0)	(3.8)	(8.6)	内面ヨコナダ 外表面ヨコナダ2枚、体部ナダ、底 輪ナダ	10YR8/1	京III古	

規範番号	地区	造形面	造形名	器種	器形	口径cm	高さcm	底径cm	容積cm ³ /g	成形調節の特徴	色調	年代	備考(型式・产地・時期等)
274	北区	4面	0351SX	土師器	直	(11.4)	(2.7)	(6.6)	内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ2脚、底部ナデ、 底部ナゲ	2.5YR8/1	京焼古		
275	北区	4面	0351SX	土師器	直	(9.8)	(1.5)	(8.0)	内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ2脚、底部ナデ	10YR7/3	京焼新		
276	北区	4面	0351SX	土師器	直	(5.4)	1.0	(4.0)	内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ、底部指ナギニ	2.5YR8/1	京焼古		
277	北区	4面	0351SX	土師器	直	(5.8)	1.1	(5.0)	内面ヨコナデ 外面部ヨコナデ2脚、底部ナデ	5YR1	京焼古		
278	北区	4面	0351SX	京焼系陶器	縫入き小坪	(6.0)			内面側面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ、施ガケ	5YR1	京焼古	京焼系、縫入り	
279	北区	4面	0365SX	土師器	直	(14.0)	(2.3)		内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ、底部ナデ	10YR8/2	京X中		
280	北区	4面	0365SX	土師器	直	(8.0)	(2.1)	(5.2)	内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ、底部ナデ、底 部ナゲ	2.5YR8/2	京X中		
281	北区	4面	0365SX	戸戸美濃系陶器	丸皿	(11.4)			内面側面ヨコナデ火輪ガケ 外面部側面ヨコナデ火輪ガケ、底部ケ メリ出、轟呑	10YR7/3	京焼古	戸戸美濃系(藤澤大窯4年半)	
282	北区	4面	0365SX	戸戸美濃系陶器	平盤土			(4.8)	内面側面ヨコナデ火輪ガケ 外面部側面ヨコナデ火輪ガケ 外面部側面ヨコナデ火輪ガケ 外面部側面ヨコナデ火輪ガケ	10YR7/4	京焼古	戸戸美濃系(藤澤大窯4年、平盤B相 転)	
283	北区	4面	0365SX	戸戸美濃系陶器	黄瀬戸向付	(16.0)	(5.7)	(10.4)	内面側面ヨコナデ火輪ガケ 外面部側面ヨコナデ火輪ガケ 外面部側面ヨコナデ火輪ガケ 外面部側面ヨコナデ火輪ガケ 外面部側面ヨコナデ火輪ガケ 外面部側面ヨコナデ火輪ガケ	2.5YR8/3	京焼古	戸戸美濃系(藤澤大窯4年)、火輪志 升形相	
284	北区	4面	0377SX	土師器	直	(7.0)	(1.6)	(5.6)	内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ、底部指ナギニ ~ナゲ	10YR7/3	京X中		
285	北区	4面	0377SX	戸戸美濃系陶器	志野向付	(10.8)			内面側面ヨコナデ志野輪ガケ 外面部側面ヨコナデ志野輪ガケ	10YR7/3	京焼古	戸戸美濃系(藤澤大窯4年)	
286	南区	4面	0983SX	戸戸美濃系陶器	黄瀬戸向付	(11.6)	7.9	7.8	内面側面ヨコナデ火輪ガケ 外面部側面ヨコナデ火輪ガケ 外面部側面ヨコナデ火輪ガケ 外面部側面ヨコナデ火輪ガケ 外面部側面ヨコナデ火輪ガケ	2.5YR6/3	京焼古	戸戸美濃系(藤澤大窯4年)、扇形輪 状の向付	
287	南区	4面	1017SX	貿易陶器	華南三割脚 カ皿				内面ケタ 外面部~火輪と二割G・Ys、Gに粗化 する	2.5Y7/3	京X古	~新 小片で天地解きは不明。	
288	東区	4面	1446SD	土師器	直	8.0	2.3	4.2	内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ、底部ナデ、底 部ナゲ	2.5Y8/2	京X中	白色系、~そ黒	
289	東区	4面	1446SD	土師器	直	(11.2)	(1.8)	(6.8)	内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ、底部指ナギニ ~ナゲ	10YR6/4	京X新	洛外模倣型。他と異なる旋上。	
290	東区	4面	1446SD	土師器	直	(11.2)			内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ、底部指ナギニ	10YR7/3	京焼古	~白	
291	東区	4面	1446SD	土師器	直	(14.4)	(2.4)	(7.2)	内面ヨコナデ(ハラ日) 外面部側面ヨコナデ、底部ナゲ	7.5YR7/3	京X新	街山城系8	
292	東区	4面	1446SD	土師器	直	(15.6)			内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/4	京X新		
293	東区	4面	1446SD	土師器	直	(11.8)	(2.5)	(7.6)	内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ、底部指ナギニ ~ナゲ	10YR7/3	京X新		
294	東区	4面	1446SD	土師器	直	(11.6)	(2.0)	(7.4)	内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ、底部指ナギニ ~ナゲ	7.5YR8/4	京X新	灯明里 中	
295	東区	4面	1446SD	土師器	直	(7.6)	(2.4)	(3.2)	内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ、底部ナデ、底 部~そくささ	7.5YR8/3	京X古	~そ黒	
296	東区	4面	1446SD	土師器	直	(7.2)	(2.1)	(2.8)	内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ、底部ナデ、底 部指ナギニ	7.5YR8/3	京X古	~そ黒	
297	東区	4面	1446SD	土師器	直	(7.0)	(1.6)	(3.6)	内面ヨコナデ 外面部側面ヨコナデ。底部指ナギニ	7.5Y8/4	京X中	~そ黒	
298	東区	4面	1446SD	常滑系陶器	片口鉢			(22.6)	内面ヨコナギリ、底部凹付け高台 ~ヨコナギ	2.5Y7/1	京V中	常滑系(中野第1四脚1)	
299	東区	4面	1446SD	信楽系陶器	直	(11.0)			内面ヨコナデ、サビ輪山 外面部側面ヨコナデ、底部指ナギニ	7.5Y4/2	京X新	信楽系(中野近世2脚段階・新相 引)、铁柄附	
300	東区	4面	1446SD	丹波系陶器	瓶鉢			(11.0)	内面ヨコナデ、ヘラによる瘤目、使 用による摩滅、外面部底付くへら割りヨコナデ、 底部米綱附	5YR5/4	京V中	丹波系(兵谷川郷~頃)	
301	東区	4面	1446SD	備前系陶器	瓶鉢	(31.0)			内面ヨコナデ8条クシ目 外面部ヨコナデ	5YR3/3	京V古	備前系(石井IVB)	
302	東区	4面	1446SD	戸戸美濃系陶器	卯皿			(7.8)	内面ヨコナデ、脚目 外面部ヨコナデ、底部赤鉄	10YR7/3	京X古	戸戸美濃系(藤澤古戸中肩) ~日	
303	東区	4面	1446SD	戸戸美濃系陶器	丸皿	(11.6)			内面ヨコナデ~自然釉 外面部ヨコナデ~自然釉	5YW2	京焼古	戸戸美濃系(藤澤大窯4年半)	
304	東区	4面	1446SD	貿易陶器	青磁碗			(5.0)	内面ヨコナデ(内面)西朝花文 外面部ヨコナデ(内面)火輪ガケ、底部ケ リ山と高台、底部は織目、円形	7.5GY7/1	京焼中	同安窯系(山本1脚D窯)	

* () は復元値か残存値を示す。

番号	地区	造物名	器種	器形	口径 cm	高 cm	底径 cm × g	成形調整の特徴	色調	年代	備考 (型式・产地・時期等)
305 東区 4面 1499SX	信楽系陶器	埴輪	(32.0)					内面回転ヨコナダ、5条クシ1単位 外面回転ヨコナダ、5条クシ1単位	5YR4/4	京X中	信楽系 (信中BS類)
306 東区 4面 1499SX	貿易陶器	染付瓶			(4.9)			内面凹込みに花文、輪柱軸付き 外面右側、底面横軸付き→右側	SGY7/3	京X新 ~京盛 古	染付 (小野E群)、花文
307 東区 4面 1500SX	土師器	瓶	11.2	2.3	6.4			内面回転ヨコナダ 外面回転ヨコナダ、体部ナダ、底 ナダ	7.5YR7/6	京盛古	
308 東区 4面 1500SX	瓦質土器	埴輪	(26.0)					内面回転ヨコナダ→ミガキ 外面回転ヨコナダ	2.5Y4/3	京X古 ~ 京盛古	瓦質系
309 東区 4面 1500SX	信楽系陶器	埴輪	(24.0)					内面回転ヨコナダ、6条クシ1単位 外面回転ヨコナダ	2.5YR5/4	京X新	信楽系 (信中BS類)
310 東区 4面 1500SX	信戸美濃系陶器	天目系瓶	(11.0)					内面回転ヨコナダ、跳動一色船台 外・内面回転ヨコナダ、跳動一色船台 外・内面回転ヨコナダ、跳動一色船台 底面擦痕、ケメリ出し高 音	2.5Y3/1	京盛古	信戸美濃系 (藤澤大窯4前半)、 天日目系E組
311 東区 4面 1500SX	貿易陶器	染付瓶			(3.2)			内面回転ヨコナダ、見込に花文、 外・内面回転ヨコナダ、底部基 底部基底、垂け出し部分の輪を抜き取る 、窓口出し合口	5GY6/1	京X中 ~京盛 古	染付 (小野C群)、花文
312 東区 4面 1500SX	貿易陶器	染付瓶	(10.0)	(2.8)	6.0			内面回転ヨコナダ、見込は輪化し た「身」 内面回転ヨコナダ、底部支 底部基底、垂け出し高音、底音→高音 内に擦痕	5GY6/2	京X新 ~京盛 古	染付 (小野C群)
313 北区 4面 0301SE	土師器	瓶	(10.6)	(2.0)	6.0			内面回転ヨコナダ 外・内面回転ヨコナダ、底部指オサエ ナダ、底面ナダ	10YR3/3	京盛中	
314 北区 4面 0301SE	土師器	瓶	(9.4)	(2.1)	6.0			内面回転ヨコナダ 外・内面回転ヨコナダ、体部ナダ、底 部ナダ	5YR6/6	京盛中	
315 北区 4面 0301SE	瓦質土器	罐	(34.0)					内面回転ヨコナダ、底部ミガキ 外・内面回転ヨコナダ、底部ミガキ→ ナダ	10YR7/4	京X新	
316 北区 4面 0301SE	土師器	後壺蓋	(6.0)	(0.5)	5.5			内面輪構みナダ 外・内面回転ヨコナダ、底部ナダ	5YR8/1	京X古 ~新	
317 北区 4面 0301SE	肥前系陶器	丸瓶	(10.0)	(5.0)	4.4			内面回転ヨコナダ底部設計→長石船 底音(ガ) (2重張) 外・内面回転ヨコナダ、一色船台音を立ヶ タ、底面擦痕	7.5YR6/4	京盛古	肥前系津唐 (1期)
318 北区 4面 0301SE	信戸美濃系陶器	環阮瓶	(11.6)	1.9	6.0			内面回転ヨコナダ、見込は輪轉 外・内面回転ヨコナダ、底部ケメリ出し 高音、トント音	2.5Y8/2	京盛古	信戸美濃系 (藤澤大窯4末)
319 北区 4面 0301SE	貿易陶器	染付瓶	(10.4)	2.1	6.0			内面回転ヨコナダ見込2重圓盤内に粒 外・内面回転ヨコナダ、底部ケメリ出し 高音、トント音	5GY6/1	京盛中	染付 (小野E群)、明代
320 北区 4面 0328SX	貿易陶器	染付瓶	(12.0)					内面回転ヨコナダ花文6分割 外・内面回転ヨコナダ、底部輪柱に鉄軸、輪 花	5GY6/1	京盛古 ~中	染付 (小野F群)、6分割輪花
321 北区 4面 0357SX	土師器	瓶	(14.0)	(2.0)	10.6			内面回転ヨコナダ 外・内面回転ヨコナダ、体部指オサエ ナダ、底部底部ナダ	7.5YR7/5	京盛中	
322 北区 4面 0357SX	土師器	瓶	8.4	1.4	6.4			内面回転ヨコナダ 外・内面回転ヨコナダ、底部ヘラ切り ナダ	7.5R7/1	京盛中	
323 北区 4面 0357SX	土師器	瓶	8.6	1.4	7.0			内面回転ヨコナダ 底部ヘラ切りナダ	7.5YR7/2	京盛中	灯明皿
324 北区 4面 0357SX	土師器	瓶	(10.0)	(2.2)	6.0			内面回転ヨコナダ 外・内面回転ヨコナダ、体部指オサエ ナダ、底部指ナダ	2.5Y7/2	京X古	
325 北区 4面 0357SX	土師器	瓶	(9.4)	(2.6)	5.8			内面回転ヨコナダ 外・内面回転ヨコナダ、体部指オサエ ナダ、底部指ナダ	7.5YR7/6	京X新	
326 北区 4面 0357SX	土師器	瓶	(9.4)	(2.6)	6.0			内面回転ヨコナダ 外・内面回転ヨコナダ、体部指オサエ ナダ、底部指オサエナダ	7.5YR6/2	京X新	
327 北区 4面 0357SX	土師器	瓶	(10.6)	(2.7)	7.4			内面回転ヨコナダ 外・内面回転ヨコナダ、体部指オサエ ナダ、底部指ナダ	7.5YR7/4	京X新	
328 北区 4面 0357SX	土師器	瓶	6.0	1.3	4.2			内面回転ヨコナダ 外・内面回転ヨコナダ	7.5YR7/3	京X中 ~京盛 古	手づくね
329 北区 4面 0357SX	土師器	瓶	7.2	1.4	3.3			内面回転ヨコナダ 外・内面回転ヨコナダ、底部指オサエ	7.5YR7/4	京X中 ~京盛 古	
330 北区 4面 0357SX	土師器	瓶	(7.0)	(1.2)	4.2			内面回転ヨコナダ 外・内面回転ヨコナダ、底部ナダ	7.5YR6/4	京X新	
331 北区 4面 0357SX	土師器	瓶	(10.0)	(2.5)	6.8			内面回転ヨコナダ 外・内面回転ヨコナダ、体部ナダ、底 部ナダ	10YR7/2	京X中	灯明皿

※ () は復元値か残存値を示す。

開拓番号	地区	遺構番	遺構名	器種	器形	口径 cm	高 cm	底径 cm	容積 cm ³	成形調節の特徴	色調	年代	備考(型式・産地・時期等)
332	北区	4面	037SX	土師器	三	(9.0)	(2.0)	(3.0)	内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ、体部ナダ、底 部ナダ	7.5YR8/3 京JR中			
333	北区	4面	037SX	土師器	三	(10.6)	(2.7)	(4.4)	内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ、体部ナダ、底 部ナダ	7.5YR8/3 京X中			
334	北区	4面	037SX	土師器	三	(11.0)	(2.0)	(5.4)	内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ、体部ナダ、底 部ナダ	2.5Y7/2 京X新 灯明皿			
335	北区	4面	037SX	土師器	三	(4.6)	(0.7)	(4.4)	内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ、底部ナダ	10YR8/1 京X中			
336	北区	4面	037SX	土師器	三	(7.0)	(1.9)	(2.0)	内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ、底部ナダ	2.5Y9/1 京X中 ~前			
337	北区	4面	037SX	土師器	羽茎	(23.6)			内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ、体部指オサエ	7.5YR6/1 京X古 五貫土器横継上器			
338	北区	4面	037SX	備衛系陶器	鉢	(20.0)			内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ	SYR4/3 京X新 備衛系(石井VB)			
339	北区	4面	037SX	貿易陶器	青磁碗	(13.2)			内面ヨコナダ 外面白跡	5G6/1 京JR古 越魚丸(野井蓮井文鏡C期)			
340	北区	4面	037SX	貿易陶器	染付 小柄小口鉢	(5.6)	(0.9)	(2.0)	内面ヨコナダ 外面白ヨコナダ、染付(草花文)高台内 縁あり、底部染付、旋ハギ、底部内 出施加	10YR8/1 京JR古 染付(小羽F群)、草花文			
341	北区	4面	036SX	土師器	三	(12.0)	(2.5)	(3.0)	内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ、体部ナダ、底 部ナダ	10YR8/1 京X新			
342	北区	4面	036SX	土師器	三	(7.2)	(1.5)	(4.0)	内面ヨコナダ 外面白ヨサエ	7.5YR6/6 京IX新 ~ハモ且			
343	東区	4面	143SX	土師器	三	(6.0)	(1.2)	(0.4)	内面ヨコナダ 外面白ナダ、底部ナダ	10YR7/3 京X古 分			
344	東区	4面	143SX	土師器	三	5.3	1.1	3.6	内面ヨコナダ 外面白ナダ、底部ナダ	7.5YR7/4 京X新			
345	東区	4面	143SX	土師器	三	(11.0)	(2.2)	(7.0)	内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ、体部指オサエ、 底部指オサエ	10YR7/3 京JR古			
346	東区	4面	143SX	土師器	三	(13.0)		(8.4)	内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ、体部ナダ、底 部ナダ	10YR1/6 京X古 分			
347	東区	4面	143SX	土師器	三	(10.0)	(2.2)	(5.4)	内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ、体部指オサエ 底部指オサエ	7.5YR7/1 京X古 灯明皿			
348	東区	4面	143SX	土師器	三	(11.0)	(2.0)	(6.2)	内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ、体部ナダ、底 部ナダ	10YR8/3 京JR古 分			
349	東区	4面	143SX	瓦質土器	黒引	(23.0)			内面指オサエ→ヨコナダ 外面白	2.5Y4/1 京JR古 奈良火鉢(立石風呂III)			
350	東区	4面	143SX	丹波系陶器	片口盆鉢	(30.0)			内面ヨコナダナダ→ナダ、1条ケシ (SYR6/6 京JR古 丹波系(長谷川IV期) 外面白ヨコナダ				
351	東区	4面	143SX	信衛系陶器	粗鉢	(32.0)			内面ヨコナダ4条1半筋 外面白ヨサエ	7.5YR6/8 京X中 信衛系(御中B相)			
352	東区	4面	143SX	信戸美濃系陶器	志野輪扁皿	(14.0)	(2.6)	(8.8)	内面ヨコナダ、薄い志野輪 外面白ヨコナダ→ラケヅ、厚い 志野輪、底部ラケヅリ、志野輪、 發付の跡	10YR8/1 京X中 ~前 信戸美濃系(藤澤大皿2径平)			
353	東区	4面	143SX	信戸美濃系陶器	丸皿	10.2	2.6	6.4	内面凹輪ヨコナダ→一筋 外底輪、圓窓具付、蓋 外面白ヨコナダ→ラケヅリ、厚 壁、底輪、底部凹輪、 高台、高台内に円形通葉巻状 筋、へこ割り高台	2.5Y7/4 京X新 信戸美濃系(藤澤大皿4後平)			
354	東区	4面	143SX	信戸美濃系陶器	丸皿	10.6	2.3	5.4	内面凹輪ヨコナダ(見込) 起壁ガク 外底輪、圓窓具付、蓋 外面白ヨコナダ→ラケヅリ、厚 壁ガク、底輪高台内に圓窓具付 筋、へこ割り高台	2.5Y7/4 京X新 信戸美濃系(藤澤大盤4後)			
355	東区	4面	143SX	信戸美濃系陶器	折腰皿	10.6	1.9	6.0	内面凹輪ヨコナダ(見込) 折腰ガク 外底輪、圓窓具付、蓋 外面白ヨコナダ→ラケヅリ、厚 壁ガク、底輪高台内に圓窓具付 筋、へこ割り高台	2.5Y8/3 京JR古 信戸美濃系(藤澤大4米)	, 内 充		
356	東区	4面	143SX	信戸美濃系陶器	天貝茶碗			(5.0)	内面凹輪ヨコナダ 外面白ヨコナダ→折腰 (軽) 軽引。底腰割り出し高台、 蓋	10YR2/2 京X古 信戸美濃系(藤澤大4米)	, 天 貝茶碗		
357	東区	4面	143SX	貿易陶器	青磁碗	(13.0)	(8.1)	4.6	内面凹輪ヨコナダ(羅氏) のスタン (横) 横縫合 外面白ヨコナダ→削引、輪縫の蓋 充、底底削引出し高台、高台P12 露筋	10YR3/1 京X中 ~京JR 龍泉窯系(小野賀健菴井文鏡C群) 見込に輪縫印とその周囲に 充、その裏面に蓋充			
358	東区	4面	146SX	土師器	三	(10.6)	(2.1)	(6.2)	内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ、体部指オサエ 底部ナダ	10YR8/4 京X新 灯明皿			
359	東区	4面	146SX	土師器	三	(11.4)	(2.1)	(6.0)	内面ヨコナダ 外面白跡ヨコナダ、体部ナダ、底 部ナダ	10YR7/1 京JR古			

※ () は復元値か残存値を示す。

番号	地区	造形法	造形名	器種	器形	口径cm	高さcm	底径 cm × g	成形調節の特徴	色調	年代	備考(型式・产地・時期等)
360 東区 4面 1460SX	土師器	直腹壺	(6.4)	(8.7)	(5.0) 内面土口压痕、ヨコナダ、口縁裏口 外面口縁部ヨコナダ、布目压痕(多 角形)→ナカ。底底部調整	7.5YR3/4 京33新 定期	墨系(A-2組)					
361 東区 4面 1460SX	丹波系陶器	瓶鉢			(10.0) 内面土口リム、外 外面土ナダ。底底部調整	7-5YR5/2 京33新 ~京33中	丹波系(黄谷川窯期)					
362 東区 4面 1460SX	信楽系陶器	瓶鉢			(14.0) 内面回転ヨコナダ、6条1单位、摩訶 丸、外 外面回転ヨコナダ、台脚との切り離 し構造引き手なし底あり。底底部調整	5YR7/6 京33新 信楽系(信中B4組b)						
363 東区 4面 1460SX	肥前系陶器	鉢	(17.0)	(10.0)	(6.0) 内面回転ヨコナダ薄手輪動 外面回転ヨコナダ薄手輪動+裏(火船) 底底部、底部ハラケナリ、ケヌリ出 し構造、底内に突起はなし	10YR5/3 京33古 肥前系唐津(1期)						
364 東区 4面 1460SX	肥前系陶器	向付		(10.8)				内面回転ヨコナダ、透明釉+薺火船 外面回転ヨコナダ薄手輪動→ 薺火船、花文+幾村文	7.5YR5/4 京33古 方円、上方方形花文と幾村文			
365 東区 4面 1460SX	肥前系陶器	皿	(22.4)					内面回転ヨコナダ「×」支援カ、透 明釉+一段脚 外面回転ヨコナダ透明釉	2.5Y6/1 京33古 肥前系唐津(1-2周orⅡ周)			
366 東区 4面 1460SX	瀬戸美濃系陶器	志野菊皿	(12.0)						7.5YR8/1 京33古 瀬戸美濃系(藤澤大窯4組)			
367 東区 4面 1461SX	土師器	皿	(6.0)	(1.1)	(3.4) 内面ヨコナダ 外面指オサニ、底部指オサニ	10YR7/2 京33新						
368 東区 4面 1461SX	土師器	皿	(11.0)	(2.1)	(6.0) 505	5YR7/4 京33古						
369 東区 4面 1461SX	肥前系陶器	皿			(4.8) 内面回転ヨコナダ 外面ケヌリ、底部ケヌリ出し高台、 窓跡	10YR5/3 京33古 肥前系唐津(1-2周)	铁鉢					
370 東区 4面 1461SX	肥前系陶器	向付	(15.7)	(4.7)	(5.3) 窓の透け見を例に倒て方型とする 窓の透け見(一重、二重)、底面ハラケナリ高 台、窓跡 底底部指オサニ	10YR6/4 京33古 ~新 肥前系唐津(1-2周orⅡ周)	鐵鉢					
371 東区 4面 1487SX	土師器	皿	(10.8)	(2.1)	(6.0) 内面ヨコナダ 外面口縁部ヨコナダ、体部指オサニ 底底部指オサニ	10YR8/3 京33古 灯明皿						
372 東区 4面 1487SX	土師器	皿	(9.0)	(2.2)	(4.0) 内面ヨコナダ 外面ヨコナダ、体部指オサニ 底底部指オサニ	7.5YR7/4 京33中						
373 東区 4面 1487SX	土師器	皿	(11.0)			10YR8/1 京33中 西都名						
374 東区 4面 1487SX	瓦質土器	信俗器	(28.0)				内面回転ヨコナダ、横板ナダ 外面口縁ヨコナダ、指オサニ	7.5YR5/1 不明				
375 東区 4面 1487SX	信楽系陶器	瓶鉢	(29.8)				内面回転ヨコナダ、スリリ4条クシ 外面回転ヨコナダ	10YR8/4 京33中 信楽系(信中B4組b)				
376 東区 4面 1487SX	信楽系陶器	瓶鉢	(30.0)				内面回転ヨコナダ、スリリ(6条)1単位 外面回転ヨコナダ	5YR5/6 京33新 信楽系(信中B4組b)				
377 東区 4面 1487SX	貿易陶磁器	青白磁花瓶	(10.4)				内面回転ヨコナダ 外面回転ヨコナダ	10Y/1 京33中 ~京33中	信楽系(山本E-F窯)			
378 東区 4面 1487SX	貿易陶磁器	壺付皿	(20.0)				内面茎木文 外面模様花、茎木文、底部發行脚附	2.5GV7/1 京33古 壺付(小野F窯) 茎木文				
379 東区 4面 1497SX	土師器	皿	(6.4)		(3.4) 内面ヨコナダ 外底部調整(指オサニ)、底部指オ サニ	2.5Y6/2 京33新 古						
380 東区 4面 1497SX	土師器	皿	(10.6)	(2.5)	(5.0) 内面ヨコナダ 外底2種部ヨコナダ、体部ナダ、底 部ナダ	10YR7/2 京33古						
381 東区 4面 1497SX	土師器	井?	(16.0)				内面ヨコナダ 外底2種部ヨコナダ、体部指オサニ	7.5YR2/3 不明				
382 東区 4面 1497SX	瓦質土器	香炉	(19.8)	(3.2)	(7.8) 内面底窓底ヨコナダ 外底ヨコナダ→ミガキ、スタン プ模様文、底部ハラケ調整、 底?	2.5Y3/1 京33古 ~京33古	三足か、巻形スタンプ文					
383 東区 4面 1497SX	瓦質土器	香炉	(17.0)	(6.5)	(16.6) 内面指オサニヨコナダ 外底ヨコナダ、薬盒一筋から 外底ヨコナダ、輪動(底)平 行李(5~6)条2筋、その間に輪動 文字吹手	2.5Y3/1 京33古 ~京33古	奈良大鉢(丸鉢)、三足か、巻形 スタンプ文					
384 東区 4面 1497SX	瀬戸美濃系陶器	花瓶					内面回転ヨコナダ、輪動一筋から 外底ヨコナダ、輪動(底)平 行李(5~6)条2筋、その間に輪動 文字吹手	7.5YR2/2 京33中 瀬戸美濃系(藤澤中窯上用)				
385 東区 4面 1497SX	瀬戸美濃系陶器	志野大瓶			(3.4) 内面土野輪、 外底2種部ガタ。底部切→ケヌリ 出し高台	2.5Y8/2 京33古 瀬戸美濃系(藤澤大窯)						
386 東区 4面 1497SX	瀬戸美濃系陶器	天日茶碗	(11.6)				内面回転ヨコナダ、輪動ガタ 外底ヨコナダ壁厚=輪動	10YR8/2 京33中 瀬戸美濃系(藤澤壁厚L-1)				
387 東区 4面 1497SX	貿易陶磁器	白磁碗			(5.2) 内面高輪、透明釉 外底ハラケズリ、凸唇、底高合 蓋ナリ凹凸、ハラケズ。ケヌリ出 し高台	10Y7/1 京33新 ~京33中	福建君系(山本C窯)					

※ () は復元値か残存値を示す。

開拓番号	地区	遺構番号	遺構名	器種	器形	口径 cm	高 cm	底径 cm	容積 cm ³	形成過程の特徴	色調	年代	備考(型式・産地・時期等)
388	東区	4面	1497SX	貿易陶器	青磁碗	(16.0)				内面同軸ヨコナダ、輪ガタ 外面凸縁波立文、輪ガタ	10YR6/1	京阪中 ～近江 新	龍泉窯系(山本G群)、蓮井文
389	東区	4面	1497SX	貿易陶器	染付瓶			4.0		内面同軸ヨコナダ、花文 外面同軸ヨコナダ、虎皮文、底部基 盤部、高台豐作の軸を焼き取る	青文や 虎皮文	近江 古	赤堀窯窯系(小朝C群)、花文
390	北区	4面	0378SD	肥前系陶器	火入	(14.0)	(7.2)	(4.8)		内面同軸ヨコナダ、輪ガタ 外面同軸ヨコナダ、絞り文、底部基 盤部、高台豊作の軸を焼き取る 輪・高台豊作3ヘ所の取り有り	7.5YR5/2	京Ⅲ古	肥前系清津上多々良窯(尾瀬)。 別れ面に唐埴の痕跡。
391	北区	4面	0378SD	肥前系陶器	染付水指			4.8		内面同軸ヨコナダ(透明釉) 外面同軸ヨコナダ(手写)、四文? 調査 2例時高台豊作一軸を焼き、輪付 部露胎	7.5YR5/1	京Ⅲ古	肥前系清津岸(尾瀬群)
392	北区	4面	0378SD	瀬戸美濃系陶器	志野焼木口			(12.4)		内面同軸ヨコナダ(透明釉) 外面同軸ヨコナダ(手写)、底部基 盤部のみ?カケリ、底膨大調整、輪脚 部露胎	10YR7/3	京Ⅲ古	瀬戸美濃系(藤原登室)
393	南区	4面	1011SX	貿易陶器	青磁大皿			(8.0)		内面「吉文」、陰刻、輪ガタ 外面同軸ヨコナダ、底膨大、輪脚 部大きさ	10YR1/1	京Ⅰ中 ～後	龍泉窯系(山本D群)、輪脚の「木 字文」
394	南区	4面	0921SX	木製品	木箱	柄長さ (13.7)以上 4.4×5.7	横径 16.3	横長			10YR4/2	京Ⅲ古 ～近江 古	庄光樹(ケヤキ)、底食いし、 底膨大
395	北区	4面	0357SX	土師器	盆	(13.6)				内面ヨコナダ 外面口縁波ヨコナダ、体透ナダ	7.5YR7/4	京Ⅳ古 9	
396	北区	4面	0357SX	土師器	盆	(13.0)	(2.5)	(6.6)		内面ヨコナダ 外面口縁波ヨコナダ、体透ナダ、底 膨大	10YR8/3	京Ⅳ古 ～近江 古	
397	北区	4面	0363SK	土師器	盆	(11.0)	(2.0)	(7.0)		内面ヨコナダ 外面口縁波ヨコナダ、体透ナダ、底 膨大	10YR7/3	京Ⅲ古	
398	北区	4面	0363SK	土師器	盆	(11.4)	(2.1)	(7.4)		内面ヨコナダ 外面口縁波ヨコナダ、体透ナダ、底 膨大	10YR7/3	京Ⅲ古	
399	北区	4面	0363SK	土師器	盆	(12.0)	(2.4)	(8.0)		内面ヨコナダ 外面口縁波ヨコナダ、体透ナダ、底 膨大	10YR7/2	京Ⅲ古	
400	北区	4面	0363SK	土師器	盆	(13.0)	(2.4)	(9.0)		内面ヨコナダ 外面口縁波ヨコナダ、体透ナダ、底 膨大	2.5Y7/3	京Ⅲ古	
401	北区	4面	0363SK	土師器	盆	(13.6)	(2.2)	(8.8)		内面ヨコナダ 外面口縁波ヨコナダ、体透ナダ、底 膨大	10YR7/2	京Ⅲ中	褐色系
402	北区	4面	0363SK	土師器	盆	(12.0)	(2.3)	(9.0)		内面ヨコナダ 外面口縁波ヨコナダ、体透指サエ →サエ、底膨大サエ	7.5Y7/4	京Ⅲ中	
403	北区	4面	0363SK	土師器	盆	(8.6)	(1.7)	(6.0)		内面口縁波ヨコナダ、見辯指オサエ →サエ 外面口縁波ヨコナダ、体透指オサエ →サエ、底膨大	7.5YR7/2	京Ⅲ古	
404	北区	4面	0363SK	土師器	盆	(9.0)	(1.5)	(7.2)		内面ヨコナダ 外面口縁波ヨコナダ、体透ナダ、底 膨大	10YR7/4	京Ⅲ古	
405	北区	4面	0363SK	土師器	盆	9.0	1.1	7.6		内面口縁波ヨコナダ、見辯指オサエ →サエ 外面口縁波ヨコナダ、体透指オサエ →サエ、底膨大	7.5YR8/1	京Ⅲ古	光形品
406	北区	4面	0363SK	土師器	盆	(9.4)	(1.5)	(7.6)		内面ヨコナダ、ナダ 外面口縁波ヨコナダ、底膨大	SYN/1	京Ⅲ古	白色系
407	北区	4面	0363SK	土師器	盆	(9.0)	(1.4)	(7.0)		内面ヨコナダ、指オサエ→ナダ 外面口縁波ヨコナダ×2段々、体透ナ ダ、底膨大	7.5YR7/3	京Ⅲ中 古	不明 好明乳
408	北区	4面	0363SK	土師器	盆	(7.6)	(1.4)	(7.0)		内面ヨコナダ 外面口縁波ヨコナダ、底膨大	10YR7/1	京Ⅲ前 ～京Ⅲ 古	
409	北区	4面	0363SK	土師器	盆	(6.6)	(1.1)	(4.6)		内面ヨコナダ 外面ヨコナダ、底膨大	2.5Y7/4	京Ⅲ古 9	
410	北区	4面	0363SK	土師器	盆	(10.0)	(1.2)	(10.0)		内面ヨコナダ 外面ヨコナダ、底部ナダ	10YR8/2	京Ⅲ中	コースター型
411	北区	4面	0363SK	瓦器	筒					内面暗火	10YR2/1	京Ⅲ中	捕葉系(IV-C)
412	北区	4面	0363SK	瓦器土器	筒	(15.2)				内面ヨコナダ 外面口縁波ヨコナダ、体透ナダ→板 ナダ 外面口縁波ヨコナダ、体透指オサエ →サエ、保付着	2.5Y7/2	京Ⅲ中 ～近江 古	
413	北区	4面	0363SK	瓦器土器	筒	(25.8)				内面ヨコナダ 外面口縁波ヨコナダ、体透指オサエ →サエ、保付着	10YR7/2	京Ⅲ中 ～近江 古	器皿が荒れる 内含りのコゲ痕あり
414	北区	4面	0363SK	瓦器土器	筒	(28.8)	(14.0)	(24.6)		内面ヨコナダ 外面口縁波ヨコナダ、体透指オサエ →サエ、保付着	10YR6/1	京Ⅲ中 ～近江 古	1個体分有り

※ () は復元値か残存値を示す。

番号	地区	遺構名	遺物名	器種	器形	口径cm	高cm	底径cm	成形特徴	色調	年代	備考(型式・产地・時期等)
415	北区	4面	0363SK	中直筒容器	小壺	(4.8)			内面ヨコナダ、反転カカル 外面ヨコナダ、反転カカル	10Y6/1	不明	
416	東区	3面	1317SD	土師器	壺	(6.4)	(2.0)	(0.3)	内面ヨコナダ、外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、指	10YR3/3	京X古	
417	東区	3面	1317SD	土師器	壺	(10.0)	(3.0)	(4.4)	内面ヨコナダ、外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ、底 部ケリ	10YR3/3	京鍋中 ～新	
418	東区	3面	1317SD	土師器	壺	(5.6)	(2.1)	(2.2)	内面ヨコナダ、外面ヨコナダ、底部ナダ	10YR8/1	京X中	白色系
419	東区	3面	1317SX	土師器	壺	(10.6)			内面ヨコナダ、外面口縁部ヨコナダ、体部ナダ	10YR7/2	京X新	
420	東区	3面	1317SD	瓦質土器	壺	(19.6)			内面ヨコナダ、外面ヨコナダ	2.5Y3/1	不明	同内系。三星美
421	東区	3面	1317SD	常滑系陶器	口片小瓶			(5.4)	内面ヨコナダ、外面口縁部ヨコナダ、底部ヘラケツリ	5YR6/8	京鍋中	常滑系 古
422	東区	3面	1317SD	瀬戸美濃系陶器	天日系瓶	(11.0)			内面ヨコナダ、外面ヨコナダ、下平ケズリ	7.5YR3/2	京X古	瀬戸美濃系(藤澤豊臣)
423	東区	3面	1317SD	肥前系陶器	壺			(0.6)	内面ヨコナダ、外面ヨコナダ、底削、底部ケズリ 山口高台、鹿形、面部、底部ケズリ	7.5YR3/2	京X新	肥前系唐津(1-2期) ～京鍋
424	南区	3面	0105SX	京他系陶器	水滴	全長 (10.0)	幅 3.0	高 7.3	外面ヨコナダ、面部、底部ケズリ 外面ヨコナダ、面部	10YR6/3	京鍋中	京他系名。大型(大太郎)の水滴
425	北区	2面	0109SD	土師器	壺	(9.2)			内面ヨコナダ、外面ヨコナダ、体部未調整	10YR8/4	京古	
426	南区	2面	0723SX	土師器	上製口盤	直径 3.4×3.3		厚 0.6	内面ヨコナダ、外面ヨコナダ、未調整	7.5YR6/4	不明	円盤2定位扁(縫合内折り)で、打 丸次により側面を内折りとする。
427	東区	2面	1215SD	土師器	壺	(12.0)			内面ヨコナダ、外面ヨコナダ、未調整	7.5YR7/4	京X中	
428	東区	2面	1215SD	瓦質土器	火鉢	(6.0)			内面ヨコナダ、外面ヨコナダ～ガラ	5Y3/1	京X新	奈良大鉢(立石火鉢作)、外面 荒れていって調査不明。
429	東区	2面	1215SD	肥前系陶器	壺	(31.0)			内面ヨコナダ、瓶山付鐵造芦文 外面ヨコナダ～ドケズリ	7.5YR7/2	京鍋中	肥前系唐津(1-2期)、鉄造芦文
430	北区	1面	0002SD	土師器	壺	(10.0)			内面ヨコナダ、外面ヨコナダのみヨコナダ、底部未調	10YR7/3	京X新	灯明直。～そき
431	北区	1面	0002SD	土師器	壺	(14.6)			内面ヨコナダ、外面ヨコナダ、底部未調整	7.5Y7/4	京X新	
432	北区	1面	0002SD	土師器	壺	(9.8)	2.1		内面ヨコナダ、外面ヨコナダ、底部ナダ未調	7.5YR7/1	京X中	
433	北区	1面	0002SD	土師器	浅腹壺	(5.2)			内面横接合領、口沿ヨコナダ 外面ヨコナダ、下平ケチナダ	10YR7/3	京鍋新	
434	北区	1面	0002SD	丹波系陶器	瓶	(35.0)			内面ヨコナダ～瓶田日 外面ヨコナダ～瓶田サエ	7.5Y6/6	京鍋古	丹波名(長谷川の傳)
435	北区	1面	0002SD	丹波系陶器	瓶	(36.0)			内面ヨコナダ～瓶田日 外面ヨコナダ～瓶田サエ	7.5YR5/6	京鍋古	丹波名(長谷川の傳)
436	北区	1面	0004SK	土師器	粗衣壺	(9.9)	8.3	11.8	内面横輪ヨコナダ、(足)ヨコナダ 外面ヨコナダ～脚附、体部上半回 転ヨコナダ、底部未調	10YR7/4	京X中	豐後名(江戸期)。江戸末。
437	北区	1面	0012SE	京他系陶器	急須				内面横輪ヨコナダ～脚附、(足)ヨコナダ 外面ヨコナダ～脚附、(足)ヨコナダ ～脚附、底部未調	2.5Y1/1	京X新	豊後名(中尾屋)、急須口に「 近人」縦。～京X ～IV中
438	南区	1面	0630SD	土師器	壺	(9.4)	(2.2)	(5.6)	内面ヨコナダ、外面ヨコナダ、体部ナダ	10YR7/2	京X古	
439	南区	1面	0630SD	土師器	壺	(6.8)	1.2	4.0	内面ヨコナダ、外面ヨコナダ～サエナダ、体部ナ ダ、底盤ナダ	10YR7/4	京X新	灯明直
440	南区	1面	0630SD	土師器	壺	(12.4)		(7.0)	内面ヨコナダ、外面ヨコナダ、体部ナダ	7.5YR7/4	京X新	
441	南区	1面	0630SD	瀬戸美濃系陶器	志野小坪	(7.2)	(4.8)	(3.4)	内面横輪ヨコナダ、志野輪、 外面ヨコナダ～脚附、志野輪、底部高 台表面に支点孔	10YR8/1	京X新	瀬戸美濃系(藤澤豊臣)。
442	南区	1面	0630SD	瀬戸美濃系陶器	折入2行次 壺	(8.0)			内面灰輪	5Y5/1	京鍋中	瀬戸美濃系(藤澤豊臣)。灰輪 ～京X 古
443	南区	1面	0630SD	肥前系陶器	染付丸壺	(10.0)			内面墨文 外面二重腹口	7.5Y8/1	京鍋古	肥前系(石井VII)、二重腹口 ～京X 中
444	東区	1面	1116SX	施前系陶器	大甕	(70.0)	(107.5)	(42.4)	内面板アーチナ 外面板アーチナ、ハラ描き文字。底部未調 整に格子～ハラ描き	2.5Y4/6	京鍋古	施前系(石井VII)、外面部墨文 「大吉あづら～」

表5 軒丸瓦観察表

番 號 名 号	形 式	遺 傳 名	地 区 名	三巴文		其当					周縁		底文		備 考	
				方 形 向 き	圓 潤	全 長	幅	徑	厚	文 様 度	内 区 位	幅	高	径	數	
447	巴文	0310SD	北区4面	右	○			10.6	1.7	6.0		0.8	0.5	9.0	16	
449	巴文	1611SX	北区4面	右	○			18.0	3.0		9.6	2.4	0.9	13.2	19	
450	巴文	1611SX	南区4面	右	○			18.6	2.6		10.0	2.1	1.0	14.4	17	
451	巴文	0815SX	南区3面	右	○	30.6	11.5	15.0	2.1	10.3	7.4	2.3	0.8		18	丸瓦凹面吊り継・ヨビキ6・体部軽穴
452	巴文	0815SX	南区3面	右	○	30.8	11.7	15.6	2.6	11.1	7.6	2.1	0.9		18	丸瓦凹面吊り継・ヨビキ6・体部軽穴
453	巴文	0721SX	南区2面	右	○	31.5	11.6	14.8	2.7	10.3	7.3	2.2	0.7		18	丸瓦凹面吊り継・ヨビキ6・体部軽穴
459	巴文	0624SX	南区1面	右		(27.0)	13.0	15.0	1.5	10.6		2.5	0.6		15	ヨビキ6・体部軽穴

表6 軒平瓦観察表

番 號 名 号	形 式	遺 傳 名	地 区 名	其当			支撑区			周縁			頂		平 瓦 厚	備 考	
				上 弦 幅	下 弦 幅	厚	低 度	幅	高	上 弦 幅	下 弦 幅	右 幅	高	上 部 厚	下 部 厚		
445	唐草文	1102SX	東区4面							1.4			1.0				
446	割頭文	1028SX	南区4面			3.6		2.9	0.4	0.3			0.3			2.8	1.3 削り曲げ造り
448	唐草文	0953SX	南区4面			5.5	2.5	3.3	1.1	1.0			0.5			2.8	2.6
454	唐草文	0815SX	南区3面	21.6	21.0	4.6	2.8	18.7	2.8	1.2	0.5	1.8	1.2	0.5	3.2	1.7	3.6 1.5

表7 丸瓦観察表

番 號 名 号	形 式	遺 傳 名	地 区 名	全 長	体 距 長		高	体 距 幅		弧 度	王縁長		王縁幅		備 考	
					上 弦 幅	下 弦 幅		厚	低 度		a	b	a	b		
455	王縁丸瓦	0002SD	北区1面	30.5		28.0		7.2	14.1		4.8	2.4	3.5	3.5		11.0 両端吊り継・ヨビキ6
456	王縁丸瓦	0002SD	北区1面	29.0		25.6		7.4	14.2		4.8	2.7	3.5	3.6		11.5 両端吊り継・ヨビキ6

表8 平瓦観察表

番 號 名 号	形 式	遺 傳 名	地 区 名	長 さ	幅		高 度	底 度	弧 度		a	b	a	b	備 考	
					前 端	后 端			底 端	底 端						
457	平瓦	0002SD	北区1面						2.4	3.3						
458	平瓦	0002SD	北区1面						2.0	2.8	底端面取り	底端面取り				

表9 鉄製品観察表

番 號 名 号	地区	遺 傳 名	形 状	形 形	長 さ cm	幅 さ cm	重 量 g	成形済みの特徴	色 調	年 代	備 考
460	北区	3面	包合端	鉄製品	刀子	(4.8)	(0.9)				
461	北区	3面	包合端	鉄製品	小柄	(13.8)	1.4	12.1			江戸 鉄製小刀に銀装飾
462	北区	2面	0118SN	鉄製品	短刀	(10.9)	(2.0)	3.1			
463	北区	3面	包合端	鉄製品	短刀	(14.5)	(1.6)	3.2			
464	北区	2面	包合端	鉄製品	短刀	(7.7)	(1.5)				
465	東区	3面	1329SX	鉄製品	薬切包丁	(9.3)					精(幅3.1)の木質握る
466	南区	3面	0808SX	鉄製品	薬切包丁	(15.2)	(4.4)	3.0			
467	東区	4面	包合端	鉄製品	打	(17.0)					大盤の打(薬元長19.5, 6×9mm角)

表 10 銅製品観察表

※ () は復元値か残存値を示す。

番号	地区	遺構名	遺構名	器種	器形	長辺 cm	短辺 cm	重量 kg	成形調和の特徴	色 調 年 代	備考(型式・法量等) (mm)	
468	北区	1面	0033SX	銅製品	鋸齿具	(5.2)	1.9			JCT ^a	菱形文具盒、円形軋穴(深0.5)	
469	東区	3面	包含層	銅製品	鋸齿具	外径 2.3	2.3	0.6			定型品、22件の鋸齿盒金具。方形軋 穴0.3×0.5	
470	北区	2面	包含層	銅製品	鋸齿具	外径 2.1	2.1	1.6			定型品、円形の鋸齿盒金具。方形軋穴 0.5×0.4	
471	北区	4面	0339SX	銅製品	鋸齿具	外径 2.2	2.2	1.6			円形の鋸齿盒金具、方形軋穴0.8×0.7	
472	南区	1面	0602SK	銅製品	窃盗蓋	外径 2.1	高さ 0.5	(2.2)		JCT ^b	つまみ付蓋、473と同じ製品	
473	南区	1面	0603SK	銅製品	窃盗蓋	外径 2.4	高さ 0.5	3.8		JCT ^b	定型品、つまみ付蓋、472と同じ製品	
474	東区	4面	包含層	銅製品	鋸齿具	11.9	2.2	4.9			薄板状金具、板端に斜め状の切縫 金具より削取った	
475	東区	1面	1124SX	銅製品	加工材±	(5.2)	1.3	(6.1)			加工用薄板状材±	
476	南区	1面	0621SX	銅製品	加工材±	(3.7)	1.7	0.4			加工用薄板状材±、模を切りおとす。	
477	南区	4面	包含層	銅製品	加工材±	4.0	0.4	1.2			加工用薄板状材±	
478	東区	3面	1313SX	銅製品	鋸齿具	(11.5)	0.6	(4.0)			斜面の板に打ちたれた金具で、 斜六角1.5mmが二所ある	
479	南区	1面	0624SX	銅製品	鋸齿具	(3.1)	0.9	(1.9)			半円形の金具に、打ちこし技術で 穴跡(ノット)と重複するX字頭を行な ず、用途不明。	
480	東区	2面	包含層	銅製品	鋸齿具	(9.0)	8.4	(81.4)			複雑な形状の金具で、定位 部をもつて、長辺等の直線部 分に使用されるものと思われるが 詳細は不明。削り落す部分の厚み、 約0.5mm、外径約10.3mm、3.2 ×0.7×0.21mm。	
481	南区	3面	包含層	銅製品	鋸齿具	(3.2)	2.2	(7.4)		JCT ^b	六花形の金具、穴跡(ノット)はあ るが、表面に木目状の凹のとねを ナット付近し、金箔を施す。	
482	東区	1面	119SX	銅製品	鋸齿具	鋸齿具用板	外径 3.3	3.3	7.1		JCT ^b	円盤、加工中のものか、厚さ1mm、 用途不明。
483	北区	4面	0321SX	銅製品	鋸齿具	2.8	1.8	4.2			定型品、金具細身、金具頭3mm、 頭出しがなく、板端又は斜めの部分 を研磨した金具のみられる。	
484	南区	2面	包含層	銅製品	鋸齿具	7.2	0.5	7.1			定型品、ネジ付±	
485	北区	2面	0128SX	銅製品	棒状品	6.0	0.5	4.4			断面四角棒状の材料(複合用±)	
486	東区	1面	1112SX	銅製品	加工材±	(7.9以上)	0.6×0.5	(0.7)			複数の加工材(複合用±)	
487	北区	1面	0645SX	銅製品	鋸齿具	外径 2.8	高さ 0.4	(14.4)		JCT ^b	四角の中央に円孔1mmがあり、 その両側に円弧曲線を配す。用途不明。	
488	南区	1面	0624SX	銅製品	鋸齿具	外径 (11.4)	0.05			JCT ^b	円筒透し金具、椎心抨丸±、用途 不明。	
489	南区	1面	0624SX	銅製品	灯芯抨丸	径 4.1	高さ 4.6			JCT ^b	断面方形(×2mm)の材を加工	
490	東区	1面	1124SX	銅製品	圓±	(23.9)					京XIV中 (錠体部厚1mm、錠内開 口部)	
491	東区	2面	包含層	銅製品	キセル墨盒	(2.2)					京XIV中 (古單1B頭±ⅢA頭)、火蓋部分 ～京XIII で補強筋が付加。 古±	
492	南区	2面	包含層	銅製品	キセル墨盒	(3.8)					京XIV中 (古單1B頭)、墨盒の部分で補 強筋は無いが火蓋から脛まで。	
493	北区	2面	0659SE	銅製品	キセル墨盒	(7.6)					京XIV中 (古單1A頭)、墨盒の火蓋から脣 までの補強品。 (古單1orⅡ頭)、火蓋と脣を丸く	
494	東区	2面	包含層	銅製品	キセル墨盒	(2.8)						
495	南区	2面	0721SX	銅製品	キセル墨盒	(5.9)					京XIV古 (古單1B頭)、火蓋から脣を失う 破損品 (古單1AorⅡB頭)、吸口側の補 強筋が付加不明。	
496	南区	2面	0662SK	銅製品	キセル墨	2.6	外径 1.1	5.0				
497	東区	4面	包含層	銅製品	キセル墨	4.1	外径 0.9	5.1			京XIV中 (古單1A頭)、吸口側の補 強筋が付加不明、脣部に溝切	
498	東区	1面	1113SX	銅製品	キセル吸口	(4.4)	外径 0.9	(0.2)			京XIV古 (古單1A頭)、最古式のキセル吸 口で、強化筋(金具)脣が付加	
499	北区	1面	0018SE	銅製品	キセル吸口	7.3	外径 1.2	16.6			京XIV新 (古单1～V)、完形品、墨水平 ±外径1.2、吸口外径1.2、吸口内径0.8、吸い口 先端を尖らせる。	

表 11 錢貨観察表

出典番号	地区	鑄柄面	鑄柄名	銘種	銘種	直径 mm	厚 mm	重量 g	特徴	備考(書体・刻年等) 年
500	南北	4面	0919P	銭貨	開元通宝	(2.8)	0.1	背面賞上に「一」平文	初期(武德4年(621))	
501	北区	3面	0201SD	銭貨	宋元通宝	2.5	0.1	2.7	真書・初期は建隆元年(960)	
502	北区	1面	0628SX	銭貨	開元通宝	2.5	0.1	2.6	行書・初期は至道元年(993~997)	
503	北区	3面	包含層	銭貨	咸平元宝	2.5	0.1	3.4	初期は咸平元年(998)	
504	北区	4面	0318SX	銭貨	祥符通宝	2.5	0.1		真書・初期は大中祥符元年(1008)	
505	北区	3面	包含層	銭貨	天聖元宝	(2.4)	0.1	2.7	篆書・初期は天聖元年(1021)	
506	北区	2面	包含層	銭貨	景祐元宝	2.4	0.1	2.5	篆書・初期は景祐元年(1034)	
507	北区	1面	0013SK	銭貨	皇宋通宝	2.5	0.1		真書・初期は皇宋元年(1039)	
508	北区	1面	0028SX	銭貨	皇宋通宝	2.4	0.1	3.1	篆書・初期は皇宋元年(1039)	
509	北区	2面	包含層	銭貨	皇宋通宝	2.5	0.1	2.5	真書・初期は宋元二年(1039)	
510	北区	3面	包含層	銭貨	皇宋通宝	2.5	0.1	2.6	初期は宋元二年(1039)	
511	北区	2面	包含層	銭貨	嘉祐通宝	2.5	0.1	3.0	真書・初期は嘉祐年間(1056~1063)	
512	北区	2面	包含層	銭貨	熙寧元宝	2.5	0.1	2.9	初期は熙寧年間(1068~1077)	
513	北区	3面	包含層	銭貨	熙寧元宝	2.5	0.1	3.2	真書・初期は熙寧年間(1068~1077)	
514	北区	3面	包含層	銭貨	熙寧元宝	2.4	0.1	2.3	真書・初期は熙寧年間(1068~1077)	
515	北区	1面	包含層	銭貨	元豐通宝	2.4	0.1	2.0	篆書・初期は元豐元年(1078)	
516	北区	3面	包含層	銭貨	元豐通宝	2.5	0.1	3.2	篆書・初期は元豐元年(1078)	
517	南区	1面	0624SX	銭貨	元豐通宝	2.4	0.1	2.0	篆書・初期は元豐元年(1078)	
518	北区	4面	0335SX	銭貨	元祐通宝	2.4	0.1	2.8	篆書・初期は元祐年間(1086~1093)	
519	南区	3面	0723SX	銭貨	元祐通宝	2.5	0.13	3.5	篆書・初期は元祐年間(1086~1093)	
520	南区	4面	0907SX	銭貨	元祐通宝	2.4	0.1		篆書・初期は元祐年間(1086~1093)	
521	南区	1面	0934SX	銭貨	元祐通宝	2.5	0.1	2.6	篆書・初期は元祐年間(1086~1093)	
522	北区	3面	包含層	銭貨	元祐通宝	2.4	0.1		篆書・初期は元祐年間(1086~1093)	
523	南区	1面	0621SX	銭貨	元祐通宝	2.3	0.1	1.6	真書・初期は元祐年間(1086~1093)	
524	北区	2面	0301SX	銭貨	大觀通宝	2.5	0.1	20.0	真書・初期は大觀元年(1087)	
525	北区	3面	包含層	銭貨	洪武通宝	(2.5)	0.1		真書・初期は洪武元年(1368)	
526	南区	2面	包含層	銭貨	洪武通宝	2.2	0.08	1.4	真書・初期は洪武元年(1368)	
527	北区	3面	包含層	銭貨	永樂通宝	2.5	0.1	3.5	真書・初期は永樂年間(1406)	
528	北区	3面	包含層	銭貨	永樂通宝	2.4	0.1	3.6	真書・初期は永樂年間(1406)	
529	北区	1面	0026SX	銭貨	寛永通宝	2.4	0.15	3.3	529~532/4点が重なって出土	
530	北区	1面	0026SX	銭貨	寛永通宝	2.5	0.15	3.1	529~532/4点が重なって出土	
531	北区	1面	0026SX	銭貨	寛永通宝	2.5	0.15	3.4	529~532/4点が重なって出土	
532	北区	1面	0026SX	銭貨	寛永通宝	(2.5)	0.15		529~532/4点が重なって出土	
533	北区	2面	包含層	銭貨	寛永通宝	2.5	0.15	3.7		
534	南区	2面	包含層	銭貨	寛永通宝	(2.5)	0.15			
535	北区	4面	包含層	銭貨	不明	2.5	0.1	2.6	文字不認	
536	北区	4面	0346SX	銭貨	不明	2.5	0.1	2.4	文字不認・無文錢	
537	南区	2面	包含層	銭貨	不明	2.4	0.1	2.4	文字不認・無文錢	
538	南区	1面	1145SX	銭貨	不明	2.5	0.1		文字不認・無文錢	

表 12 銅鑄造関連品観察表

※ () は復元値か残存値を示す。

品目番号	地区	遺構面	遺構名	器種	器形	口径 cm	高さ cm	底径 cm	成形調節の特徴	色調	年代	備考(使用内容等) cm
539	東区	4面	包含層	土製品	円錐	(6.2)	2.5	2.4	内部ヨコナギ、鋸歯形付唇、一部見えており、底あり 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	10Y6/1	銅溶解用坩埚、原質實	
540	北区	3面	包含層	土製品	円錐	(6.8)	(2.5)	(0.6)	内部ヨコナギ、鋸歯形付唇 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	10YR7/1	銅溶解用坩埚、使用11回か	
541	北区	2面	包含層	土製品	円錐	7.2	2.5	2.7	内部ヨコナギ、鋸歯形付唇 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	10YR7/3	11回実用、銅溶解用坩埚	
542	東区	4面	包含層	土製品	円錐	(7.2)	(2.9)	(4.4)	内部ヨコナギ、鋸歯形付唇 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	10YR7/1	銅溶解用坩埚	
543	東区	4面	包含層	土製品	円錐	(7.4)	(2.5)	(3.4)	内部ヨコナギ、鋸(金色)に光るもの あり 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	7.5Y7/1	銅溶解用坩埚	
544	北区	3面	包含層	土製品	円錐	7.5	2.4	3.8	内部ヨコナギ、鋸歯形付唇 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	10YR7/3	11回実用、銅溶解用坩埚	
545	北区	3面	包含層	土製品	円錐	(7.6)	(2.8)	(4.0)	内部ヨコナギ、鋸歯形付唇 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	10YR7/1	銅溶解用坩埚	
546	北区	2面	包含層	土製品	円錐	(8.4)	(2.3)	(4.2)	内部ヨコナギ、鋸付唇 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	10YR7/3	銅溶解用坩埚、使用回数少ないも ので、外面部物の付着が少な い	
547	南区	3面	包含層	土製品	円錐	(9.0)	(0.2)	(5.0)	内部ヨコナギ、鋸歯形付唇 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	10YR6/1	銅溶解用坩埚	
548	東区	4面	包含層	土製品	円錐	(9.4)	(3.2)	(5.0)	内部ヨコナギ、鋸歯形付唇 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	7.5Y7/1	547に似る、銅溶解用坩埚	
549	北区	3面	包含層	土製品	円錐	(10.0)	(3.7)	(4.2)	内部ヨコナギ、鋸歯形付唇 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	2.5Y5/4	銅溶解用坩埚、溶解不純物が内外 に厚く付着	
550	東区	1面	1113SX	土製品	円錐	(10.2)	(0.2)	(5.7)	内部ヨコナギ、鋸付唇 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	7.5YR7/1	銅溶解用坩埚	
551	東区	4面	1437SX	土製品	収録	(10.2)			内部ヨコナギ、鋸歯形付唇 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	2.5Y7/1	内部黒化	
552	東区	4面	1437SX	土製品	収録	(10.0)			内部ヨコナギ、鋸歯形付唇 外面部ヨコナギ、指サエ・ナ ギ、底屈ナギ	2.5Y5/3	一体作りの柄(縦3.0×横2.5)を残 す	
553	北区	3面	0190SE	鉛物	圓盤					10YR2/1	銅(不純物)、長径7.9×短径6.5× 厚み2.3	

表 13 石製品(硯)観察表

品目番号	地区	遺構面	遺構名	器種	器形	長辺 cm	短辺 cm	厚 cm	成形調節の特徴	色調	年代	備考(石材名・法量等) g
554	南区	4面	包含層	石製品	硯	13.2	5.5	1.5	内外面共に丁寧な研ぎ調節	10Y4/1	～茎葉 中左	真岩製(高島石、鳴海石)。日本 近世品。研中矢が残る。 表面に削痕がある者と仕上げ の口(ヒダリ)なしのもの が複数。重量(60g)。
555	南区	4面	包含層	石製品	硯	5.5	2.7	0.9	内外面共に丁寧な研ぎ調節	7.5Y5/1	～茎葉 中左	真岩製(高島石、鳴海石)。小 型硯。
556	南区	4面	包含層	石製品	硯	15.8	5.4	1.6	内外面共に丁寧な研ぎ調節	7.5Y6/2	～茎葉 中左	真岩製(高島石、鳴海石)。研 底中央を深くし、軽量化のため 各部位を斜めに切削。表面 に削痕が残る。重量(60g)。
557	北区	4面	0343SX	石製品	硯			3.0	内外面共に丁寧な研ぎ調節	5YR5/3	～茎葉 中左	赤色系無鉱斑斜面製(赤根雲石、 赤門石在生)。大切削の小断片 、縁を二段に落す。

表 14 石製品(茶臼)観察表

品目番号	地区	遺構面	遺構名	器種	器形	面積 cm	高 cm	台径 cm	成形調節の特徴	色調	年代	備考(石材名・法量等) cm
558	南区	2面	0105SX	石製品	茶臼下臼	(20.8)	10.8	(34.0)	外部受皿・台部は丁寧な構造を調節 内部凹凸は浅く、丁寧な手のひら仕上げ	10GY6/1	京焼新 壇カ	真跡石製で日面は端まで8分割、受 皿径40mm、受皿底3.0mm、脚柱径 (2.9)、各み2.2、底1.9mm 茶谷焼食道跡(三輪979)に近い
559	南区	1面	0663SK	石製品	茶臼下臼	(19.9)	9.3	(30.0)	外部受皿は丁寧な構造を調節、台部は 側面に上部のみの手のひら仕上げ 内部凹凸は浅く、底ひら切仕上げ	7.5YR5/3	京焼新 壇カ	真跡石製で臼面は端まで8分割、浅い 側面仕上げ、側面に上部のみの手のひ ら仕上げ。受皿底3.0mm、脚柱径 (2.9)、各み2.2、底1.9mm 茶谷焼食道跡(三輪979)に近い
560	北区	1面	0012SE	石製品	茶臼下臼	(18.2)	8.5	(18.2)	(28.0) (下臼) 外面部は丁寧な構造を調節。 内部受皿は手のひら仕上げ 側面に上部のみの手のひら仕上げ 内部凹凸は浅く、底ひら切仕上げ するもの。外底は本筋を調節	10Y4/1	京焼新 壇カ	真跡石製で臼面は端まで8分割、 上臼小字と下臼大字有り。受皿径 (3.0)、脚柱下臼(方筋) 1.5×1.3、 底ひら切・脚柱底(方筋) 1.5、各 み径1.2、底ひら切、被削する。他に同 じ砂岩製の碗形が1点あり。